館蔵資料調査研究報告書７

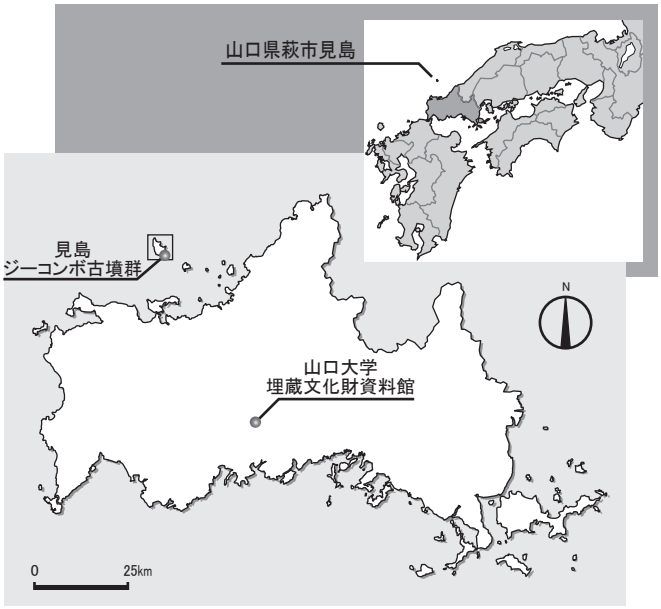
見島ジーコンボ古墳群

東部域出土資料調査報告

2022

山口大学埋蔵文化財資料館

見島ジーコンボ古墳群
東部域出土資料調査報告



2022

山口大学埋蔵文化財資料館

序

山口大学が所在する県内五つの地区（山口市：吉田地区・白石地区、宇部市：小串地区・常盤地区、光市：光地区）は、いずれも遺跡の上に立地しています。埋蔵文化財資料館は、本学の施設拡充等工事により遺跡が破壊される可能性が生じた場合、文化財保護のための発掘調査を実施することを主要業務としていますが、その調査・研究成果を報告書の刊行、実物資料展示、データベースの構築など様々な方法により広く地域社会に公開することも重要な責務と考えています。

さて、当館には上記構内遺跡から出土した資料の他にも、山口県の著名遺跡から出土した資料が数多く収蔵されています。これらは、当館設立以前の昭和20年代後半から40 年代前半にかけて、主として本学教員であった小野忠熙氏により発掘調査が担当され、本学各所に収蔵されていたものを継承した資料群です。その中でも、萩市見島所在の国指定史跡「見島ジーコンボ古墳群」出土資料を最重要と位置付け、平成22年度より継続的な調査研究を行い、「館蔵資料調査研究報告書」として刊行しています。

平成28年度までに古墳群西部域の資料調査終え、同年度中から東部域の分布調査採取資料の整理を開始しましたが、翌29年度より構内遺跡保護業務が多忙となり、作業の長期停滞を余儀なくされました。元号も変わり令和3年度に至って作業を再開し、年度中に調査を終了することができましたので、その成果をご報告いたします。

見島総合学術調査の一環として、山口県教育委員会と萩市教育委員会により実施された見島ジーコンボ古墳群の発掘調査は、昭和35年から37年の3カ年にかけて実施されており、調査後実に半世紀以上の年月が経過しました。本書をもちまして、当館が所蔵する資料の悉皆調査および報告はひとまずの終了を迎えることになります。考古学・歴史学・地域史研究等の基礎資料として活用いただければ望外の幸せです。

最後になりますが、当館の調査・研究活動にあたって、ご支援、ご協力を頂いた関係機関、関係各位に心から厚く御礼申し上げますとともに、今後とも引き続きご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

令和4年3月

山口大学埋蔵文化財資料館長

根ヶ山　徹

例言

１．本書は、昭和35年(1960)から昭和37年(1962)の3ヶ年、山口県教育委員会および萩市教育委員会の合同により実施された、萩市見島所在の見島ジーコンボ古墳群出土資料の再整理調査報告である。

２．上記の調査で出土した見島ジーコンボ古墳群出土品は、萩博物館（山口県萩市堀内355番地所在）と山口大学埋蔵文化財資料館（山口県山口市吉田1677-1所在）に分有保管されている。

３．見島ジーコンボ東部域出土資料の確認および整理作業は、横山成己（山口大学埋蔵文化財資料館助教）と乃美友香（山口大学事務局学術基盤部総務係技術補佐員）が行い、作業の一部を本学学芸員資格課程の学内実務実習にて行った。資料の実測、写真撮影は横山が行い、採拓は乃美が行った。製図・整図は横山と乃美が行った。

４．本書の執筆編集は横山が行った。

５．本書を作成するにあたり、下記の方々に助言・協力を得ました。記して感謝の意を表します。
石井 理津子　　市来 真澄　　柏本 秋生　　川島 尚宗　　田畑 直彦　　松下 孝幸
水久保 祥子

凡例

１．本報告書における見島ジーコンボ古墳群の遺構番号は、『見島総合学術調査報告』(山口県教育委員会 1964)で付されたものに準拠している。

２．見島ジーコンボ古墳群の略号を「ＭＪ」で表記している。ＭＪの後ろに付している数字は墳墓番号である（例：見島ジーコンボ古墳群第56号墳＝ＭＪ56)。墳墓番号不明の場合「ＵＫ」と表記している。
資料の種別に関しては萩博物館所蔵品の土器類は「Ｈ」、山口大学埋蔵文化財資料館所蔵品の土器類は「Ｙ」、同様に鉄器類は「Ｈi」「Ｙｉ」、銅製品は「Ｈｂｒ」「Ｙｂｒ」、玉類は「Ｈｂ」「Ｙｂ」、貝製品は「Ｈｓｈ」、石製品は「Ｈｓ」の略号を付して識別している。

３．遺物実測図の縮尺については、以下のように統一した。
土器…1/2または1/3　金属器…1/2　玉類・貝製品・石製品＝1/2

４．遺物の実測図は、下記のように分類した。
断面黒塗り……須恵器、金属器
断面白抜き……土師器、玉類、貝製品、石製品

５．土器の色調記号は、主として農林省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色帖』(1976)に準拠した。

本文目次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境
第1節　地理的環境 …… 1
第2節　歴史的環境 …… 1

第Ⅱ章　見島ジーコンボ古墳群東部域の出土資料
第1節　資料の由来 …… 4
第2節　東部域の出土資料 ……10

第Ⅲ章　まとめ ……140

挿図目次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

図1 萩市見島遺跡分布図……3

第Ⅱ章　見島ジーコンボ古墳群東部域の出土資料

図2 見島ジーコンボ古墳群分布図 ……5・6

図3 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図① ……11

図4 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図② ……12

図5 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図③ ……13

図6 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図④ ……15

図7 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図⑤ ……17

図8 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図⑥ ……18

図9 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図⑦ ……19

図10 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図⑧ ……21

図11 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図⑨ ……23

図12 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図⑩ ……24

図13 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図⑪ ……25

図14 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図⑫ ……27

図15 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図⑬ ……29

図16 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図⑭ ……30

図17 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図⑮ ……31

図18 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図⑯ ……33

図19 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図⑰ ……34

図20 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図⑱ ……35

図21 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図⑲ ……37

図22 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図⑳ ……39

図23 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㉑ ……40

図24 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㉒ ……41

図25 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㉓ ……43

図26 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㉔ ……44

図27 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㉕ ……45

図28 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㉖ ……47

図29 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㉗ ……49

図30 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㉘ ……50

図31 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㉙ ……51

図32 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㉚ ……53

図33 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㉛ ……54

図34 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㉜ ……55

図35 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㉝ ……57

図36 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㉞ ……59

図37 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㉟ ……60

図38 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㊱ ……61
図39 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㊲ ……63
図40 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㊳ ……65
図41 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㊴ ……66
図42 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㊵ ……67
図43 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㊶ ……69
図44 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㊷ ……70
図45 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㊸ ……71
図46 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㊹ ……73
図47 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㊺ ……75
図48 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㊻ ……76
図49 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㊼ ……77
図50 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㊽ ……79
図51 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㊾ ……81
図52 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図㊿ ……82
図53 見島ジーコンボ古墳群
東部域出土土器実測図(51) ……83

第Ⅲ章　まとめ

図54 第81号墳石室と出土大甕実測図 ……141
図55 見島ジーコンボ古墳群
東部域平行文当て具痕の分布 ……145
図56 見島ジーコンボ古墳群に見られる
特殊な当て具痕① ……146
図57 見島ジーコンボ古墳群に見られる
特殊な当て具痕② ……147
図58 見島ジーコンボ古墳群に見られる
特殊な当て具痕③ ……148

写真目次

第Ⅱ章　見島ジーコンボ古墳群東部域の出土資料

写真1 総合学術調査当時の東部域遠景……7
写真2 総合学術調査当時の東部域近景……7
写真3 東部域現況……8
写真4 第98号墳か……8
写真5 第99号墳か……8
写真6 第102号墳か ……8
写真7 第103号墳か ……8
写真8 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器①
……85
写真9 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器②
……86
写真10 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器③
……87
写真11 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器④
……88
写真12 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑤
……89
写真13 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑥
……90
写真14 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑦
……91
写真15 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑧
……92
写真16 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑨
……93
写真17 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑩
……94
写真18 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑪
……95

写真19 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑫ ……96
写真20 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑬ ……97
写真21 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑭ ……98
写真22 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑮ ……99
写真23 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑯ ……100
写真24 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑰ ……101
写真25 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑱ ……102
写真26 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑲ ……103
写真27 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑳ ……104
写真28 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉑ ……105
写真29 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉒ ……106
写真30 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉓ ……107
写真31 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉔ ……108
写真32 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉕ ……109
写真33 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉖ ……110
写真34 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉗ ……111
写真35 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉘ ……112
写真36 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉙ ……113
写真37 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉚ ……114
写真38 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉛ ……115
写真39 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉜ ……116
写真40 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉝ ……117
写真41 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉞ ……118
写真42 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉟ ……119
写真43 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㊱ ……120
写真44 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㊲ ……121
写真45 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㊳ ……122
写真46 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㊴ ……123
写真47 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㊵ ……124
写真48 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㊶ ……125
写真49 見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㊷ ……126

表目次

第Ⅱ章　見島ジーコンボ古墳群東部域の出土資料

表1 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵
　　見島ジーコンボ古墳群東部域資料 ……9
表2 出土遺物(土器)観察表……127

第Ⅲ章　まとめ

表3 須恵器内面当て具痕一覧……144
表4 須恵器内面当て具痕の比率……145

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

第1節　地理的環境

萩市見島は、萩市浜崎港から北北西に約46.3㎞離れた日本海中に浮かぶ孤島である。島の平面形態は南を底辺とする不等辺三角形を呈し、南北約4.6㎞、東西約2.5㎞、島周約24.3㎞を測り、総面積はおよそ7.8㎢となる。

見島は火山島であり、地質は玄武岩類、角礫凝灰岩および海岸低地部の沖積層で構成される。島は中央部から西部にかけて高く、現在航空自衛隊見島分屯基地が置かれるイクラゲ山（標高181m）が最高峰となっている。また、瀬高と呼称される中央山地により南北が分断されており、島の南部および北東部に見られる湾入部周域にはわずかながら沖積低地が形成されている。それぞれに本村・宇津の集落が発達し、現在でも島への数少ない出入り口として存在する。

これら海岸域にある天然の低地には、島裾を洗う波浪から生じた岩屑が砂礫浜堤や礫浜堤を形成している。見島ジーコンボ古墳群は、島の南岸線東端の晩台山南麓から、本村港の東にある孤立丘高見山の東麓までの間に形成された、東西長約300m、幅約50m～100m、標高約7mの礫浜堤（横浦海岸）に立地している[註1]。

第2項　歴史的環境

1．遺跡の分布状況（図1）

見島に埋存する遺跡の様相については、ジーコンボ古墳群以外は全く明らかとなっていないと言っても過言では無かろう。現在公表されている埋蔵文化財包蔵地の分布についても、山口県教育委員会と萩市教育委員会が昭和35年（1960）から同37年（1962）まで実施した合同調査に負うところが大きい。

見島における踏査は、昭和35年合同調査の9月４日から3日間にかけて実施したとされる。『見島総合学術調査報告』では、その成果として島内の13地点が紹介されているが[註2]、現在の周知の埋蔵文化財包蔵地と照合すると、「見島小学校々庭付近の遺物包含層」「薬師堂背後の遺物包含層」「見島体育館付近の遺物散布地」が**見島本村遺跡**（図1の**1**）、「本村東区の遺物散布地と包含層」「本村部落の東部の水田」「杉山西南斜面の遺物散布地」が**堅田遺跡**（図1の**2**）、「片尻の遺物散布地」が**片尻遺跡**（図1の**6**）、「草谷の遺物散布地」が**草谷遺跡**（図1の**7**）、「船戸の遺物散布地」が**船戸遺跡**（図1の**9**）、「船見田の遺物散布地」が**船見田遺跡**（図1の**10**）、「大竹の遺物散布地」が**大竹遺跡**（図1の**11**）、「瀬田の石器発見地」が**瀬田遺跡**（図1の**3**）に該当するようである。現在の本村港と本村漁港の間にある小丘で、古く大正5年（1916）に土師器壺2点と硬玉製勾玉1点が出土したとされ[註3]、昭和35年の合同調査においても土師器壺片４点が確認された「宮崎山の遺物散布地」は、その後明確な資料の採取に恵まれなかったのか現在では包蔵地から除外されている。また、合同調査における踏査がジーコンボ古墳群発掘調査の前提としての「見島における居住の時代的上限」「古墳の築造に先行する文化の有無」「当時の地形や島の生産力」「村落の規模とその継続期間」の確認等に目的を置いていたためか、当時既にその位置が推定されていた中世の城館跡である**要害山城跡**（図1の**4**）、**高見山城跡**（図1の**5**）に関して言及されていない。また、平成元年（1989）発行の『萩市史』第2巻では、要害山城跡の北北西約1㎞の丘陵上に

土塁・石垣が見られることから、城跡の存在が指摘されている[註4]（図1の**8**）。

以上、見島において確認されている遺跡の分布状況を概観した。居住に適した低地が狭小である見島においては、工事中の埋蔵文化財の発見もやはり限定的な地域に限られるようであり、昭和30年以降の新知見もほぼ存しない状況と言える。

2．見島ジーコンボ古墳群造営以前の見島

前述したように、萩市見島においては、小規模な試掘調査を除き、ジーコンボ古墳群以外の遺跡に未だ調査の鍬が入れられていない。そのため、各遺跡で採取された断片的な資料からジーコンボ古墳群造営以前の様相を推し量る他手段がないようである。

萩市見島発見の先史時代遺物に関しては、平成元年（1989）発行の『萩市史』に詳しい（中村・国森1989）。同書によると、昭和35年（1960）より開始された合同調査の段階では、弥生時代以前に所属する遺物は同年に本村寺山南麓の宅地（図1の**3**）で小学生児童により発見された環状石斧の1点に限られた状態であった[註5]が、昭和45年（1970）に本村の中国電力島内発電所の増築工事にて縄文時代中期に比定される土器片が、昭和59年（1984）には見島小学校南方の水田基盤整備工事にて、遺物包含層と見られる黒褐色粘土層中から縄文時代後晩期の土器片とともに石棒片、打製石斧、石錘、そして環状石斧片などが出土したとされる。両地点とも現在の堅田遺跡（図1の**2**）内に位置しており、見島における人類活動が島南端の沖積低地部において開始されたことを示唆する重要な資料となっている。弥生時代の遺物については、同じく見島小学校南方水田基盤工事で確認された黒褐色粘土層中から弥生時代前・後期の土器片が出土しているが、その総量はさして多くないそうである。古墳時代の遺物も、やはり堅田遺跡を中心に多数の土師器、須恵器が採集されている状況である。昭和35年調査に伴い実施された踏査で、現在見島本村遺跡と命名されている地点で確認された多数の遺物も、主として当時代に所属するものと推察される。

上記の資料はいずれも正式な発掘調査を経ずしての採集品であり、遺構の確認がなされていない状況下では見島の先史時代について多くを語り得ない。現状としては、見島では古く縄文時代中期から弥生時代にかけ、本土に面する本村周辺域において少なくとも一時的な人類の上陸活動が行われ、古墳時代に至ると小規模ではあろうが同地域に集落が形成され定住生活が行われたものと推察するに止めたい。

【註】

1）地理的環境は乗安（1983）による。

2）斎藤・小野（1964）の400～402頁

3）ジーコンボ古墳群に関する最初期の報告は大正12年（1923）に三輪善之助氏によってなされている（三輪1923）が、その文中に「古墳」の項目で宮崎山出土遺物が紹介されている。

4）合同調査前年である昭和34年（1959）に発行された『萩市誌』には、明確な位置は示されていないが城山址として高見山城跡の存在が、古城址として要害山城跡の存在が記されている（俵1959）。また平成元年（1989）発行の『萩市史』第2巻では、本村北西部のみのぼし山（蓑干山：標高130m）山上に土塁・石垣が構築されていることが指摘され、「みのぼし山城」の仮名が付されている（中村・国森1989）が、埋蔵文化財包蔵地名としては「要害山城跡」が用いられている。

5）大正15年（1926）に実施された山高郷土史研究会による見島の調査報告（匹田ほか1927）には見島小学校敷地（現：見島ふれあい交流センター（公民館）敷地）にて採取されたとされる弥生土器が報告されており、本村宮崎山での弥生土器採取にも言及されている。同じく両地について、昭和10年（1935）の山本博氏の報告（山本1935）には土器実測図が付されているが、直ちに「弥生土器」とは判じがたいものであり、現在資料の所在も不明確であることから『萩市史』では確実な資料として認めていない。



国指定　史跡　見島ジーコンボ古墳群

1 見島本村遺跡　集落跡（縄文～中世）
2 堅田遺跡　散布地（縄文～古代）
3 瀬田遺跡　散布地（弥生）
4 要害山城跡　城館跡（中世）
5 高見山城跡　城館跡（中世）
6 片尻遺跡　散布地
7 草谷遺跡　散布地
8 要害山城跡　城館跡（中世）
9 船戸遺跡　散布地
10 船見田遺跡　散布地
11 大竹遺跡　散布地

萩市（1971）『萩市地形図 7』（国土座標第Ⅲ系）を転載・加筆

図1　萩市見島遺跡分布図

第Ⅱ章　見島ジーコンボ古墳群東部域の出土資料

第1節　資料の由来

昭和35年（1960）から37年（1962）までの3ヶ年に及ぶ見島ジーコンボ古墳群の調査は、初年度が古墳群を中心に見島の分布調査に、2年度が西部域に分布する石室10基（第123・124・128・137・151～156号墳）の発掘調査に、3年度が東部域に分布する石室10基（第1・44・56・番外15・57・番外16・77・81・105・116号墳）の発掘調査に当てられた。

平成22年度から当館が継続的に実施している出土資料再調査により、2年度（西部域）の出土資料は萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に、3年度（東部域）の出土資料は萩博物館にのみ収蔵されていることが判明したが、これとは別に、当館には発掘調査が実施されていないはずの墳墓出土品が多数存在していた。これらの大多数は出土年月日が残されておらず、遺物収納袋2袋に「見島　69号　玄室内　60□□□□」「9月4日10時　見島　へのへのもへじ　80・81」（□は判読不明）の文字が見られるのみであった。これらの資料はどのような経緯で収集され、収蔵されることになったのだろうか。

『見島総合学術調査報告』によると、初年度の調査は「第1年度の基本調査は100分の1の古墳分布図を作るとともに、各古墳に番号をつけこれを東南端の晩台山の方から数えてすべて174基を明かにし、各古墳にはペンキで番号をつけ図面と対象させるとともに将来の保存にも資することにした。また地上に散乱している須恵器破片等を採集した（368頁：下線筆者）」とされる。この記述を読む限りでは、当館に所蔵される未発掘墳の資料は、多少の疑念は残る[註1]ものの、初年度の分布調査にて表面採取されたものと思われ、その全てが本学に保管されることになったと推測される。

当館と萩博物館に分有保管されていた昭和36年（1961）調査墳の出土資料に関しては、分布調査採取資料も合わせ調査を実施した後に報告をおこない[註2]（横山2011・2013・2015・2017、横山・松浦2012、横山・川島2016）、昭和35年（1960）の分布調査資料についても、西部域のものはすでに報告を終えた（横山2017）。東部域に関しても、同様に萩博物館に所蔵される昭和37年（1962）調査墳の出土資料と分布調査資料との悉皆調査を実施する予定であったが、昭和37年出土の各資料が膨大であることから、1基分の調査に相当の期間を要することが予想されたため、ひとまず対象を当館所蔵の分布調査資料に限ることにした。対象とした資料は図2・表1の通りで、80番台後半から90番台が欠落するものの、採取地点は東部域のほぼ全域に及んでいることが分かる。

【註】

1）『見島総合学術調査報告』には「まず初年度の予備調査で、外部的な観察から識別できる石室の分布とその遺存状態を明らかにして、調査にふさわしい古墳を選択し（409頁：下線筆者）」という記述が見られる。作成された分布図を見ても、石室の天井石や側石がしっかりと描かれている。見島総合学術調査にて民俗班の調査員を務めた宮本常一氏が昭和35年（1960）に撮影した古墳群東部域の写真を見ると、積石によるマウンドは比較的良好に保たれており、開口部のみが顔をのぞかせる墳墓が多数存在したようである（宮本常一データベース[http://www.towatown.jp/database/]NO.3163～3167・3169）。「遺存状態を明らかにする」という目的で、石室の輪郭を出すため多少の掘削が加えられた可能性がある。第69号墳遺物元袋に見られる「玄室内」の文字はさらにこの疑念を高めている。

2）分布調査採取資料（初年度）と発掘調査出土資料（2年度）の接合例は、第123号墳で9例、128号墳で5例見られる。東部域においても同様の事例が多数確認されるものと予想される。

第Ⅱ章　見島ジーコンボ古墳群東部域の出土資料

昭和 37 年 (1962) 調査墳
昭和 57 年 (1982) 調査墳
昭和 36 年 (1961) 調査墳で出土資料調査報告書既刊
昭和 35 年 (1960) 分布調査にて遺物が採取された地点で出土資料調査報告書既刊
本書の調査対象墳 ※昭和 35 年 (1960) 分布調査にて遺物が採取された地点



図2　見島ジーコンボ古墳群分布図

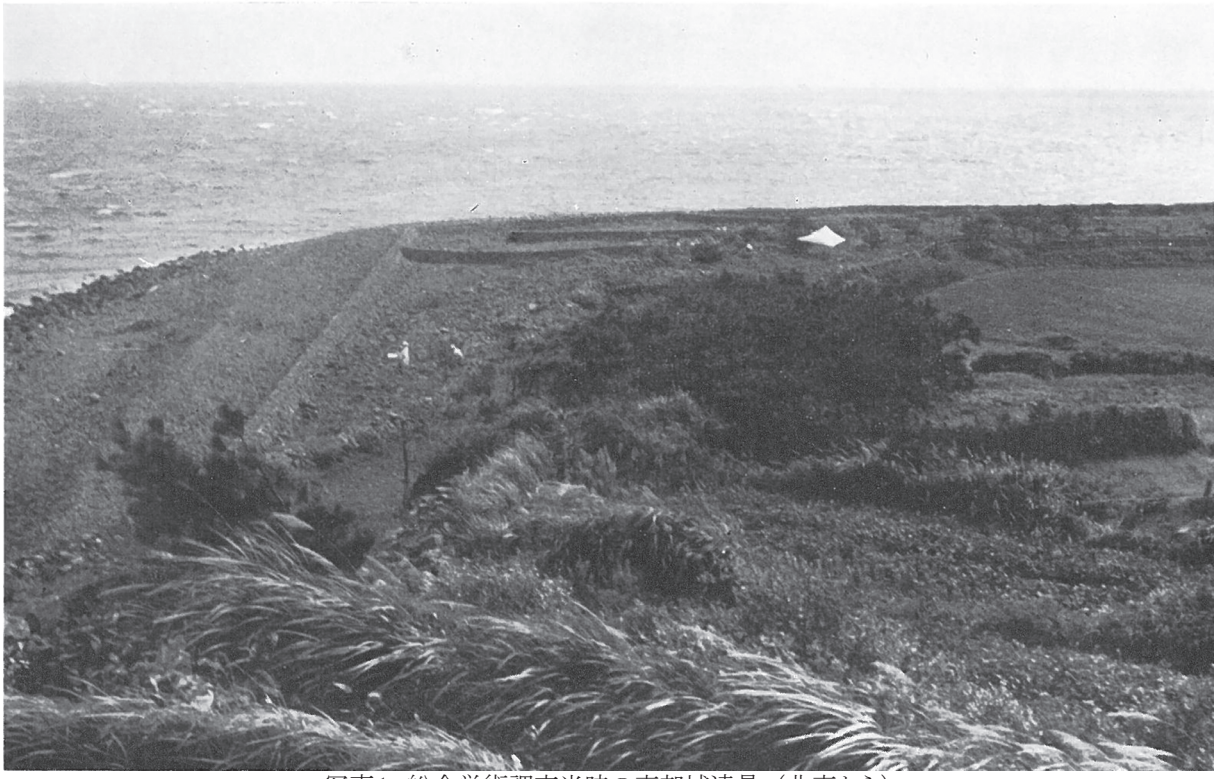


写真1　総合学術調査当時の東部域遠景（北東から）
斎藤・小野 1964「図版3（上）古墳群の現状（1）」を転載



写真2　総合学術調査当時の東部域近景（北東から）
斎藤・小野 1964「図版1（下）遺跡のある海岸」を転載



写真3　東部域現況（南東から）※2012 年 11 月撮影



写真4　第 98 号墳か（東から）
※2012 年 11 月撮影



写真5　第 99 号墳か（南から）
※2012 年 11 月撮影



写真6　第 102 号墳か（東から）
※2012 年 11 月撮影



写真7　第 103 号墳か（北西から）
※2012 年 11 月撮影

表1　山口大学埋蔵文化財資料館所蔵見島ジーコンボ古墳群東部域資料

墳墓番号	旧コンテナ番号	旧袋番号	整理日	遺構番号	須恵器	土師器	鉄器他	遺物実測	備考
第2号墳	34	18	20160620	MJ2Y	4片			須恵器　壺1　甕2	元袋に「2」
第3号墳	32	12	20160620	MJ3Y	5片			須恵器　甕3	元袋に「3」
第5号墳	33	4	20160620	MJ5Y	4片			須恵器　横瓶1　壺2　甕2	元袋に「5」
第6号墳	33	5	20160620	MJ6Y	25片			須恵器　坏1　高台付坏2 甕6	元袋に「6」
第8号墳	33	1	20160620	MJ8Y	3片 陶器1片			須恵器　甕2	元袋に「8」
第9号墳	33	2	20160620	MJ9Y	6片			須恵器　甕1	元袋に「9'の○こ○」 分布図に9号は存在しない
第12号墳	33	9	20160621	MJ12Y	8片			須恵器　平瓶1　甕5	元袋に「12」
第13号墳	33	15	20160621	MJ13Y	5片	1片		須恵器　甕1 土師器　坏1	元袋に「13」
第15号墳	33	11	20160621	MJ15Y	2片			須恵器　高坏1　甕1	元袋に「15」
第18号墳	33	3	20160621	MJ18Y	3片	1片		須恵器　壺1　甕1 土師器　坏1	元袋に「18」
第20号墳	33	14	20160621	MJ20Y	9片	2片		須恵器　平瓶1　壺1　甕4	元袋に「20」
第23号墳	33	20	20160621	MJ23Y	7片			須恵器　坏1　甕3	元袋に「23」
第26号墳	32	26	20160621	MJ26Y	6片			須恵器　壺1　甕3	元袋に「26」
第27号墳	32	5	20160621	MJ27Y	8片			須恵器　壺2　甕4	元袋に「27」
第29号墳	32	13	20160621	MJ29Y	9片			須恵器　壺1　甕7	元袋に「29」
第31号墳	34	16	20160621	MJ31Y	6片			須恵器　坏1　坏蓋1 壺1　甕1	元袋に「31」
第33号墳	34	12	20160621	MJ33Y	7片			須恵器　壺3　甕3	元袋に「33」
第34号墳	34	23	20160621	MJ34Y	11片			須恵器　高台付坏1 壺1　甕3	元袋に「34」
第35号墳	31	16	20160622	MJ35Y	6片			須恵器　壺1　甕3	元袋に「35」
第37号墳	33	12	20160622	MJ37Y	2片		石1	須恵器　甕1	元袋に「37」
第39号墳	31	9	20160622	MJ39Y	6片			須恵器　高台付坏1	元袋に「39」
第41号墳	33	10	20160622	MJ41Y	5片	1片		須恵器　甕4 土師器　坏1	元袋に「41」
第42号墳	32	4	20160622	MJ42Y	14片			須恵器　壺2　甕7	元袋に「42」
第43号墳か	33	25	20160622	MJ43Yか	8片			須恵器　壺2　甕3	元袋に「4？」43か
第44号墳	32	2	20160622	MJ44Y	23片	2片		須恵器　坏蓋3　鉢1 壺1　甕4	元袋に「44」
第45号墳	31	11	20160622	MJ45Y	25片	1片		須恵器　坏蓋1　高台付坏1 壺2　甕9 土師器　坏1	元袋に「45」
第48号墳	31	10	20160622	MJ48Y	4片			須恵器　坏蓋1　甕3	元袋に「48」
第49号墳	31	13	20160622	MJ49Y	8片	2片		須恵器　壺1　甕3 土師器　坏1　皿1	元袋に「49」
第50号墳	32	6	20160622	MJ50Y	2片			須恵器　甕2	元袋に「50」
第52号墳	32	7	20210520	MJ52Y	12片	1片		須恵器　甕5 土師器　甕1	元袋に「52」
第53号墳	34	17	20210520	MJ53Y	6片			須恵器　壺1　甕5	元袋に「53」
第54号墳	31	7	20210520	MJ54Y	12片			須恵器　甕8	元袋に「54」
第55号墳	32	21	20210520	MJ55Y	19片	1片		須恵器　坏1　壺2　甕6	元袋に「55」
第56号墳	32	16	20210520	MJ56Y	2片	1片		須恵器　坏1　甕1 土師器　皿1	元袋に「56」
第58号墳	32	17	20210520	MJ58Y	5片			須恵器　壺2　甕3	元袋に「58」
第59号墳	32	18	20210520	MJ59Y	3片			須恵器　甕3	元袋に「59」
第63号墳	32	19	20210630	MJ63Y	21片			須恵器　壺3　甕8	元袋に「63」
第64号墳	31	15	20210630	MJ64Y	10片	1片		須恵器　坏蓋1　甕6 土師器　壺1	元袋に「64」
第65号墳	32	29	20210630	MJ65Y		1片		土師器　坏1	元袋に「65」
第66号墳	32	9	20210630	MJ66Y	16片			須恵器　壺4　甕5	元袋に「66」
第67号墳	34	21	20210630	MJ67Y	15片			須恵器　坏1　高台付坏1 横瓶1　壺2　甕5	元袋に「67」
第68号墳	34	1	20210630	MJ68Y	8片			須恵器　甕6	元袋に「68」
第69号墳	31	5	20210630	MJ69Y	24片			須恵器　坏1　高台付坏1 壺2　甕7	元袋に「69　玄室内」 遺物一部注記済み 「見島69　1960」
第70号墳	32	3	20210630	MJ70Y	14片	1片		須恵器　甕4 土師器　甕1	元袋に「70」
第71号墳	34	28	20210630	MJ71Y	11片	1片		須恵器　壺1　甕5 土師器　坏1	元袋に「71」
第72号墳	34	3	20210630	MJ72Y	18片			須恵器　坏蓋1　甕9	元袋に「72　S 19　内口1」
第73号墳	34	8	20210701	MJ73Y	2片			須恵器　甕2	元袋に「73　H 3　内口1」
第75号墳	34	22	20210701	MJ75Y	5片	3片		須恵器　坏蓋1　高台付坏1 甕1 土師器　高坏1	元袋に「無□(對か)75 口1□(ハか)　底H 1」
第76号墳	34	25	20210701	MJ76Y	5片			須恵器　壺1	元袋に「76　S4　H1」
第77・78号墳	32	8	20210701	MJ77・78Y	12片			須恵器　高台付坏1 横瓶3　壺2　甕4	元袋に「無数　(78　77)」
第79号墳	34	2	20210701	MJ79Y	5片			須恵器　壺1　甕4	元袋に「79　S-4」
第80・81号墳	34	26	20210701	MJ80・81Y	1片				元袋に「9月4日10時 見島 へのへのもへじ 80・81」
第81号墳	34	27	20210701	MJ81Y	9片	2片		須恵器　甕5	元袋に「81　S15　H-2」
第82号墳	33	23	20210701	MJ82Y	35片			須恵器　高台付坏1　壺3 甕7	元袋に「82　S」
第83号墳	34	19	20210701	MJ83Y	7片	3片		須恵器　甕2 土師器　坏1	元袋に「83　S-7　H-3　ロ-1」
第84号墳か	34	15	20210701	MJ84Yか	5片			須恵器　壺1　甕2	元袋に「84(9か)　S5　口内1」
第85号墳	34	13	20210701	MJ85Y	2片			須恵器　甕1	元袋に「85　S1」
第100号墳	34	14	20210701	MJ100Y	6片			須恵器　壺2　甕4	元袋に「100　S5」
第101号墳	34	11	20210701	MJ101Y	10片			須恵器　甕3	元袋に「101　S16」
第103号墳	34	10	20210701	MJ103Y	8片			須恵器　壺1　甕2	元袋に「103　S7」
第105号墳	33	21	20210701	MJ105Y	10片			須恵器　坏蓋1　甕3	元袋に「105　S14　口1　底1」
第107号墳	34	9	20210701	MJ107Y	3片			須恵器　壺2　甕1	元袋に「107　S3」
第108号墳	33	6	20210701	MJ108Y			動物(犬) の頭骨か		元袋に「見島 S36. 9. 3 1□(0か)8号　棺内表土中」 出土年月日と内容から第128号墳出土 資料とみられる
第112号墳	33	8	20210701	MJ112Y	40片			須恵器　坏蓋1　坏1 壺3　横瓶3　甕13	元袋に「112　S41　底4」
第113号と 114号の間	34	6	20210702	MJ113-114Y	23片	(緑釉)1片		須恵器　坏1　高坏1 甕6　緑釉1	元袋に「113　114間」
第116号墳	33	24	20210702	MJ116Y	8片			須恵器　甕3	元袋に「116　S8」
第117号墳	92	4	20210702	MJ117Y	7片			須恵器　甕5	元袋に「117　S9」
第120号墳	92	7	20210702	MJ120Y	2片			須恵器　壺1　甕1	元袋に「120　S2」
不明1	32	15	20211006	MJUK1	4片			須恵器　甕4	元袋に「不明」
不明2	32	30	20211006	MJUK2	2片			須恵器　甕2	元袋に「不明」

※緑網掛け:昭和37年(1962)調査墳　青網掛け:昭和57年(1982)調査墳

第2節　東部域の出土資料

1．資料整理の概要（図2、表1）

平成28年度に西部域の分布調査採取資料を整理・報告する際に、東部域の分布調査採取資料の整理にも部分的に着手していたが、その後は資料調査や公開の手段、予算的な措置等について萩市との調整が停滞したことや、当館の埋蔵文化財保護業務が多忙となったことが原因で中断期間が長引き、作業を再開できたのは5年後、令和3年(2021)のことであった。

分布調査にて資料が採取された墳墓を見ると、東部域南西部北側（第86～99号墳）が欠落するもののほぼ全域に及んでいることが分かる。昭和37年（1962）に調査された第44・56・77・81・105・116号墳の資料や、山口県教育委員会により昭和57年（1982）に調査された第72・113号墳の資料も存在している。

このうち、コンテナNO．33 袋NO．25は遺物元袋の注記が「43」もしくは「48」に読めたが、第48号墳採取資料はコンテナNO．31 袋NO．10に見られることから、第43号墳に所属させることにした。コンテナNO．34 袋NO．15は遺物元袋の注記が「84」または「89」と読める。判断しかねるが、上記の資料空白地点を考慮して暫定的に第84号墳に所属させることにした。

このほか、遺物元袋に「9’の□こ□」と記された資料については、第9号墳が『見島総合学術調査報告』の巻末分布図に欠落していることに苦慮したが、第5～11号墳が立地する付近で採取されたものと見なし、ひとまず第9号墳所属として取り扱うことにした。また、見島ジーコンボ古墳群「不明」とされる2袋についても、内容から分布調査採取品である可能性が高いと考え、西部域にて採取された可能性もあるものの、この機会にあわせて報告を行う。

遺物元袋に「見島　S36.9.3．1□8号　棺内表土中」と記された資料は、古くに当館が作成した遺物管理台帳では「第108号墳」とされてきたが、内容が動物（犬か）の頭骨であることや、出土年月日からも第128号墳に所属することは明白である。[註1]

遺物整理作業においては、従来通り遺構番号として号数の前に遺跡略号（**MJ**＝見島ジーコンボ古墳群）を、遺物番号の前に当館所蔵品を示す**Y**を付している。

東部域分布調査で確認された遺物は、ほぼ全てが土器であり、金属器と人骨は存在しなかった。須恵器に比して土師器は極めて少量であった。以下に各墳の遺物を報告する。

2．各墳出土土器（図3～53、写真8～49、表2）

【第2号墳】（図3、写真8）

昭和37年(1962)に発掘調査され、銅製銙帯具や刀装具、人骨歯2体分（壮年男性1、年齢不明女性1）（松下・松下2014）などが出土した第1号墳の南約7mに位置しており、石室主軸は北－南を向く。

資料はいずれも須恵器である。**MJ2Y1**は頸－肩部片と体下半－底部片であり、接合しないが長頸壺の同一個体とみられる。肩部外面と底部内面に灰を被っている。内面と肩部外面は丁寧に回転ナデが施され、当て具痕は消滅しているが、体部外面には平行文叩きが残っている。底部外端に付された高台は欠失する。**MJ2Y2**は甕の体部片。外面は平行文叩き後カキ目が施され、内面には同心円文当て具痕が残る。**MJ3Y3**も甕の体部片。外面の叩き痕は完全にナデ消されている。内面は平行文当て具痕下にわずかに同心円文当て具痕が観察される。

【第3号墳】（図3、写真8）

第2号墳の西南西約3mに位置しており、石室主軸は北西－南東を向く。

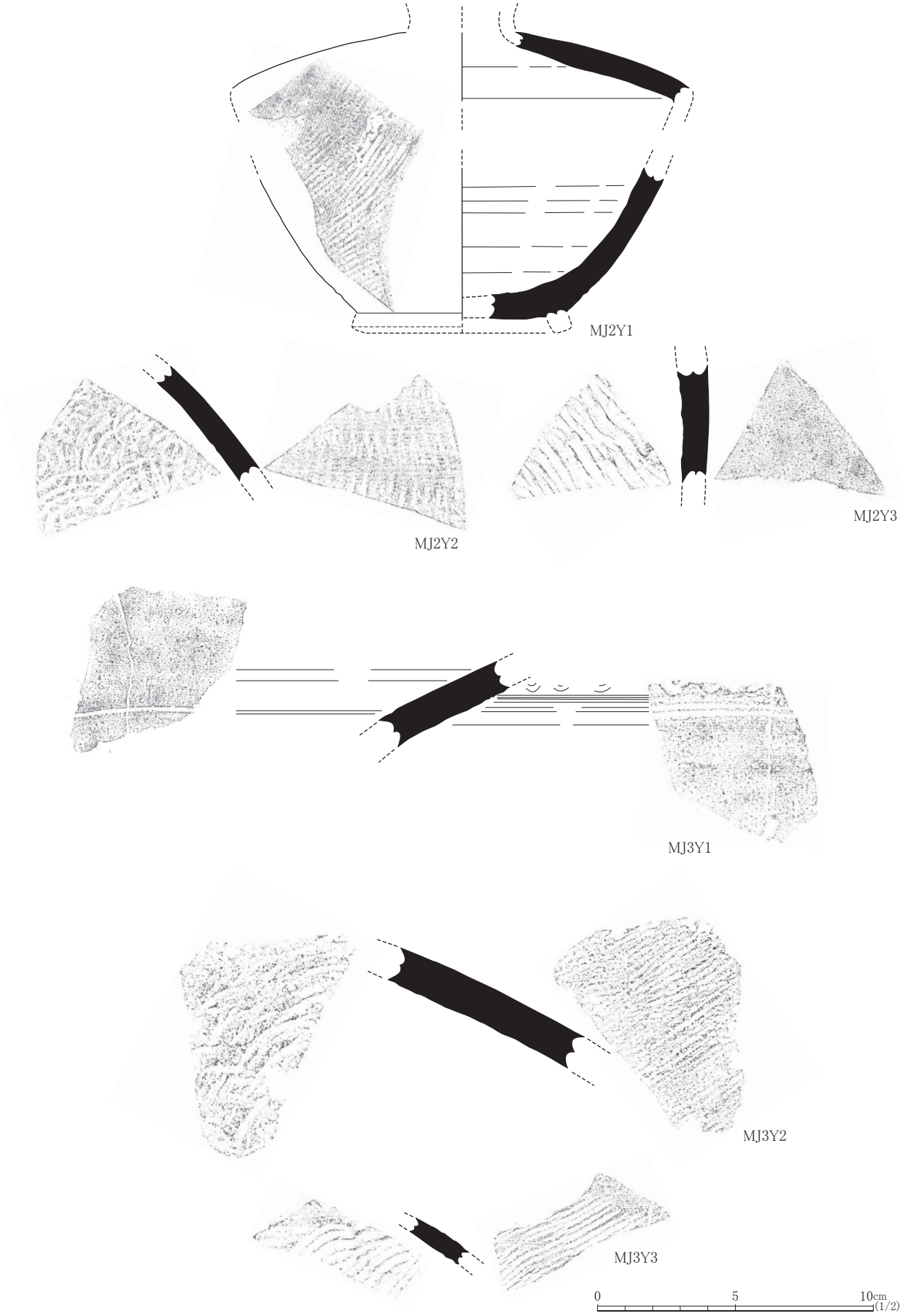


図 3　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図①

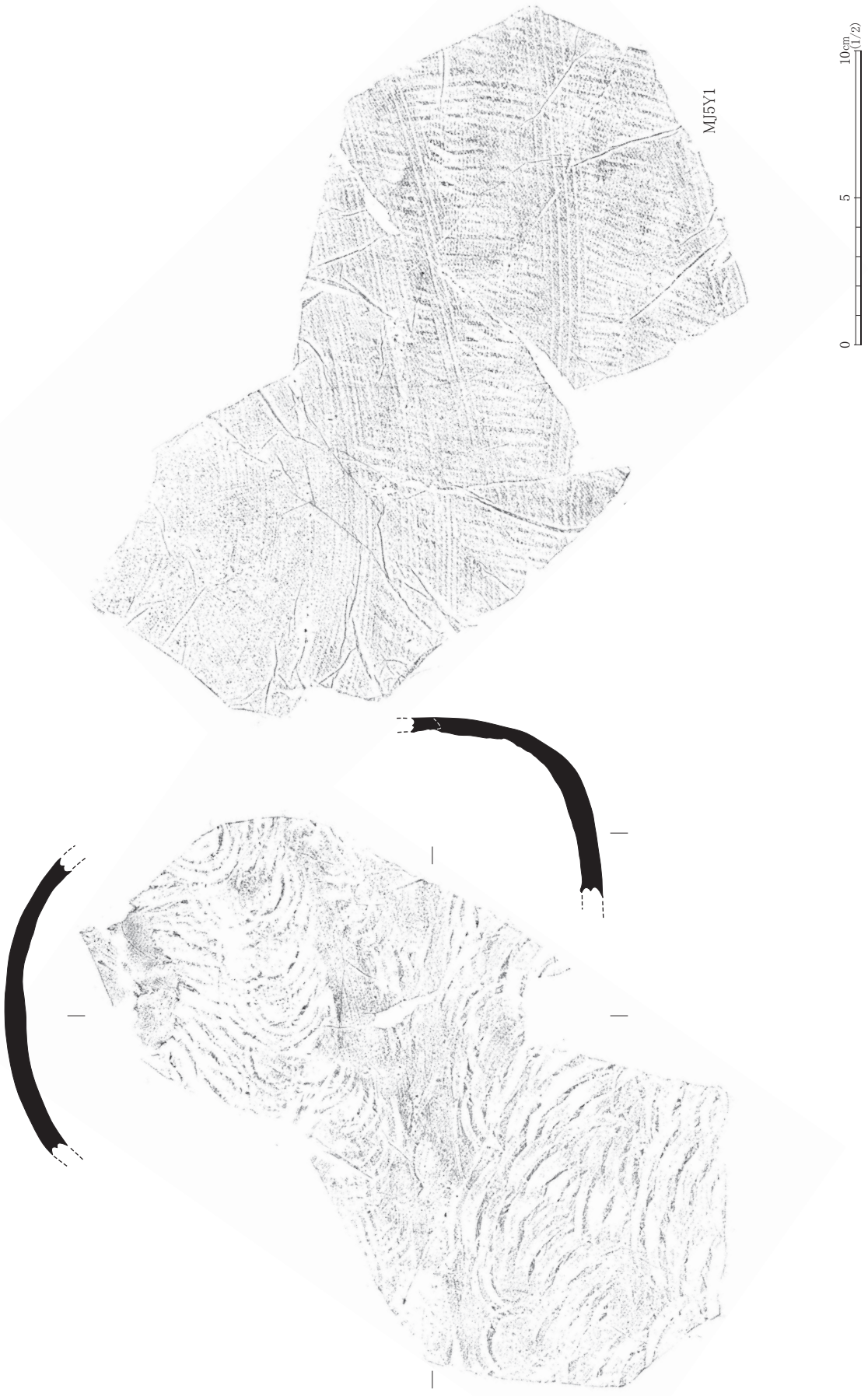


図 4　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図②



図 5　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図③

資料はいずれも須恵器である。**MJ3Y1**は甕の頸部片で、2片が接合した。口縁に向かい大きく開く個体で、外面には2条の沈線と櫛描波状文が施されている。内面の沈線はヘラ記号と思われる。**MJ3Y2**は甕の体部片。外面には方向を違え平行文叩きが施される。内面の同心円文当て具痕はナデにより不明瞭となっている。胎土や焼成具合からMJ3Y1と同一個体の可能性がある。**MJ3Y3**も甕の体部片。外面は平行文叩き後に部分的に横ナデが施される。内面の同心円文当て具痕は明瞭に残る。

【第5号墳】(図4・5、写真8・9)

第3号墳の南約4.5mに位置しており、石室主軸は北－南を向く。

資料はいずれも須恵器である。**MJ5Y1**は横瓶の底－体部片とみられる。外面は平行文叩き後に粗くカキ目が施される。内面には同心円文当て具痕が残るが、粘土紐接合部に強い指ナデが見られる。円盤閉塞部がわずかに残り、外面には指押さえ、内面には目の細かな布目が残る。**MJ5Y2**は壺の肩部とみられる。外面は目の細かな格子文叩き(2.5㎜角。擬格子平行文か)後に回転ナデが施される。内面の当て具痕は完全にナデ消されている。**MJ5Y3**は甕体部片。外面は目の細かな平行文叩き(7条/㎝)後に板状工具によるナデ(カキ目か)が施されている。内面は平行文当て具痕をそのまま残すが、下方にわずかに同心円文当て具痕が見られる。**MJ5Y4**は甕の底－体部片。外面は目の細かな平行文叩き(7条/㎝)後に板状工具による器面調整が施され、内面には同心円文当て具痕が残すが、底部付近はナデ消しが図られている。成形痕跡や胎土、焼成状態からMJ5Y3・4は同一個体である可能性が高い。

【第6号墳】(図6、写真9・10)

第5号墳の西に隣接する。石室主軸方向は北西－南東とみられる。

資料はいずれも須恵器である。**MJ6Y1**は無高台の坏底部片。復元底部径7.6㎝、残存高1.7㎝を測る。底部外面には繊維状の圧痕が見られる。**MJ6Y2**は高台付坏の底部片。器壁の厚い個体で、底部外端に扁平な高台がハ字状に開いて付く。復元高台径は外端で8.8㎝、内端で7.8㎝。残存高は1.9㎝を測る。**MJ6Y3**も高台付坏の底部片。底部外端のやや内側に扁平な高台がハ字状に付く。底部外面には板圧痕が部分的に残る。復元高台径は外端で9.4㎝、内端で8.0㎝、残存高は1.6㎝を測る。**MJ6Y4**は甕の頸－肩部片。外面には灰を多量に被っているが、格子文叩きが観察される。内面には同心円文当て具痕が残る。焼成不良で内面が赤みを帯びる。**MJ6Y5**も甕の頸－肩部片。内外面とも横ナデが施され、叩きと当て具痕ともに観察できない。胎土や焼成状態からMJ6Y8と同一個体の可能性がある。**MJ6Y6**は甕の体部片。外面には擬格子平行文叩きが施され、内面には平行文当て具痕が明瞭に残る。**MJ6Y7**も甕の体部片。外面は平行文叩き後にカキ目が施される。内面は同心円文当て具痕の上に平行文当て具痕が重複する。同一個体とみられる破片が他に2点存在する。**MJ6Y8**も甕の体部片。外面は平行文叩き後にナデを施す。内面の同心円文当て具痕もナデにより不明瞭となっている。内面の粘土紐接合部に強くナデを施している。**MJ6Y9**は甕の底部片。外面はナデが施されているが、わずかに平行文叩きが残る。内面の同心円文当て具痕もナデにより不明瞭となっている。やや不良の焼成状態や胎土から、MJ6Y4と同一個体の可能性がある。

【第8号墳】(図7、写真10)

第5号墳の南東約2mに位置する。破壊が進行しているようで、石室の主軸方向は不明である。

資料はいずれも須恵器である。**MJ8Y1**は甕の口縁－頸部片。器形がシャープで胎土も精緻、成形にも熟練が感じられる。頸基部から屈曲して直線的に開き、口縁部に至る。口縁内外端部をわずかに肥厚させる。口縁端部から頸部内面にかけてわずかに灰を被っている。復元口径17.6㎝、残存高4.9㎝を測る。**MJ8Y2**は甕の体部片。外面は平行文叩きが施され、内面には平行文当て具痕が明瞭に残る。



図 6　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図④

【第9号墳】（図7、写真10）

遺物収納袋に「9’の□こ□」と記されていたもので、分布図では第9号墳は欠番となっている。暫定的に第9号墳に所属させておく。須恵器6片が収納されていたが、図示可能な資料は1点のみである。**MJ9Y1**は甕の頸－肩部片。頸基部から強く外反して口縁が開く。肩部外面はカキ目が密に施されるものの、平行文叩きが観察される。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。復元頸部径13.4㎝を測る。

【第12号墳】（図7、写真10～11）

第6号墳の南約4.5mに位置しており、間に第11号墳を挟む。石室主軸方向は北－南を向く。

資料はいずれも須恵器である。**MJ12Y1**は円盤閉塞部を含む破片で、外面は自然釉および灰で不明瞭ではあるがカキ目が施されている。内面は円盤部に目の細かな布目が明瞭に残り、接合部周囲は丁寧に回転ナデが施されているものの、同心円文当て具痕がかすかに残っている。平瓶天井部の可能性がある。**MJ12Y2**は甕の口縁部片である。ゆるやかに外反する口縁で、端部の下位ににぶい沈線を1条巡らせている。内面には多量の灰が被っている。**MJ12Y3**は甕の肩部片で、**MJ12Y4**は体部片。外面は平行文叩きが施されており、内面の同心円文当て具痕はナデにより不明瞭となっている。**MJ12Y5**も甕の体部片である。外面には平行文叩き、内面には平行文当て具痕が見られるが、胎土や焼成状態からMJ12Y4とは部位違いの同一個体である可能性が高い。**MJ12Y6**も甕。外面には平行文叩きが交叉して施され、内面には平行文当て具痕が残る。

【第13号墳】（図8、写真11）

第12号墳の南東約4mに位置しており、石室の主軸は北－南を向くようである。

MJ13Y1は須恵器甕の体部片で、外面には平行文叩きが施されている。内面には同心円文当て具痕に重複して目の粗い平行文当て具（3条/㎝）が当てられている。**MJ13Y2**は土師器坏の口縁部片。焼成状態が良好で器壁も薄くシャープな器形であるが、細片9点の接合資料で器面調整は観察できない。口縁端部は欠失している。

【第15号墳】（図8、写真11）

第12号墳の南西約4.5mに位置しており、石室の主軸は北北東－南南西を向いている。

須恵器片2点のみ存在する。**MJ15Y1**は高坏脚部片。内外面とも丁寧に回転ナデが施されており、脚柱折損部に透穴の下端が遺存する。裾部は緩やかに外反して接地するが、上端部をわずかに肥厚させている。**MJ15Y2**は甕の肩部片とみられる。外面は平行文叩きが施される。内面はやや目の細かい平行文当て具痕（4条/㎝）の上から同心円文当て具が当てられており、粗くナデが施されている。

【第18号墳】（図8、写真11）

第13号墳の南西約1.5mに位置している。石室の破壊が著しいようで、主軸方向は不明である。

MJ18Y1は須恵器壺の肩部片。外面は平行文叩き後カキ目が密に施されており、上位に灰を被っている。内面は軽く回転ナデが施されるが、同心円文当て具痕がはっきりと残っている。**MJ18Y2**は須恵器甕の体部片。外面は平行文叩きのほか、ヘラによる直線3条の痕跡が見られる。内面の当て具痕（平行文か）はナデにより部分的に消されている。**MJ18Y3**は土師器坏の口縁部片。2片の接合資料で、同一個体と思われる接合しない小片が他に8点存在する。口縁は外面に稜を形成しながらやや外反気味に立ち上がるが、端部を欠失している。全面の風化が著しく器面調整は観察できない。

【第20号墳】（図8・9、写真12）

第18号墳の西1mに隣接している。石室の主軸は北北西－南南東を向いている。

資料はいずれも須恵器である。**MJ20Y1**は壺の底－体部片。焼成状態が良好で、内外面ともに回転

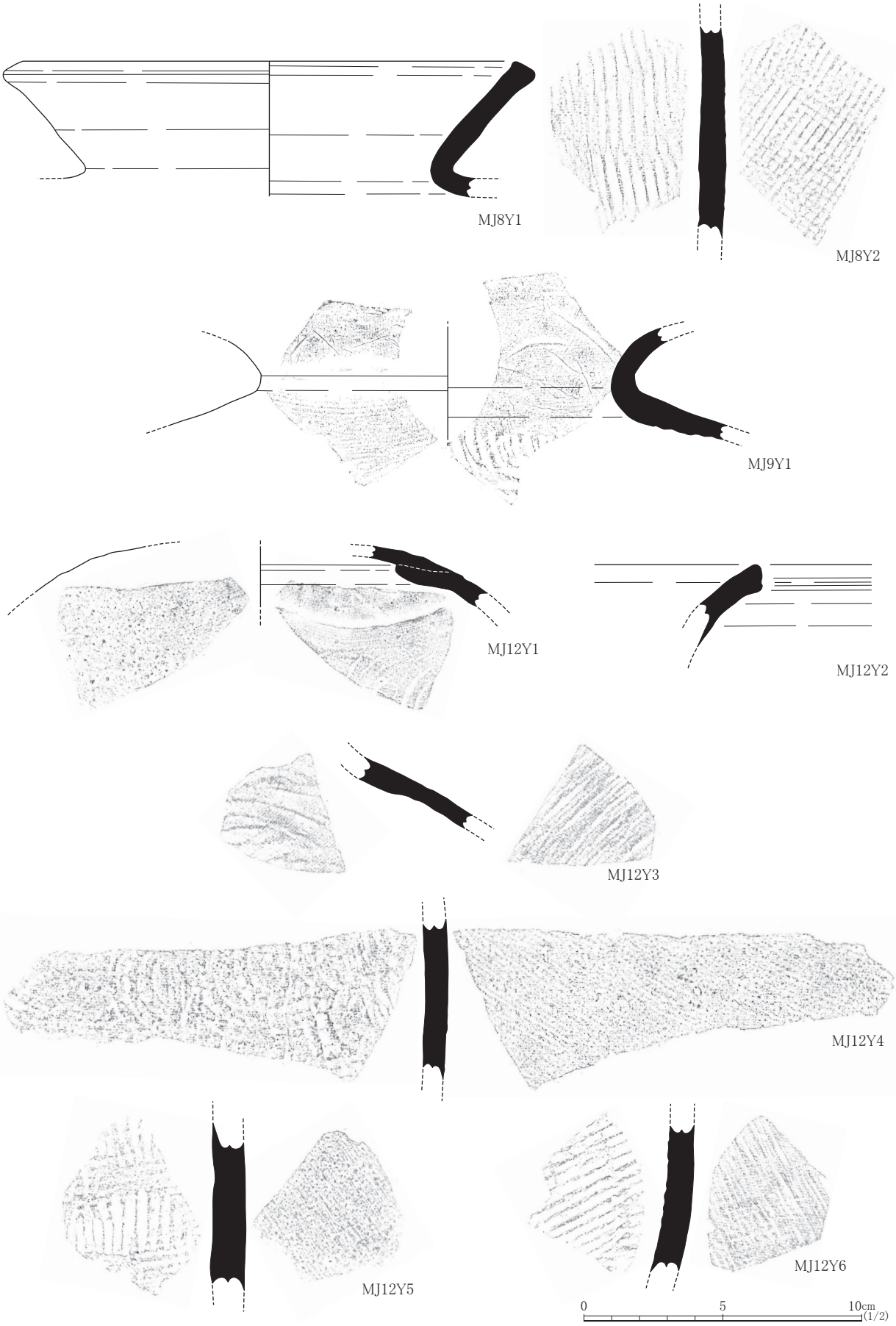


図 7　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑤

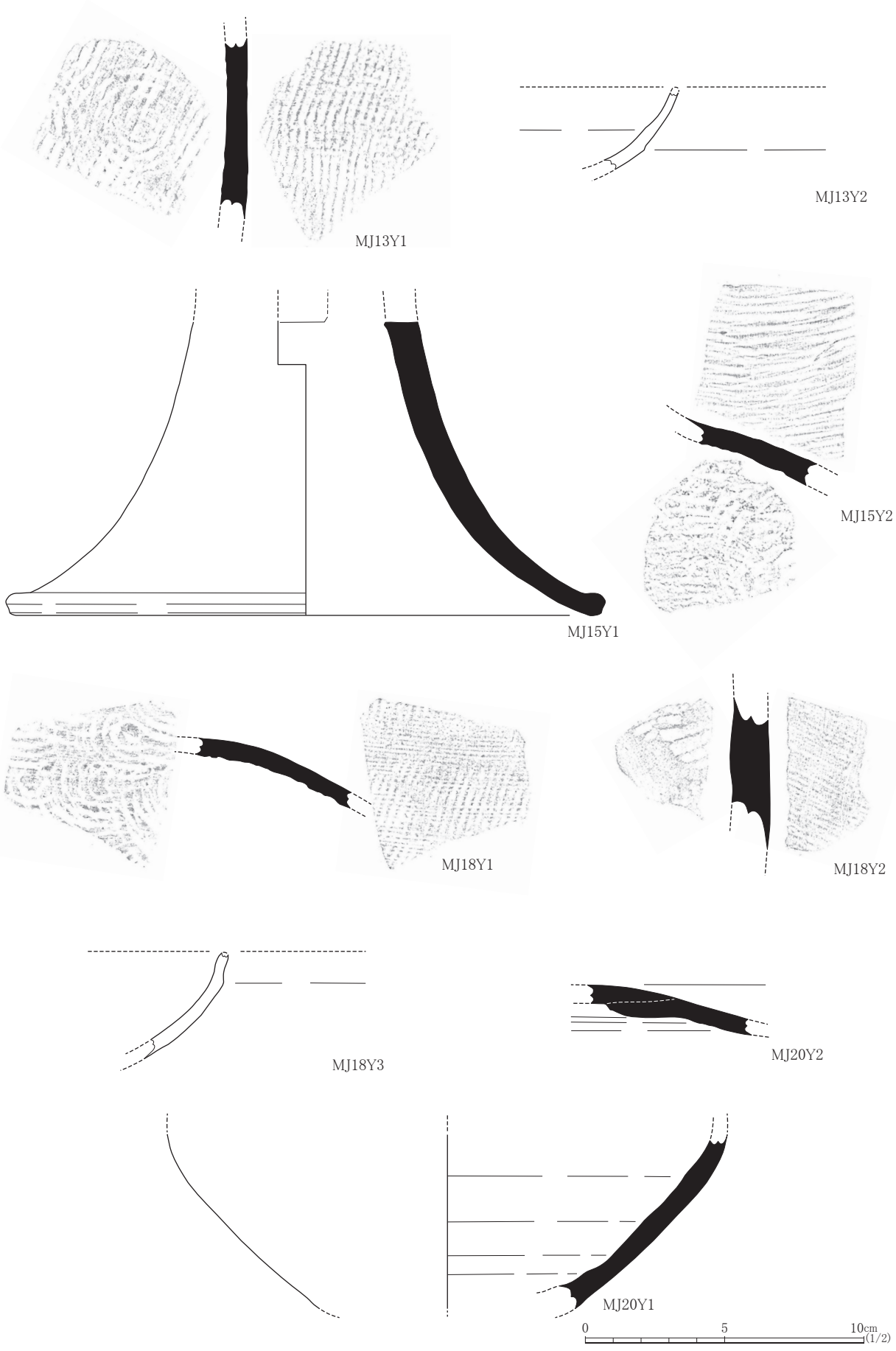


図 8　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑥

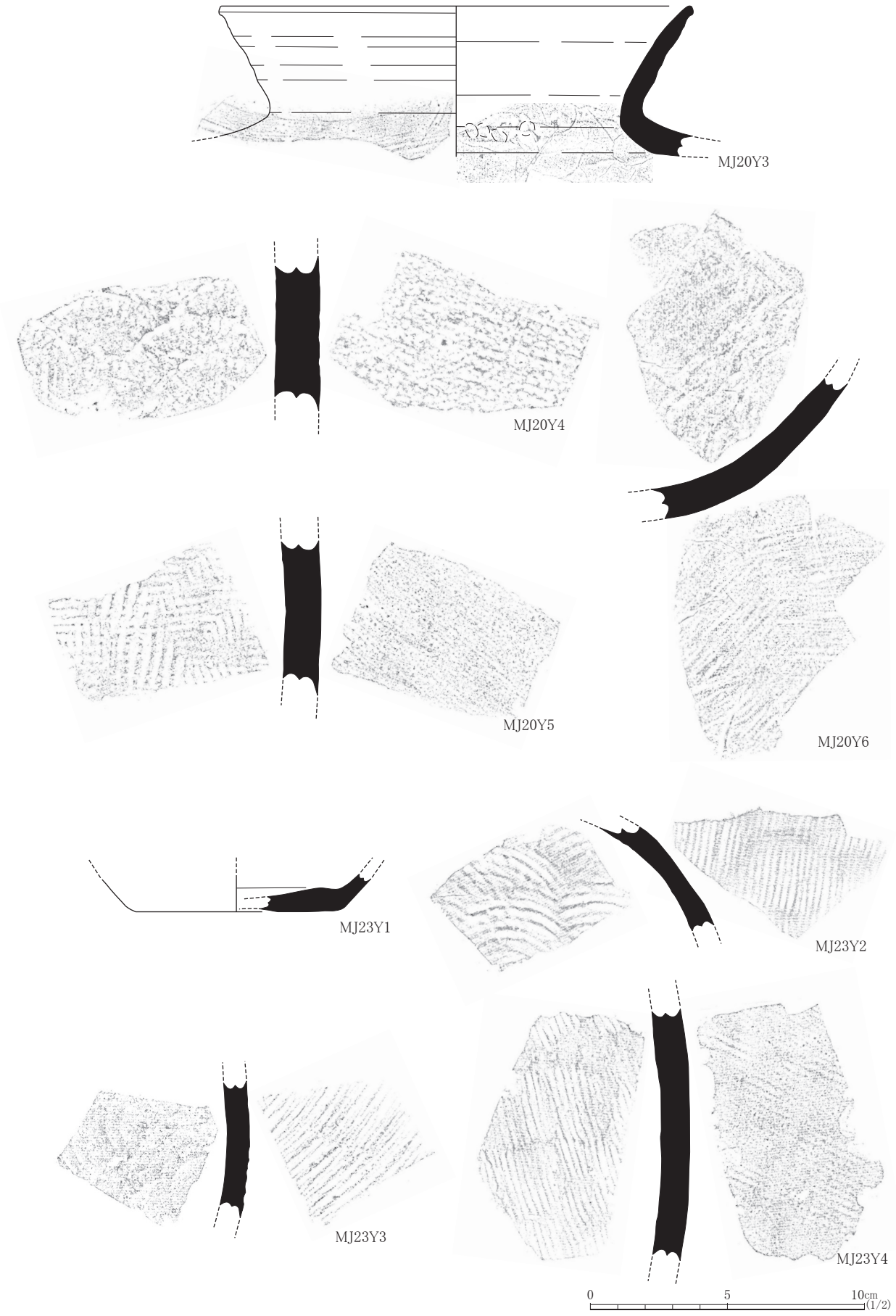


図 9　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑦

ナデが丁寧に施されており、叩きや当て具痕は観察されない。**MJ20Y2**は円盤閉塞部を含む破片で、外面は不定方向のナデが、内面は回転ナデが施されている。平瓶の天井部であろうか。**MJ20Y3**は甕の口縁－肩部片。頸部から屈曲気味に開き、わずかに外反しながら口縁に至る。内面には灰が少量被る。肩部外面には平行文叩きが施されており、内面の当て具痕は同心円文にも見えるがナデにより特定できない。復元口径17.2㎝、残存高5.5㎝を測る。**MJ20Y4**は器壁の厚みから大甕の体部片とみられる。外面は自然釉を被っているため判別しづらいが、格子文または擬格子文平行叩きが施されている。内面の同心円文当て具痕はナデによりほぼ消滅している。**MJ20Y5**も大甕の体部片か。外面には平行文叩きを行い、内面の平行文当て具痕には粗くナデを施している。**MJ20Y6**は甕の底部片。外面には平行文叩きが交叉して施される。内面の同心円文当て具痕は丁寧にナデ消され、わずかに残るのみである。このほか土師器も2片採取されているが、図化不能である。

【第23号墳】（図9、写真12・13）

第15号墳の南西約11mに位置している。石室の主軸は東北東－西南西を向いている。

資料はいずれも須恵器である。**MJ23Y1**は無高台の坏底部片。復元底部径7.4㎝、残存高1.35㎝を測る。**MJ23Y2**は甕の体部片。外面は平行文叩き後カキ目が施されている。内面の同心円文当て具痕は軽くナデが施される。**MJ23Y3**も甕の体部片。外面は平行文叩きが施され、内面の同心円文当て具痕は丁寧にナデ消されるが部分的に残している。**MJ23Y4**も甕の体部片。外面は目の粗い平行文叩き（3条/㎝）後ナデを施す。内面は平行文当て具痕（4条/㎝）を残すが、所々に凹みが見られる。

【第26号墳】（図10、写真13）

第20号墳の南西約2mに位置している。石室は大きく破壊を受けているようで、主軸は南－北を向いているようにも見えるが定かではない。

資料はいずれも須恵器である。**MJ26Y1**は壺の底部片。器壁の厚い個体で、焼成時の膨れや爆ぜが見られる。高台も焼成時に剥離したものと思われる。**MJ26Y2**は甕の口縁－頸部片。頸部から緩やかに外反して口縁が大きく開く。口縁端部を外方に折りたたむことで低い突帯を形成する。頸部の外面には斜め方向の連続する板圧痕が見られ、頸部内面の最下端には当て具痕がわずかに残る。復元口径21.6㎝、残存高5.5㎝を測る。。**MJ26Y3**は甕の体部片。外面の目の粗い平行文叩き（2条/㎝）、内面の同心円文当て具痕ともそのまま残す。外面にはわずかに自然釉を被っている。**MJ26Y4**も甕の体部片とみられ、平行文叩きと平行文当て具痕が残っているが、板状の個体であり内外面の判別が付けがたい。

【第27号墳】（図10、写真13・14）

第26号墳の南約1mに隣接している。石室の主軸は北北西－南南東を向いている。

資料はいずれも須恵器である。**MJ27Y1**は壺の口縁部片。頸部から外反して口縁が短く立ち上がる。口縁端部内側はにぶく面を取る。復元口径19.2㎝、残存高3.0㎝を測る。**MJ27Y2**は壺甕類の肩部片とみられる。頸基部で折損しており、内面に強いナデを施す。外面に平行文叩き、内面に同心円文当て具痕を残す。**MJ27Y3**は器壁が厚く大甕の体部片とみられる。外面は平行文叩き後カキ目を施しており、上部に灰が被っている。内面は同心円文当て具痕を丁寧にナデ消している。MJ27Y5と同一個体の可能性がある。**MJ27Y4**は甕の体部片。外面は平行文叩き後に部分的にカキ目を施す。内面は同心円文当て具痕をそのまま残している。**MJ27Y5**も甕の体部片だが、器壁がやや厚く大甕の可能性がある。外面は平行文叩きをナデ消した後にカキ目を施している。内面は同心円文当て具痕を丁寧にナデ消している。**MJ27Y6**も大甕の体部片か。内面は焼成時に剥離した可能性がある。外面には平行文叩きが見られる。

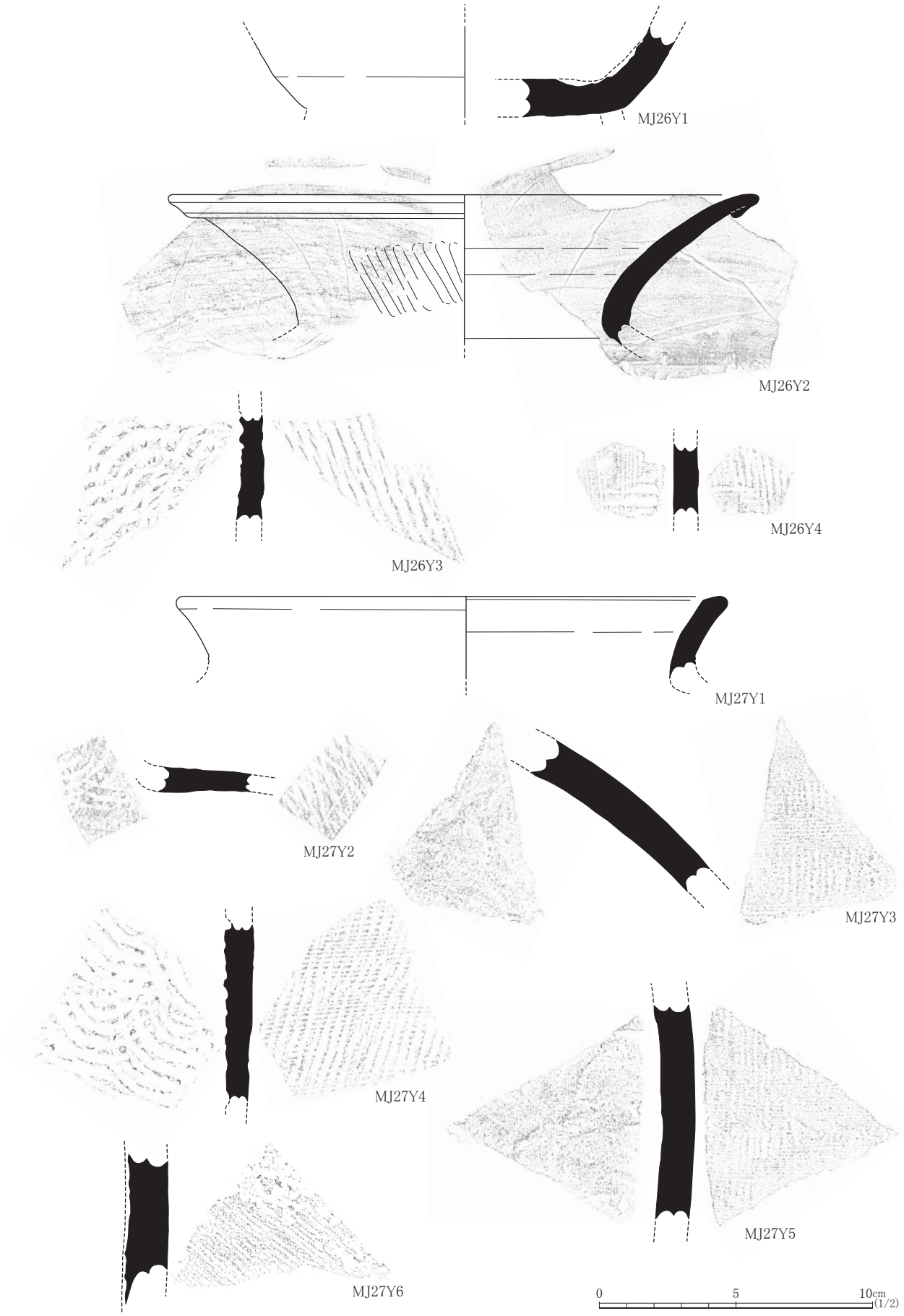


図 10　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑧

【第29号墳】（図11、写真14・15）

第27号墳の南約4mに位置している。分布図を見る限りでは、石室は大破しているようである。

資料はいずれも須恵器である。**MJ29Y1**は壺の底部片。平底で外面には糸切り痕と板圧痕が残るが、内面に平行文当て具痕がかすかに残ることから、平行文叩きが施されたのであろう。**MJ29Y2**は緩やかに外反して開く甕の口縁部片。外端部に突帯を1条巡らせている。**MJ29Y3**は大甕の頸－肩部片。頸部から強く外反して口縁が開く。肩部内面には同心円文当て具痕が残るが、外面は自然釉と灰を被るため成形痕を観察できない。復元頸部径29.6㎝を測る。**MJ29Y4**は甕の頸部片。胎土や焼成状態からMJ29Y2と同一個体である可能性が高い。**MJ29Y5**は甕の頸－肩部片。肩部外面の擬格子平行文叩きは粗くナデ消されている。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。**MJ29Y6**は甕の体部片。外面に平行文叩きを残すが、内面の当て具痕は完全にナデ消されている。胎土や焼成状態からMJ29Y2・4と同一個体の可能性がある。**MJ29Y7**も甕の体部片。外面の平行文叩き、内面の同心円文当て具痕ともそのまま残す。**MJ29Y8**も甕の体部であるが、胎土は精選されており、焼成状況も良好で、見島の須恵器としてはやや異質に感じる。外面は平行文叩き後カキ目が施されており、少量の灰と自然釉を被っている。内面の同心円文当て具痕はそのまま残している。

【第31号墳】（図11、写真15）

第29号墳の南南西約2mに位置している。石室の主軸は北北東－南南西を向いている。小型の石室で、天井石は良好に遺存しているようである。

資料はいずれも須恵器である。**MJ31Y1**は2片の接合資料で、坏蓋の天井部片。低いドーム状の天井部から緩やかに口縁部に向かい降下する。残存高1.5㎝を測る。**MJ31Y2**は無高台坏の底部片。底部外面は不定方向のナデ、それ以外は内外面とも回転ナデが施される。復元底部径7.2㎝、残存高2.3㎝を測る。**MJ31Y3**は壺の肩部片か。外面は平行文叩き後密にカキ目が施されている。内面は同心円文当て具痕を残している。**MJ31Y4**は甕の体部片。外面は平行文叩き後に不定方向から板状工具によるナデ（カキ目か）が施されている。内面の格子文当て具痕は粗くナデが施される。

【第33号墳】（図12、写真15・16）

第31号墳の西南西約2mに位置している。石室の主軸は北西－南東を向いている。

資料はいずれも須恵器である。**MJ33Y1**は短頸壺の口縁－肩部片。なで肩の肩部から屈曲して短く口縁が立ち上がる。肩部外面には左上がりの平行文叩き（4条/㎝）が施され、頸部付近は強い指押さえ痕が残る。内面は丁寧に横ナデが施されているが、肩部内面にわずかに同心円文当て具痕が残る。**MJ33Y2**は壺の肩部片か。外面は平行文叩き（4条/㎝）後カキ目を密に施す。ヘラ状工具による傷がジグザグに付いているが、意図的なものかは不明である。部分的に灰を被っている。内面の同心円文当て具痕は、縦方向の丁寧なナデにより不明瞭となっている。胎土が精選されており、器面調整も丁寧に施された個体である。**MJ33Y3**は壺の底－体部片。体部外面は回転ヘラ削りおよび回転ナデが、内面は回転ナデが施され、部分的に縦方向のナデも施される。焼成具合は異なるが、胎土の特徴や丁寧な器面調整からMJ33Y2と同一個体の可能性がある。**MJ33Y4**は甕の口縁－頸部片で、胎土や焼成状態からMJ29Y2と同一個体の可能性がある。**MJ33Y5**は甕の体部片。外面は透明釉が被るものの平行文叩きは明瞭に残る。内面には同心円文当て具痕が残る。**MJ33Y6**は甕の底部付近とみられる。外面は不定方向から目の粗い平行文叩き（2条/㎝）が施されており、内面には同心円文当て具痕が残る。

【第34号墳】（図12・13、写真16）

第31号墳の南南東約1.5mに位置しており。石室の主軸は北東－南西を向いている。

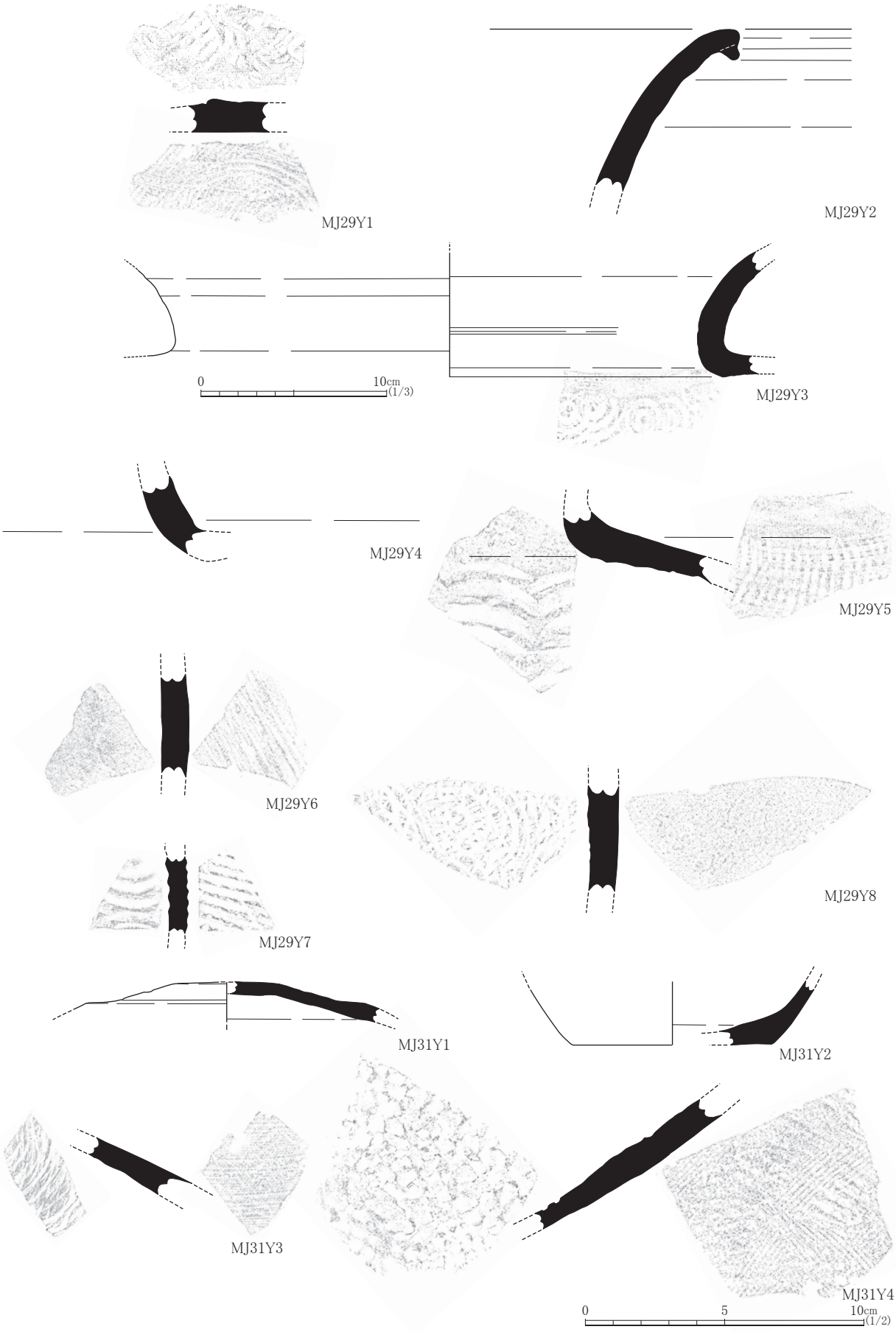


図 11　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑨

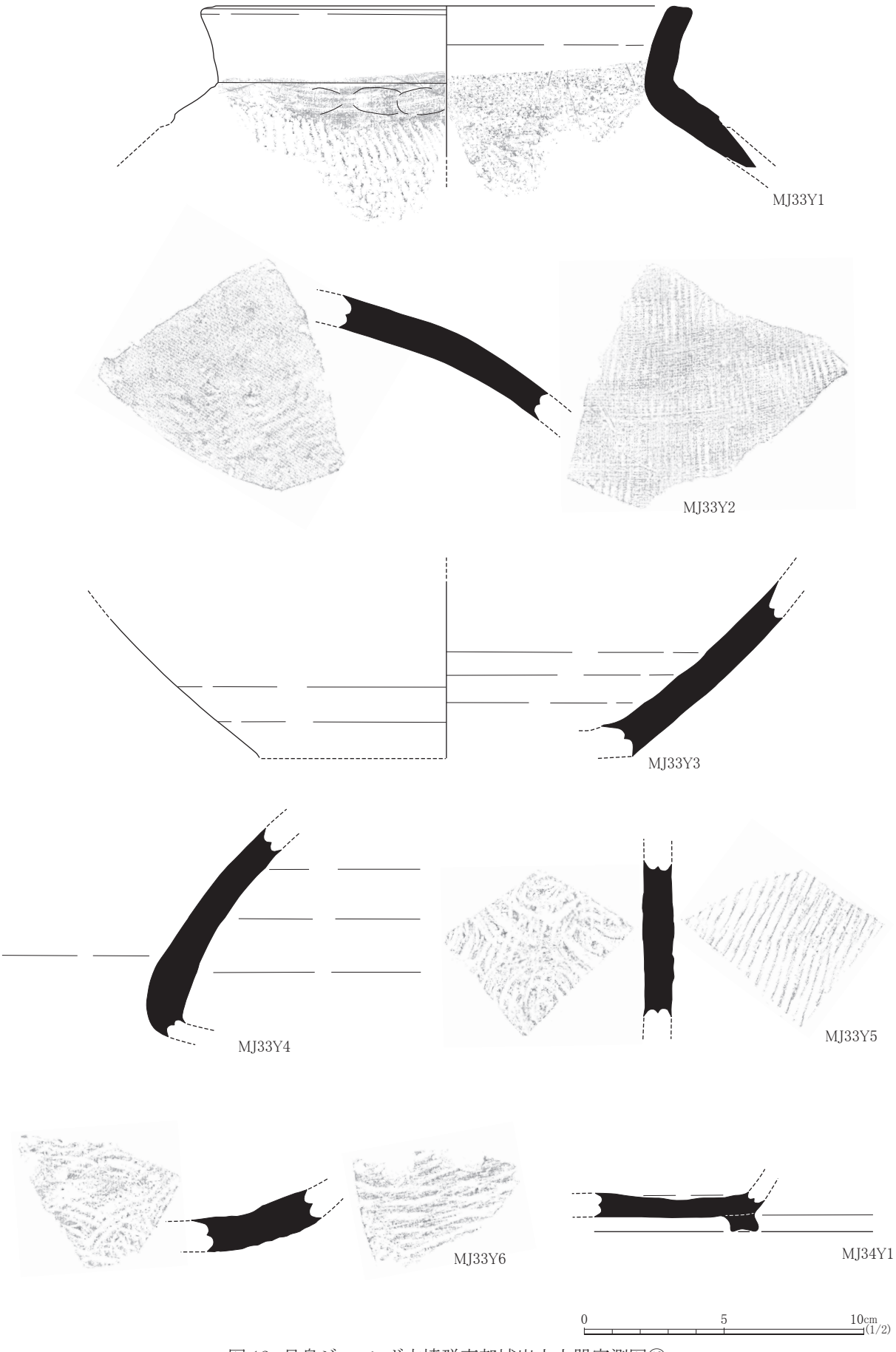


図 12　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑩



図 13　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑪

資料はいずれも須恵器である。**MJ34Y1**は高台付坏の底部片。底部の外端に断面長方形の高台が付く。高台は内外端で接地する。残存高は1.4㎝。他に同一個体とみられる破片1点が存在する。**MJ34Y2**は長頸壺。口縁部片、体部片、底部片が存在するが、胎土や焼成状態から同一個体とみられる。口縁は頸部から強く外反して開く。端部を欠失するが、内外端を肥厚させている。復元口径(外端)は11.6㎝。体部は外面の格子文叩きをほぼナデ消しており、内面の同心円文当て具痕も部分的にナデ消している。底部外面には高台が剥離した痕跡が残る。復元底部径は17.0㎝を測る。**MJ34Y3**は甕の体部片。外面は擬格子平行文叩き(3条/㎝)後粗くカキ目を施す。内面の同心円文当て具痕は部分的にナデが施される。**MJ34Y4**も甕の体部片。外面の平行文叩きは軽くナデが施され、内面の同心円文当て具痕はそのまま残している。**MJ34Y5**は甕の底部付近の破片とみられる。外面は不定方向から目の粗い平行文叩き(2条/㎝)が施される。内面には同心円文当て具痕が残る。

【第35号墳】(図13・14、写真16・17)

第34号墳の南西約3mに位置している。石室の主軸は北－南を向いている。分布図を見る限り石室の遺存状態は良いようである。発掘調査は行われていないが、萩博物館には出土人骨が保管されており、年齢不明男性の1体分と鑑定されている(松下・松下2014)

資料はいずれも須恵器である。**MJ35Y1**は壺または平瓶の肩部か。外面は平行文叩き後にカキ目を施しており、円形に灰の被らない部分が残る。重ね焼の痕跡であろうか。内面の同心円文当て具痕はほぼナデ消されている。**MJ35Y2**は甕の口縁部片。緩やかに外反させ、端部を外方に折り重ねる。復元口径22.4㎝、残存高2.6㎝を測る。**MJ35Y3**は甕の体部片。外面は目の細かな平行文叩き(5条/㎝)を施しており、内面には同心円文当て具痕が残る。**MJ35Y4**は3片の接合資料。器壁が厚く、大甕底部付近の破片か。外面は不定方向から擬格子平行文叩きを施している。内面には同心円文当て具痕が残る。

【第37号墳】(図14、写真17)

第35号墳の北西約2.5mに位置している。破壊が著しいようで、石室の主軸方向は不明である。

採取された資料はいずれも須恵器である。**MJ37Y1**は大甕の口縁－肩部片。頸部から緩やかに外反して口縁が開く。肩部外面と口縁内面に灰を被っている。肩部外面は左上がり後縦位に平行文叩き(3条/㎝)を施し、内面の同心円文当て具痕はそのまま残している。復元口径31.5㎝、残存高8.3㎝を測る。

【第39号墳】(図14、写真17)

第35号墳の南東約1.5mに近接している。石室の主軸は北西－南東を向いており、南東に開口する。

採取された資料はいずれも須恵器である。**MJ39Y1**は高台付坏の底部片。器壁がやや厚く、底部外端に断面方形の高台がハ字状に付く。復元高台径は外端で8.3㎝、内端で7.2㎝、残存高は2.2㎝を測る。他に同一個体とみられる底部片が1点存在する。

【第41号墳】(図14・15、写真17・18)

第35号墳の南西約6.5mに位置している。石室の破壊が著しいようで、主軸方向は不明である。

MJ41Y1は須恵器甕の頸－肩部片。外面は横位後左上がりに目の細かい平行文叩き(5条/㎝)が施されている。内面の同心円文当て具痕はナデが施される。**MJ41Y2**も甕の頸－肩部片。外面は密にカキ目が施されており、叩き痕は目視できない。内面の同心円文当て具痕にはナデが施されている。**MJ41Y3**は3片が接合した大甕体部片。外面の叩き痕はナデおよび多量の灰により観察不能である。内面には同心円文当て具痕が残る。**MJ41Y4**も大甕で、底部付近とみられる。外面は不定方向から平行文叩きが施され、内面の同心円文当て具痕は下方にナデが施される。MJ41Y3と同一個体の可能性もあるが、同心円文当て具の径が異なる。**MJ41Y5**は土師器坏の口縁部小片。内外面とも回転ナデを施す。

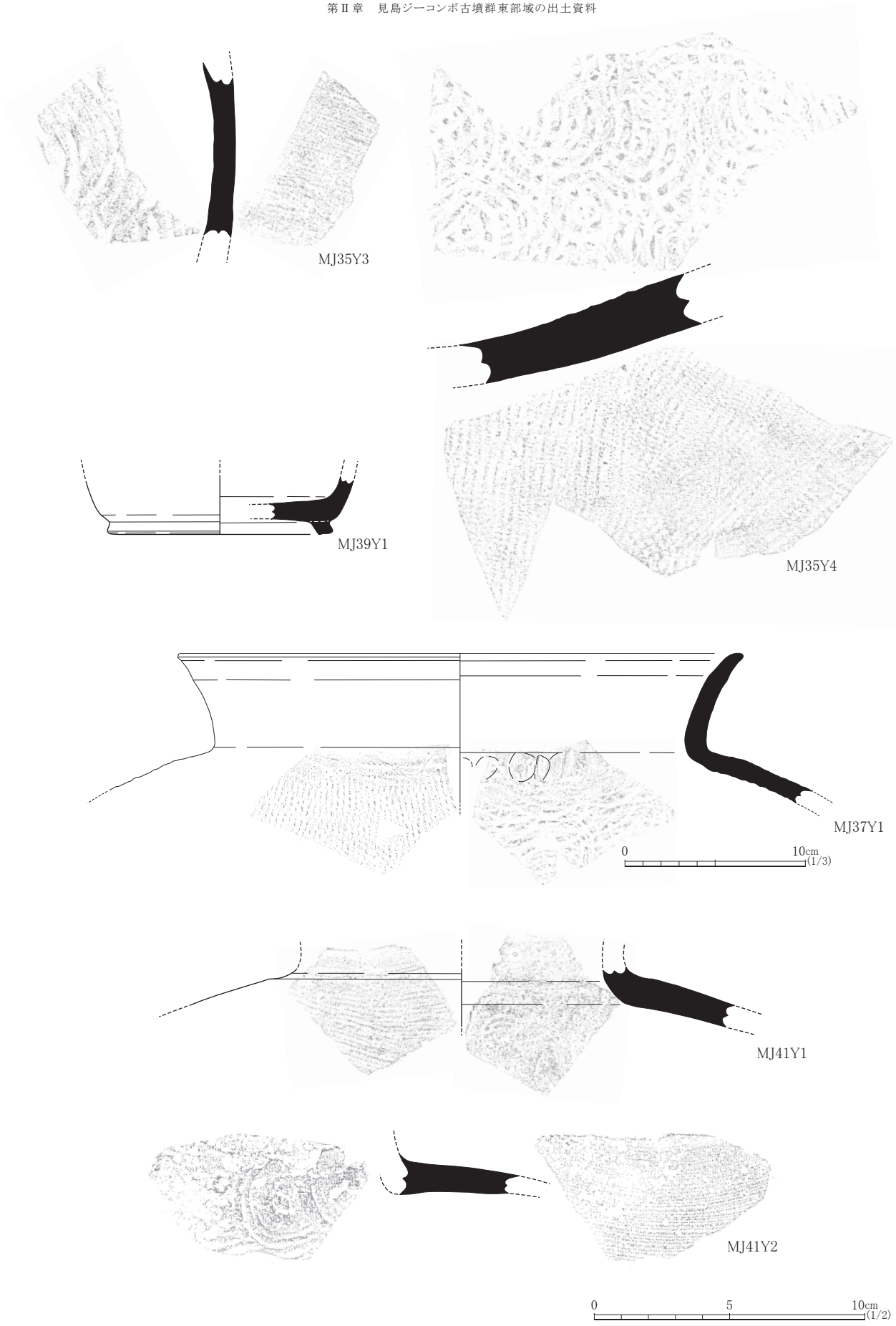


図 14　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑫

【第42号墳】（図15・16、写真18・19）

第35号墳の南南西約2mに位置している。石室の主軸は北東－南西を向いており、分布図を見る限り天井石は遺存しているようである。

資料はいずれも須恵器である。**MJ42Y1**は長頸壺の肩部片とみられる。胎土は精選されており、焼成状態も良好である。外面は自然釉を被るため器面調整などは確認できない。内面は回転ナデが施されているものの、当て具痕（同心円か）をわずかに残す。**MJ42Y2**は壺の肩部片か。外面には平行文叩きが残っているが、内面の当て具痕は完全にナデ消されている。**MJ42Y3**は甕の体部片。外面は平行文叩き後ナデを施す。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。**MJ42Y4**も甕体部片である。外面は平行文叩き後カキ目が施される。内面の同心円文当て具痕は上下で工具が異なっている。**MJ42Y5**も甕の体部片。外面は平行文叩き後軽くナデ、部分的にカキ目を施す。内面の平行文当て具痕も軽くナデが施される。**MJ42Y6**も体部片。外面は平行文叩き後粗くカキ目を施し、内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。**MJ42Y7**は甕の底部付近か。外面の平行文叩き、内面の平行文当て具痕ともにナデが施される。**MJ42Y8**も底部付近の破片とみられる。外面の格子文叩きは丁寧にナデが施されているが部分的に残ってる。内面も丁寧にナデが施されており、明確な当て具痕は観察できないものの、凹みが所々に残っている。無文当て具や丸石を使用した可能性もある。**MJ42Y9**も底部付近か。外面の叩き痕は格子文に見えるが擬格子の可能性もある。内面には無文円形の当て具痕が残る。

【第43号墳か】（図16・17、写真19）

前述の通り、暫定的に第43号墳に所属させた資料群である。第43号墳は第42号墳の東約2mに位置している。小型の石室で、主軸は北－南を向いている。

資料はいずれも須恵器である。**MJ43かY1**は壺の頸－肩部片。胎土は精選され、成形痕も完全にナデ消された優品である。外面に自然釉と灰を多く被る。**MJ43かY2**は壺の底－体部片。無高台丸底の壺とみられ、シャープな器形で胎土も精選されている。外面は回転ヘラ削りが施され、残存最上部のみ回転ナデが施される。内面は丁寧な回転ナデが施されている。**MJ43かY3**は大甕の体部片。外面は平行文叩きが施され、自然釉を被っている。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。**MJ43かY4**は大甕底部付近の破片か。外面は風化しているものの格子文叩きが残り、幅細の工具で部分的にカキ目が施されている。内面は同心円文当て具痕をそのまま残す。**MJ43かY5**は底部片。外面は平行文叩きを不定方向から施した後にナデが施されている。内面も不定方向から平行文当て具が当てられている。

【第44号墳】（図17、写真19・20）

第39号墳の南約3mに位置している。昭和37年（1962）調査墳で、報告によると石室の主軸はS8° Wで奥行き331㎝、幅50～71㎝、高さ95～112㎝を測る（斎藤・小野1964）。1体分とみられる人骨の断片（松下・松下2014）や鉄刀などの鉄製品、須恵器102片、土師器4片が出土したとされる。

採取品には土師器2片が存在したが図化不能であったため、掲載する資料はいずれも須恵器となる。**MJ44Y1**は坏蓋の天井－口縁部片。板状の扁平な天井部から屈曲して口縁が降下し、口縁端部は鳥嘴状に外方に下垂させる。復元口径15.2㎝、残存高0.8㎝を測る。**MJ44Y2**も坏蓋の天井－口縁部片。扁平ではあるがMJ44Y1に比して高さのある天井部から屈曲して口縁に降下し、端部を外方に開いた後に鳥嘴状に下垂させる。口縁の内外面に重ね焼の痕跡が残る。復元口径14.4㎝、残存高1.5㎝。他に同一個体とみられる天井部片1点が存在する。**MJ44Y3**はつまみを有する坏蓋の天井－口縁部片。天井中央にボタン状つまみが付き、扁平なドーム状の天井部から内湾して降下し、口縁を屈曲気味に持ち上げるが端部を欠失している。つまみ径2.0㎝、残存高1.4㎝を測る。**MJ44Y4**は鉢の口縁部か。わず

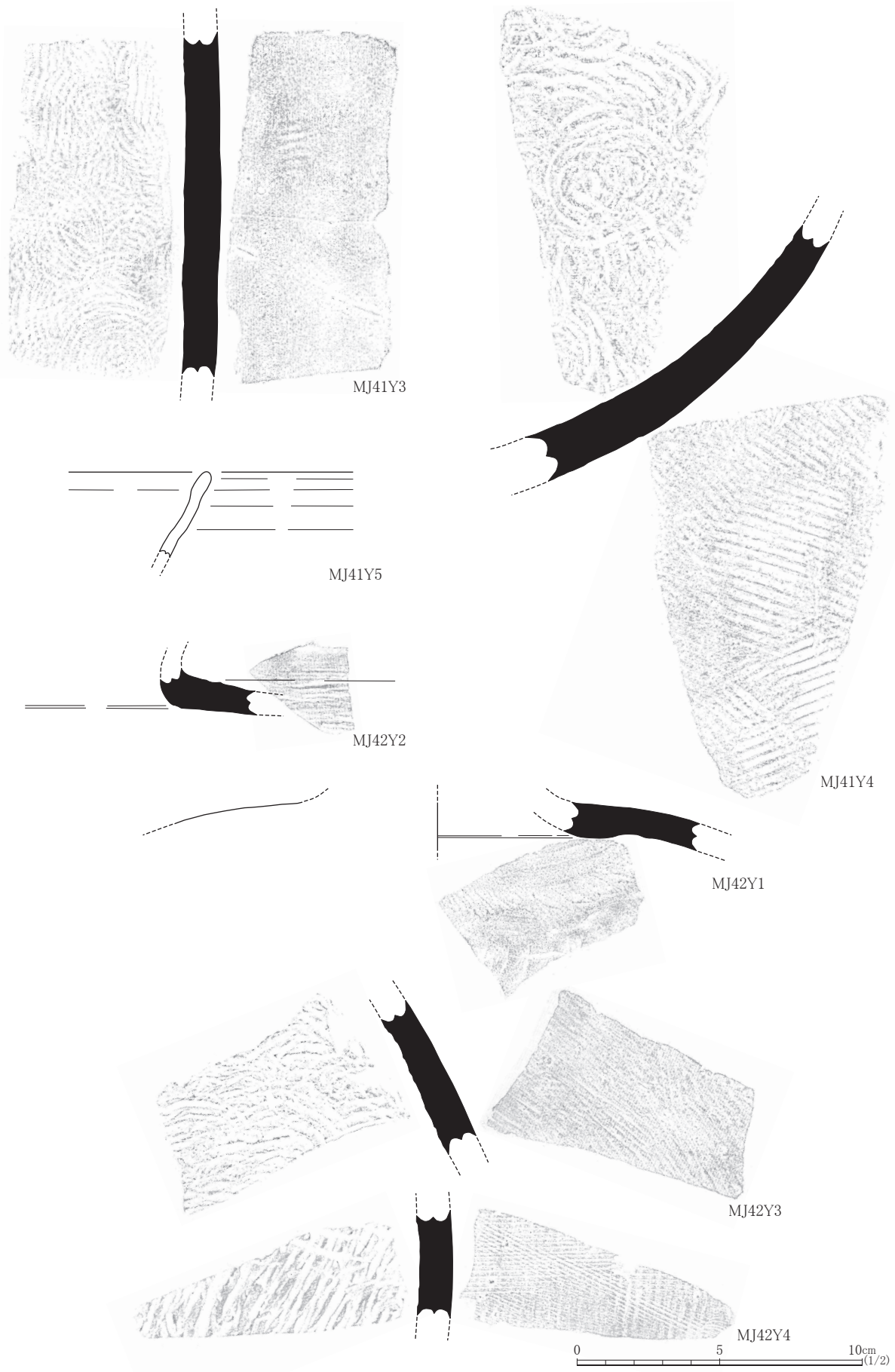


図 15　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑬

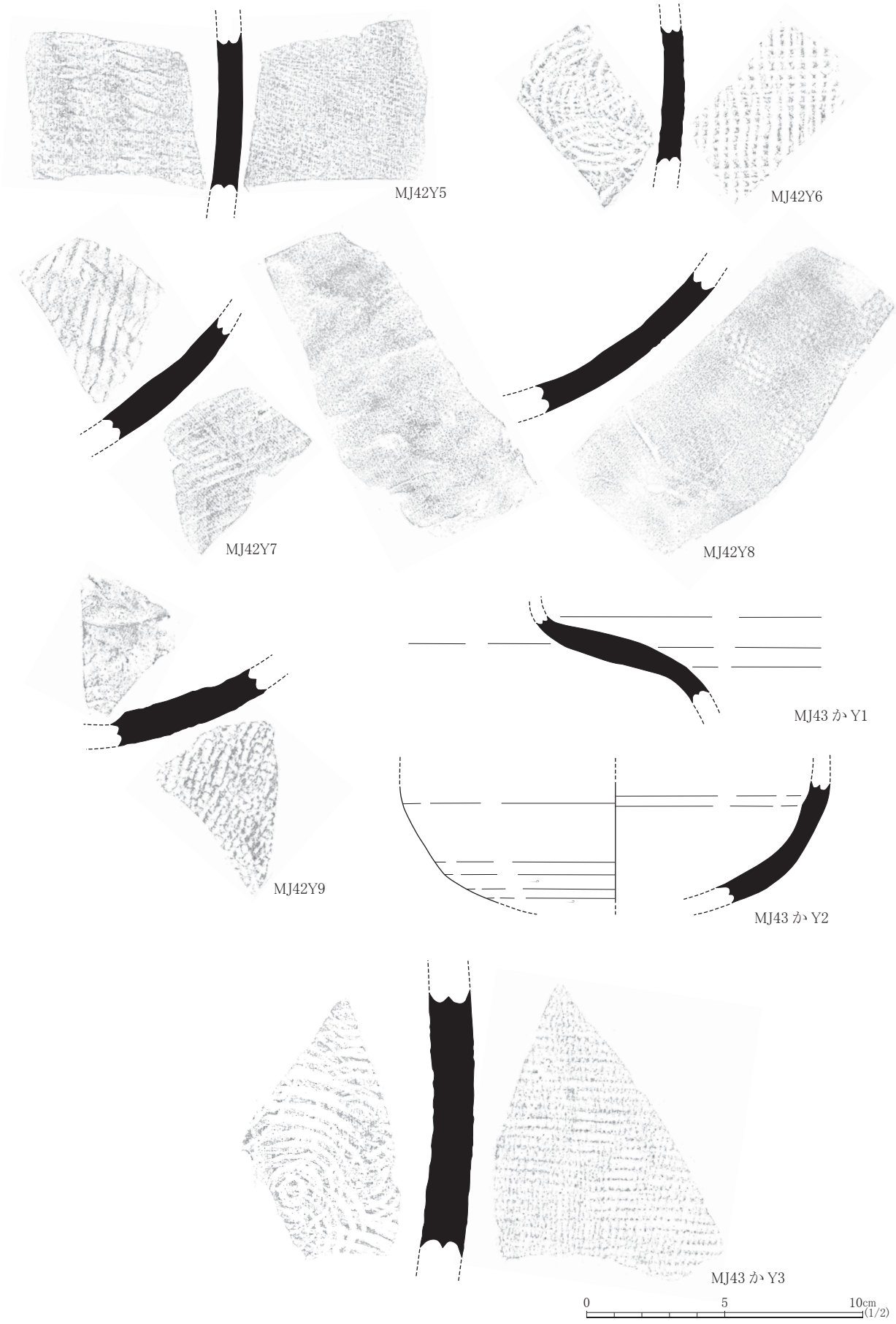


図 16　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑭

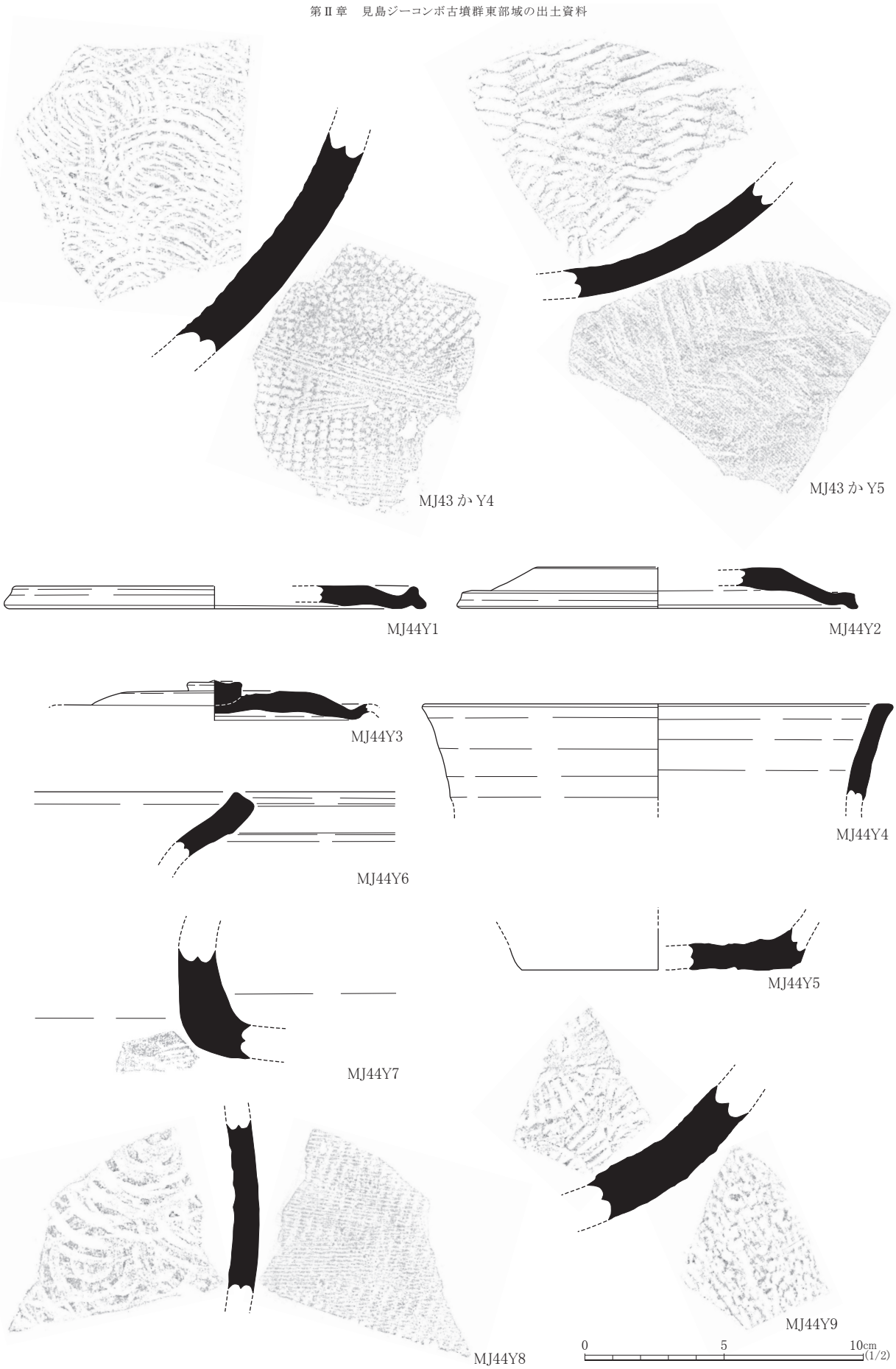


図 17　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑮

かに外反するが直立気味に立ち上がる口縁で、復元口径16.8㎝、残存高3.5㎝を測る。口縁端部のみ灰を被っている。**MJ44Y5**は壺の底部片。平底の外端に高台が剥離したかのような痕跡が残るが、全周しないことからヘラ切り痕と判断した。復元底部径9.8㎝、残存高1.5㎝。**MJ44Y6**は甕の口縁部片。外反する口縁から端部を内湾気味に立ち上げており、断面コ字状に外面をわずかに肥厚させている。内面に灰、外面に自然釉を被る。他に同一個体とみられる破片2点が存在する。**MJ44Y7**は器壁の厚い個体で大甕の頸部片とみられる。内面の肩との接合部にわずかに同心円文当て具痕が残る。**MJ44Y8**は甕の体部片。外面は平行文叩き後部分的にカキ目を施す。内面の同心円文当て具痕は部分的にナデが施されている。**MJ44Y9**は器壁が厚いことから大甕底部付近の破片の可能性がある。外面は火膨れや自然釉で判然としないものの、格子文（擬格子か）叩きが施されているようである。内面には車輪文当て具痕が残る。歯車文とみられるが、半損しており全形は不明である。

【第45号墳】（図18・19、写真20～22）

第44号墳の西に隣接する。石室の主軸は西北西－東南東を向く。

多くの須恵器が採取されている。**MJ45Y1**は坏蓋の天井部片。低いドーム状天井の中央に扁平なボタン状つまみを有する。つまみ径は2.35㎝、残存高1.2㎝。**MJ45Y2**は高台付坏の底－体部片。底部外端に断面方形の小ぶりな高台がハ字状に付く。底部外面には長さ5㎜程度の連続する工具痕が見られる。体部は内湾しつつ開き気味に立ち上がる。復元高台径は外端で8.6㎝、内端で7.6㎝、残存高2.3㎝を測る。**MJ45Y3**は壺の頸－肩部片。頸部は強く屈曲しており、頸部内面と肩部外面に灰を被っている。肩部外面に横位の平行文叩き（4条/㎝）が残るが、内面の当て具痕は完全にナデ消されている。**MJ45Y4**は壺の体部片。、シャープなつくりで、外面の回転ヘラ削り、内外面の回転ナデとも丁寧に施されている。**MJ45Y5**は甕の口縁部片。大きく外反しており、外端部下位に断面三角形の小ぶりな突帯を巡らせている。復元口径25.6㎝、残存高2.8㎝。**MJ45Y6**も甕の口縁部片。口縁内端を上方に跳ね上げ、外端下位に断面三角形の突帯を巡らせる。内面には多量の灰が被っている。**MJ45Y7**は甕の体部片。外面には目の粗い平行文叩き（3条/㎝）が施され、内面の同心円文当て具痕には粗く横ナデが施される。**MJ45Y8**は2片が接合した甕の体部片。外面は風化で不明瞭となっているが、格子文または擬格子平行文叩きが施されているようである。内面の同心円文当て具痕は部分的にナデが施されている。**MJ45Y9**も体部片。外面は平行文叩き後カキ目が施される。内面の同心円文当て具痕は部分的にナデが施される。**MJ45Y10**も体部片だが、内面の当て具は平行文である。**MJ45Y11**も平行文当て具が用いられるがMJ45Y9の平行文当て具（2条/㎝）に比して目が細かい（8条/㎝）。**MJ45Y12**の外面は擬格子平行文叩きが施されており、内面は同心円文当て具痕をそのまま残す。**MJ45Y13**の外面は目の粗い平行文叩き（3条/㎝）後カキ目を施す。内面の同心円文当て具痕には成形過程の境界部が見られる。**MJ45Y15**は唯一の土師器で、坏の底部片。復元底部径7.2㎝、残存高1.6㎝を測る。

【第48号墳】（図19、写真22）

第44号墳の南約6.5mに位置する。石室の主軸は北－南を向くようだが、破壊が激しいようである。

採取された土器は少数で、いずれも須恵器である。**MJ48Y1**は坏蓋の天井－口縁部片。やや高さのある扁平な天井部に輪状つまみが付く。天井部から内湾して直線的に口縁に降下し、端部を短く下垂させる。復元口径15.0㎝、つまみ径8.0㎝、器高3.3㎝を測る。**MJ48Y2**は2片の接合資料で、甕の体部片。外面は平行文叩き後カキ目を施す。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。**MJ48Y3**も甕の体部片。外面の平行文叩き、内面の同心円文当て具痕とも軽くナデを施す。**MJ48Y4**は底部付近の破片とみられ、外面は不定方向から平行文叩きを施している。内面には扇状文当て具痕が見られる。

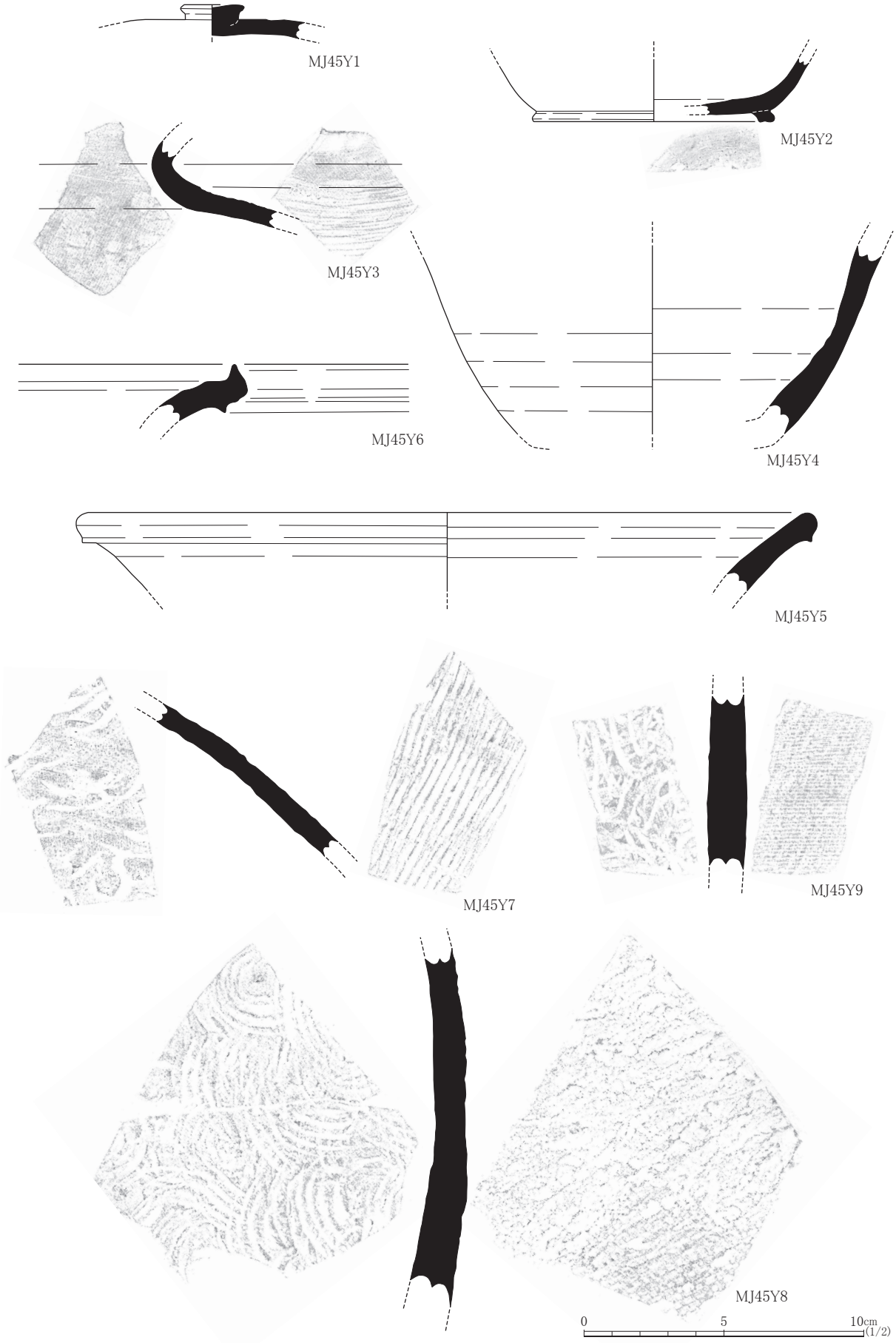


図 18　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑯

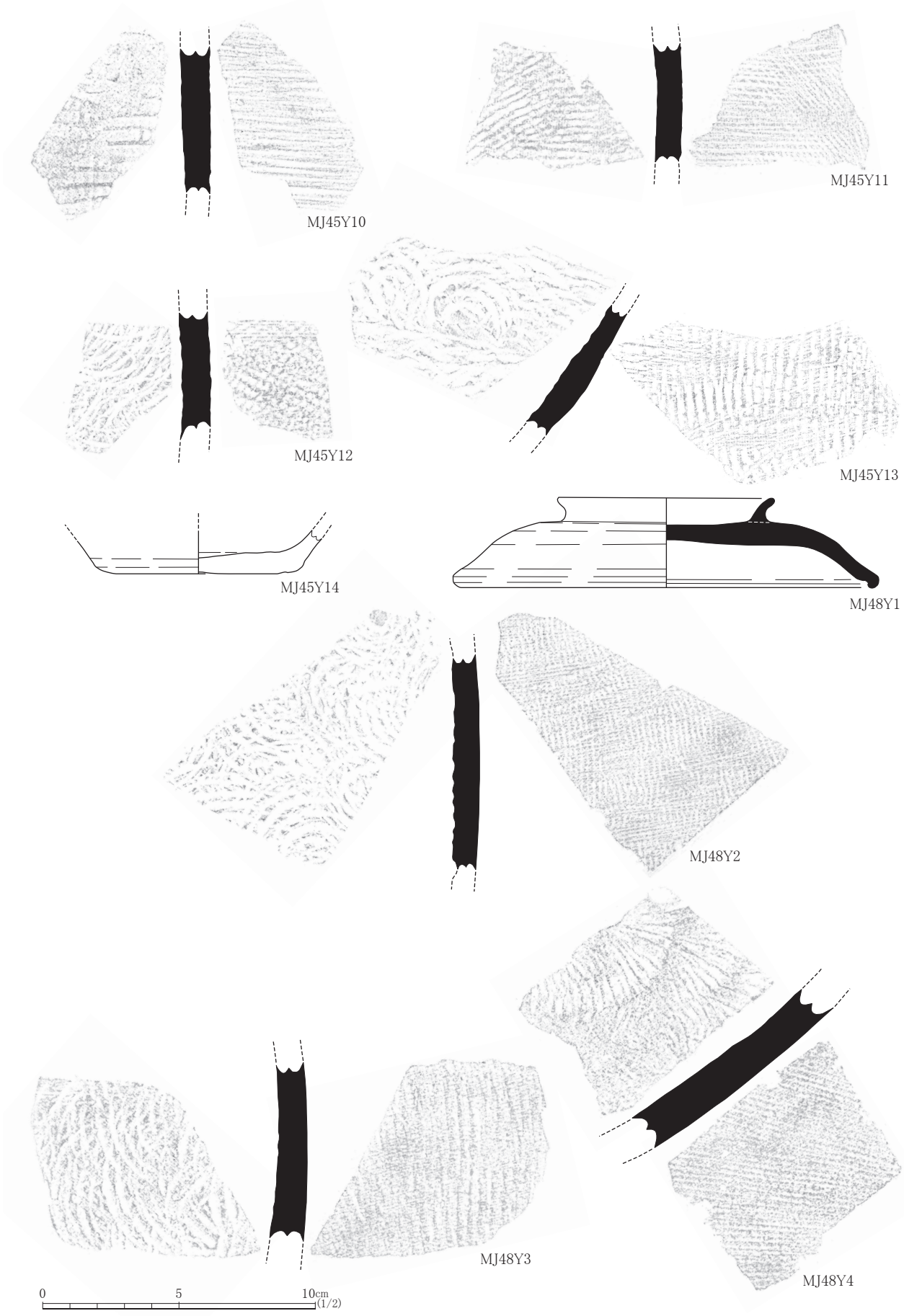


図 19　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑰

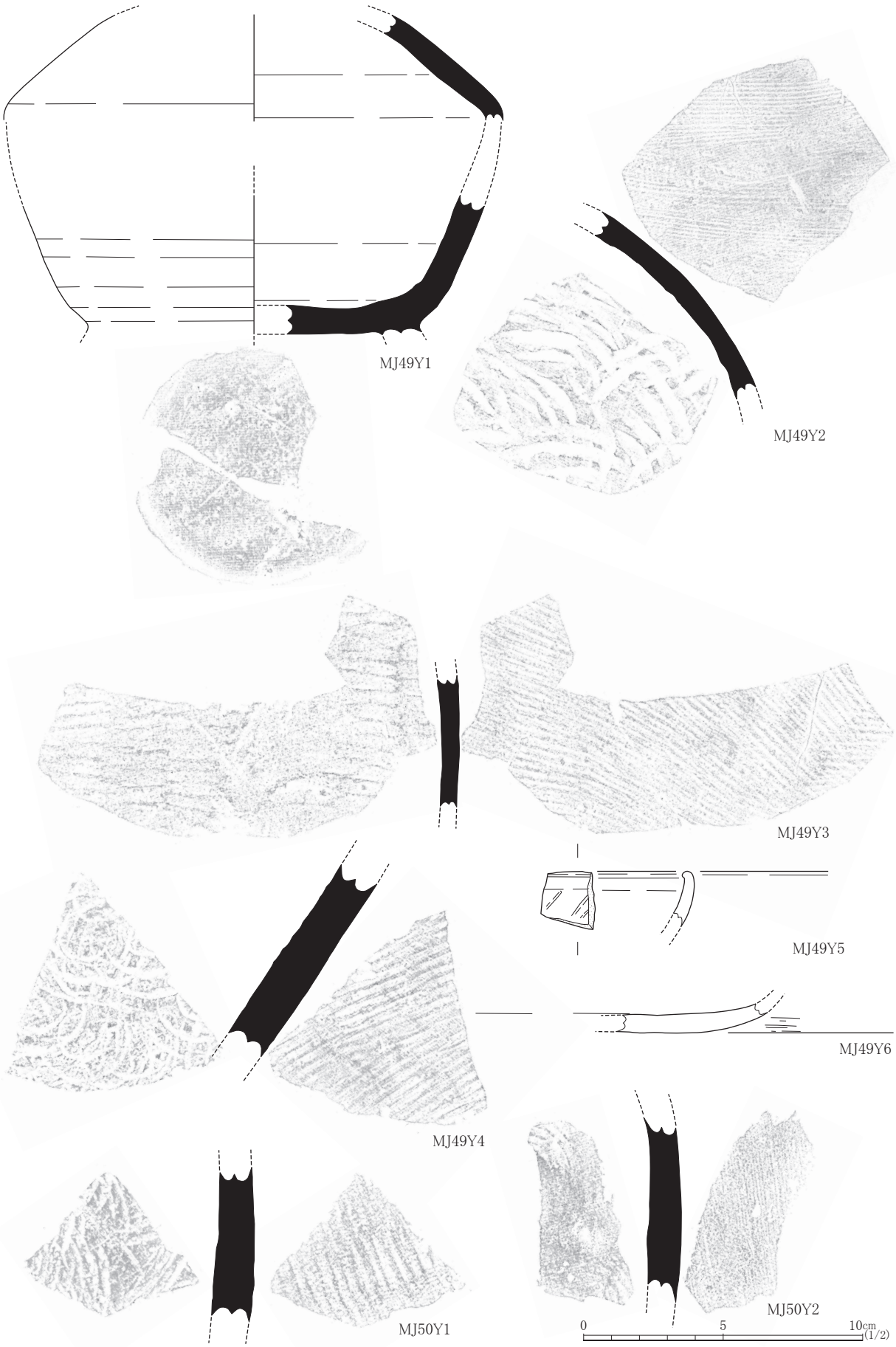


図 20　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑱

【第49号墳】（図20、写真22・23）

第48号墳の西約6.5mに位置する。石室の主軸は北東－南西を向く。

採取された土器は少数で、須恵器が多い。**MJ49Y1**は壺の肩部と底－体部片で、接合しないが同一個体と考えられる。肩部は内外面とも回転ナデが施され、叩きや当て具の痕跡は見られない。外面に少量の灰を被る。底部は隣接する第55号墳採取品と接合した。底部中央にヘラ記号とみられる直線1条が見られ、底部外端には高台が剥離した痕跡が残る。内面中央に灰が少量被っている。**MJ49Y2**は甕の体部片。外面の叩き痕は完全にナデ消され、部分的にカキ目が施されているが、他の同一個体とみられる破片を見ると平行文叩きが施されている。内面は径の大きな同心円文当て具痕を粗くナデている。**MJ49Y3**は3片の接合資料で、甕の体部片。外面には平行文叩きが施されている。内面は最終的には平行文当て具痕を残すが、前段階の同心円（無文か）当て具痕もわずかに残している。**MJ49Y4**は大甕の体部片。外面の平行文叩き、内面の同心円文当て具痕とも軽くナデを施している。**MJ49Y5**は土師器坏の口縁部片。口縁端部を内側に折り込んでいる。内面には暗文（斜線）が施されている。**MJ49Y6**は土師器皿の底部片。外面は丁寧にミガキが施される。内面は風化が著しく器面調整は観察できない。

【第50号墳】（図20、写真23）

第49号墳の北東約3.5mに位置する。石室の破壊が著しいようで、主軸は不明である。

採取された土器2片はいずれも須恵器である。**MJ50Y1**は甕の体部片で、外面の目の粗い平行文叩き（3条/㎝）、内面の同心円当て具痕とも軽くナデを施す。**MJ50Y2**も甕の体部片。外面の目の細かい平行文叩き（8条/㎝）は軽くナデを施している。内面の同心円文当て具痕はほぼナデ消されている。

【第52号墳】（図21、写真23・24）

第48号墳の西約3mに位置する。分布図を見る限り石室の破壊が進行しているようであるが、石室の主軸は北－南を向くようである。

土師器1点以外は全て須恵器である。**MJ52Y1**は甕の口縁－頸部片。直立気味の頸部から口縁は大きく外反するようである。頸基部内面に同心円文当て具痕を残す。**MJ52Y2**は甕の体部片。外面は平行文叩き後ナデ、カキ目を施す。内面の同心円文当て具痕はそのまま残している。**MJ52Y3**も体部片。外面は平行文叩きが施され、内面の同心円文当て具痕は部分的にナデ消されている。**MJ52Y4**は底部付近の破片である。外面は不定方向から平行文叩きが施されており、内面の同心円文当て具痕は軽くナデられている。**MJ52Y5**も底部付近の破片とみられる。外面は平行文叩きが施され、内面はナデにより不明瞭となっているが無文とみられる当て具痕がわずかに残る。**MJ52Y6**は土師器甕の口縁部片。外反する口縁の内端を凹ませている。器壁の薄い個体で、胎土は精選されており、焼成も良好である。

【第53号墳】（図21・22、写真24）

第48号墳の南約3.5mに位置する。石室の破壊が進行しているようであるが、石室の主軸は北西－南東を向くようである。

採取された土器は少数でいずれも須恵器である。**MJ53Y1**は壺の肩部片。外面の平行文叩きは丁寧にナデ消されており、わずかに残るのみである。内面の当て具痕は平行文の可能性がある。**MJ53Y2**は大きく外反する甕の口縁部片で、内面と外面下位折損部付近にに薄く自然釉を被る。口縁端部および外面2箇所に沈線を巡らせている。**MJ53Y3**は大甕の体部片。外面は目の粗い平行文叩き（2.5条/㎝）後に目の細かい平行文叩き（5条/㎝）を施している。内面は扇状文当て具痕と平行文当て具痕が見られ、部分的に重複しており後者が前者を切っている。**MJ53Y4**も大甕で底部付近の破片とみられる。外面は目の粗い平行文叩き（2.5条/㎝）が施され、内面は扇状文当て具痕のみが残る。MJ53Y3と同一個

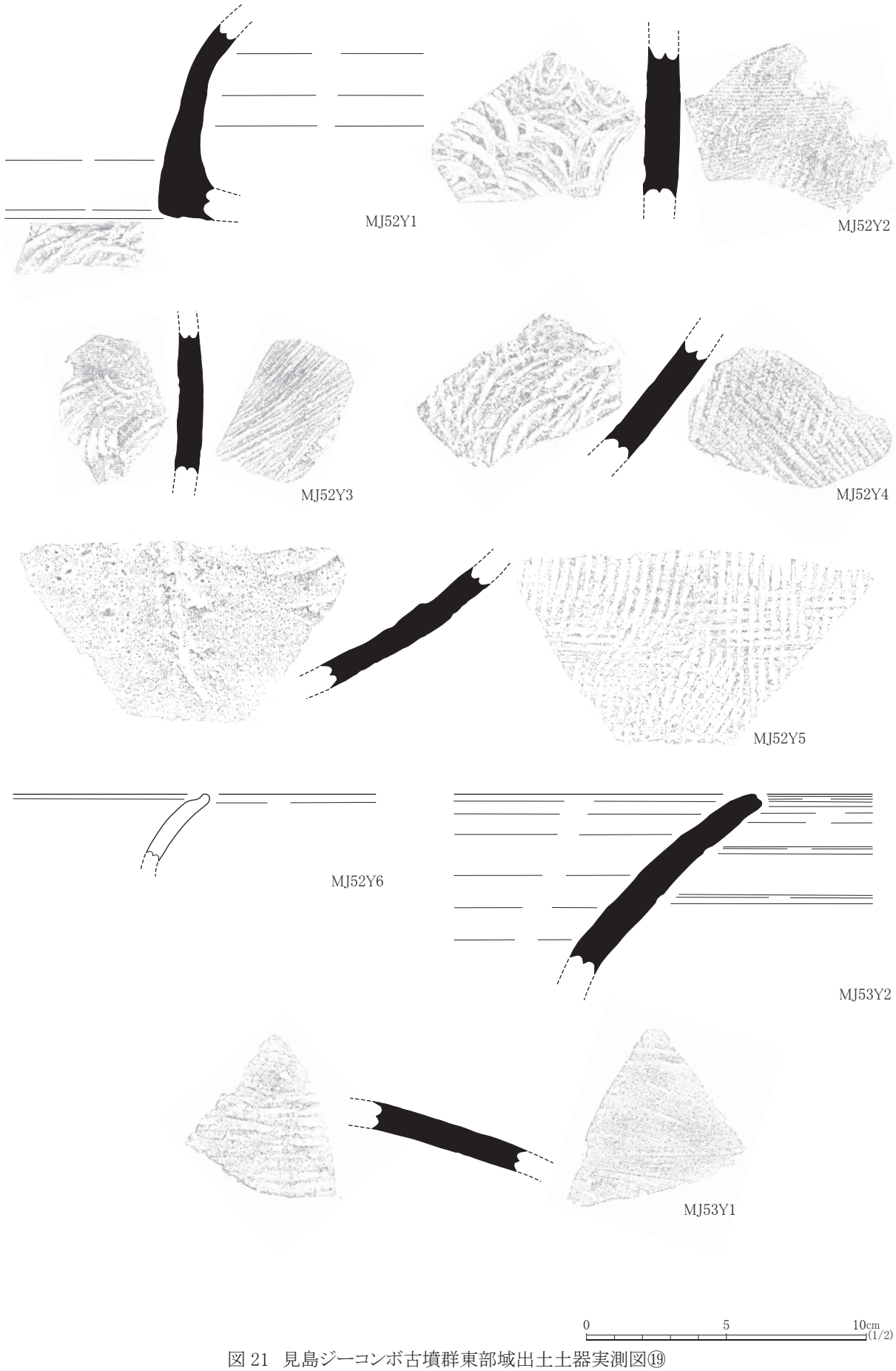


図 21　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑲

体とみられ、叩き具と当て具のセット関係は「目の粗い平行文叩き具⇔扇状文当て具」「目の細かい平行文叩き具⇔平行文当て具」と推定される。**MJ53Y5**は甕の体部片。外面は平行文叩き後部分的にナデを施し、内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。**MJ53Y6**は甕底部付近の破片。外面は平行文叩き後板状工具によるナデ（カキ目か）が施される。内面の当て具痕は同心円文か平行文か特定しがたい。

【第54号墳】（図22・23、写真24・25）

第53号墳の北西約2.5mに位置する。分布図では全長約1.5m程度の小型の石室で、主軸は北西－南東を向き、南東に開口するようである。

採取された土器はいずれも須恵器である。**MJ54Y1**は甕の口縁－体部。接合しない口縁－頸部片と体部片を図上復元した。体部は卵形で、く字状に屈曲する頸部から外傾し口縁が短く立ち上がる。体部外面の平行文叩きと内面の同心円文当て具痕はそのまま残している。復元口径は内端で13.4㎝、残存高9.0㎝。口縁内面に灰を被っている。**MJ54Y2**は甕の頸－肩部片。強く外反する頸部から口縁は大きく開くものと思われる。肩部外面は平行文叩きが施される。内面はナデ消しが図られているが、わずかに当て具痕（同心円文か）を残している。**MJ54Y3**は甕の肩部か。外面の平行文叩きはそのまま残している。内面は丁寧にナデが施されており、当て具痕は凹みとして残るのみである。無文当て具使用か。**MJ54Y4**は甕の体部片。外面の平行文叩きはほぼナデ消される。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。**MJ54Y5**の体部片は胎土や焼成状態がMJ54Y3に類似しており、外面は平行文叩き後板状工具によるナデ（カキ目か）が施される。内面の同心円文当て具痕をそのまま残すが、MJ54Y3に比して当て具の径が大きいため、ここでは別個体としておく。**MJ54Y6**と**MJ54Y7**は共に外面に平行文叩き、内面に同心円文当て具痕を残す。MJ54Y6の外面には自然釉が被っている。**MJ54Y8**は底部付近の破片とみられる。外面には不定方向の平行文叩きが施され、内面の同心円文当て具痕はそのまま残している。

【第55号墳】（図23～25、写真25～27）

第49号墳の南約2mに位置しており、石室の大半は石垣の下に埋没しているようである。石室の主軸は北北東－南南西を向くものと思われる。

採取された土器は、土師器1片（図化不能）を除くと須恵器に限られる。**MJ55Y1**はここでは坏としておくが、高坏坏部の可能性もある。焼成は堅緻で、体部は内外面とも回転ナデが施される。口径は11～12㎝内外と推定される。**MJ55Y2**は壺の肩部片とみられる。外面は灰と回転ナデにより不明瞭となっているが、格子文叩きがわずかに残る。内面も丁寧にナデが施されているが、同心円文当て具痕がわずかに残る。**MJ55Y3**は壺の底部付近とみられる。胎土は精緻、焼成は堅緻な優品である。外面は全面に自然釉が被っており、回転ナデまたは削りが施されている。内面も丁寧に回転ナデが施されているものの、同心円文当て具痕がわずかに残っている。壺肩部の可能性も有している。**MJ55Y4**は大甕で、接合しない口縁-頸部片と頸-肩部片を図上復元した。頸部から緩やかに外反して口縁が開く。口縁端部を断面楕円形状に下垂させている。復元口径27.9㎝、残存高8.35㎝を測る。肩部外面はナデ及びカキ目の下にわずかに平行文叩きが残る。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。**MJ55Y5**は甕の底部付近で、胎土や焼成状態からMJ55Y4と同一個体とみられる。3片が接合しており、うち2点は隣接する第49号墳にて採取されたものである。外面は所々に平行文叩きが残るが丁寧にナデが施されている。内面は上方に径の大きな同心円文当て具痕が残っており、下方は平行文当て具が用いられているようだがナデにより不明瞭となっている。**MJ55Y6**は2片が接合した甕の体部片。外面下方は不定方向から平行文叩きが施されている。内面は粗くナデられているが同心円文当て具痕を残している。**MJ55Y7**も体部片で、外面は平行文叩き後部分的にカキ目を施す。内面は平行文当て具痕の上に径の大きな同心円文

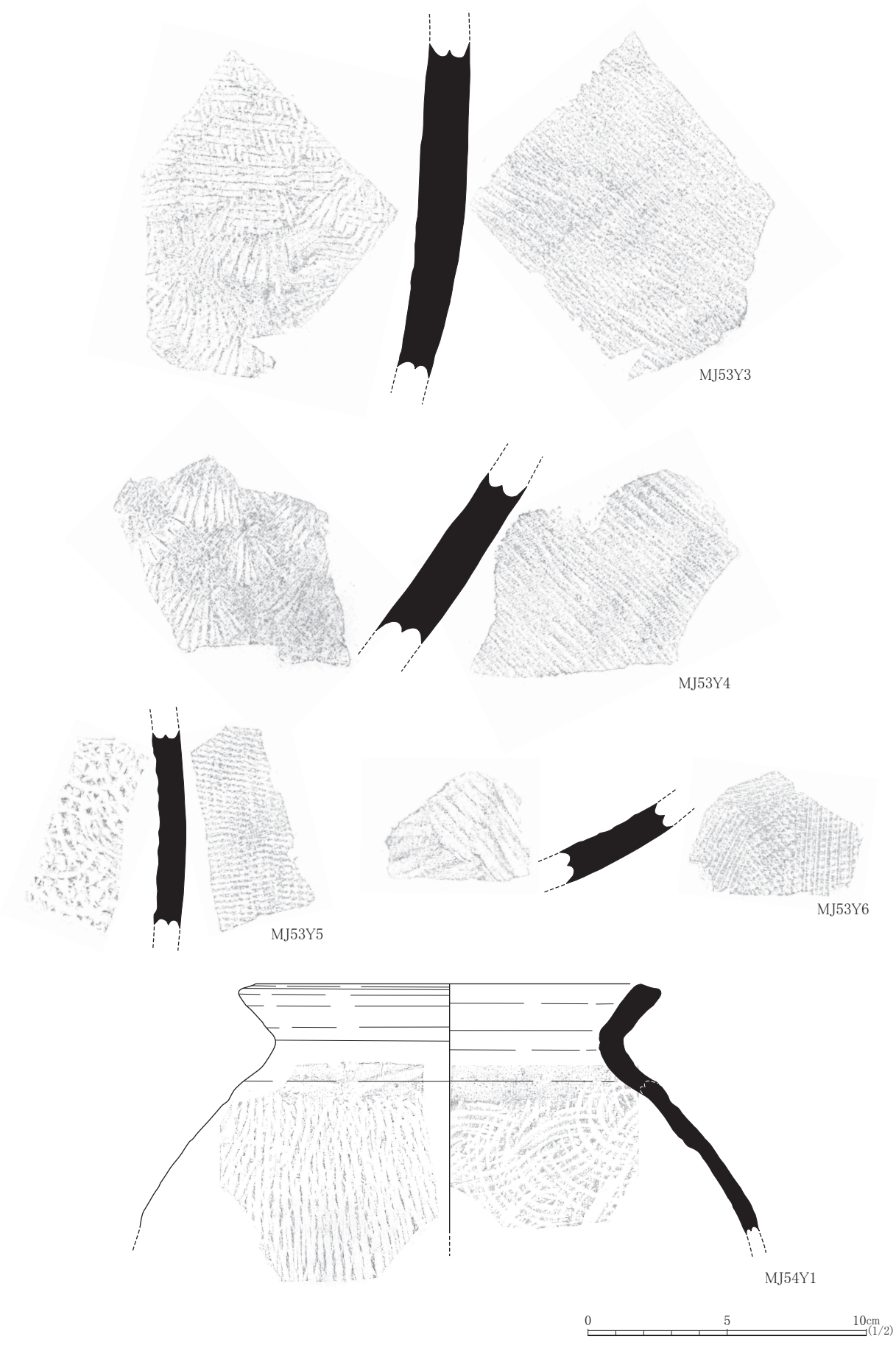


図 22　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑳



図 23　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㉑

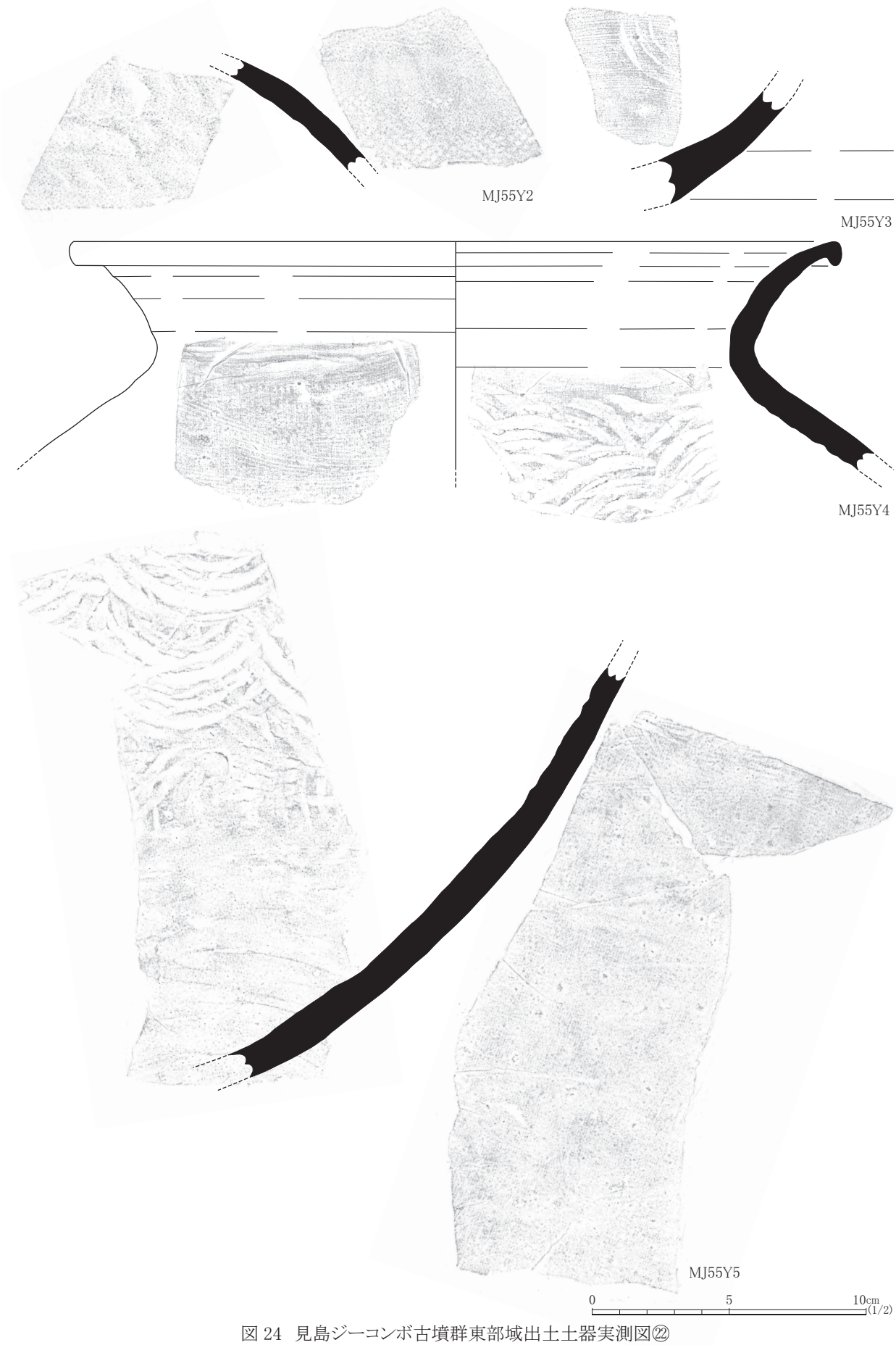


図 24　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㉒

当て具痕が重なるが、部分的に櫛歯状の平行文当て具痕が残っている。同一個体と目されるものを除き、古墳群では他に類例を見ない当て具痕であり注目される[註2]。**MJ55Y8**は外面の平行文叩きが方向を一にしているのに対し、内面の平行文当て具は不定方向から当てられている。**MJ55Y9**は底部付近の破片とみられる。外面は平行文叩き後部分的に幅細のカキ目（幅1㎝で4条）が施される。内面の平行文当て具痕は部分的に凹部がm字状に見えるが、当て具の当たり方による偶然の所産と思われる。

【第56号墳】（図25・26、写真27）

第23号墳の南西約5mに位置している。昭和37年（1962）調査墳で、報告によると石室主軸はS59°W[註3]で、奥行き330㎝、幅60～83㎝、高さ90～120㎝を測る（斎藤・小野1964）。出土遺物には須恵器74片のほか、蕨手刀1、石製銙帯具（蛇尾1、巡方2、丸鞆5）、銭貨（神功開宝2、降平永宝1、承和昌宝1、貞観永宝1）、硬玉製勾玉2、金銅製釵子1、青銅製鈴1、銅匙1などがあり、遺跡を象徴する資料群となっている。なお、報告書に記載はないが年齢不明男性の人骨も出土している（松下・松下2014）

採取された土器は少数で須恵器2片、土師器1片のみである。**MJ56Y1**は須恵器坏の口縁部片。口縁は直線的に外方に開く。復元口径16.4㎝、残存高4.8㎝を測る。『見島総合学術調査報告』掲載の高台付坏（第16図6）と同一個体の可能性もある。**MJ56Y2**は大甕の底部付近の破片で、外面の平行文叩きは粗くナデられており、内面に残る径の大きな同心円文当て具痕も部分的にナデが施されている。**MJ56Y3**は土師器椀または皿の底部片で、底部外面に糸切り痕が残る。体部は大きく開いて立ち上がる。復元底部径6.2㎝、残存高2.2㎝を測る。見島ジーコンボ古墳群終焉時期の通説となっている10世紀初頭を下る資料の可能性がある。

【第58号墳】（図26、写真27・28）

第56号墳の南西約5mに位置している。石室の主軸は北西-南東とみられるが、分布図を見る限り破壊が著しいようである。

採取された土器はいずれも須恵器である。**MJ58Y1**は壺の肩部片か。器壁の薄い個体で、外面の平行文叩きはそのまま残すが、内面の同心円文当て具痕は丁寧にナデ消している。**MJ58Y2**も壺の肩部片で、胎土は精緻、焼成も堅緻である。外面は全体に自然釉を被っており器面が観察できない。内面は回転ナデが施されており、当て具痕は見られない。**MJ58Y3**は甕の肩部片。外面はカキ目が密に施されており、叩き痕は観察できない。内面は同心円文当て具痕に軽くナデを施している。**MJ58Y4**は甕の体部片。外面の平行文叩きはそのまま残し、内面の同心円文当て具痕は軽くナデる。**MJ58Y5**も体部片であるが、外面下方の平行文叩きがやや不定方向から施されていることから、底部付近の破片と思われる。内面の当て具痕はほぼナデ消されているが、遺存部を見ると斜格子文である可能性が高い。

【第59号墳】（図26、写真28）

第59号墳の南南東約2mに位置している。石室は破壊が進行しているようだが、主軸は北北西-南南東と思われる。

採取された土器は3片の須恵器で、同一個体の甕とみられる。**MJ59Y1**は口縁部片で、直立気味に立ち上がる頸部から口縁を強く外反させている。口縁外面を断面コ字状に、内端を断面三角形状に肥厚させる。外面と口縁内端に自然釉と灰を被る。小片のため径の復元は行っていないが、口径50㎝程度の大甕とみられる。**MJ59Y2**は体部片で、外面は自然釉と灰を被るため不明瞭となっているが、擬格子平行文叩き（3条/㎝）を施しているようである。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。**MJ59Y3**は底部付近の破片とみられる。外面に擬格子平行文叩き（3条/㎝）を施し、直交方向から平行文叩き（5条/㎝）を施す。内面の同心円文当て具痕は部分的にナデ消されている。

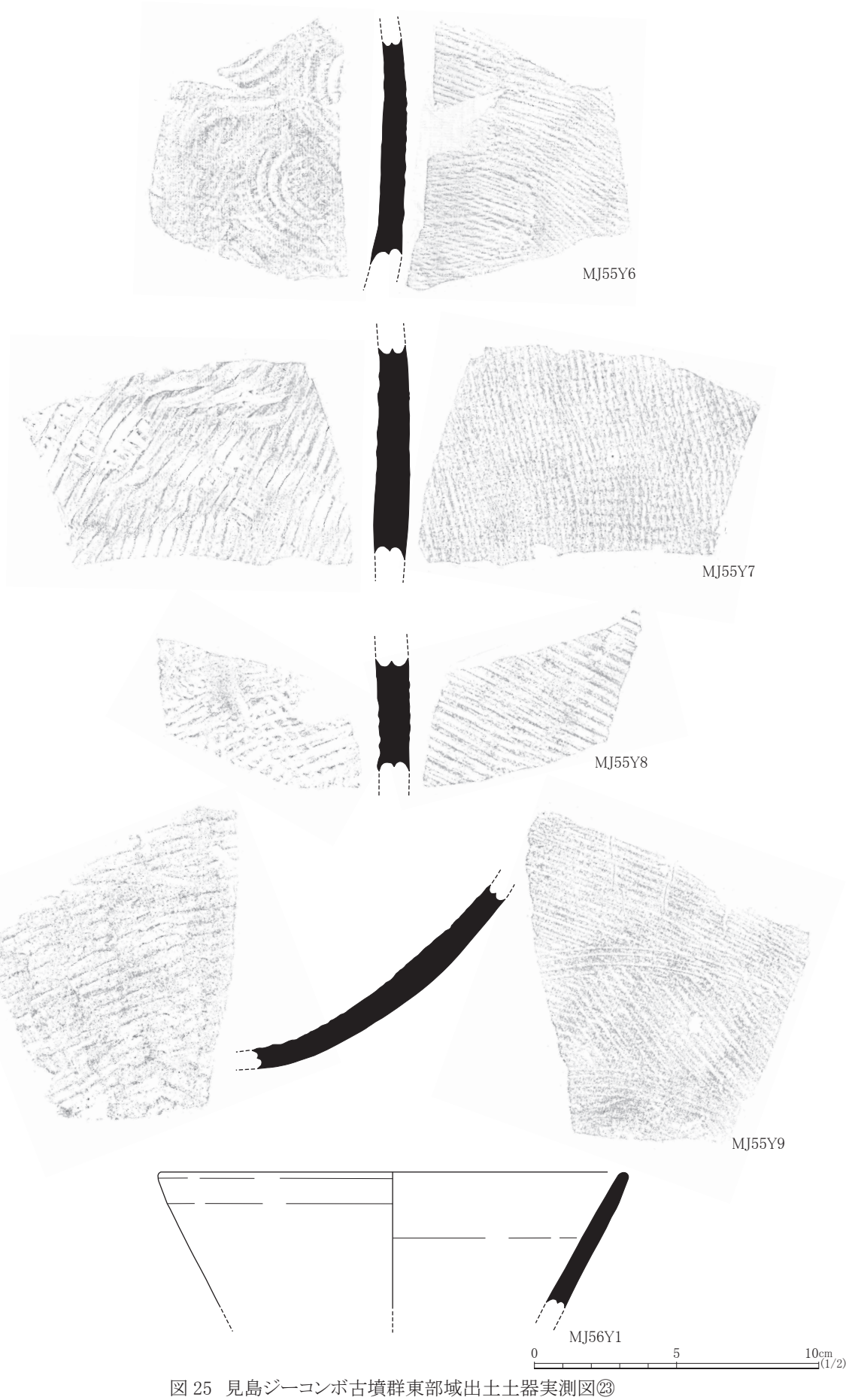


図 25　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㉓

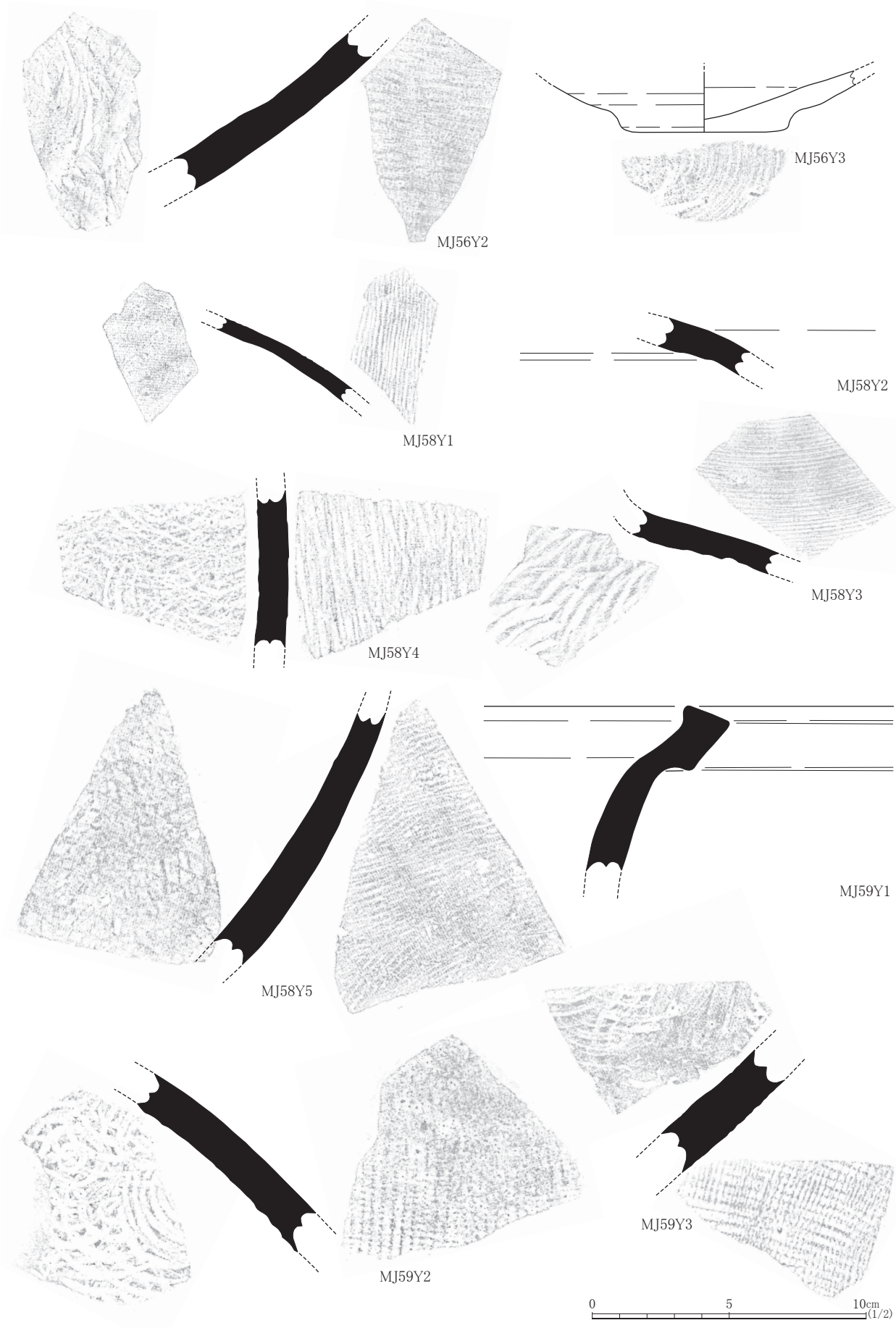


図 26　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㉔

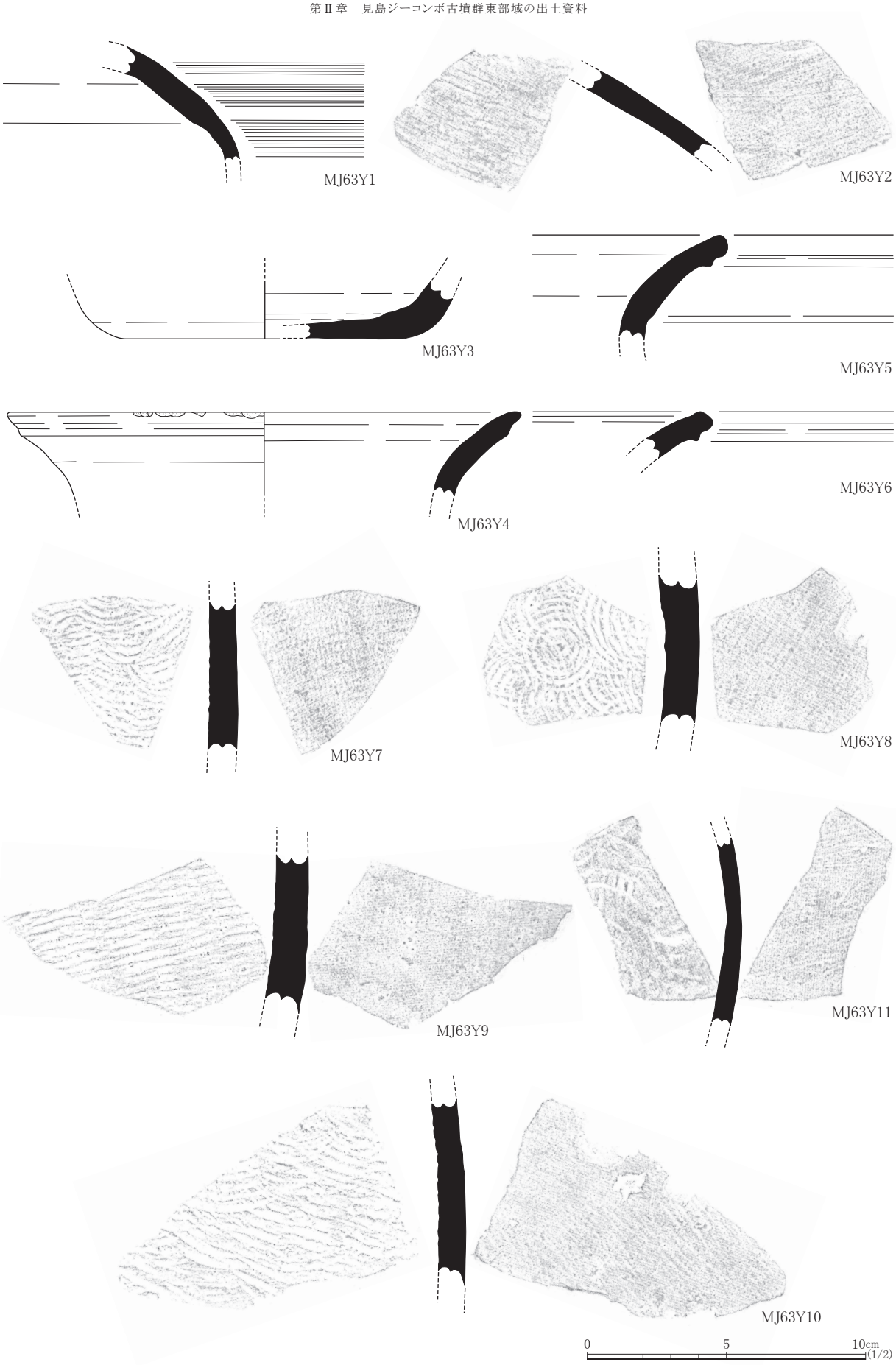


図 27　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㉕

【第63号墳】（図27、写真28・29）

第55号墳の西約9mに位置している。石室の遺存状態は良いようで、主軸は北東-南西を向く。

採取された土器は21片に及ぶが、いずれも須恵器である。**MJ63Y1**は壺の肩部片。外面は密にカキ目を施し、内面は回転ナデが施される。**MJ63Y2**も壺の肩部片。外面の平行文叩きは回転ナデによりほぼ消滅している。内面もナデが施されているが平行文当て具痕が残る。**MJ63Y3**は壺の底部片。無高台平底で、胎土や焼成状態からMJ63Y1の底部とみられる。復元底部径10.0㎝、残存高2.1㎝を測る。**MJ63Y4**は甕または壺の口縁部か。直立気味の頸部から口縁が大きく外反し、端部を尖り気味に収める。内外面共に回転ナデを施す。端部を連続して打ち欠いており、焼成時に他の個体と溶着していたと推定されることから、脚裾部の可能性を残す。復元口径18.4㎝、残存高3.0㎝。**MJ63Y5・6**は甕の口縁部片で、別個体である。両者とも口縁外端下位に断面三角形状の突帯を巡らせるが、前者の口縁端部は丸く収め、後者は面を取る。**MJ63Y7・8・9**は甕の体部片で、同一個体の可能性が高い。7は外面の擬格子平行文叩きをほぼそのまま残し、内面の同心円文当て具痕もそのまま残す。8は外面の擬格子平行文叩きがナデにより不明瞭となっており、内面の同心円文当て具痕も軽くナデられるが残している。9の外面は丁寧にナデが施され、かすかに叩き痕を残すのみで、内面には目の粗い平行文当て具痕（3条/㎝）が見られる。胎土及び焼成状態はほぼ同一である。**MJ63Y10**も甕の体部片。外面は不定方向からの平行文叩きの後にナデが施される。内面の径の大きな同心円文当て具痕はそのまま残す。**MJ63Y11**は器壁の薄い体部片。外面は平行文叩き後ナデが施され、内面は同心円文当て具痕を粗くナデ消しているが、部分的に目の粗い平行文当て具痕（3条/㎝）も見られる。

【第64号墳】（図28・29、写真29・30）

第63号墳の南西約6mに位置している。分布図に天井石は描かれていないが、石室の遺存状態は良いようで、主軸は北東-南西を向く。

採取された土器は須恵器が多く、土師器は1片のみである。**MJ64Y1**は坏蓋の天井-口縁部片。扁平なドーム状の天井部から緩やかに降下し、口縁を外方に屈曲させた後に端部を短く下垂させる。天井部外面中央に残る折損部から、つまみを有していたと推定される。内面には直線1条のヘラ記号が残る。復元口径13.8㎝、残存高1.95㎝を測る。口縁外面には灰が多量に被っており、重ね焼かれた状況を示している。**MJ64Y2**は甕の体部片。外面の目の粗い平行文叩き（3条/㎝）、内面の同心円文当て具痕ともそのまま残す。**MJ64Y3**も体部片。外面は擬格子平行文叩き後ナデ、部分的にカキ目を施す。内面は丁寧にナデられており、同心円文当て具痕をかすかに残すのみである。**MJ64Y4**は外面の平行文叩きをそのまま残すが、内面の当て具痕はナデで消滅している。残されたわずかな凹みから平行文当て具を用いたものと思われる。**MJ64Y5**の外面には目の細かい平行文叩き（6条/㎝）が施されており、内面の同心円文当て具痕は軽くナデられている。**MJ64Y6**は甕の底部片。外面は不定方向から目の細かい平行文叩き（6条/㎝）が施され、軽くナデられている。内面もナデられ、丸い凹みしか残っていない。丸石などが用いられたものと思われる。**MJ64Y7**は器壁が厚く大甕の底部とみられる。外面は目の細かい平行叩き（8条/㎝）が施されている。内面は薄く灰を被っており、ナデも施されていることから不明瞭ではあるが、丸く凹みが残っていることからやはり丸石などが用いられたのだろう。**MJ64Y8**は土師器壺の底部片。外面は風化が激しく器面の観察は不能である。内面には顕著に指押さえ痕が残る。

【第65号墳】（図29、写真30）

第64号墳の東約3mに位置しており、西半分は石垣に埋もれている。分布図では不明確であるが、石室の主軸は東-西を向くようである。

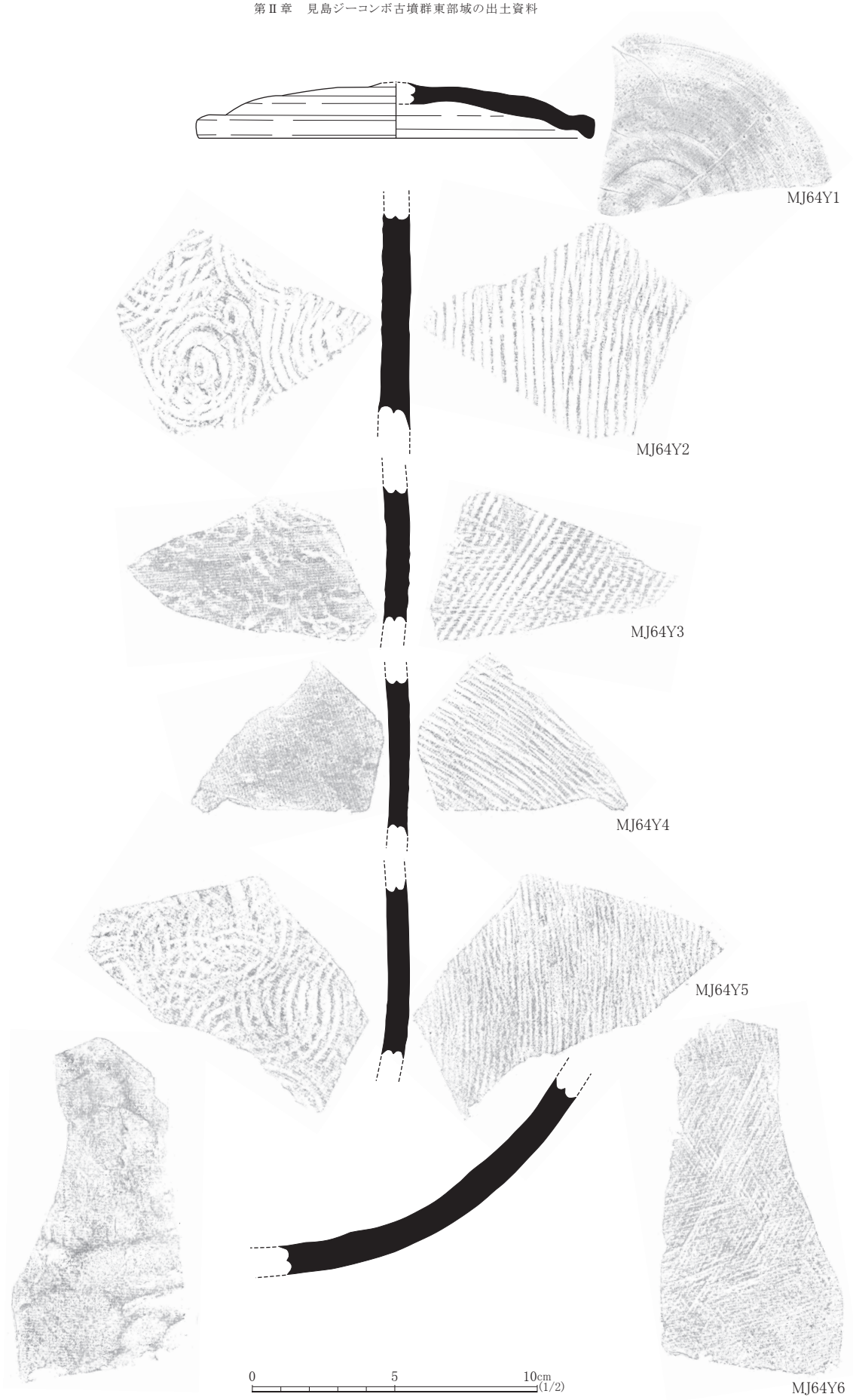


図 28　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㉖

採取された土器は土師器1片のみである。MJ65Y1は4片の接合資料で、坏口縁部とみられる。

【第66号墳】（図29・30、写真30・31）

第49号墳の南約7mに位置しており、破壊が進行しているようである。石室主軸は北西-南東か。

採取された土器はいずれも須恵器である。MJ66Y1は壺の肩部片。外面には灰が多量に被るがカキ目が見られる。内面の同心円文当て具痕はナデ消しが図られている。MJ66Y2も壺の肩部片。やはり外面に灰を被っており不明瞭となっているが、他の同一個体とみられる破片を見ると、目の細かな平行文叩き（5条/cm）が施されていることがわかる。内面の同心円文当て具痕には直交方向の亀裂が見られる。MJ66Y3は壺の底部片。体部が円筒状に立ち上がる壺で、器壁が厚い。外面には回転ヘラ削りが施されている。復元底部径11.0cm、残存高2.05cmを測る。MJ66Y4は壺類の高台片とみられる。MJ66Y5は甕の口縁-肩部片。頸部から短く外傾して口縁が立ち上がる。肩部はなで肩で、外面の平行文叩きはそのまま残し、内面の同心円文当て具痕はナデ消しが図られている。復元口径18.5cm、残存高5.5cmを測る。MJ66Y6は大甕の体部片。外面は平行文叩き後軽くナデが施される。内面の平行文当て具痕は一方がやや扇状に開いている。MJ66Y7の体部片は外面にカキ目が密に施されており、壺の可能性もある。内面の同心円文当て具痕は直交方向に亀裂が見られるが、車輪文当て具痕の可能性もある。MJ66Y8の体部片は外面に目の細かな平行文叩き（4.5条/cm）後板状工具によるナデ（カキ目か）が施される。内面の不定方向から当てられている目の細かな平行文当て具（6条/cm）は、見島では類例が少ない。MJ66Y9は外面の平行文叩きが途中で方向を違えている。内面の当て具痕は平行文にも見えるが、径の大きな同心円文当て具が用いられたのであろう。

【第67号墳】（図30～32、写真31・32）

第66号墳の南東約2.5mに位置している。石室主軸は北東-南西に向くようである。

採取された土器はいずれも須恵器である。MJ67Y1は坏で、直線的に口縁が開く。復元口径11.8cm、残存高3.9cmを測る。MJ67Y2は高台付坏の底-体部片。器壁のやや厚い個体で、底部外端に断面逆台形の小ぶりな高台が付く。高台は内外端で接地する。復元高台径は外端で7.8cm、内端で7.1cm。残存高は2.0cmを測る。MJ67Y3は壺の頸-肩部片か。肩部外面には目が非常に細かい平行文叩き（9条/cm）が施されている。内面の同心円文当て具痕はナデが施されている。内面に自然釉を被っており、頸-肩境界稜が逆に弧を描いているなど不可思議な資料である。MJ67Y4は壺の底-体部片で、接合しない同一個体の底部片と体部片を図上復元した。底部外端に断面方形の小ぶりな高台がハ字状に付いており、体部外面の下位は回転ヘラ削りが、上位は回転ナデと不定方向のナデが施されている。内面は全面回転ナデ。復元高台径は外端で13.6cm、内端で12.7cm。腹部径は20.4cmを測る。MJ67Y5は横瓶の腹部片であろうか。外面は平行文叩き後カキ目が施されている。カキ目が器面に対し垂直方向から施されていることから、円筒状の器形となる。内面の同心円文当て具痕はそのまま残している。MJ67Y6は甕の頸-肩部片。肩部外面の平行文叩きは縦位後横位に施される。内面は同心円文当て具痕をそのまま残すが、頸部は横ナデが施されている。頸部外面に灰を少量被っており、折損部の上面に平行文叩きが残っている。MJ67Y7の頸-肩部片はここでは甕としたが、器壁が薄く壺の可能性もある。肩部外面には平行文叩きを残す。内面には目の大きな格子文当て具痕（9mm角）が残っている。見島では類例を見いだせていない。MJ67Y8は甕の体部片。外面は平行文叩き後軽くナデが施されている。内面は目の粗い平行文当て具痕（3条/cm）に重複して目の細かい平行文当て具（6条/cm）が当てられた後、部分的にナデが施されている。MJ67Y9も体部片。外面の平行文叩きと内面の同心円文当て具痕をそのまま残す。外面には平行文叩きと直交する方向に条痕が付いている。MJ67Y10は甕の底部付近の破片と思わ

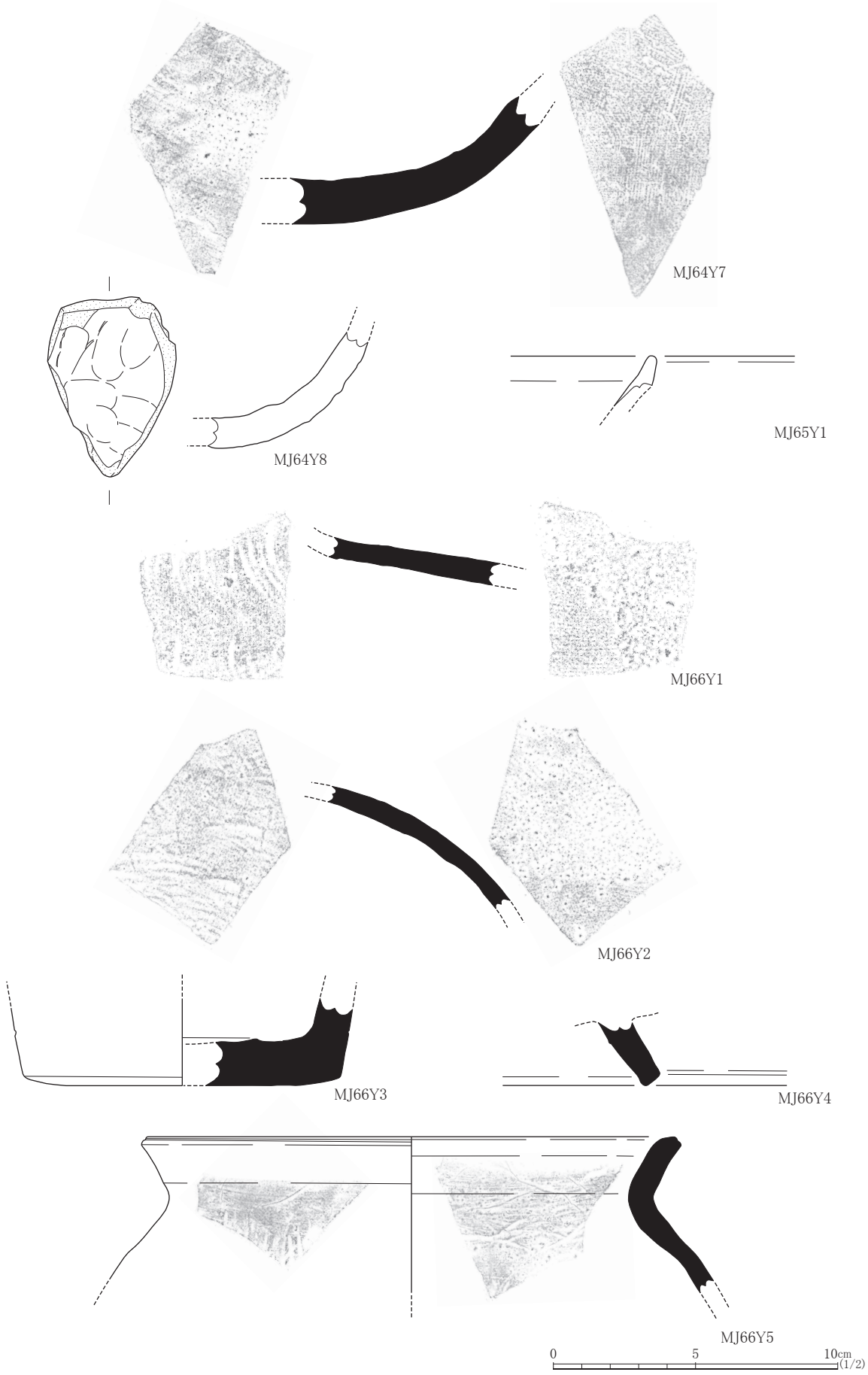


図 29　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㉗

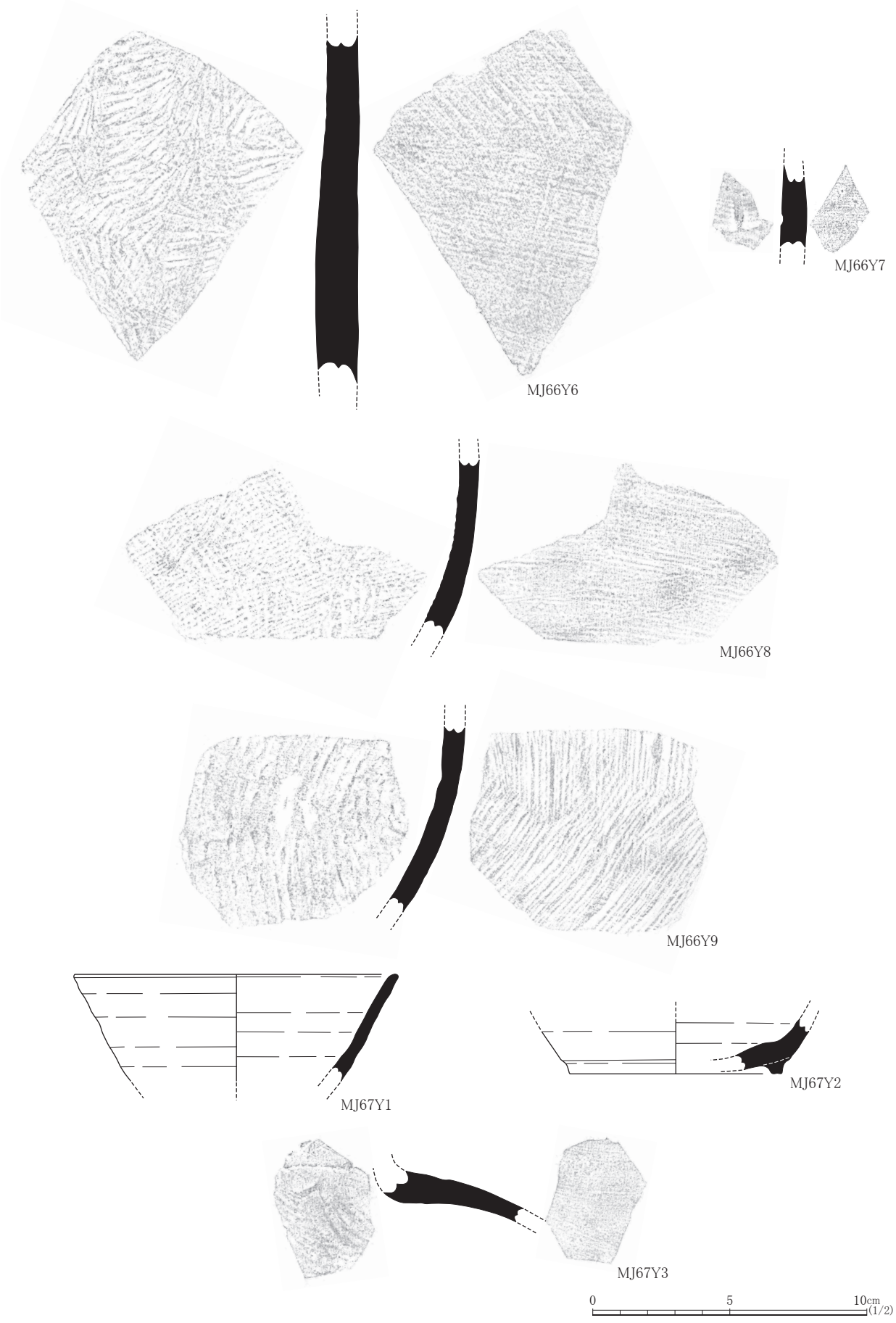


図 30　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㉘

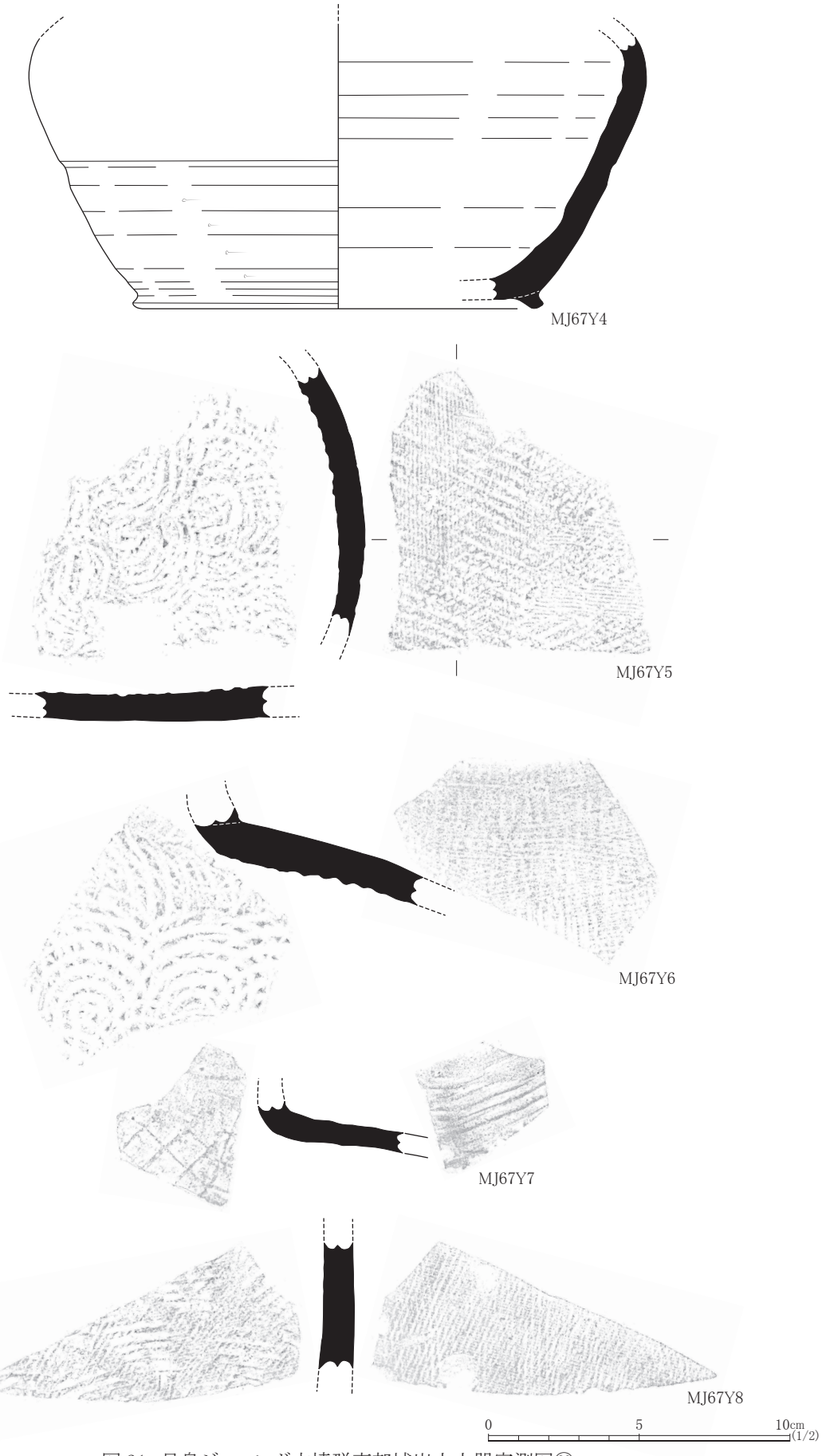


図 31　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㉙

れる。外面は目の粗い平行文叩き(2.5条/㎝)後に粗くカキ目を施している。内面は同心円文当て具痕を残すが、部分的に強くナデが施されており、下方に灰を被っている。

【第68号墳】(図32、写真32・33)

第67号墳の南約1.5mに近接する。古墳群の中では比較的長大な石室を有するようで、主軸は北西-南東を向く。

採取された土器はいずれも須恵器である。**MJ68Y1**は甕の口縁-頸部片。頸部から緩やかに外傾して口縁が立ち上がる。口縁内端をわずかに肥厚させている。復元口径17.4㎝、残存高5.3㎝を測る。**MJ68Y2**は甕の肩部片か。外面は平行叩き後軽くナデる。内面の同心円文当て具痕はそのまま残している。**MJ68Y3**は器壁が厚いことから大甕の体部片とみられる。外面の平行文叩きはナデによりほぼ消滅しており、内面の平行文当て具痕はそのまま残す。**MJ68Y4**は甕の体部片。外面は目の細かい平行文叩き(8条/㎝)が施され、自然釉を被っている。内面の同心円文当て具痕は軽くナデられている。**MJ68Y5**は器壁の薄い体部片で、外面は擬格子平行文叩きを、内面は同心円文当て具痕をそのまま残す。**MJ68Y6**も器壁の薄い個体で、底部付近の破片と思われる。外面は目の細かい平行文叩き(8条/㎝)が不定方向から施されている。内面の同心円文当て具痕はナデにより不明瞭となっている。

【第69号墳】(図33・34、写真33・34)

第68号墳の北西約1.5mに近接する。破壊が著しいようで、主軸の方向は不明である。

24片もの土器が採取されているが、全て須恵器である。**MJ69Y1**はやや大型の坏底-体部片。器壁の厚い個体で、平底から内湾して体部が立ち上がる。体部外面はヘラ切り後ナデが施されている。復元底部径11.0㎝、残存高3.35㎝を測る。**MJ69Y2**は高台付坏の底-体部片。底部外端に断面方形の小ぶりな高台が付く。体部は外傾して直線的に立ち上がるが、口縁は軽く外反するようである。復元高台径は外端で6.4㎝、内端で5.4㎝。残存高は4.1㎝を測る。胎土は精選されており、つくりもシャープである。**MJ69Y3・4**は胎土と焼成状態から同一個体の壺である可能性が高い。3は肩部片で、外面はカキ目状に目の細かい平行叩き(8条/㎝)が横位と縦位から施されている。内面の同心円文当て具痕はナデ消しが図られているが、わずかに残っている。4は体下半部片で、外面はナデ、内面は回転ナデが施されている。**MJ69Y5**は甕の頸部片で、頸基部で剥離している。頸部は直立気味に外反して立ち上がる。内面に灰を被っている。**MJ69Y6・7・8**は胎土及び焼成状態から同一個体とみられる。6は頸-肩部片で、頸基部で剥離している。内外面とも丁寧にナデが施されており、叩きや当て具痕は観察できない。7は体部片。9片の接合資料で、外面は縦位の平行文叩きを部分的にナデ消している。内面の平行文当て具は不定方向から当てられている。当て具の外縁が明確にわかる資料である。8も体部片で、外面は7と同じ叩き具が用いられているようだが、内面は7と同じ目の粗い平行文当て具(2.5条/㎝)を用いた後に、目の細かい平行文当て具(5条/㎝)を当てている。他に同一個体とみられる接合しない破片が8点存在する。**MJ69Y9**は甕としたが、器壁が薄く胎土は精緻、焼成は堅緻であり、壺の可能性もある。外面の平行文叩きはそのまま残し、内面の同心円文当て具痕は軽くナデが施されている。**MJ69Y10**は大甕の底部付近の破片とみられる。外面には不定方向から平行文叩きが施されている。内面は丁寧にナデが施されており、同心円文当て具痕は上方にかろうじて残るが下方は完全に消されている。**MJ69Y11**は器壁の薄い個体で、壺または甕の底部付近とみられる。外面は目の細かい平行文叩き(8条/㎝)が不定方向から施されており、内面の同心円文当て具痕はナデにより不明瞭となっている。

【第70号墳】(図34、写真35)

分布図では第69号墳の南約4mに大石1点が図示されているだけでありで、主体部の有無は不明と言

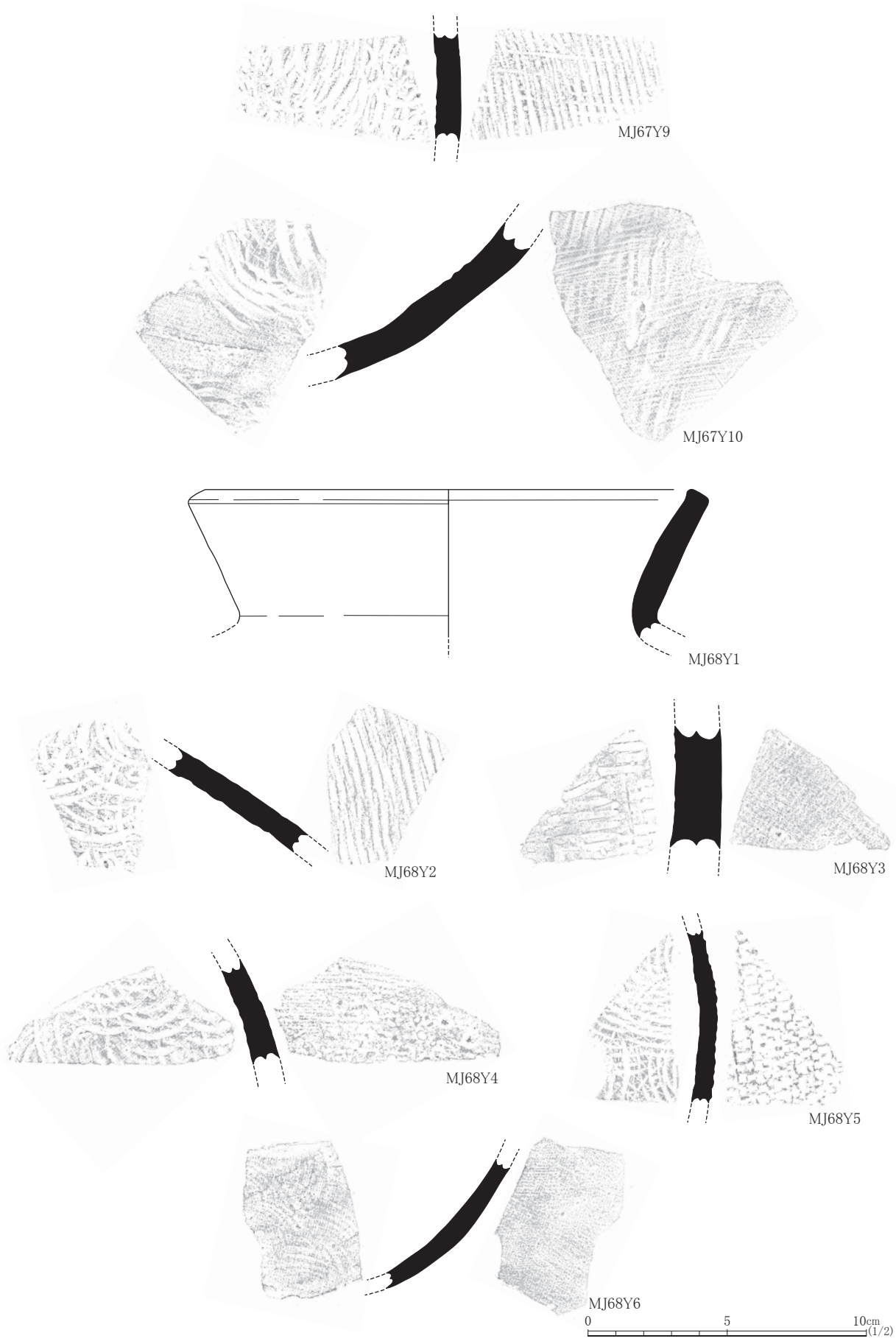


図 32　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㉚

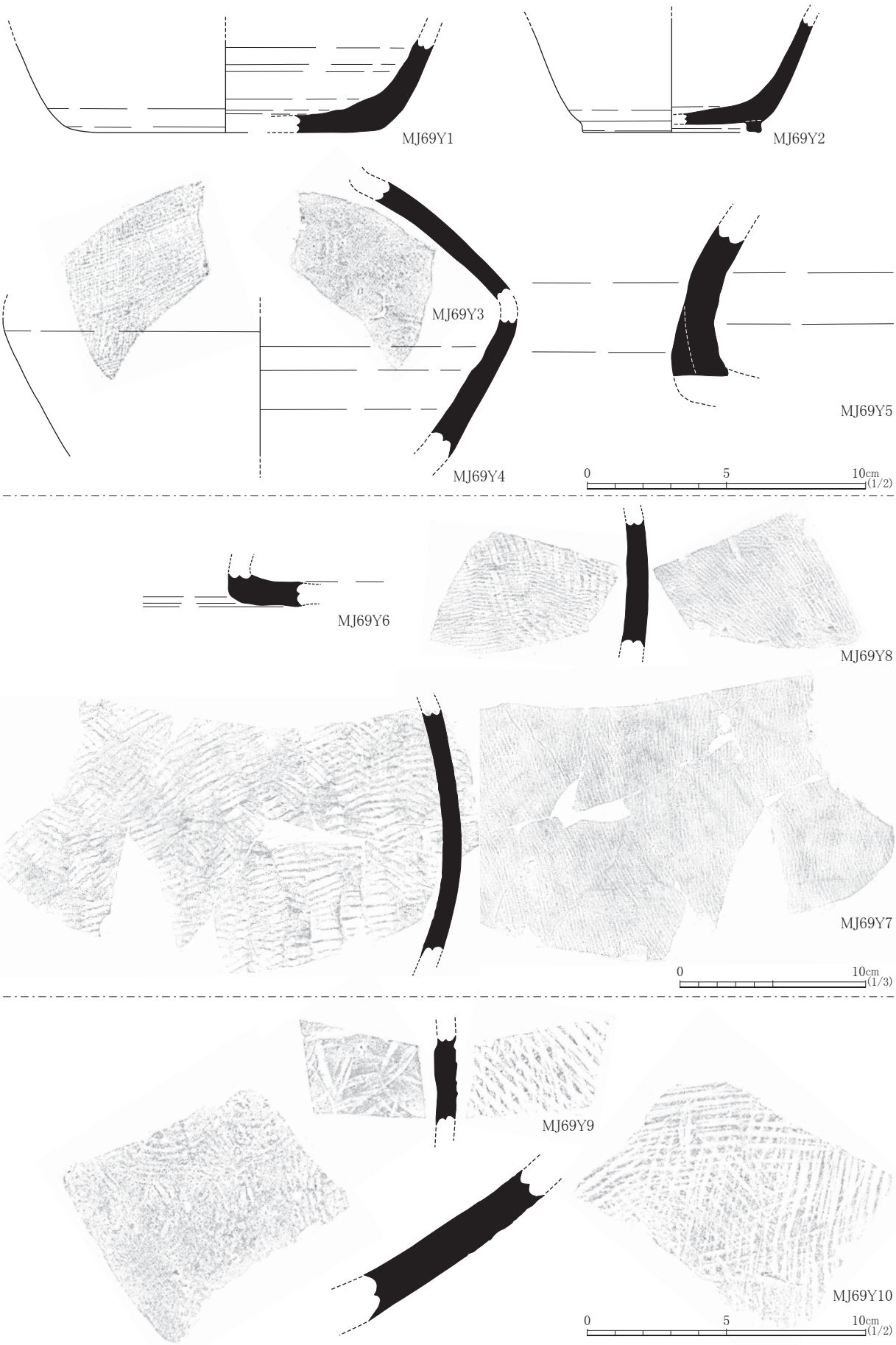


図 33　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㉛

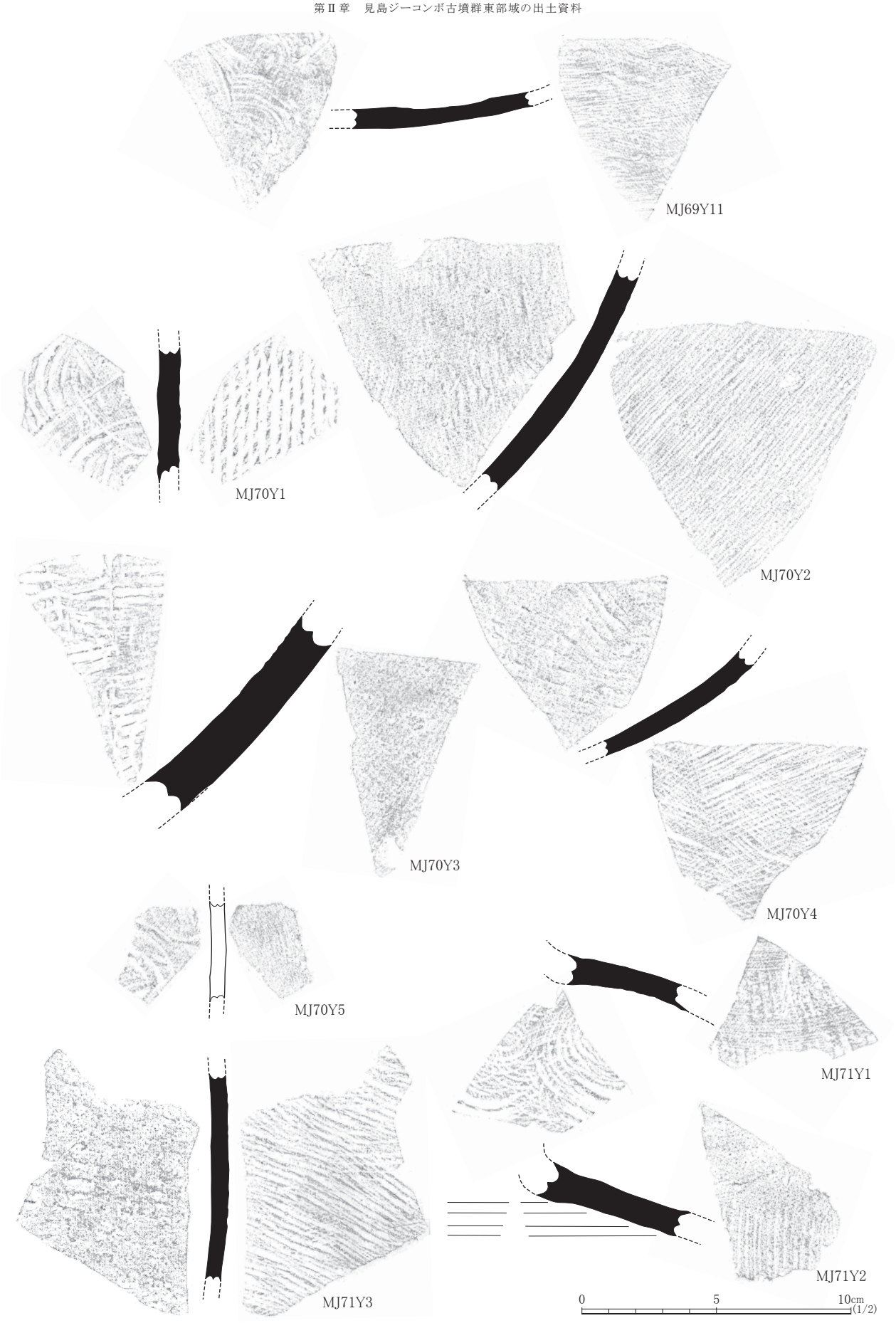


図 34　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㉜

わざるを得ない。

土師器1片を除くといずれも須恵器である。**MJ70Y1**は器壁の薄い体部片。外面の平行文叩きはそのまま残し、内面の同心円文当て具痕は軽くナデられている。MJ69Y9と同一個体の可能性がある。**MJ70Y2**は甕の体部片。外面は目の細かい平行文叩き(7条/㎝)が施されており、内面の目の粗い平行文当て具痕(3条/㎝)はナデにより部分的に不明瞭となっている。**MJ70Y3**は大甕の底部付近の破片とみられる。外面は平行文叩き後に軽くナデられており、内面の同心円文当て具痕には目の粗い平行文当て具痕(3条/㎝)が重なる。**MJ70Y4**は器壁の薄い甕の底部付近で、外面は不定方向から平行文叩きが施されている。内面の平行文当て具痕はほぼナデ消されている。他に同一個体とみられる接合しない破片が7点存在している。**MJ70Y5**は須恵器系土師器の甕体部片とみられる。外面の平行文叩きはハケ目状に細かく(6条/㎝)、内面の同心円文当て具痕は軽くナデられている。

【第71号墳】(図34・35、写真35・36)

分布図では第65号墳の南約5.5mに位置しているが、石室は大破しているようで石室の主軸方向は不明である。

土師器1片を除くといずれも須恵器である。**MJ71Y1**は壺の肩部片か。外面は平行文叩き後に密にカキ目を施す。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。**MJ71Y2**は甕の頸-肩部片。肩部外面に平行文叩きが残るが、内面の当て具痕はナデにより消滅している。**MJ71Y3**は第70号墳採取の破片と接合している。器壁の薄い甕の体部片で、外面は目の細かい平行文叩き(7条/㎝)が施されている。内面の目の粗い平行文当て具痕(2条/㎝)はナデにより不明瞭となっている。**MJ71Y4**も体部片で、外面の平行文叩きはそのまま残す。内面は丁寧にナデ消されているが、同心円文当て具痕がかすかに残る。**MJ71Y5**は3片の接合資料で、うち1片は第72号墳採取の破片である。MJ71Y3の事例とともに、同一個体の破片が広範囲に移動している状況をうかがい知ることができる。外面はナデにより不明瞭となっているが、格子文または擬格子平行文叩きが施されている。内面は径の大きな同心円文当て具痕が残されており、部分的に強くナデられている。**MJ71Y6**は肩部か。外面は目の細かい平行文叩き(5条/㎝)が施され、内面の同心円文当て具痕は軽くナデられている。**MJ71Y7**は土師器坏の底部片である。

【第72号墳】(図35・36、写真36・37)

第70号墳の南西約5mに位置している。昭和57年(1982)の調査墳で、報告書によると石室の主軸はN2°Wで、羨道部を含めた石室規模は内法で全長440㎝、玄室の長さは300㎝、幅は70～100㎝、高さは120㎝を測る(乗安1983)。形骸化した羨道部は上方に開口するとされ、東部域石室の大きな特徴と見なされている。小児を含む3体の人骨(松下・分部・佐熊1983)のほか、須恵器、土師器の坏、須恵器高坏、須恵器壺甕類、刀装具を含む鉄刀、鉄鏃、刀子、滑石製勾玉などが出土している。

18片の土器が採取されているが、いずれも須恵器である。**MJ72Y1**は坏蓋の口縁部片。扁平な蓋とみられ、口縁端部をわずかに下垂させている。**MJ72Y2**は甕の頸-肩部片。頸部内面と肩部外面には灰が多量に被っている。頸部は緩やかに外反しながら立ち上がる。肩部外面は灰により器面が観察できないが、内面は同心円文当て具痕が残っている。復元頸部径17.0㎝を測る。**MJ72Y3**は甕の体部片。外面の灰の被り方から肩部から腹部にかけての破片とみられる。外面は縦位の平行文叩き後部分的にカキ目が施される。内面の同心円文当て具痕は軽くナデられている。**MJ72Y4**も体部片。外面には目の細かい平行文叩き(6条/㎝)が施され、内面には目の粗い平行文当て具痕(2条/㎝)を残す。**MJ72Y5**の外面は目の粗い平行文叩き(3条/㎝)が施され、内面の目の粗い平行文当て具痕(2条/㎝)は当て具の縁部が残っている。**MJ72Y6**の内面は目の粗い平行文当て具痕(3条/㎝)が残り、部分的に同心円

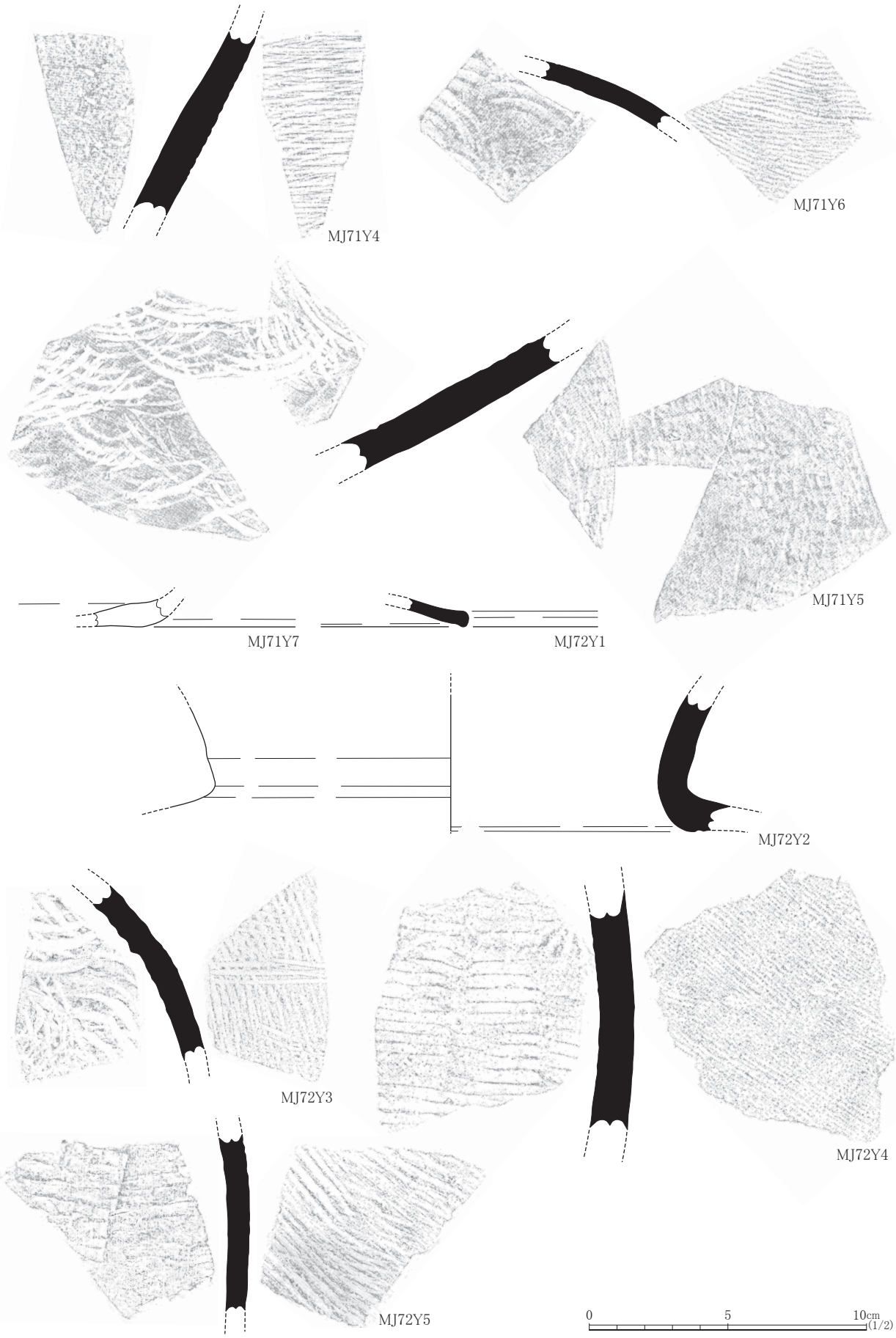


図 35　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㉝

文とみられる当て具痕もあるが先後関係は不明である。**MJ72Y7**は大甕の体部片。外面の平行文叩き、内面の同心円文当て具痕とも軽くナデが施される。採取地不明品であるMJUK1Y4と同一個体の可能性がある。**MJ72Y8**は器壁の薄い甕で、底部付近の破片とみられる。外面は直交方向から平行文叩きが行われているが、叩き具を違えている(3条/cmと2条/cm)。内面は同心円文当て具がランダムに当てられており、当て具の違いは看取できない。**MJ72Y9**も底部付近の破片で、外面は不定方向から平行文叩きが施されている。内面は同心円文当て具痕の上から目の粗い平行文当て具(2条/cm)が当てられている。**MJ72Y10**は2片の接合資料で、外面の平行文叩き、内面の同心円文当て具痕ともナデにより不明瞭となっている。

【第73号墳】(図37、写真37)

第72号墳の北西に隣接している。遺存状態は良好のようで、天井石も2石残している。石室の主軸はほぼ北-南を向く。

須恵器2片が採取されている。**MJ73Y1**は甕の口縁-頸部片。強く外反する頸部から短く口縁が開く。口縁端部を短くつまみ上げている。復元口径22.2cm、残存高3.3cmを測る。**MJ73Y2**は器壁の薄い甕で、底部付近の破片とみられる。外面の平行文叩き(4条/cm)は不定方向から施されており、内面の目の粗い平行文当て具痕(2条/cm)はほぼナデ消されている。

【第75号墳】(図37、写真37・38)

第71号墳の南西約4mに位置する。分布図には天井石と見られる3石が描かれているものの、破壊が進行しているようである。石室の主軸方向は北東-南西か。

須恵器5片、土師器3片が採取されている。**MJ75Y1**は須恵器坏蓋。内外面とも回転ナデを施す。復元口径11.5cm、残存高2.9cmを測る。高坏坏部の可能性も残す。**MJ75Y2**は高台付坏の底部片。焼成状態は陶器状で、内外面とも器面の風化が著しい。底部外端に付く長めの高台はハ字状に開く。復元高台径は外端で7.8cm、内端で7.1cm、残存高は2.55cmを測る。**MJ75Y3**は2片の接合資料で、須恵器甕の体部片。外面は平行文叩きを残し、内面の同心円文当て具痕はナデにより不明瞭となっている。**MJ75Y4**も甕で底部付近の破片であろう。外面は横位と縦位から平行文叩きが施されいるが、叩き具が異なっている(前者は3条/cm、後者は4条/cm)。内面には目の粗い平行文当て具痕(3条/cm)が残り、部分的に同心円文当て具痕が重複している。胎土や焼成状態から、MJ75Y3と同一個体と思われる。**MJ75Y5**は土師器高坏の脚裾部片。器壁が薄くシャープなつくりである。復元裾部径12.2cm、残存高2.5cm。

【第76号墳】(図37、写真38)

第75号墳の南東約2mに位置する。天井石を失っており、奥壁や羨道も破壊されているようである。石室の主軸は北北東-南南西を向く。

須恵器5片が採取されている。**MJ76Y1**は壺の肩部片か。外面は平行文叩き後部分的にカキ目が施されている。内面はナデ消しが図られているが、円盤状の凹みがわずかに残っている。

【第77・78号墳】(図37～39、写真38・39)

第77号墳と第78号墳は南東-北西に隣接しており、第75号墳の南約5mに位置する。

第77号墳は昭和37年(1962)調査墳であり、報告書によると石室主軸はS32° Eで、石室規模は奥行き211cm、幅40cm、高さ135～138cmを測る。出土した人骨歯片は性別・年齢不明の1体分と鑑定されており(松下・松下2014)、須恵器片89点、土師器片14点が出土している。

第78号墳は天井石の大半を失うものの、分布図を見る限り石室の遺存状態は良いようで、石室の主軸は北西-南東を向く。

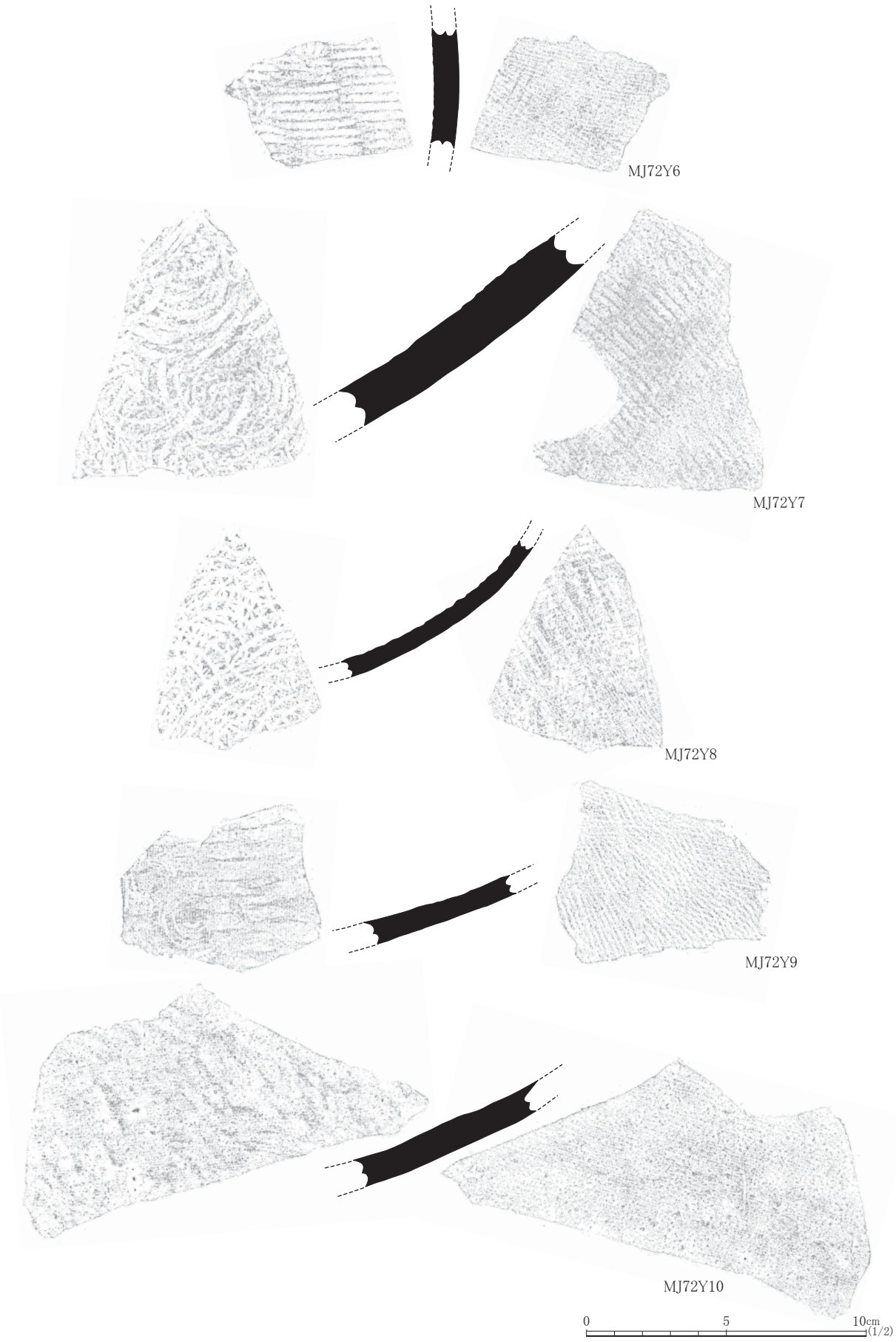


図 36　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㉞

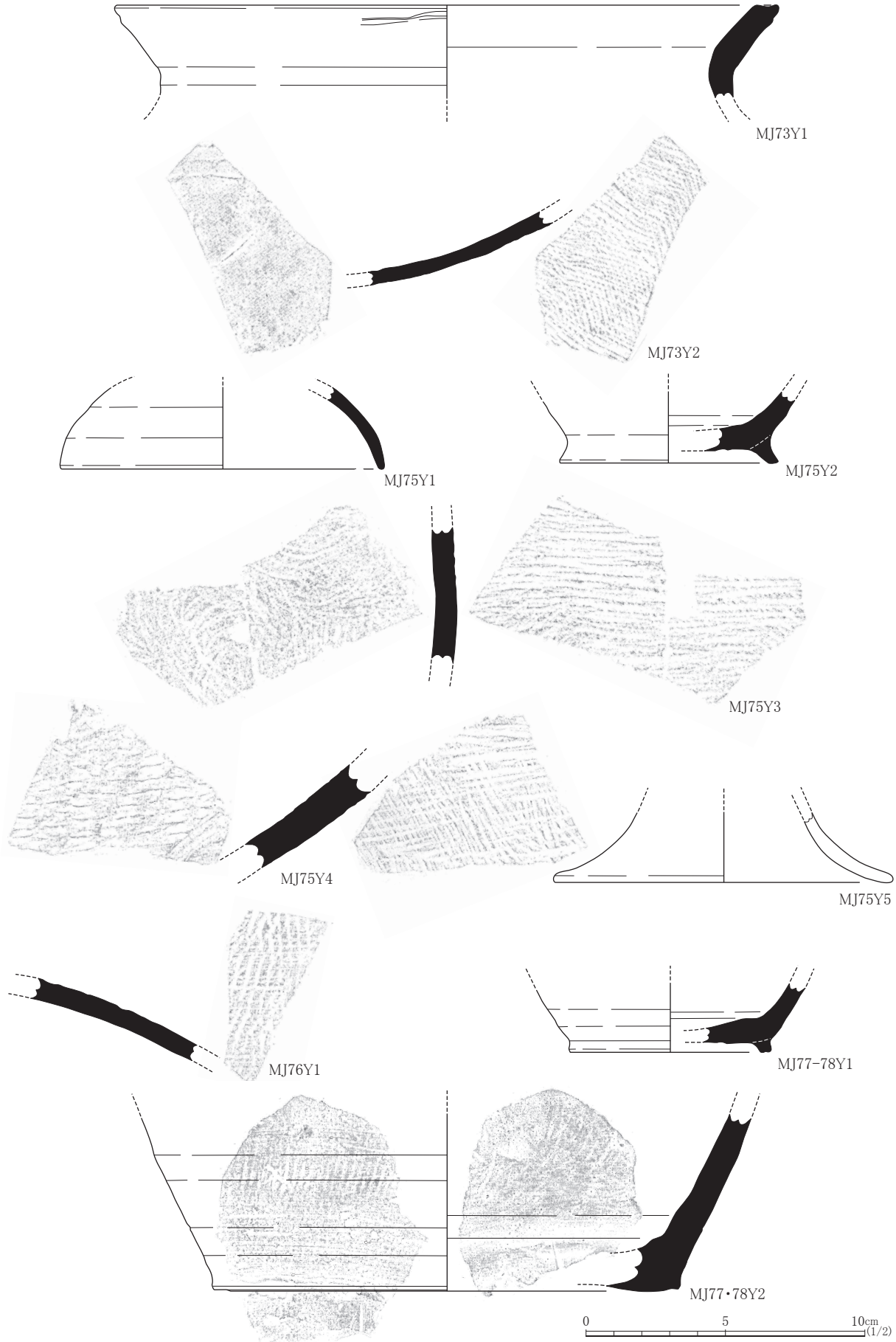


図 37　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㉟

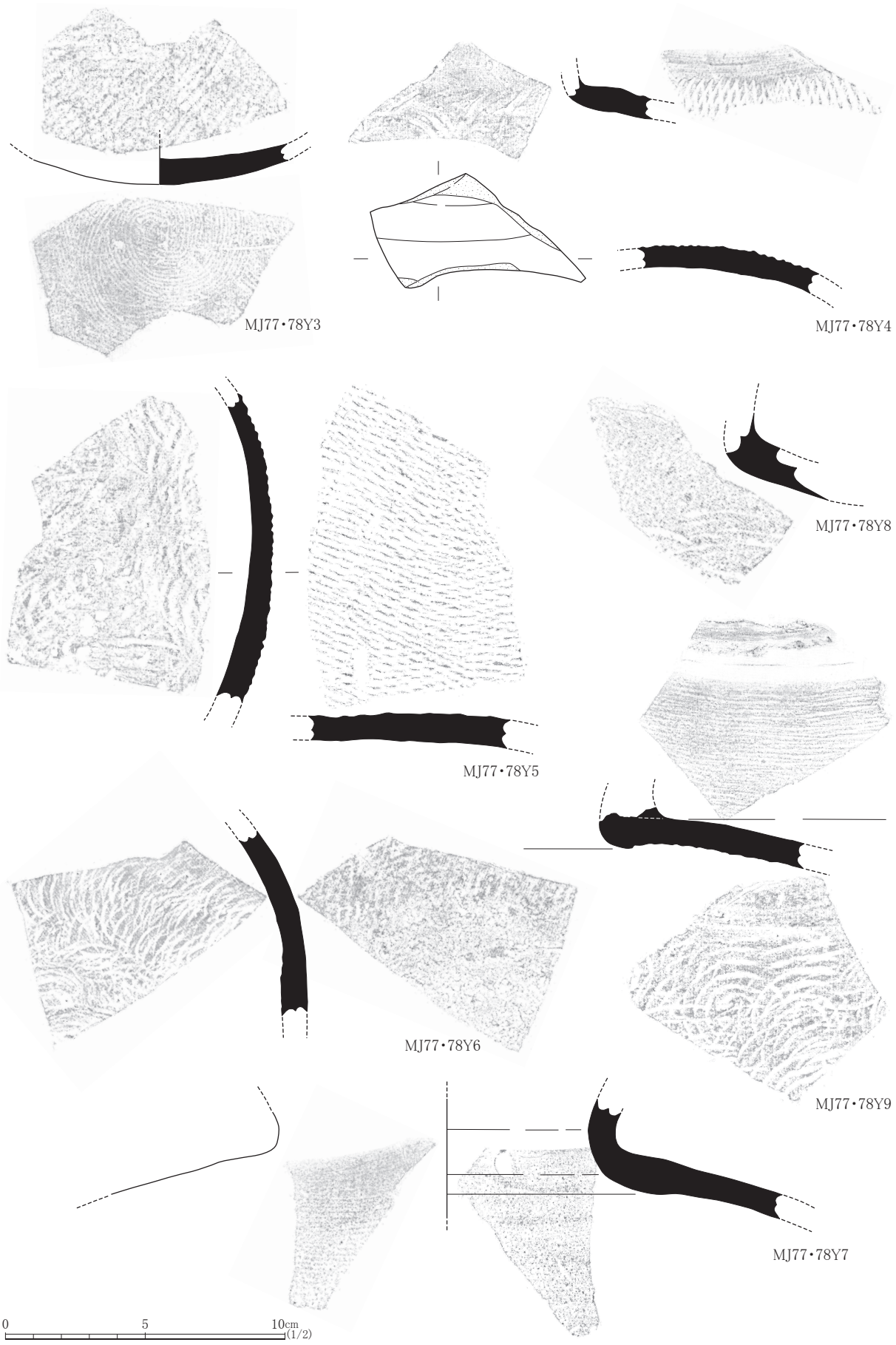


図 38　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㊱

12片の土器が採取されており、いずれも須恵器である。**MJ77・78Y1**は高台付坏の底-体部片。底部外端に断面方形の小ぶりな高台が付き、内外端で接地する。体部は直線的に外方に立ち上がる。復元高台径は外端で7.2㎝、内端で6.4㎝、残存高は2.5㎝を測る。**MJ77・78Y2**は壺の底-体部片。底部外端に高台が剥離した痕跡があるが焼成前に剥離したようで、無高台の壺として使用されたと考えられる。体部外面は縦位の平行文叩き後回転ヘラ削りが施されている。内面は同心円文当て具痕にナデを施している。復元底部径16.6㎝、残存高6.4㎝。**MJ77・78Y3**は壺の底部片か。外面は平行文叩き後渦巻き状にカキ目が施されている。内面の目の粗い平行文当て具痕（3条/㎝）は軽くナデられる。**MJ77・78Y4**は横瓶の頸-肩部とみられる。肩部外面は右上がりの平行文叩きを施した後に左上がりに叩く。内面の同心円文当て具痕は粗くナデ消している。**MJ77・78Y5**も横瓶の体部片。MJ77・78Y4と同様の特徴を有しており、同一個体と考えられる。**MJ77・78Y6**も横瓶の肩-腹部片。胎土が精緻、焼成状態も堅緻で、上記の横瓶とは別個体とみられる。外面に灰と自然釉が多量に被るものの、平行文叩きが観察される。内面は規則的に連続する径の小さな同心円文当て具痕が残る。**MJ77・78Y7**は甕の頸-肩部片である。頸部の内外面に灰と自然釉を被る。肩部外面には横位の目の細かい平行文叩き（6条/㎝）が施される。内面の同心円文当て具痕はナデにより不明瞭となっている。**MJ77・78Y8**も甕の頸-肩部の小破片。内面にわずかに同心円文当て具痕を残す。**MJ77・78Y9**も頸-肩部片で、肩部外面には横位に目の細かな平行文叩き（6条/㎝）が施されており、叩き痕は頸基部の剥離部にまで至っている。内面は軽くナデられているが、同心円文当て具痕が明瞭に残る。**MJ77・78Y10**は甕の体部片。外面は平行文叩き後部分的に幅細のカキ目が施される。内面の目の粗い平行文当て具痕（3条/㎝）は同心円文当て具痕に重複している。

【第79号墳】（図39・40、写真39）

第78号墳の南西約2.5ｍに位置する。破壊が進行しているようであるが、比較的大型の石室とみられる。石室の主軸は北西-南東を向く。

須恵器片が6点採取されている。**MJ79Y1**は壺の肩部片。外面は密にカキ目が施されており、叩きは観察されない。内面は回転ナデが施されており、同心円文当て具痕がわずかに残る。**MJ79Y2**は甕の肩部片とみられ、外面に灰を多く被っている。外面はやや左上がりの平行文叩きを行った後にカキ目を施している。内面の同心円文当て具痕はナデにより不明瞭となっている。**MJ79Y3**は外面に灰を少量被っており、肩部付近の体部片とみられる。外面に平行文叩きを施し、内面の同心円文当て具痕はそのまま残している。**MJ79Y4**は2片の接合資料で、甕底部付近の破片である。外面は2方向から平行文叩き（4条/㎝）を施し、対応するように内面にも2方向（横・右上がり）からの平行文当て具痕（3条/㎝）が残っている。その組み合わせは「左上がり平行文叩き⇔横位平行文当て具痕」「縦位平行文叩き⇔右上がり平行文当て具痕」である。**MJ79Y5**は2片の接合資料で、甕の底部片である。外面は不定方向から目の粗い平行文叩き（2条/㎝）を行った後に粗くカキ目を施している。内面は全面的にナデが施されているが、上方に目の細かな平行文当て具痕（5条/㎝）が残り、下方にはヘラ状の金属工具によるものと思われる刺突痕が不規則に8箇所残っている。

【第81号墳】（図40、写真40）

第79号墳の南西約3.5ｍに位置する。昭和37年（1962）調査墳であり、報告書によると墳丘積石が若干遺存しており、天井石は4石が残り、3石が石室内に落下していたとされる。石室主軸はS19°Wで、石室規模は奥行き275㎝、幅34㎝～52㎝、高さ83～96㎝を測る。石室からは2体分の人骨歯が出土しており、1体は年齢不明の男性、1体は性別不明の幼児と鑑定されている（松下・松下2014）。そのほか、金

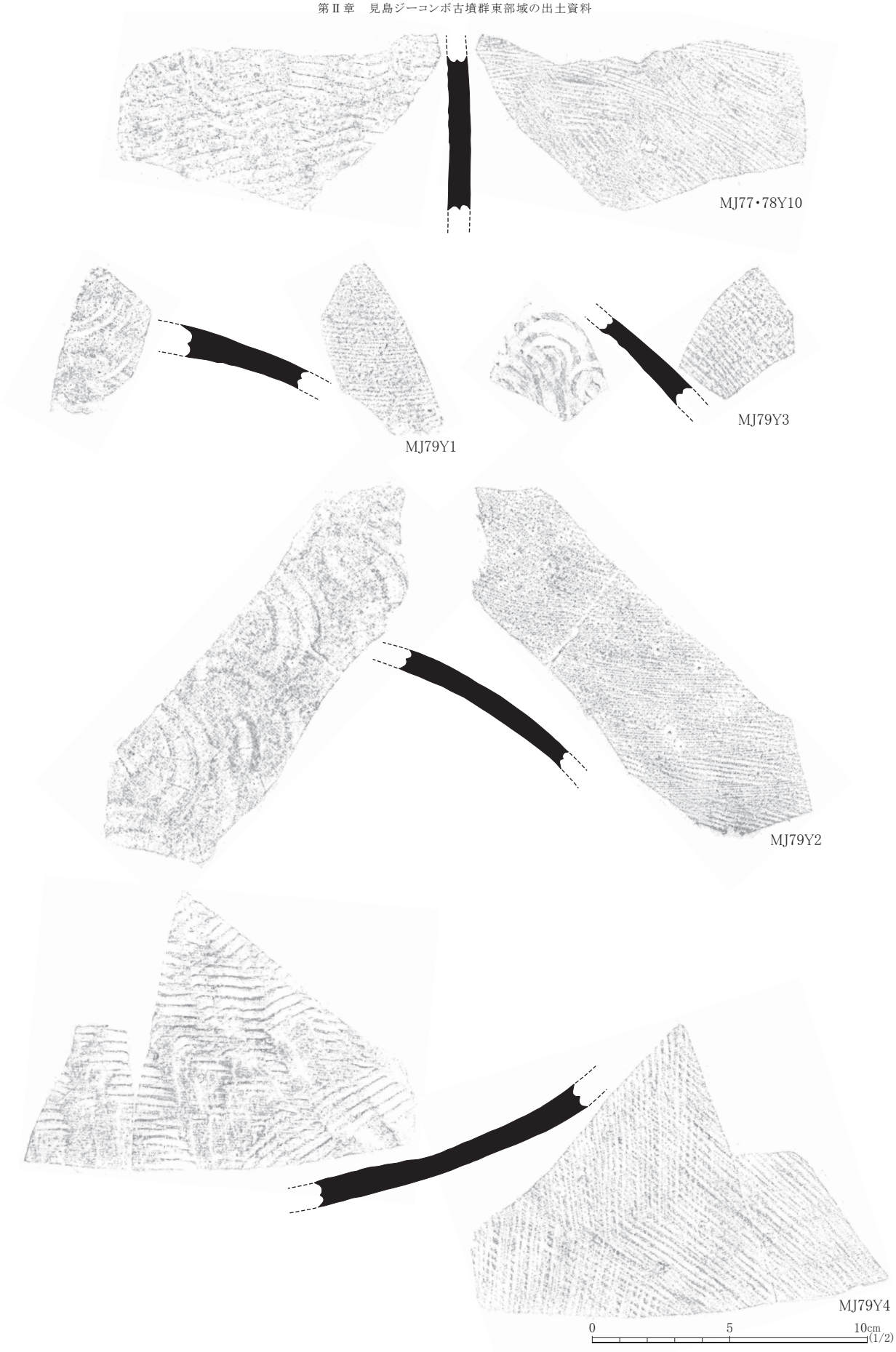


図 39　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㊲

具の遺存した刀子や小刀子3点、大甕を含む須恵器82点、土師器1点が出土している。

須恵器片が9点、土師器片が2片採取されているが、図化可能なものはいずれも須恵器である。**MJ81Y1**は甕の頸-肩部小片である。内外面とも横ナデが施されている。**MJ81Y2**は器壁の薄い甕の体部片。外面は右上がりの平行文叩き後カキ目を施す。内面の同心円文当て具痕は明瞭に残る。**MJ81Y3**は甕体部の小片。外面は斜格子状に2方向から平行文叩きを施す。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。**MJ81Y4**は外面に平行文叩きを行った後に軽くナデを施す。内面の目の粗い平行文当て具痕（3条/㎝）はそのまま残す。**MJ81Y5**は外面の平行文叩き、内面の同心円文当て具痕ともナデによりやや不明瞭となっている。

【第82号墳】（40～42、写真40・41）

第81号墳の西北西約2.5mに位置する。破壊が進行しているようであるが、分布図には天井石とみられる2石が描かれている。石室の主軸は北北東-南南西を向く。

東部域採取資料群の中では多量である35片の土器（いずれも須恵器）が存在する。**MJ82Y1**は高台付坏の口縁-底部片。接合しない口縁部片と底-体部片とを図上復元した。底部外端のやや内側に断面長方形の低い高台が付き、内端で接地する。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁はわずかに外反する。復元口径は14.0㎝、復元高台径は外端で9.2㎝、内端で8.0㎝。器高は3.9㎝を測る。**MJ82Y2**は壺の頸-肩部片。器壁がやや薄く、シャープなつくりである。頸部内面と肩部外面に自然釉を多量に被っていることから肩部外面の器面観察ができないが、同一個体とみられる別個体を見ると平行文叩き（2.5条/㎝）が施されいる。内面は同心円文当て具痕に回転ナデが施されている。復元頸部径は11.6㎝を測る。**MJ82Y3**も壺の頸-肩部片とみられる。回転ナデにより不明瞭となっているが、肩部外面には格子文または擬格子平行文叩きが施されているようである。内面の同心円文当て具痕も回転ナデにより不明瞭となっている。同一個体と思われる破片が他に3点存在する。**MJ82Y4**は壺の体部片とみられる。外面の格子文叩きには特異な叩き具が用いられており、格子文中に「×」印が彫り込まれている。内面には2種の平行文当て具（2条/㎝と3条/㎝）が方向を違えて当てられている。胎土や焼成状態の特徴から**MJ82Y3**と同一個体の可能性がある。**MJ82Y5**は大甕の口縁-肩部片で、4片の接合資料である。。肩の張る器形で、屈曲する頸部から口縁が直線的に短く開く。口縁内面には灰を少量被っている。肩部外面の左上がりの平行叩き、内面の同心円文当て具痕ともそのまま残す。復元口径30.1㎝、残存高7.3㎝を測る。**MJ82Y6**は2片の接合資料で、MJ82Y5と同一個体の底部片とみられる。外面は平行文叩きを方向を違えながら施し、軽くナデている。内面には楕円形の同心円文当て具を用いている。この大甕と同一個体と考えられる破片が他に17点も存在するが、残念なことに接合しない。**MJ82Y7**は甕の口縁部片。外反する頸部から直線的に口縁が開く。外面下端に板状工具の圧痕が見られる。**MJ82Y8**は甕の体部片。外面には目の細かい平行文叩き（5条/㎝）が施され、内面には目の粗い平行文当て具痕（3条/㎝）と多数の指押さえ痕が明瞭に残る。**MJ82Y9**は器壁の薄い個体で、甕の底部片とみられる。外面は平行文叩き後ナデが施され、内面の同心円文当て具痕には部分的にナデが施される。他に同一個体とみられる破片が2点存在する。**MJ82Y10**も甕の底部片。外面は擬格子平行文叩き後に部分的にカキ目が施される。内面の同心円文当て具痕はナデが施される。**MJ82Y11**は3片の接合資料で、外面は目の細かい平行文叩き（5条/㎝）を行った後に丁寧にカキ目を施す。内面は縦方向に丁寧にナデられているものの、目の細かい平行文当て具痕（4条/㎝）がわずかに残っている。

【第83号墳】（図43、写真41・42）

第81号墳の南約4mに位置する。西側の大半が石垣の下に埋まっているようで、石室の主軸は不明で

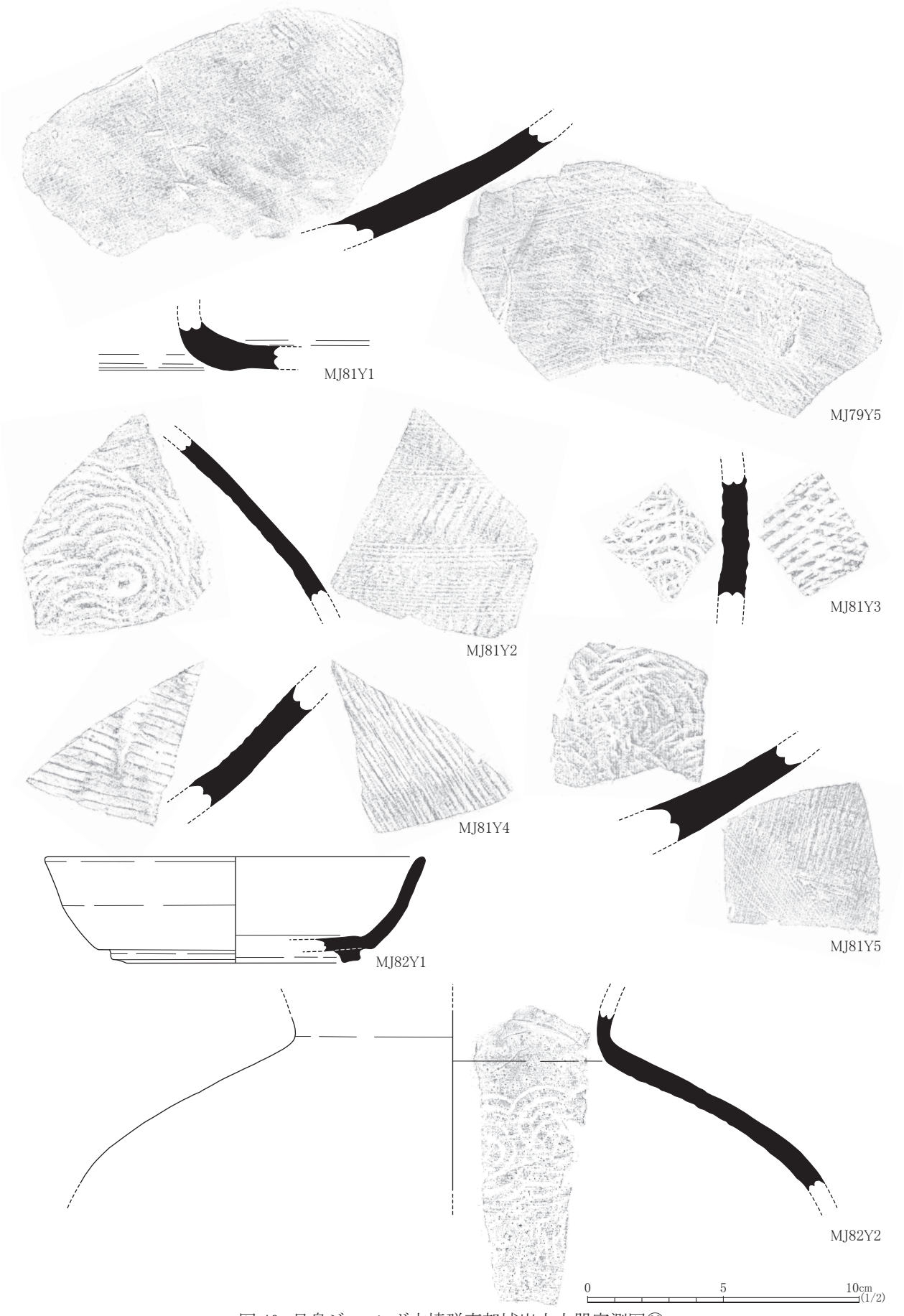


図 40　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㊳

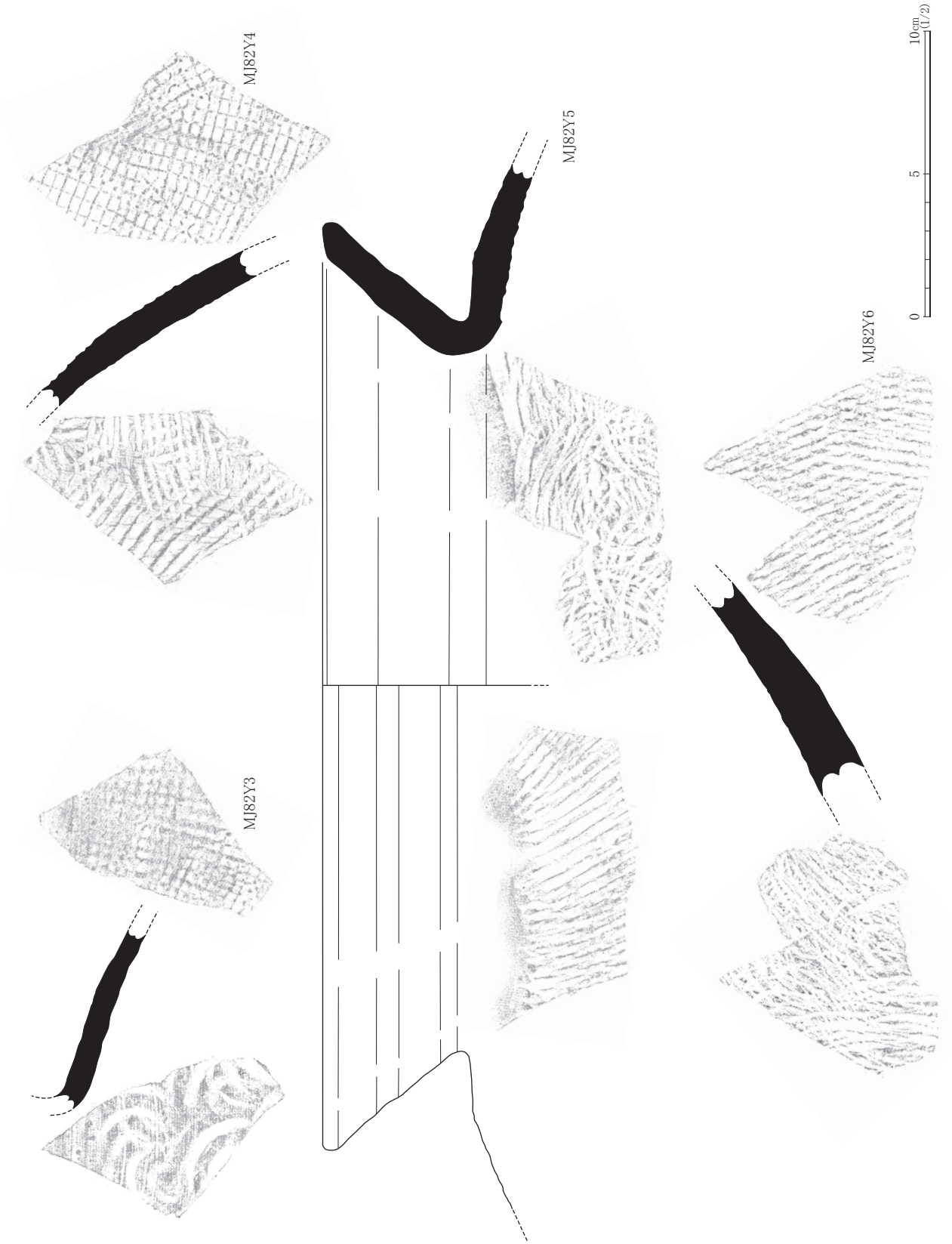


図 41　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㊴

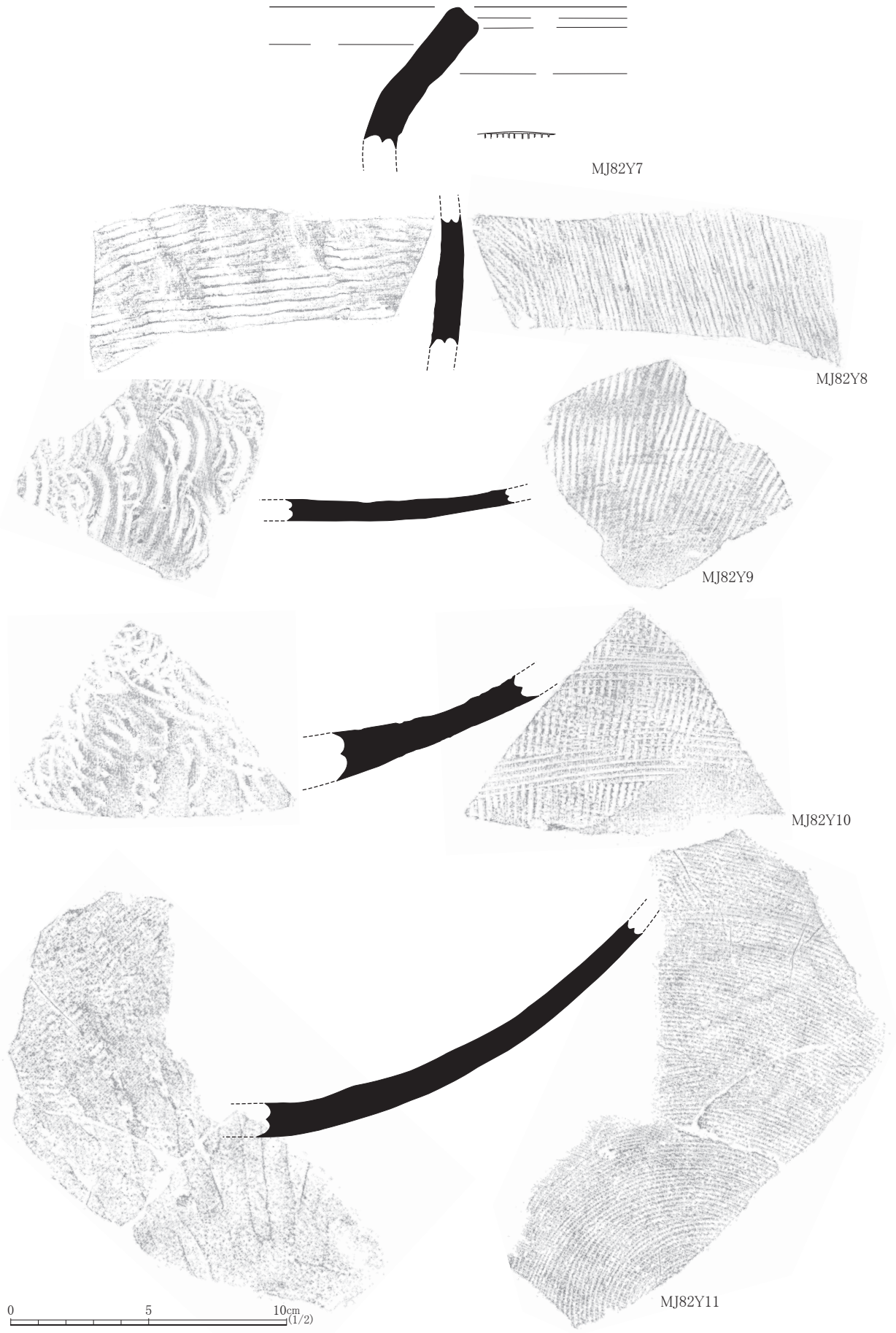


図 42　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑩

ある。

須恵器7片、土師器3片が採取されている。**MJ83Y1**は2片の接合資料。器壁の薄い個体で、須恵器甕の底部付近とみられる。外面は不定方向から平行文叩き（4条/㎝）が施される。内面は丁寧にナデが施されており、部分的に平行文当て具痕（3条/㎝）を残すのみである。**MJ83Y2**も須恵器甕の底部付近。風化が著しいが、外面に目の粗い平行文叩き（2.5条/㎝）、内面に同心円文当て具痕を残す。**MJ83Y3**は2片の接合資料で、器壁の薄い土師器坏の口縁部片。直線的に大きく開く。

【第84号墳か】（図43、写真42）

暫定的に第84号墳に所属させた資料群である。第84号墳は第82号墳の北北西約2.5mに位置する。大きく破壊されており、石室の一部しか遺存していないようである。

須恵器4片が採取されている。**MJ84かY1**は底-体部片。径の小さな底部から体部が直立気味に立ち上がることから、円筒形の壺とみられる。復元底部径10.6㎝を測る。**MJ84かY2**は甕の頸-肩部片。肩部外面は密にカキ目が施されており、叩きの痕跡は見られない。内面の同心円文当て具痕も上方は回転ナデにより消滅しているが、下方は明瞭に残っている。復元頸部径17.8㎝を測る。**MJ84かY3**は甕の体部片。外面は平行文叩きをそのまま残し、内面の同心円文当て具痕はナデにより不明瞭になっている。

【第85号墳】（図43、写真42）

第64号墳の西北西約4mに位置する。小型の石室を有しているようだが、天井石は1石しか描かれておらず、破壊が進行しているようである。石室の主軸は北東-南西を向く。

須恵器5片が採取されている。**MJ85Y1**は器壁の薄い甕の体部片。外面は平行文叩き後カキ目が施されている。内面は同心円文当て具痕に目の細かな平行文当て具痕（6条/㎝）が重複する。

【第100号墳】（図43・44、写真42・43）

第84号墳の西南西約20.5mに位置する。著しく破壊を受けているようで、石室の主軸は不明である。

採取された6片はいずれも須恵器である。**MJ100Y1**は器壁がやや厚いが、ここでは壺の頸-肩部片としておく。肩部外面は回転ナデ、内面はナデが施される。**MJ100Y2**は無高台平底の壺底部片。**MJ100Y3**は甕の肩部片。外面は平行叩き後部分的にカキ目が施され、内面の同心円文当て具痕は部分的にナデられる。**MJ100Y4**は甕の体部片。外面は目の粗い平行文叩き（2条/㎝）を方向を違えて施す。内面には同心円文当て具痕と、部分的に車輪文（歯車文）当て具痕が見られる。**MJ100Y5**は底部付近の破片とみられ、外面には目の粗い平行文叩き（2条/㎝）後軽いナデが施され、内面の平行文当て具痕（4条/㎝）も軽くナデられる。内面当て具痕が異なるものの、外面の叩き痕、胎土や焼成状態からMJ100Y4と同一個体とみられる。**MJ100Y6**は外面の平行文叩き、内面の同心円文当て具痕とも軽くナデが施されている。

【第101号墳】（図44、写真43）

第100号墳の西約2mに位置する。天井石は遺存していないらしく、石室側壁や奥壁なども大きく動かされているようである。石室主軸は北-南か。

10片の土器が採取されており、いずれも須恵器である。**MJ101Y1**は2片の接合資料で、甕の体部片である。外面は平行文叩き後部分的にカキ目が施される。内面の同心円文当て具痕は軽くナデられている。**MJ101Y2**も2片が接合した甕の体部片。外面に平行文叩き、内面に同心円文当て具痕を残す。**MJ101Y3**は甕の底部付近か。外面の目の細かい平行文叩き（5条/㎝）は軽くナデられており、内面の目の粗い平行文当て具痕（3条/㎝）も部分的にナデが施されている。

【第103号墳】（図44・45、写真43）

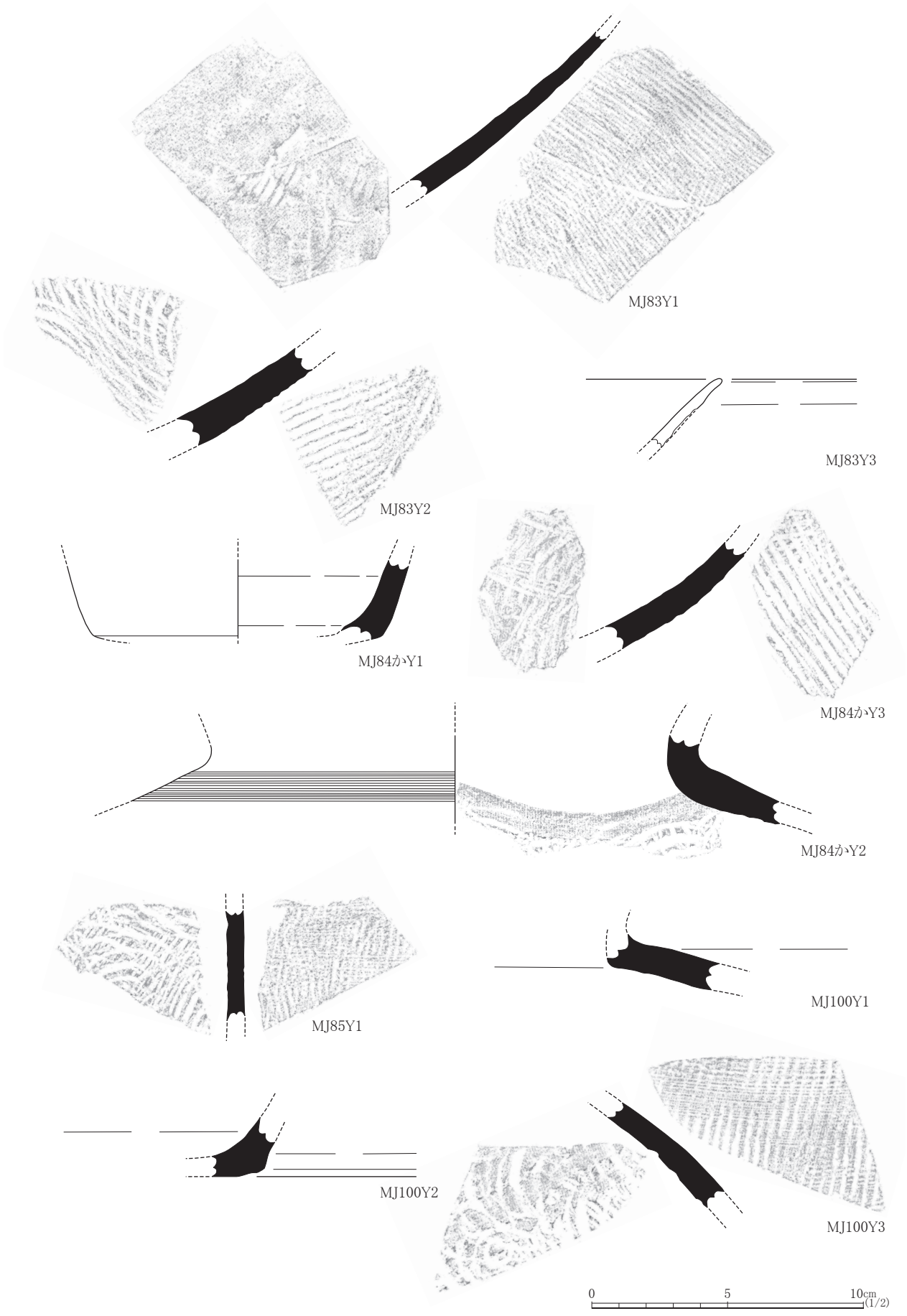


図 43　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㊶

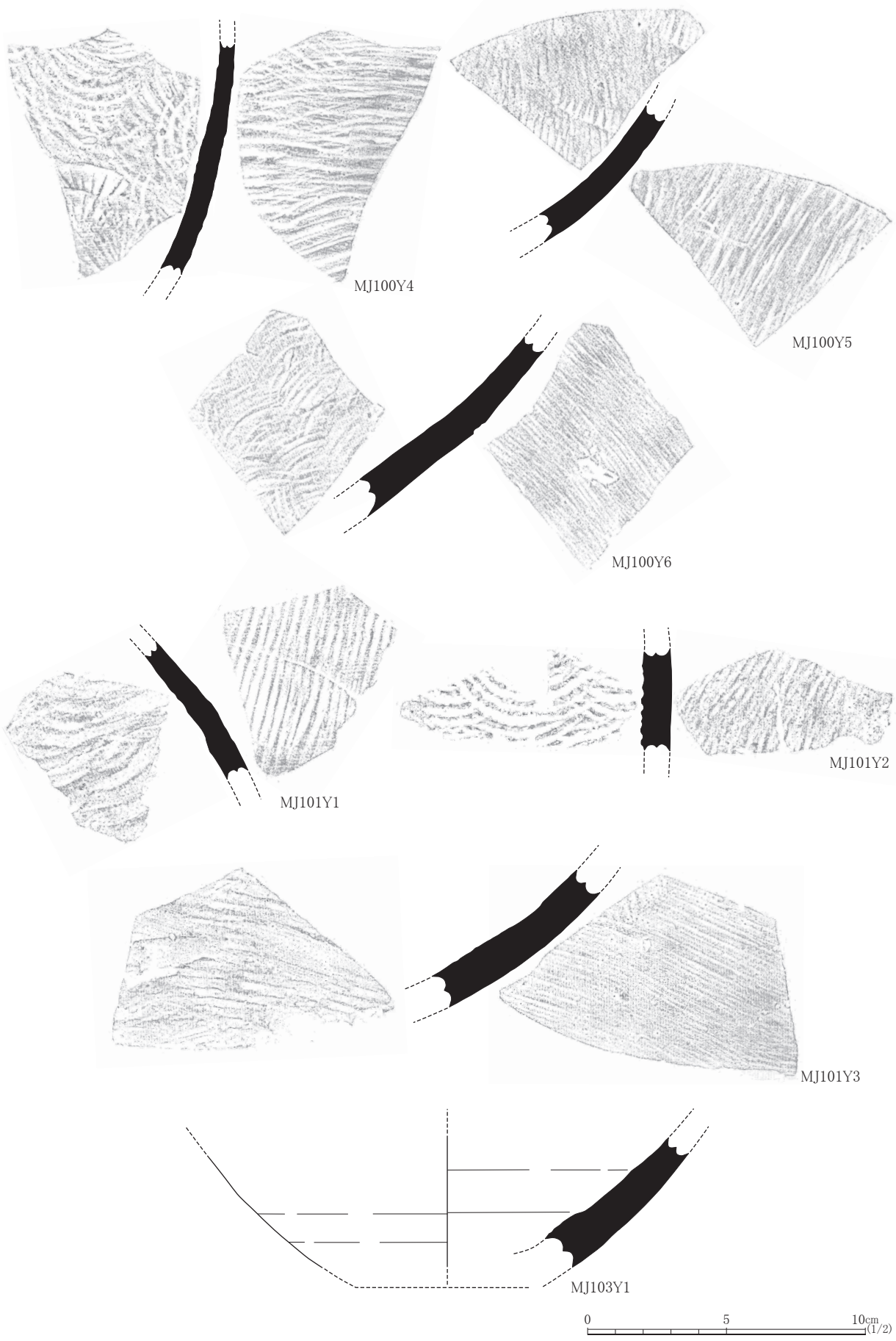


図 44　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㊷

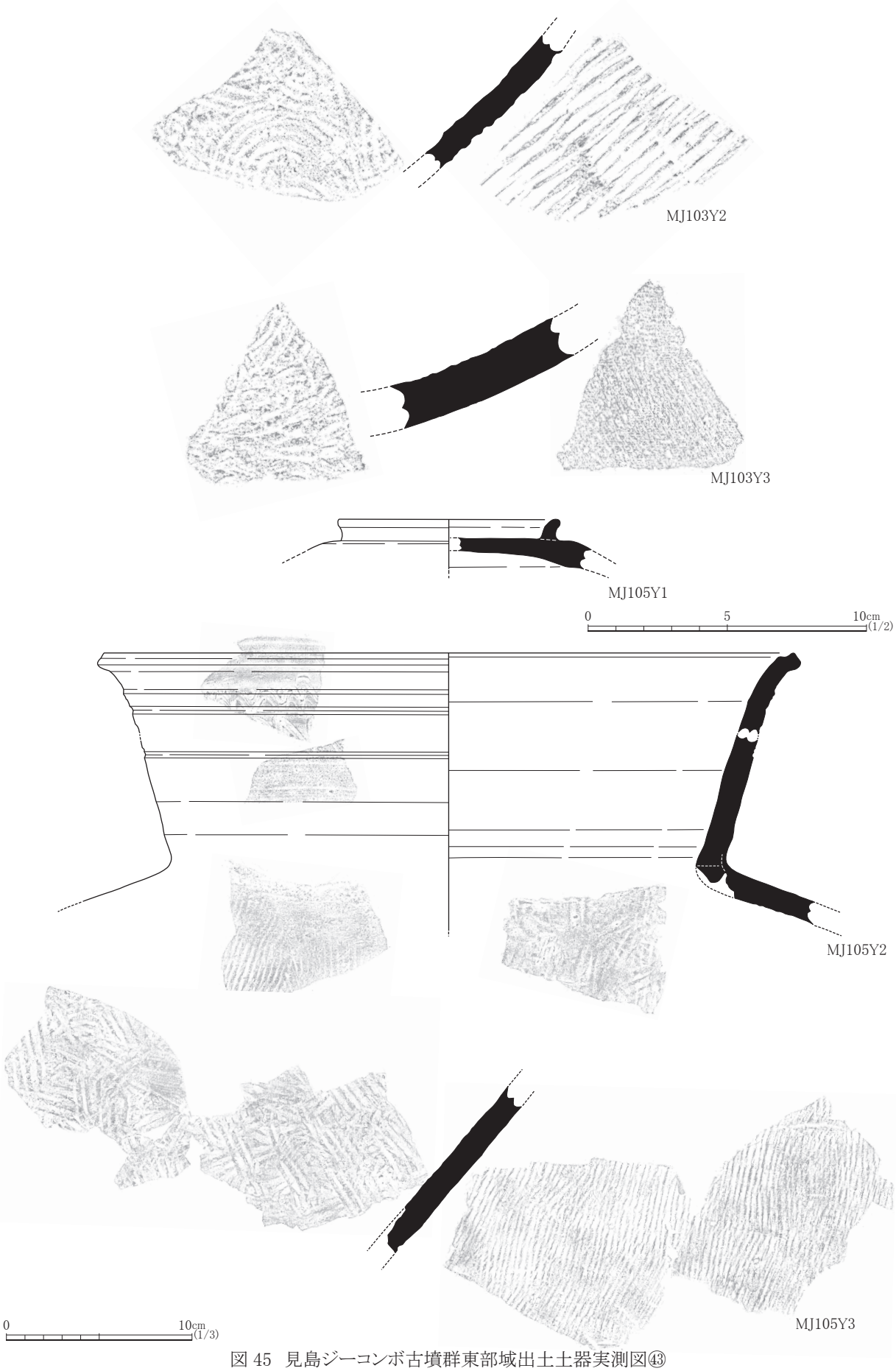


図 45　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㊸

第101号墳の北北西約7.5mに位置する。石室は比較的遺存状態が良いようで、主軸は北北東-南南西を向く。

採取された8片はいずれも須恵器である。**MJ103Y1**は壺の体下半部片。内外面とも回転ナデが施されている。**MJ103Y2**は甕の体部片。外面は目の粗い平行文叩き（2条/㎝）が施され、内面の同心円文当て具痕は部分的にナデられる。他に同一個体とみられる破片が2点存在する。**MJ103Y3**は器壁が厚く大甕の底部片とみられる。外面は凹凸の少ない平行文叩きが施されている。内面の同心円文当て具痕は軽くナデが施される。

【第105号墳】（図45・46、写真43・44）

第103号墳の南西約8.5mに位置する。昭和37年（1962）調査墳であり、報告書によると、周辺には積石が見られ、石室の主軸はS19° Wで、規模は奥行き312㎝、幅51～83㎝、高さ83～96㎝。石室内からは人骨歯が複数出土しており、鑑定の結果4体分（成人3体（うち1体は女性）、7～8歳の未成人1体）存在することが明らかとなっている（松下・松下2014）。遺物としては、多数の須恵器と若干の土師器、施釉陶器1点、鉄製品1点の出土が報告されている。

採取された10片はいずれも須恵器である。**MJ105Y1**は輪状つまみを有する坏蓋の天井部片。つくりはシャープであるが、やや酸化焼成となっている。復元つまみ径8.0㎝、残存高1.8㎝。**MJ105Y2**は大甕の口縁-肩部。接合しない口縁部、頸部（2片の接合資料）、肩部の3片から図上復元を行った。頸部から外傾して直線的に口縁に延びており、口縁端部を屈曲気味に外反させ、内端を凹ませている。頸部外面には沈線で文様帯を区画しており、少なくとも上下2段に櫛描波状文（6条か）を施している。外面頸基部には灰と砂が付着している。肩部外面には右上がりの平行文叩き（3条/㎝）が施されており、頸基部付近は横ナデが行われている。内面の目の粗い平行文当て具（2条/㎝）は不定方向から当てられている。復元頸部径は30.0㎝、口径は37㎝程度になるものと推定される。他に同一個体とみられる頸部片、肩部片が1点ずつ存在する。**MJ105Y3**は4片の接合資料で、大甕の体部片。外面は平行文叩き（3条/㎝）後に部分的にナデを施す。内面の平行文当て具（2条/㎝）はほぼ直交する方向から当てられており、こちらも部分的にナデられている。用いられた成形具や焼成状態、胎土から、MJ105Y2と同一個体であろう。**MJ105Y4**は甕の底部付近の破片。外面は目の粗い平行文叩き（3条/㎝）を行った後に部分的にカキ目を施している。内面には2種の同心円文当て具が用いられている。

【第107号墳】（図46、写真44・45）

第105号墳の西南西約4.5mに位置する。分布図を見る限り石室は大破しているようでる。

3片の須恵器が採取されている。**MJ107Y1**は器壁の薄い個体で、壺の肩部片か。外面は目の細かい平行文叩き（5条/㎝）が施されるが、多量の灰により不明瞭となっている。内面は同心円文当て具痕に重複してまばらに平行文当て具（3条/㎝）が当てられている。**MJ107Y2**も壺の肩部か。外面は目の細かい平行文叩き（6条/㎝）が施され、灰を少量被っている。内面は平行文当て具（3条/㎝）が密に当てられており、下部に同心円文当て具痕がかすかに残っている。当て具痕の状態に多少の相違があるが、MJ107Y1と同一個体である可能性が高い。**MJ107Y3**は甕の体部片。外面にはやや目の粗い平行文叩き（4条/㎝）が施される。内面の目の粗い平行文当て具痕（3条/㎝）は弧を描く外縁部が残っており、平行文に対し木目が直交していることが分かる。

【第112号墳】（図46～49、写真45～47）

第83号墳の西約4mに位置する。石室の遺存状態は良好なようで、分布図には天井石4石が描かれている。石室の主軸は北北西-南南東を向く。

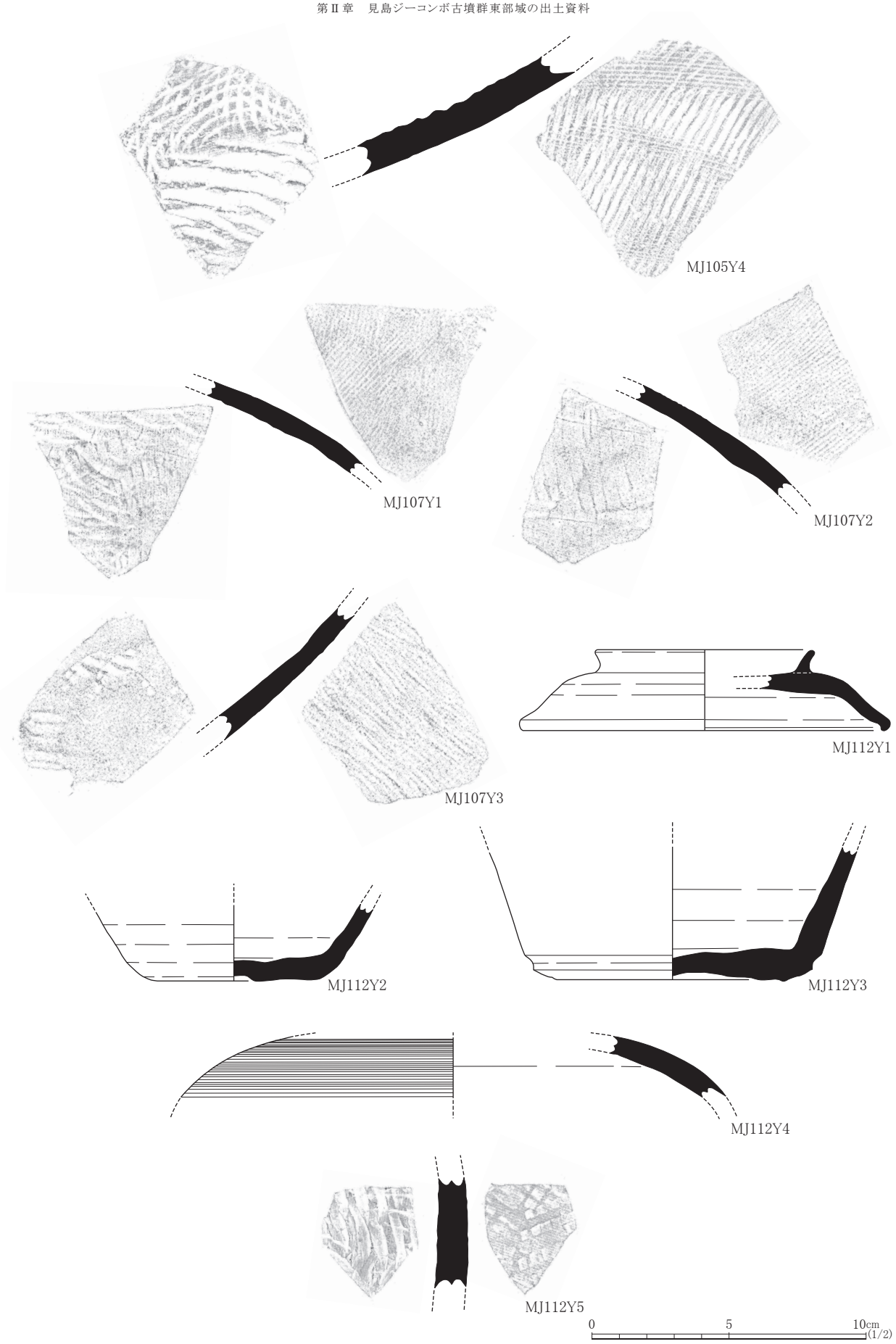


図 46　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㊹

東部域資料群では最多となる40片の土器が採取されているが、全て須恵器である。**MJ112Y1**は2片の接合資料で、輪状つまみを有する坏蓋の天井-口縁部片。やや高さのある扁平な天井部から内湾して口縁に降下し、端部をやや内側に短く下垂させる。天井部内面が平滑に摩滅していることから、墨痕は残っていないものの硯として使用された可能性が指摘できる。復元口径13.0㎝、復元つまみ径7.8㎝、器高2.9㎝を測る。**MJ112Y2**は坏の底-体部片。平底から体部が外傾して直線的に立ち上がる。復元底部径6.5㎝、残存高2.8㎝。**MJ112Y3**は3片の接合資料で、壺の底-体部片。底部外端に面を取っており、高台が剥離した痕跡にも見えるが、焼成時にはすでに剥離していたようである。体部はあまり外傾せずに直線的に立ち上がる。体部は内外面とも回転ナデ、底部はナデが施される。復元底部径10.2㎝、残存高4.85㎝を測る。**MJ112Y4**は2片の接合資料で壺の肩部片。外面には密にカキ目が施してあり、内面は回転ナデが行われる。**MJ112Y5**は壺の体部片か。胎土は精緻、焼成は堅緻であり、外面は不定方向から格子文(擬格子平行文か)叩きが施されている。内面の同心円文当て具痕は部分的にナデられる。**MJ112Y6**は横瓶の頸-肩部片。頸部の立ち上がりがわずかに残っている。肩部外面には目の粗い平行文叩き(2条/㎝)が施されており、側腹部から肩部にかけて断続してカキ目が施されている。内面の同心円文当て具は肩部から側腹部方向に当てられている。**MJ112Y7**は横瓶の側腹部片。円盤閉塞部での剥離が見られる。外面は丁寧にカキ目を施しているため、平行文叩き(2条/㎝)はほぼ消滅しているが、円盤剥離面には明瞭に残っている。内面には同心円文当て具痕が残り、円盤接合部にはナデが施されている。**MJ112Y8**は横瓶の円盤閉塞部片。外面には渦巻き状にカキ目(12条)が施されている。内面は丁寧にナデが施されているが、接合剥離部に細かな布目が残っている。成形に見られる特徴や胎土、焼成状態の類似から、MJ112Y6～8は同一個体である可能性が高い。他にも同一個体とみられる破片が1点存在する。**MJ112Y9**は甕の口縁-肩部片。なで肩から頸部が強く外反し、口縁は短く立ち上がる。肩部外面には縦位に目の粗い平行文叩き(3条/㎝)が施され、内面には径の大きな同心円文当て具痕が残っている。当て具痕の直上には紐圧痕が1条見られる。復元口径15.2㎝、残存高4.2㎝を測る。**MJ112Y10**は甕の頸-肩部片。肩部外面には横位の平行文叩き(3条/㎝)が施され、内面の同心円文当て具痕は軽くナデられる。復元頸部径14.6㎝。**MJ112Y11・12**は甕の頸-肩部小片。肩部を見ると、11は外面にカキ目が施されるものの左上がりの平行文叩きがわずかに残り、内面も回転ナデが施されるが、同心円文当て具痕が明瞭に残る。12は縦位後に右上がりの平行文叩きが施されており、内面同心円文当て具痕の上方は回転ナデにより消されかけている。**MJ112Y13**は器壁の薄い体部片。外面には擬格子平行文叩きが施されている。内面の同心円文当て具痕には亀裂が見られる。**MJ112Y14～17**は甕の体部片。14は外面に擬格子平行文叩きが施される。内面は目の粗い平行文当て具痕(3条/㎝)に部分的に径の大きな同心円文当て具痕が重なり、平行文当て具痕の一部には櫛歯状の痕跡が見られる。内外面の特徴や胎土、焼成状態から、MJ55Y7と同一個体である可能性が高いが、両者には45mもの隔たりが存在する。15は外面に目の細かい平行文叩き(5条/㎝)が施され、内面には目の粗い平行文当て具痕(2条/㎝)が残る。16は外面に縦位の平行文叩きを行った後に粗くカキ目が施される。内面は所々で火膨れが生じている。同心円文当て具痕が明瞭に残るが、上方は横ナデが行われている。17は2片の接合資料で、外面は横位および左上がりに平行文叩きが施されている。内面の同心円文当て具痕には部分的に目の粗い平行文当て具痕(2条/㎝)が重なる。**MJ112Y18～21**は底部付近の破片とみられる。18の外面は目の細かい擬格子平行文叩き(5条/㎝)が施され、軽くナデられている。内面は上方に目の粗い平行文(格子文か)当て具痕が見られ、下方に径の大きな同心円文当て具痕が残り、後者が前者に重複する。MJ112Y15と同一個体とみられる。19は外面に目の粗い平行文叩き(2条/㎝)を行った後に

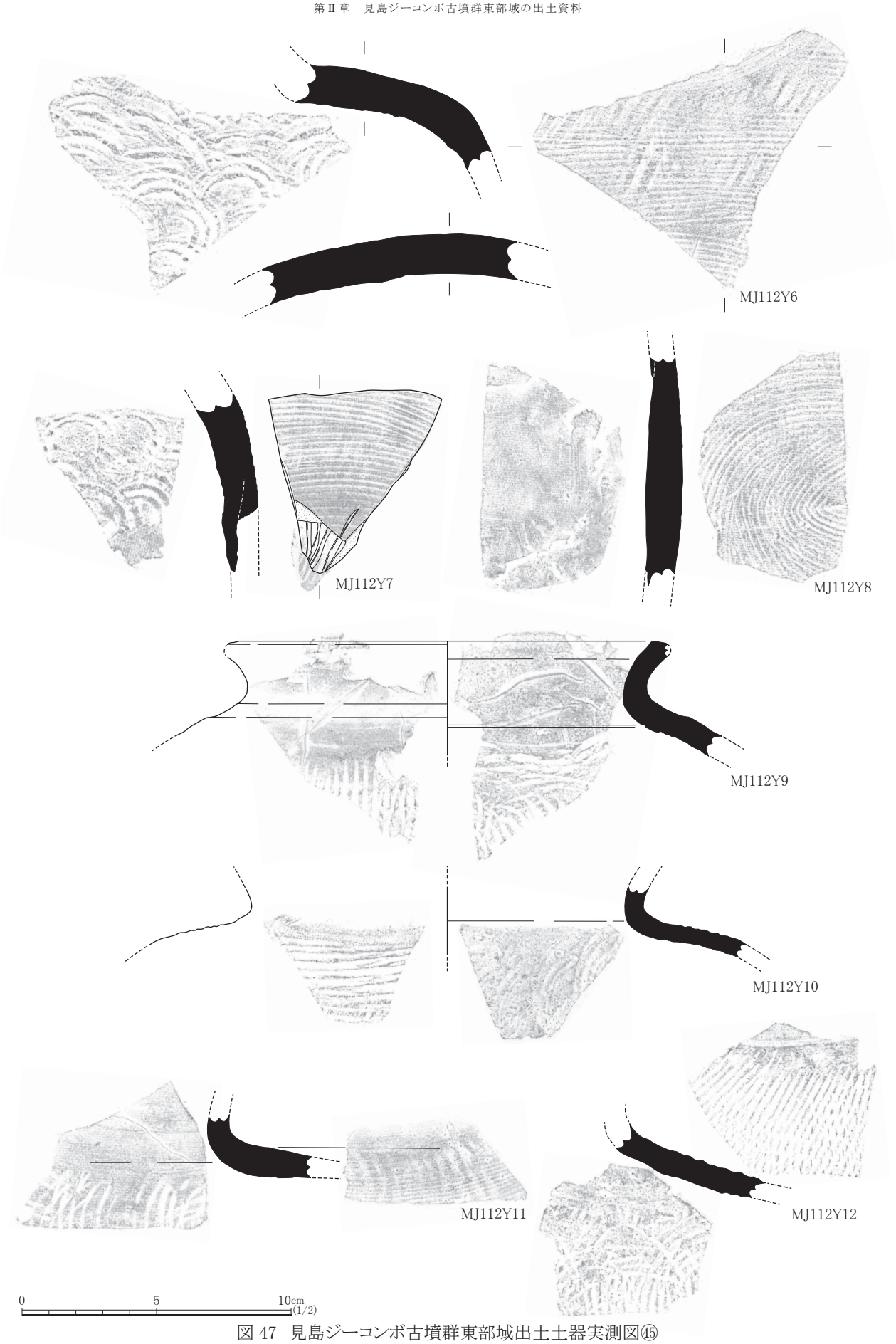


図 47　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑮

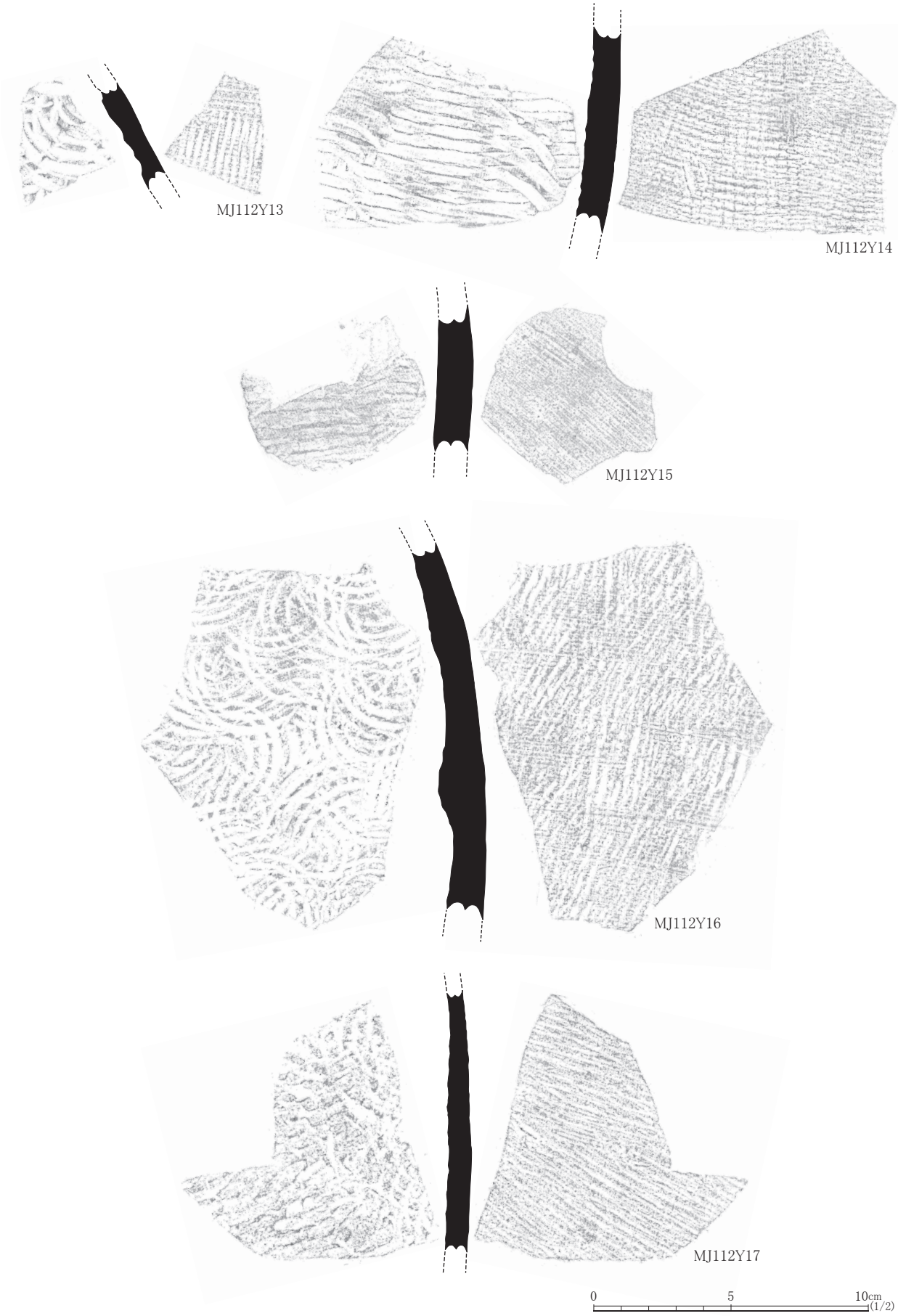


図 48　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㊻



図 49　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑰

方向を違えて目の細かい平行文叩き（4条/㎝）を施す。内面は当て具を変更した形跡はないが、上方から下方の順に同心円文当て具を当てている。20の外面は平行文叩き後軽くナデを施す。内面には径の小さな同心円文当て具痕が残る。21は2片の接合資料で、外面には方向を違えながら目の粗い平行文叩き（3条/㎝）が施されている。内面の同心円文当て具痕は丁寧にナデ消されている。

【第113-114号墳】（図50・51、写真47・48）

第113号墳は第112号墳の北西約2mに位置する。昭和57年（1982）の調査墳で、報告書によると石室の主軸はN8° Wで南に開口し、石室規模は内法で全長410㎝、中央部幅70㎝、高さ60～70㎝を測る（乗安1983）。形骸化した羨道部はやはり上方に開口すると指摘されている。出土した人骨歯は性別不明の壮年と鑑定されている（松下・分部・佐熊1983）。遺物としては須恵器坏や坏蓋、壺が出土しており、墳丘外表からではあるが緑釉陶器花瓶の底部とみられる破片も確認されている。

第114号墳は第113号墳の南西約3.5mに位置している。石室の遺存状態は良好なようで、分布図には天井石3石が描かれている。石室の主軸はほぼ北-南を向く。

比較的多くの資料が採取されており、須恵器23片、緑釉陶器1片が存在する。**MJ113-114Y1**は坏の口縁部片。口縁は内湾気味に立ち上がり、外端を小さく玉縁状に肥厚させる。内外面とも回転ナデが施される。**MJ113-114Y2**は長頸壺の口縁-頸部片の可能性もあるが、径から高坏脚柱部片と判断した。内外面とも回転ナデが施されている。**MJ113-114Y3**は小型甕の口縁-肩部片。なで肩長胴の甕とみられ、口縁は外反しながら短く立ち上がる。肩部外面は斜格子状に方向を違えて平行文叩き（3条/㎝）を施しており、内面には同心円文当て具痕を残す。肩部上方から口縁にかけては内外面とも回転ナデを施す。復元口径12.8㎝、残高5.1㎝を測る。**MJ113-114Y4**は体部片で、胎土や焼成状態から**MJ113-114Y3**と同一個体であろう。外面は縦位後右上がりの平行文叩き（いずれも3条/㎝）が施され、内面には楕円形の同心円文当て具痕をそのまま残している。他に同一個体とみられる破片が4点存在する。**MJ113-114Y5**は器壁の薄い個体で、甕の口縁-肩部片である。接合しない口縁-頸部片と頸-肩部片（2片が接合）から図上復元を行った。頸部から口縁にかけて直線的に外傾させており、口縁外端下部を断面三角形状に小さく肥厚させている。肩部の外面は横位に目の粗い平行文叩き（3条/㎝）を施しており、内面の同心円文当て具痕はナデにより不明瞭となっている。復元口径は21.6㎝、残存高8.3㎝を測る。他に同一個体とみられる破片が5点存在する。**MJ113-114Y6**はMJ113-114Y5と同一個体の腹部付近の破片と思われる。外面は不定方向から目の粗い平行文叩き（2条/㎝）を施す。内面には格子文（木目のある目の粗い平行文か）当て具痕がかすかに残る。**MJ113-114Y7**は体部片。外面は上下で方向を違えて平行文叩きを施す。断定はできないが、上方（右上がり）の平行文叩きと下方（左上がり）の平行叩きは、前者が4条/㎝、後者が5条/㎝のように観察されることから、叩き具を換えている可能性もある。内面の当て具痕は、ナデにより不明瞭であるが上方が同心円文当て具、下方が平行文当て具（3条/㎝）を用いている。**MJ113-114Y8**も体部片で、外面に目の細かい平行文叩き（6条/㎝）が残る。内面の目の粗い平行文当て具痕（2条/㎝）は部分的にナデが施されている。**MJ113-114Y9**は緑釉陶器の体部片。外面は灰白色の素地全面に釉薬が淡～浅黄色に発色しており、深緑色に流れている。昭和57年（1982）調査にて出土した緑釉陶器花瓶と同一個体の可能性もあるが、比較検討していない。

【第116号墳】（図51、写真48）

第114号墳の西約4mに位置する。昭和37年（1962）の調査墳で、報告書によると石室の主軸はS14° W、天井石は2石が遺存し、1石は石室内に転落していたとされる。石室規模は奥行き315㎝、幅35～75㎝、高さ79～87㎝で、出土した人骨歯は壮年女性1体分と鑑定されている（松下・松下2014）。その他の



図 50　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㊽

出土遺物に関しては言及を避けたい。[註4]

採取された8片はいずれも須恵器である。**MJ116Y1**は甕の頸-肩部片。外面は灰を多量に被っているが、縦位2方向からの平行文叩きが観察される。内面の同心円文当て具痕はナデにより不明瞭となっている。**MJ116Y2**は甕の体部片。外面は平行文叩き後粗くカキ目が施される。内面には径の大きな同心円文当て具痕を残す。**MJ116Y3**は2片の接合資料で、器壁の薄い体部片。外面の目の粗い平行文叩き(2条/㎝)は軽くナデられており、内面の同心円文当て具痕も部分的に丁寧なナデが行われている。

【第117号墳】(図52、写真48・49)

第114号墳と第116号墳の中間に位置する。両者に比して破壊が著しく進行しているようで、天井石や片側壁は完全に失われているようである。石室の主軸は北東-南西を向く。

須恵器7片が採取されている。**MJ117Y1**は大甕の頸-肩部片。肩部外面には横位の平行文叩きが施されており、頸剥離部にも観察される。回転ナデ及びナデが丁寧に施されているため、内面の同心円文当て具痕は不明瞭となっている。**MJ117Y2**は器壁の薄い甕の体部片。外面は左上がりに目の粗い平行文叩き(3条/㎝)を行った後、上方に横位の平行文叩き(4条/㎝)を施す。内面は丁寧なナデにより不明瞭となっているが、上方に平行文当て具、下方に同心円文当て具を用いているようである。**MJ117Y3**は板状の須恵器片で、器種及び部位不明。外面は平行文叩き後カキ目が施されている。内面は同心円文当て具痕が残るが、ナデにより不明瞭となっている。**MJ117Y4**は大甕底部付近の破片か。外面は不定方向から平行文叩きが施されている。内面はナデによりほぼ観察不能となっているものの、平行文または格子文当て具が用いられているように見える。**MJ117Y5**は2片の接合資料で、甕の底部片である。外面は不定方向から平行文叩きが施されており、内面は丁寧にナデられているが、わずかに同心円文当て具痕を残している。

【第120号墳】(図52、写真49)

分布図には120の番号が欠落している。候補としては第116号墳の西に隣接して描かれている石列、もしくは第118号墳の南西に隣接して描かれた石列がこれに該当すると考えられるが、付された番号の並びから、第118号墳の南西にある石列の可能性が高い。

須恵器2片が採取されている。**MJ120Y1**は壺の体下半部片。外面はナデ、内面は回転ナデを施す。**MJ120Y2**は器壁が厚く、大甕の体部片とみられる。外面の平行文叩き、内面の同心円文当て具痕とも軽くナデが施される。

【不明墳1】(図53、写真49)

前述したように「見島ジーコンボ古墳群」以外の情報がなく、厳密な採取地点は不明であるが、内容から墳墓に所属していた資料と推定されることから、併せて報告を行う。

須恵器4片が採取されている。**MJUK1Y1**は甕の口縁-肩部片。強く外反する頸部から口縁が大きく開く。肩部外面は灰を被るため不明瞭であるが、平行文叩きがわずかに見られる。内面の同心円文当て具痕もナデにより不明瞭となっている。復元頸部径は17.6㎝を測る。**MJUK1Y2**も甕の頸-肩部片。外面は密にカキ目が施されているものの、縦位の平行文叩き(4条/㎝)が残されている。内面の同心円文当て具痕には縦方向にナデが行われている。**MJUK1Y3**は甕の底部片。外面は不定方向からの平行文叩き(3条/㎝)後ナデが施されている。内面はナデにより不明瞭となっているが、斜格子文当て具痕が残っている。**MJUK1Y4**は大甕の底部片。外面は目の粗い平行文叩き(3条/㎝)後ナデが施される。内面は乱雑に同心円文当て具が当てられている。胎土や焼成状態、用いられている成形具の特徴から、MJ72Y7と同一個体の可能性がある。

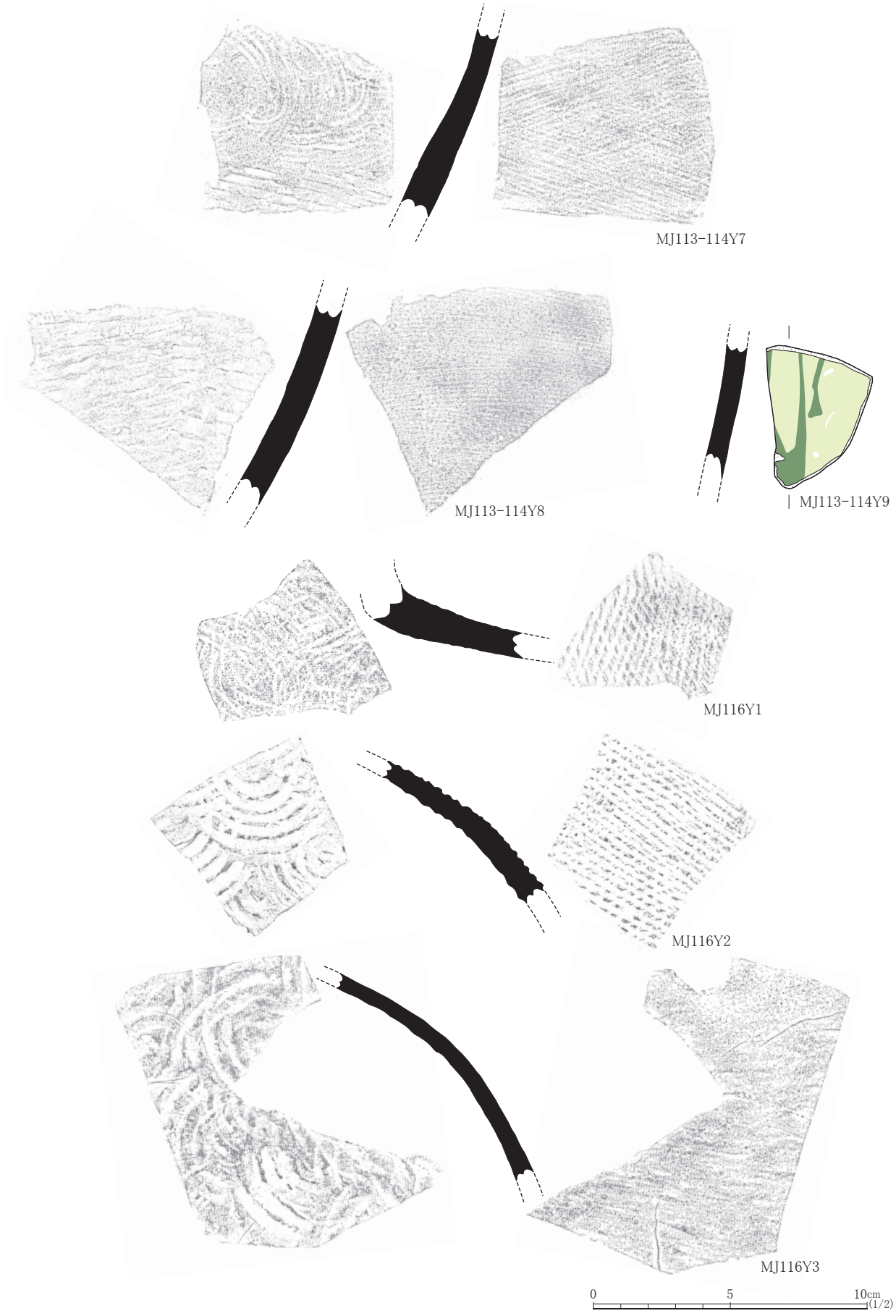


図 51　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図㊾

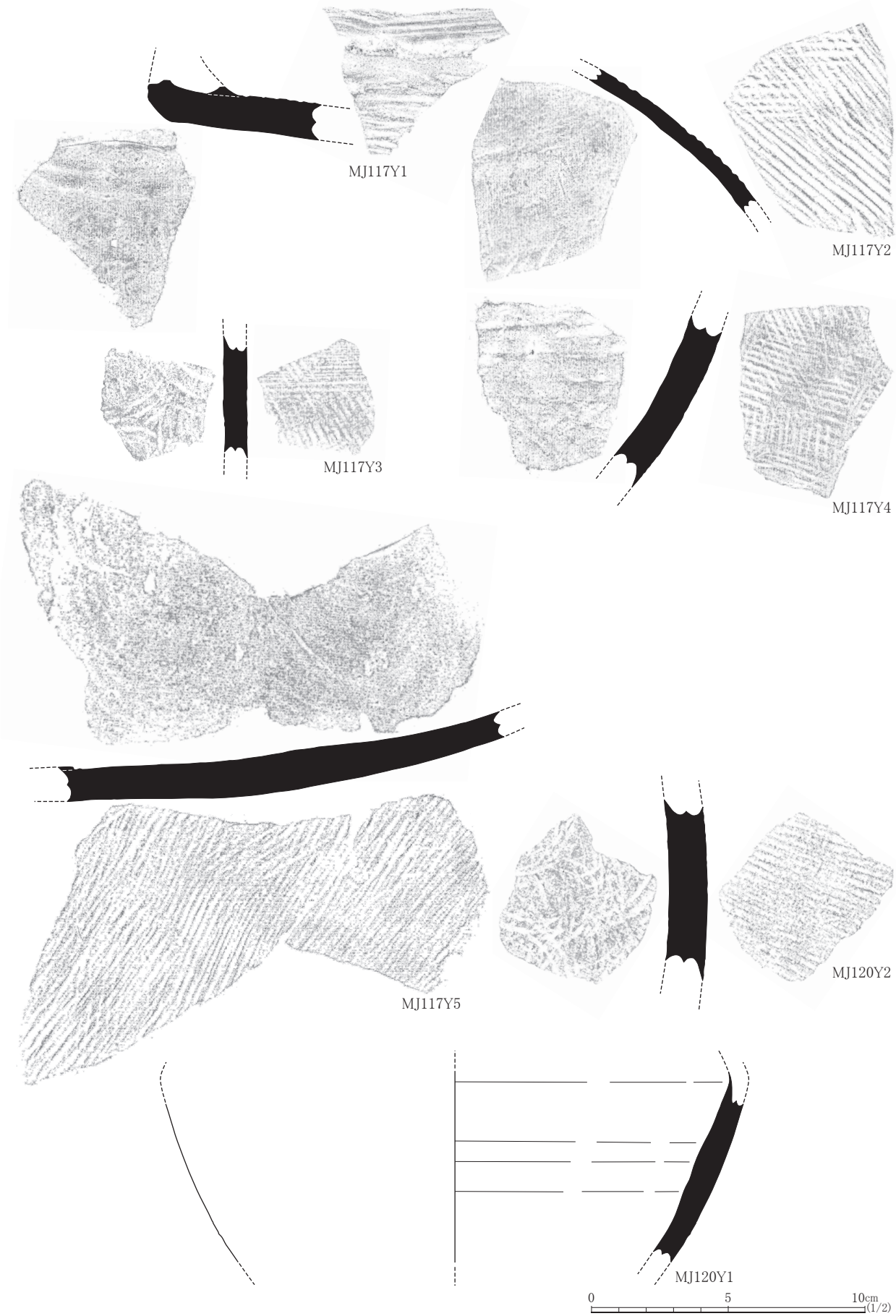


図 52　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑳

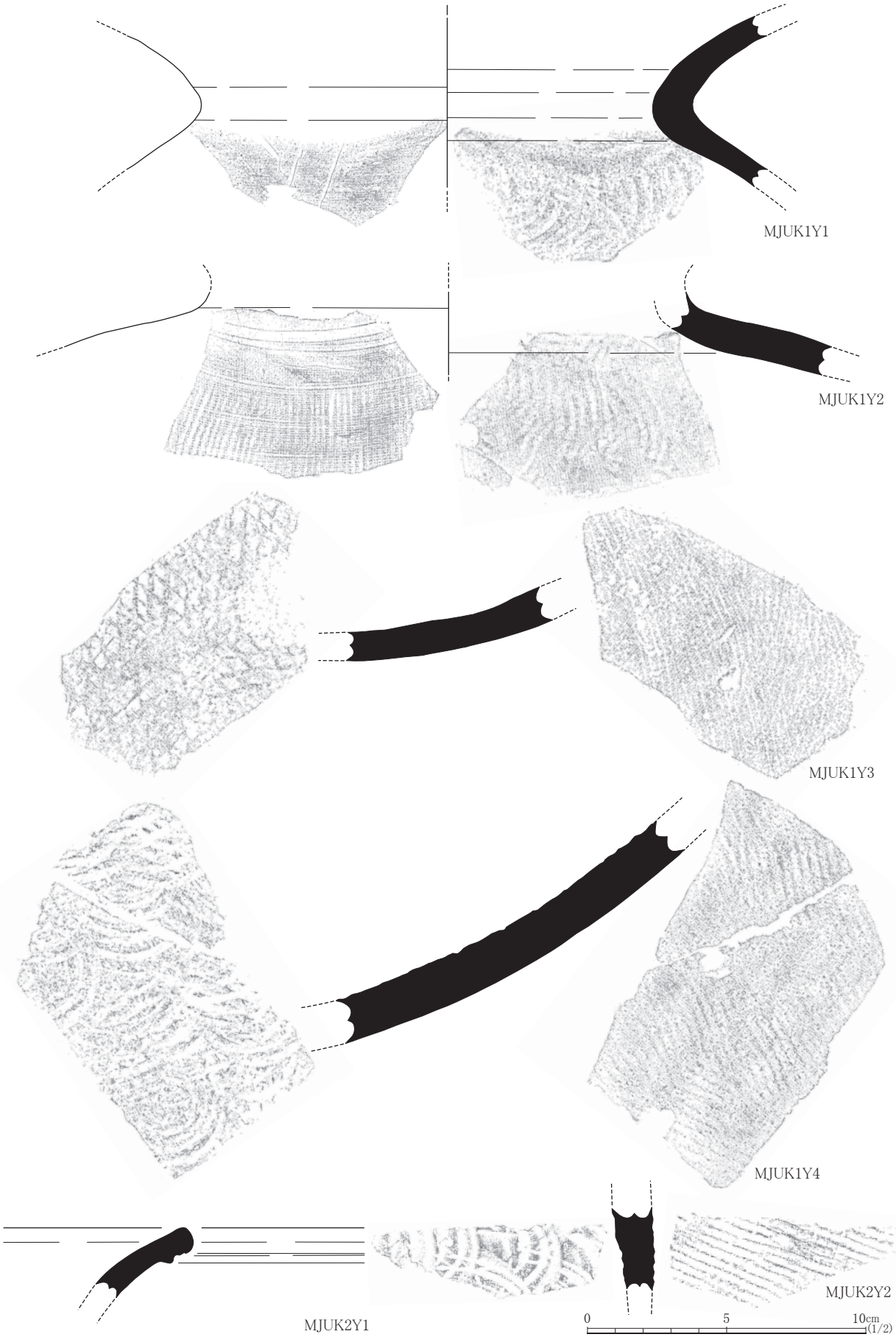


図 53　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器実測図⑤1

【不明墳2】(図53、写真49)

こちらも「見島ジーコンボ古墳群」以外の情報がない資料である。

須恵器2片が採取されている。**MJUK2Y1**は大きく外反して開く甕の口縁部片。口縁外端の下方に断面三角形状の突帯を巡らせている。内外面とも回転ナデが施されており、口縁端部から内面にかけて薄く灰を被っている。**MJUK2Y2**は甕の体部小片。外面には平行文叩き(4条/㎝)が施されており、内面の同心円文当て具痕はそのまま残している。

【註】

1)第128号墳は、昭和36年(1961)の9月2日から4日にかけて調査が実施されたと推定される(横山2015)。『見島総合学術調査報告』「考古の部」の第128号墳報告文には「なお、石室の内部から1個体分の犬の頭骨と下顎骨が出土した。」との一文が見られる(斎藤・小野1964)。

2)平行文当て具ではないが、東部域の第134号墳採取の壺(MJ134Y1:第133号墳採取片と接合)の内面に最外縁が歯車状になっている同心円文当て具痕が見られ(横山2017)、文様構成の類似が指摘できる(本書143・148頁参照)。

3)報告書の主軸の記載は「S59° E」となっており、本文中にも「南東に入口を向けている」とあるが、分布図や掲載された平面図では石室の主軸は北東-南西を向いている。

4)『見島総合学術調査報告』「考古の部」(斎藤・小野1964)における第116号墳出土遺物の記述は、第123号墳出土遺物に関する記述と明らかに重複しており、土器類と銅鋺以外は全て第123号墳に所属することが確認されている(横山2017)。土器類については、市来真澄氏により部分的な紹介が行われている(市来2011)。


MJ2Y1 外面


MJ2Y2 外面


MJ2Y3 外面


MJ2Y1 内面


MJ2Y2 内面


MJ2Y3 内面


MJ3Y1 外面


MJ3Y2 外面


MJ3Y3 外面


MJ3Y1 内面


MJ3Y2 内面


MJ3Y3 内面


MJ5Y2 外面


MJ5Y1 内面


MJ5Y2 内面

写真8　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器①


MJ5Y3 外面


MJ5Y4 外面



MJ6Y1 外面


MJ5Y3 内面


MJ5Y4 内面


MJ6Y1 内面



MJ6Y2 外面



MJ6Y3 外面


MJ6Y4 外面


MJ6Y2 内面


MJ6Y3 内面



MJ6Y4 内面



MJ6Y5 外面


MJ6Y6 外面


MJ6Y7 外面


MJ6Y5 内面


MJ6Y6 内面


MJ6Y7 内面

写真9　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器②


MJ6Y8 外面


MJ6Y9 外面


MJ8Y1 外面


MJ6Y8 内面


MJ6Y9 内面


MJ8Y1 内面


MJ8Y2 外面


MJ9Y1 外面


MJ12Y1 外面


MJ8Y2 内面


MJ9Y1 内面


MJ12Y1 内面


MJ12Y2 外面


MJ12Y3 外面


MJ12Y4 外面


MJ12Y2 内面


MJ12Y3 内面


MJ12Y4 内面

写真 10　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器③

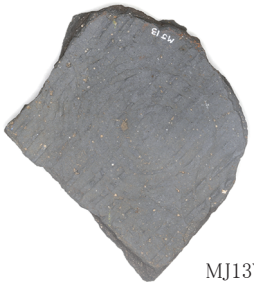

MJ12Y5 外面


MJ12Y6 外面


MJ13Y1 外面


MJ12Y5 内面


MJ12Y6 内面


MJ13Y1 内面


MJ13Y2 外面


MJ15Y1 外面


MJ15Y2 外面


MJ13Y2 内面

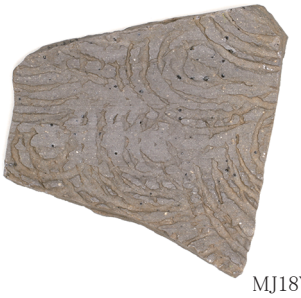

MJ15Y1 内面


MJ15Y2 内面


MJ18Y1 外面


MJ18Y2 外面


MJ18Y3 外面


MJ18Y1 内面


MJ18Y2 内面


MJ18Y3 内面

写真 11　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器④


MJ20Y1 外面


MJ20Y2 外面


MJ20Y3 外面


MJ20Y1 内面


MJ20Y2 内面


MJ20Y3 内面


MJ20Y4 外面

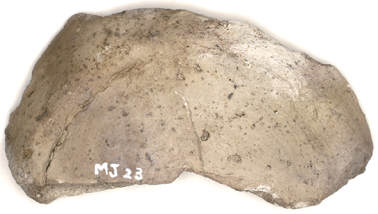

MJ20Y5 外面


MJ20Y6 外面


MJ20Y4 内面


MJ20Y5 内面


MJ20Y6 内面


MJ23Y1 外面


MJ23Y2 外面


MJ23Y3 外面


MJ23Y1 内面


MJ23Y2 内面


MJ23Y3 内面

写真 12　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑤


MJ23Y4 外面

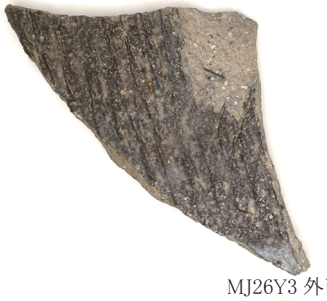

MJ26Y1 外面


MJ26Y2 外面


MJ23Y4 内面


MJ26Y1 内面


MJ26Y2 内面


MJ26Y3 外面


MJ26Y4 外面


MJ27Y1 外面


MJ26Y3 内面


MJ26Y4 内面


MJ27Y1 内面


MJ27Y2 外面


MJ27Y3 外面


MJ27Y4 外面


MJ27Y2 内面


MJ27Y3 内面


MJ27Y4 内面

写真 13　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑥


MJ27Y5 外面



MJ27Y6 外面


MJ29Y1 外面


MJ27Y5 内面


MJ27Y6 内面


MJ29Y1 内面


MJ29Y2 外面


MJ29Y3 外面



MJ29Y4 外面


MJ29Y2 内面


MJ29Y3 内面


MJ29Y4 内面


MJ29Y5 外面


MJ29Y6 外面


MJ29Y7 外面


MJ29Y5 内面


MJ29Y6 内面


MJ29Y7 内面

写真 14　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑦


MJ29Y8 外面


MJ31Y1 外面


MJ31Y2 外面


MJ29Y8 内面


MJ31Y1 内面


MJ31Y2 内面


MJ31Y3 外面


MJ31Y4 外面


MJ33Y1 外面


MJ31Y3 内面


MJ31Y4 内面


MJ33Y1 内面


MJ33Y2 外面


MJ33Y3 外面


MJ33Y4 外面


MJ33Y2 内面


MJ33Y3 内面


MJ33Y4 内面

写真 15　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑧


MJ33Y5 外面


MJ33Y6 外面


MJ34Y1 外面


MJ33Y5 内面


MJ33Y6 内面


MJ34Y1 内面







MJ34Y2 外面

MJ34Y2 内面


MJ34Y3 外面


MJ34Y3 内面


MJ34Y4 外面


MJ34Y5 外面


MJ35Y1 外面


MJ34Y4 内面


MJ34Y5 内面


MJ35Y1 内面

写真 16　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑨


MJ35Y2 外面


MJ35Y3 外面


MJ35Y4 外面


MJ35Y2 内面


MJ35Y3 内面


MJ35Y4 内面


MJ37Y1 外面


MJ39Y1 外面


MJ41Y1 外面


MJ37Y1 内面


MJ39Y1 内面


MJ41Y1 内面


MJ41Y2 外面


MJ41Y3 外面


MJ41Y4 外面


MJ41Y2 内面


MJ41Y3 内面


MJ41Y4 内面

写真 17　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑩


MJ41Y5 外面


MJ42Y1 外面


MJ42Y2 外面


MJ41Y5 内面


MJ42Y1 内面


MJ42Y2 内面


MJ42Y3 外面


MJ42Y4 外面


MJ42Y5 外面


MJ42Y3 内面


MJ42Y4 内面


MJ42Y5 内面


MJ42Y6 外面


MJ42Y7 外面


MJ42Y8 外面


MJ42Y6 内面


MJ42Y7 内面


MJ42Y8 内面

写真 18　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑪


MJ42Y9 外面


MJ43 か Y1 外面


MJ43 か Y2 外面


MJ42Y9 内面


MJ43 か Y1 内面


MJ43 か Y2 内面


MJ43 か Y3 外面


MJ43 か Y4 外面


MJ43 か Y5 外面


MJ43 か Y3 内面


MJ43 か Y4 内面


MJ43 か Y5 内面


MJ44Y1 外面


MJ44Y2 外面


MJ44Y3 外面


MJ44Y1 内面


MJ44Y2 内面


MJ44Y3 内面

写真 19　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑫


MJ44Y4 外面


MJ44Y5 外面


MJ44Y6 外面


MJ44Y4 内面


MJ44Y5 内面


MJ44Y6 内面


MJ44Y7 外面


MJ44Y8 外面


MJ44Y9 外面


MJ44Y7 内面


MJ44Y8 内面


MJ44Y9 内面


MJ45Y1 外面


MJ45Y2 外面


MJ45Y3 外面


MJ45Y1 内面


MJ45Y2 内面


MJ45Y3 内面

写真 20　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑬


MJ45Y4 外面


MJ45Y5 外面


MJ45Y6 外面


MJ45Y4 内面


MJ45Y5 内面


MJ45Y6 内面


MJ45Y7 外面


MJ45Y8 外面


MJ45Y9 外面


MJ45Y7 内面


MJ45Y8 内面

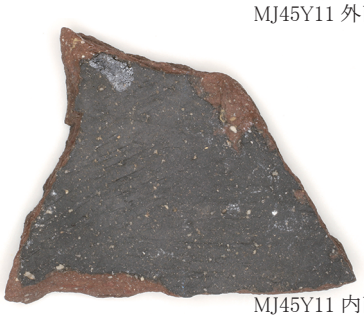

MJ45Y9 内面


MJ45Y10 外面


MJ45Y11 外面


MJ45Y12 外面


MJ45Y10 内面


MJ45Y11 内面


MJ45Y12 内面

写真 21　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑭


MJ45Y13 外面


MJ45Y14 外面


MJ48Y1 外面


MJ45Y13 内面


MJ45Y14 内面


MJ48Y1 内面


MJ48Y2 外面


MJ48Y3 外面


MJ48Y4 外面


MJ48Y2 内面


MJ48Y3 内面


MJ48Y4 内面


MJ49Y1 外面


MJ49Y2 外面


MJ49Y3 外面


MJ49Y1 内面


MJ49Y2 内面


MJ49Y3 内面

写真 22　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑮


MJ49Y4 外面


MJ49Y5 外面


MJ49Y6 外面


MJ49Y4 内面


MJ49Y5 内面


MJ49Y6 内面


MJ50Y1 外面


MJ50Y2 外面


MJ52Y1 外面


MJ50Y1 内面


MJ50Y2 内面

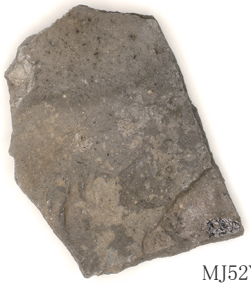

MJ52Y1 内面


MJ52Y2 外面


MJ52Y3 外面


MJ52Y4 外面


MJ52Y2 内面


MJ52Y3 内面


MJ52Y4 内面

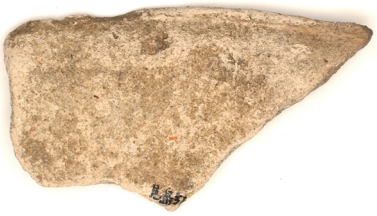
写真 23　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑯


MJ52Y5 外面


MJ52Y6 外面


MJ53Y1 外面


MJ52Y5 内面


MJ52Y6 内面


MJ53Y1 内面


MJ53Y2 外面


MJ53Y3 外面


MJ53Y4 外面


MJ53Y2 内面


MJ53Y3 内面


MJ53Y4 内面


MJ53Y5 外面


MJ53Y6 外面


MJ54Y2 外面


MJ53Y5 内面


MJ53Y6 内面


MJ54Y2 内面

写真 24　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑰

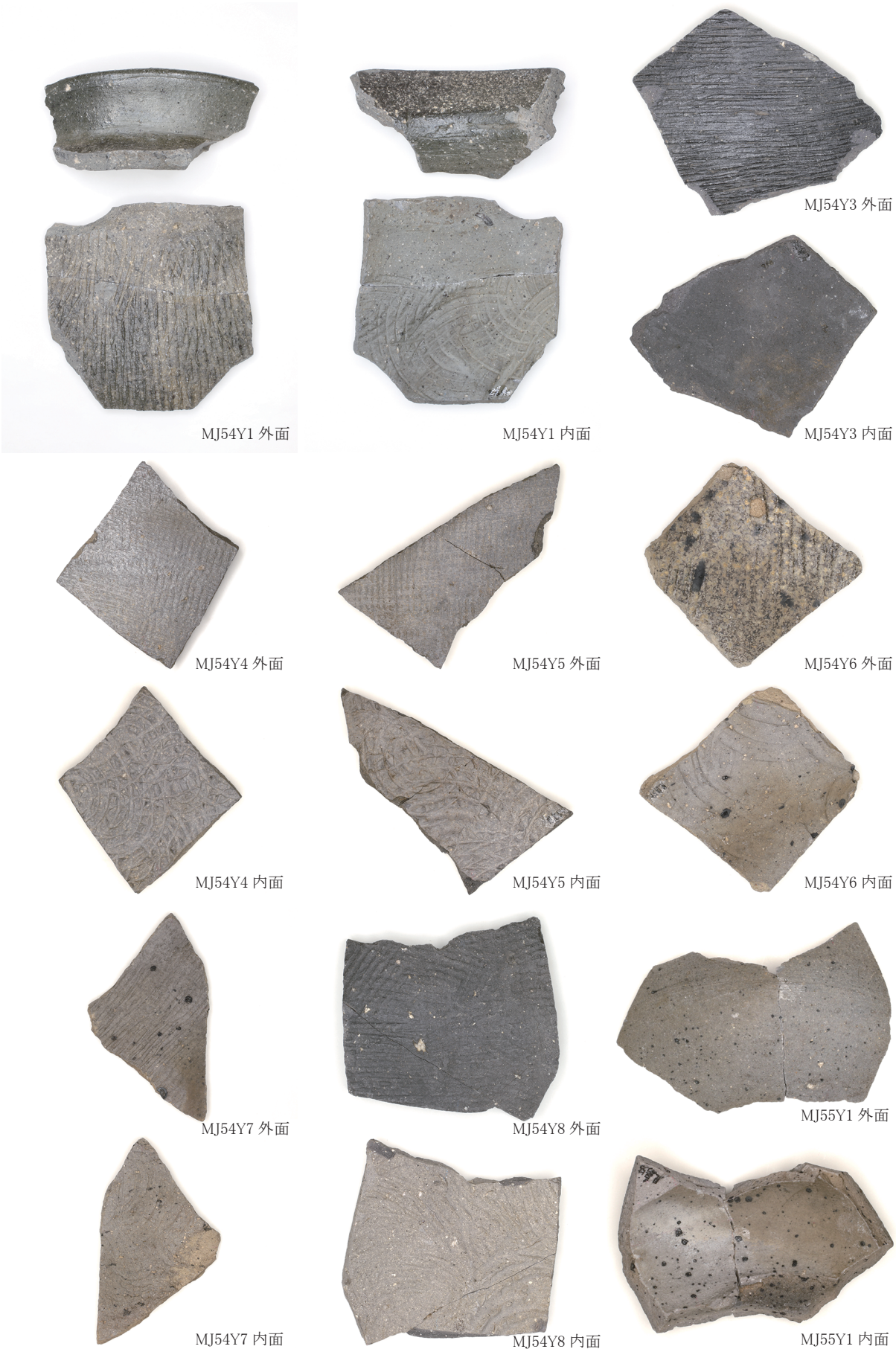


写真 25　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑱


MJ55Y2 外面


MJ55Y3 外面


MJ55Y2 内面


MJ55Y3 内面




MJ55Y4 外面


MJ55Y5 外面


MJ55Y6 外面


MJ55Y6 内面




MJ55Y4 内面


MJ55Y5 内面


MJ55Y7 外面


MJ55Y7 内面

写真 26　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑲


MJ55Y8 外面


MJ55Y9 外面


MJ56Y1 外面


MJ55Y8 内面


MJ55Y9 内面


MJ56Y1 内面


MJ56Y2 外面


MJ56Y3 外面


MJ58Y1 外面


MJ56Y2 内面


MJ56Y3 内面


MJ58Y1 内面


MJ58Y2 外面


MJ58Y3 外面


MJ58Y4 外面


MJ58Y2 内面


MJ58Y3 内面


MJ58Y4 内面

写真 27　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑳


MJ58Y5 外面


MJ59Y1 外面


MJ59Y2 外面


MJ58Y5 内面


MJ59Y1 内面


MJ59Y2 内面


MJ59Y3 外面


MJ63Y1 外面


MJ63Y2 外面


MJ59Y3 内面


MJ63Y1 内面


MJ63Y2 内面


MJ63Y3 外面


MJ63Y4 外面


MJ63Y5 外面


MJ63Y3 内面


MJ63Y4 内面


MJ63Y5 内面

写真 28　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉑


MJ63Y6 外面


MJ63Y7 外面


MJ63Y8 外面


MJ63Y6 内面


MJ63Y7 内面


MJ63Y8 内面


MJ63Y9 外面


MJ63Y10 外面


MJ63Y11 外面


MJ63Y9 内面


MJ63Y10 内面


MJ63Y11 内面


MJ64Y1 外面


MJ64Y2 外面


MJ64Y3 外面


MJ64Y1 内面


MJ64Y2 内面


MJ64Y3 内面

写真 29　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉒


MJ64Y4 外面


MJ64Y5 外面


MJ64Y6 外面


MJ64Y4 内面


MJ64Y5 内面


MJ64Y6 内面


MJ64Y7 外面


MJ64Y8 外面


MJ65Y1 外面


MJ64Y7 内面


MJ64Y8 内面

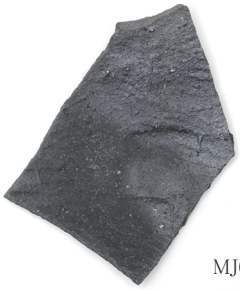

MJ65Y1 内面


MJ66Y1 外面


MJ66Y2 外面


MJ66Y3 外面


MJ66Y1 内面


MJ66Y2 内面


MJ66Y3 内面

写真 30　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉓


MJ66Y4 外面


MJ66Y5 外面


MJ65Y6 外面


MJ66Y4 内面


MJ66Y5 内面


MJ65Y6 内面


MJ66Y7 外面


MJ66Y8 外面


MJ66Y9 外面


MJ66Y7 内面


MJ66Y8 内面


MJ66Y9 内面


MJ67Y1 外面


MJ67Y2 外面


MJ67Y3 外面


MJ67Y1 内面


MJ67Y2 内面


MJ67Y3 内面

写真 31　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉔


MJ67Y4 外面


MJ67Y5 外面


MJ67Y6 外面


MJ67Y4 内面


MJ67Y5 内面


MJ67Y6 内面


MJ67Y7 外面

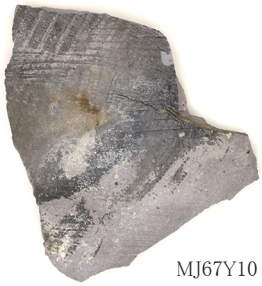

MJ67Y8 外面


MJ67Y9 外面


MJ67Y7 内面

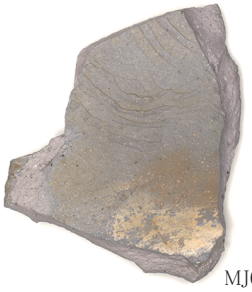

MJ67Y8 内面


MJ67Y9 内面


MJ67Y10 外面


MJ68Y1 外面


MJ68Y2 外面

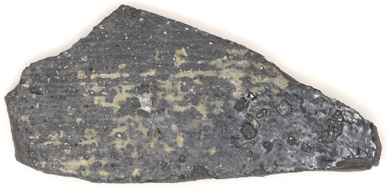

MJ67Y10 内面


MJ68Y1 内面


MJ68Y2 内面

写真 32　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉕


MJ68Y3 外面


MJ68Y4 外面


MJ68Y5 外面


MJ68Y3 内面


MJ68Y4 内面


MJ68Y5 内面


MJ68Y6 外面


MJ69Y1 外面


MJ69Y2 外面


MJ68Y6 内面


MJ69Y1 内面


MJ69Y2 内面


MJ69Y3 外面


MJ69Y4 外面


MJ69Y5 外面


MJ69Y3 内面


MJ69Y4 内面


MJ69Y5 内面

写真 33　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉖


MJ69Y6 外面


MJ69Y6 内面


MJ69Y7 外面


MJ69Y8 外面


MJ69Y8 内面


MJ69Y7 内面


MJ69Y9 外面


MJ69Y10 外面


MJ69Y11 外面


MJ69Y9 内面


MJ69Y10 内面

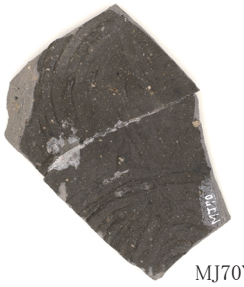

MJ69Y11 内面

写真 34　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉗


MJ70Y1 外面


MJ70Y2 外面


MJ70Y3 外面


MJ70Y1 内面


MJ70Y2 内面


MJ70Y3 内面


MJ70Y4 外面


MJ70Y5 外面


MJ71Y1 外面


MJ70Y4 内面


MJ70Y5 内面


MJ71Y1 内面


MJ71Y2 外面


MJ71Y3 外面


MJ71Y4 外面


MJ71Y2 内面


MJ71Y3 内面


MJ71Y4 内面

写真 35　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉘


MJ71Y5 外面


MJ71Y6 外面


MJ71Y7 外面


MJ71Y5 内面


MJ71Y6 内面


MJ71Y7 内面


MJ72Y1 外面


MJ72Y2 外面


MJ72Y3 外面


MJ72Y1 内面


MJ72Y2 内面


MJ72Y3 内面


MJ72Y4 外面


MJ72Y5 外面


MJ72Y6 外面


MJ72Y4 内面


MJ72Y5 内面


MJ72Y6 内面

写真 36　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉙


MJ72Y7 外面


MJ72Y8 外面_


MJ72Y9 外面


MJ72Y7 内面


MJ72Y8 内面


MJ72Y9 内面


MJ72Y10 外面


MJ73Y1 外面


MJ73Y2 外面


MJ72Y10 内面


MJ73Y1 内面


MJ73Y2 内面


MJ75Y1 外面


MJ75Y2 外面


MJ75Y3 外面


MJ75Y1 内面


MJ75Y1 内面


MJ75Y3 内面

写真 37　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉚


MJ75Y4 外面


MJ75Y5 外面


MJ76Y1 外面


MJ75Y4 内面


MJ75Y4 内面


MJ76Y1 内面


MJ77・78Y1 外面


MJ77・78Y2 外面


MJ77・78Y3 外面


MJ77・78Y1 内面


MJ77・48Y2 内面


MJ77・78Y3 内面


MJ77・78Y4 外面


MJ77・78Y5 外面


MJ77・78Y6 外面


MJ77・78Y4 内面


MJ77・78Y5 内面


MJ77・78Y6 内面

写真 38　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉛


MJ77・78Y7 外面


MJ77・78Y8 外面


MJ77・78Y9 外面


MJ77・78Y7 内面


MJ77・78Y8 内面


MJ77・78Y9 内面


MJ77・78Y10 外面


MJ79Y1 外面


MJ79Y2 外面


MJ77・78Y10 内面


MJ79Y1 内面


MJ79Y2 内面


MJ79Y3 外面


MJ79Y4 外面


MJ79Y5 外面


MJ79Y3 内面


MJ79Y4 内面


MJ79Y5 内面

写真 39　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉜


MJ81Y1 外面


MJ81Y2 外面


MJ81Y3 外面


MJ81Y1 内面


MJ81Y2 内面


MJ81Y3 内面


MJ81Y4 外面


MJ81Y5 外面


MJ82Y1 外面

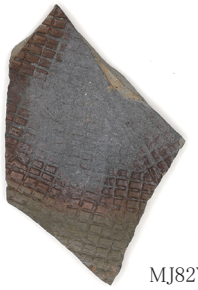

MJ81Y4 内面


MJ81Y5 内面


MJ82Y1 内面


MJ82Y2 外面


MJ82Y3 外面


MJ82Y4 外面


MJ82Y2 内面


MJ82Y3 内面


MJ82Y4 内面

写真 40　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉝


MJ82Y5 外面


MJ82Y6 外面


MJ82Y7 外面


MJ82Y5 内面


MJ82Y6 内面


MJ82Y7 内面


MJ82Y8 外面


MJ82Y9 外面

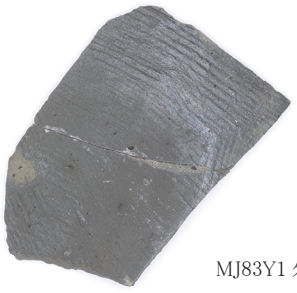

MJ82Y10 外面


MJ82Y8 内面


MJ82Y9 内面


MJ82Y10 内面


MJ82Y11 外面


MJ83Y1 外面


MJ83Y2 外面


MJ82Y11 内面


MJ83Y1 内面

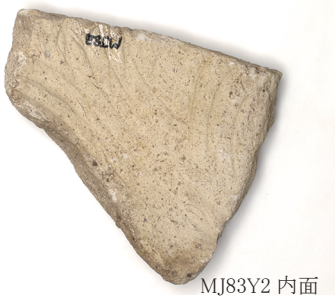

MJ83Y2 内面

写真 41　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉞


MJ83Y3 外面


MJ84 か Y1 外面


MJ84 か Y2 外面


MJ83Y3 内面


MJ84 か Y1 内面


MJ84 か Y2 内面


MJ84 か Y3 外面


MJ85Y1 外面


MJ100Y1 外面


MJ84 か Y3 内面


MJ85Y1 内面


MJ100Y1 内面


MJ100Y2 外面


MJ100Y3 外面


MJ100Y4 外面


MJ100Y2 内面


MJ100Y3 内面


MJ100Y4 内面

写真 42　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㉟

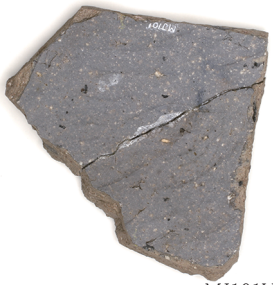

MJ100Y5 外面


MJ100Y6 外面


MJ101Y1 外面


MJ100Y5 内面


MJ100Y6 内面


MJ101Y1 内面


MJ101Y2 外面


MJ101Y3 外面


MJ103Y1 外面


MJ101Y2 内面


MJ101Y3 内面


MJ103Y1 内面


MJ103Y2 外面


MJ103Y3 外面


MJ105Y1 外面


MJ103Y2 内面


MJ103Y3 内面

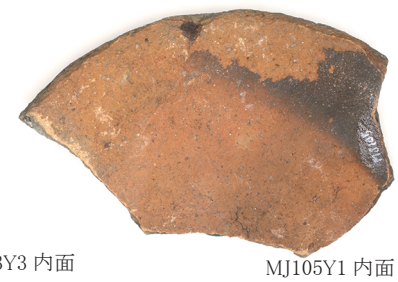

MJ105Y1 内面

写真 43　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㊱



MJ105Y2 外面



MJ105Y3 外面



MJ105Y2 内面



MJ105Y3 内面



MJ105Y4 外面



MJ107Y1 外面



MJ107Y2 外面



MJ105Y4 内面



MJ107Y1 内面



MJ107Y2 内面

写真 44　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㊲


MJ107Y3 外面


MJ112Y1 外面


MJ112Y2 外面


MJ107Y3 内面


MJ112Y1 内面


MJ112Y2 内面


MJ112Y3 外面


MJ112Y4 外面


MJ112Y5 外面


MJ112Y3 内面


MJ112Y4 内面


MJ112Y5 内面


MJ112Y6 外面


MJ112Y7 外面


MJ112Y8 外面


MJ112Y6 内面


MJ112Y7 内面


MJ112Y8 内面

写真 45　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㊳


MJ112Y9 外面


MJ112Y10 外面


MJ112Y11 外面


MJ112Y9 内面


MJ112Y10 内面


MJ112Y11 内面


MJ112Y12 外面


MJ112Y13 外面


MJ112Y14 外面


MJ112Y12 内面


MJ112Y13 内面


MJ112Y14 内面


MJ112Y15 外面


MJ112Y16 外面


MJ112Y17 外面


MJ112Y15 内面


MJ112Y16 内面

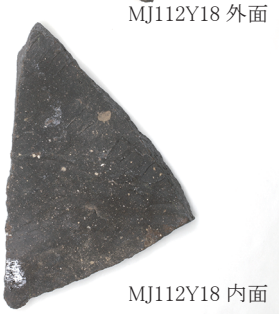

MJ112Y17 内面

写真 46　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㊴


MJ112Y18 外面


MJ112Y19 外面


MJ112Y20 外面


MJ112Y18 内面


MJ112Y19 内面


MJ112Y20 内面


MJ112Y21 外面


MJ113-114Y3 外面


MJ116-114Y3 内面


MJ112Y21 内面

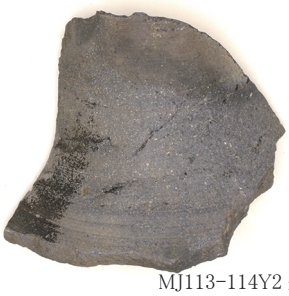

MJ113-114Y4 外面


MJ113-114Y4 内面


MJ113-114Y1 外面


MJ113-114Y5 外面


MJ113-114Y6 外面


MJ113-114Y2 外面


MJ113-114Y5 内面


MJ113-114Y6 内面

写真 47　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器⑩


MJ113-114Y7 外面


MJ113-114Y8 外面

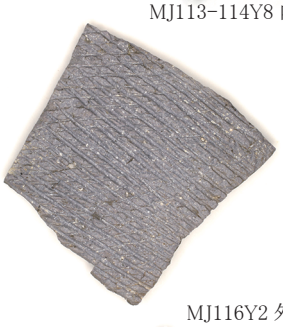

MJ113-114Y9 外面


MJ113-114Y7 内面


MJ113-114Y8 内面


MJ113-114Y9 内面


MJ116Y1 外面


MJ116Y2 外面


MJ116Y3 外面


MJ116Y1 内面


MJ116Y2 内面


MJ116Y3 内面


MJ117Y1 外面


MJ117Y2 外面


MJ117Y3 外面


MJ117Y1 内面


MJ117Y2 内面


MJ117Y3 内面

写真 48　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㊶


MJ117Y4 外面

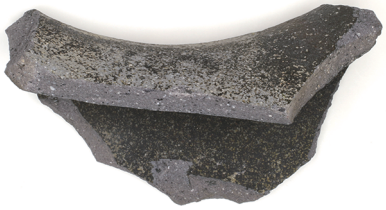

MJ117Y5 外面


MJ120Y1 内面


MJ117Y4 内面


MJ117Y5 内面


MJ20Y2 内面


MJUK1Y1 外面


MJUK1Y2 外面


MJUK1Y3 外面


MJUK1Y1 内面


MJUK1Y2 内面


MJUK1Y3 内面


MJUK1Y4 外面


MJUK2Y1 外面


MJUK2Y2 外面


MJUK1Y4 内面


MJUK2Y1 内面


MJUK2Y2 内面

写真 49　見島ジーコンボ古墳群東部域出土土器㊷

表2 出土遺物(土器)観察表

法量( )は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
MJ2 Y1	第2号墳	須恵器 長頸壺	肩～底部		①灰色(N4/)～暗灰色(N3/) 灰:暗オリーブ灰色(2.5GY4/1) ②灰色(N4/)	密 0.3～1.5㎜φの角閃石・長石などが多く混ざる	やや不良	接合しない資料であるが、胎土や焼成具合から見て同一個体。肩の張る器形で、高台は欠失している。体部外面底部付近は平行文叩きが明瞭に残る。内面の当て具痕はナデ消されている。肩部外面と底部内面に灰を被っている。
MJ2 Y2	第2号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/) ②灰黄色(2.5Y6/2)	密 0.2～1.5㎜φの長石・くさり礫などがやや多く混ざる	やや不良	外面は平行文叩き後カキ目が施される。内面は同心円文当て具痕が残るが、部分的にナデ消されている。
MJ2 Y3	第2号墳	須恵器 甕	体部		①灰赤色(10R4/2) ②灰褐色(5YR4/1)	密 0.2～2㎜φの長石・くさり礫などがやや多く混ざる	やや不良	外面の叩き痕は完全にナデ消される。内面は平行文当て具痕の下に同心円文当て具痕がわずかに観察される。
MJ3 Y1	第3号墳	須恵器 甕	頸部		①暗灰色(N3/) ②灰色(N4/) ～暗灰色(N3/)	密 0.2～1.5㎜φの長石・くさり礫などがやや多く混ざる	良好	2片が接合。大きく開く頸部で、外面に2条の沈線が巡らされ、その上位に波状文が施される。内面の沈線はやや傾いていることからヘラ記号である可能性が高い。
MJ3 Y2	第3号墳	須恵器 甕	体部		①②灰色(N3/)	密 0.2～1.5㎜φの長石・くさり礫などがやや多く混ざる	良好	外面は方向を違えながら平行文叩きを施す。内面の同心円文当て具痕はナデにより不明瞭となっている。MJ3Y1と同一個体とみられ、他に体部片1点が存在する。
MJ3 Y3	第3号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(5Y5/1) ②灰色(N5/)	密 0.1～0.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩き後部分的な横ナデが施される。内面の同心円文当て具痕は明瞭に残り、部分的にナデが施される。
MJ5 Y1	第5号墳	須恵器 横瓶	側部 ～底部か		①灰色(N6/～4/) ～暗灰色(N3/) ②暗灰色(N3/)	密 0.1～1.5㎜φの角閃石・長石などが少量混ざる	良好	6片が接合。円盤閉塞部が残る。外面は平行文叩き後カキ目が施される。内面は同心円文当て具痕が残るが、部分的にナデが施される。円盤閉塞接合部を強くナデる。
MJ5 Y2	第5号墳	須恵器 壺か	肩部		①②黄灰色(2.5Y6/)	密 0.1～1.5㎜φの角閃石・長石などが少量混ざる	良好	外面は格子文叩き後ナデが施される。内面の当て具痕は完全にナデ消される。
MJ5 Y3	第5号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/) ②灰色(N5/)	密 0.1～1㎜φのくさり礫・長石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩きを施した後に板状工具で器面調整を行っているよう に見える。内面は平行文当て具痕をそのまま残すが、下位にわずかに同心円当て具痕が見られる。MJ5Y4とは内面の当て具痕が異なるが同一個体である可能性が高い。
MJ5 Y4	第5号墳	須恵器 甕	体部 ～底部		①灰色(N4/) ②灰色(N5/～4/)	密 0.1～2.5㎜φのくさり礫・長石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩きを施した後に板状工具で器面調整を行っているよう に見える。内面の同心円文当て具痕は下位にナデ消しが図られている。MJ5Y3とは内面の当て具痕が異なるが同一個体である可能性が高い。
MJ6 Y1	第6号墳	須恵器 坏	底部	②(7.6) ③△1.7	①灰色(N4/) ②灰色(5Y5/1)	密 0.1～0.5㎜φの角閃石・長石などが極少量混ざる	良好	シャープなつくり。平底からやや内湾気味に体部が立ち上がる。底部外面に繊維状の痕跡が残る。底部残存率1/6。
MJ6 Y2	第6号墳	須恵器 高台付坏	底部	②高台径外端(8.8) ③△1.9	①灰色(N5/) ②灰色(5Y5/1)	密 0.1～1㎜φの長石・石英などがやや多く混ざる	やや不良	器壁の厚い個体で、体部外端に扁平な高台がハ字状に付く。底部残存率1/6。
MJ6 Y3	第6号墳	須恵器 高台付坏	底部	②高台外端(9.4) ③△1.6	①②灰色(5Y5/1)	密 0.1～0.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	底部外端に扁平な高台がハ字状に付く。底部外面に板圧痕が部分的に残る。底部残存率1/7.5。
MJ6 Y4	第6号墳	須恵器 甕	頸～肩部		①暗青灰色(5PB4/1) 灰:灰白色(7.5Y8/1) ②にぶい橙色(7.5YR6/4) ～にぶい褐色(7.5YR5/4)	密 0.3～2㎜φの角閃石・くさり礫などが少量混ざる	やや不良	肩部外面に平行文叩きが施され、内面には同心円文当て具痕が残る。焼成不良で内面が赤みを帯びている。外面には灰が多量に被る。
MJ6 Y5	第6号墳	須恵器 甕	頸～肩部		①灰色(N5/) ②灰色(N4/)	密 0.1～1㎜φのくさり礫・長石などがやや多く混ざる	良好	内外面に横ナデが施される。胎土および焼成具合からMJ6Y8と同一個体の可能性がある。
MJ6 Y6	第6号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/) ②灰褐色(5YR4/2)	密 0.1～1㎜φの長石などが極少量混ざる	やや不良	外面は平行文叩きが施され、内面には同心円文当て具痕が明瞭に残る。他に同一個体とみられる体部片が2点存在する。
MJ6 Y7	第6号墳	須恵器 甕	体部		①②灰色(N4/)	密 0.1～1㎜φの長石などがやや多く混ざる	良好	外面は平行文叩き後ハケ状工具によるナデ(カキ目か)が施される。内面は同心円文当て具痕の上に平行文当て具痕が重複する。他に同一個体とみられる破片が2点存在する。
MJ6 Y8	第6号墳	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) ②灰色(N5/)	密 0.2～3㎜φのくさり礫・長石などがやや多く混ざる	良好	外面は平行文叩き後ナデ、内面の同心円文当て具痕もナデにより不明瞭となっている。内面の粘土接合部周囲を強くナデる。他に同一個体とみられる体部片が9点存在する。
MJ6 Y9	第6号墳	須恵器 甕	底部		①にぶい褐色(7.5YR6/3) ～オリーブ黒色(5Y3/2) ②にぶい褐色(7.5YR5/3)	密 0.3～2㎜φの角閃石・くさり礫などが少量混ざる	やや不良	外面に部分的に平行文叩きが残る。内面の同心円文当て具痕はナデにより不明瞭となっている。MJ6Y4と同一個体の可能性あり。
MJ8 Y1	第8号墳	須恵器 甕	口縁～頸部	①(17.6) ③△4.9	①灰色(N6/～4/) ②灰色(N6/) ～灰色(10Y6/1) 灰:浅黄色(2.5Y7/4)	精緻 0.1～1㎜φの角閃石・長石などが少量混ざる	良好	精選された胎土で、焼成具合も良好でシャープなつくり。内面に灰被る。口縁部残存率1/8。
MJ8 Y2	第8号墳	須恵器 甕	体部		①②青灰色(5PB5/1)	密 0.2～1㎜φのくさり礫などがやや多く混ざる	良好	外面の平行文叩き、内面の平行文当て具痕ともに明瞭に残る。
MJ9 Y1	第9号墳	須恵器 甕	頸～肩部	頸部径(13.4)	①頸部:黒色(N2/) 肩部:灰色(N5/) ②頸部:灰色(N4/) 肩部:暗灰色(N3/)	密 0.2～1.5㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	肩部外面はカキ目を施すが、下位に平行文叩きが観察される。内面の同心円文当て具痕は明瞭に残る。頸部残存率1/8.5。
MJ12 Y1	第12号墳	須恵器 平瓶	天井部		①暗灰色(N3/) 灰:灰白色(5Y8/2) ～灰色(10Y4/2) ②灰色(N5/)	密 0.2～3㎜φのくさり礫・長石などが極少量混ざる	不良	天井部の閉塞粘土円盤の破片。円盤の内面には目の細かい布目が残る。外面はカキ目が施されているが灰を被っており不明瞭。内面には同心円文当て具痕がかすかに残る。
MJ12 Y2	第12号墳	須恵器 甕	口縁部	③△3.0	①にぶい赤褐色(2.5YR4/3) ～暗灰色(N3/) ②灰黄色(2.5Y5/1) 灰:灰白色(5Y8/2)～暗オリーブ灰色(5GY4/1)	密 0.1～1㎜φのくさり礫・長石などがやや多く混ざる	やや不良	大きく外反する口縁で、端部に沈線を1条巡らせる。内面には灰が多量に被る。
MJ12 Y3	第12号墳	須恵器 甕	肩部		①②灰色(5Y4/1)	密 0.1～0.5㎜φのくさり礫・長石などがやや多く混ざる	やや不良	外面に平行文叩きを施す。内面の同心円文当て具痕はナデにより不明瞭となっている。
MJ12 Y4	第12号墳	須恵器 甕	体部		①②暗灰色(N3/)	密 0.2～5㎜φのくさり礫・石英などが多く混ざる	やや不良	2片が接合。外面には平行文叩きが施される。内面の同心円文当て具痕はナデにより不明瞭となっている。MJ12Y5と同一個体とみられる。他に同一個体とみられる破片が2点存在する。

法量( )は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
MJ12Y5	第12号墳	須恵器 甕	体部		①②暗灰色(N3/)	密 0.2～3㎜φのくさり礫・石英などが多く混ざる	良好	外面には平行文叩きが施され、内面には平行文当て具痕が残る。当て具は異なるが胎土等からMJ12Y4と同一個体とみられる。
MJ12Y6	第12号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(5Y5/1) ②明褐灰色(7.5YR7/2) ～灰褐色(7.5YR5/2)	密 0.1～2.5㎜φの長石などがやや多く混ざる	やや不良	外面は縦・横方向から平行文叩きを施す。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。
MJ13Y1	第13号墳	須恵器 甕	体部		①②灰色(N5/)	密 0.1～0.5㎜φのくさり礫・長石などがやや多く 混ざる	良好	外面は平行文叩きを施す。内面は同心円文当て具痕の上に平行文当て具痕が重複する。
MJ13Y2	第13号墳	土師器 坏	口縁部		①橙色(7.5YR6/6) ②橙色(5YR6/6)	密 0.1～0.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	9片が接合。内湾気味に立ち上がる口縁部片で、口縁端部は欠失する。。風化が激しく 器面調整は観察できない。
MJ15Y1	第15号墳	須恵器 高坏	脚柱～裾部	裾部径(20.7) ③△10.5	①黄灰色(2.5Y4/1) ②黄灰色(2.5Y5/1)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	裾が大きく 開く 脚柱部片。裾端部上面をわずかに肥厚させる。上部に透かしの 下端が幅1.6cmほど遺存するが、幅、形状とも 不明。脚柱部残存率1/8。
MJ15Y2	第15号墳	須恵器 甕	肩部か		①灰色(N4/) ②灰黄色(2.5Y6/2)	密 0.1～1㎜φの長石・石英などが少量混ざる	やや不良	2片が接合。外面の 平行文叩きは明瞭に残る。内面は平行文当て具痕に同心円文当て具痕が重複しており、粗くナデが施されている。
MJ18Y1	第18号墳	須恵器 壺	肩部		①灰色(N5/) 灰:灰白色(2.5Y8/2) ②灰色(5Y6/1)	密 0.1～1㎜φの角閃石・長石などが少量混ざる	良好	長頸壺の肩部片か。外面はカキ目が施されており、灰を被っ ている。内面は軽く 回転ナデが施されるが同心円文当て具痕が残っ ている。他に同一個体とみられる肩部片が1点存在する。
MJ18Y2	第18号墳	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) ②灰色(N4/)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	やや不良	外面は平行文叩き後ナデが施される。内面は当て具痕（平行文か）が残るが、ナデにより消されている部分も ある。
MJ18Y3	第18号墳	土師器 坏	口縁～体部		①橙色(7.5YR6/6) ②橙色(5YR6/6)	密 0.1～1㎜φの長石・雲母などが少量混ざる	良好	2片が接合。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は短く 外反する。端部は欠失している。風化が著しく 器面調整は観察できない。他に同一個体とみられる小片が8点存在する。
MJ20Y1	第20号墳	須恵器 壺	底～体部		①灰色(N5/～6/) ②灰色(N6/)	密 0.1～3㎜φの長石などが少量混ざる	良好	内外面とも 回転ナデが丁寧に施される。焼成具合も 良好。
MJ20Y2	第20号墳	須恵器 平瓶か	天井部か		①灰色(5Y5/1) ②灰色(N5/)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	閉塞粘土円盤が残る。外面は不定方向のナデ、内面は回転ナデが施される。
MJ20Y3	第20号墳	須恵器 甕	口縁～肩部	①(17.2) ③△5.5	①②暗灰色(N3/) 外面灰:灰白色 (7.5Y8/1)	密 0.1～1.5㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	頸部からわずかに外反して口縁が 立ち上がる。肩部外面には平行文叩きが施される。内面の当て具痕はナデによりほぼ消されている。頸部残存率1/6。
MJ20Y4	第20号墳	須恵器 甕	体部		①暗青灰色(5PB3/1) ②青灰色(5PB6/1)	密 0.1～1.5㎜φのくさり礫などがやや多く 混ざる	良好	器壁の厚い 個体。外面の叩きは格子文に見えるが自然釉（透明）を被っており判別しづらい。内面の同心円文当て具痕も ナデによりほぼ消されている。
MJ20Y5	第20号墳	須恵器 甕	体部		①②暗灰色(N3/)	密 0.2～3㎜φの長石・石英などがやや多く 混ざる	良好	外面は平行文叩きを施す。内面は平行文当て具痕を 粗く ナデ消す。
MJ20Y6	第20号墳	須恵器 甕	底部		①灰色(N4/) ②灰色(N6/～4/)	密 0.2～3㎜φの長石などが多量に混ざる	良好	外面は斜格子状に平行文叩きを 施す。内面の同心円当て具痕は丁寧にナデ消されており、痕跡がわずかに残るのみである。
MJ23Y1	第23号墳	須恵器 坏	底部	②(7.4) ③△1.35	①灰黄色(2.5Y7/2) ～浅黄色(2.5Y7/3) ②灰白色(2.5Y8/1)	密 0.1～3㎜φの長石などが少量混ざる	やや不良	平底の底部から体部が開いて立ち上がる。底部外面は不定方向のナデが施される。内面は回転ナデを 施した後に仕上げのナデが施される。
MJ23Y2	第23号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N6/～5/) ②黄灰色(2.5Y6/1)	密 0.1～0.5㎜φの角閃石・長石などが極少量混ざる	良好	器面に焼き爆ぜが見られる。外面は平行文叩き後カキ目が施される。内面は同心円文当て具痕を 軽く ナデる。他に同一個体とみられる破片2点が存在する。
MJ23Y3	第23号墳	須恵器 甕	体部		①②暗青灰色(5PB4/1)	密 0.1～1㎜φの長石・角閃石などがやや多く 混ざる	良好	外面に 平行文叩きが施される。内面の同心円文当て具痕は丁寧にナデ消しが行われるが部分的に 残っ ている。他に同一個体とみられる破片1点が存在する。
MJ23Y4	第23号墳	須恵器 甕	体部		①暗青灰色(5PB3/1) ②暗青灰色(5PB4/1)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩き後ナデが施される。内面は平行文当て具痕が残るが、指押さえ状の凹み（円盤当て具か）が見られる。
MJ26Y1	第26号墳	須恵器 壺	底部	②(12.0) ※高台欠失	①灰黄色(2.5Y7/2～6/2) ②灰黄色(2.5Y7/2～6/2) ～暗灰黄色(2.5Y5/2)	やや粗 0.1～1㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	やや不良	器壁の厚い 個体。高台は焼成時に 剥離したも のと思われる。焼きぶく れやハゼがみられる。他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ26Y2	第26号墳	須恵器 甕	口縁～頸部	①(21.6) ③△5.5	①灰色(N6/～4/) ②灰色(5Y6/1)	密 0.1～1㎜φの角閃石・長石などが極少量混ざる	良好	頸部から軽く 外反して大きく 口縁が開く 。口縁外端の下位に低い突帯を1条巡らせる。頸部外面には板圧痕が見られる。明部内面下端には形状不明であるが当て具痕がわずかに残る。口縁端部に重ね焼の痕跡が見られる。外面突帯残存率1/8。
MJ26Y3	第26号墳	須恵器 甕	体部		①青灰色(5PB5/1) ～暗青灰色(5PB4/1) ②青灰色(5PB5/1)	密 0.2～4㎜φの長石・くさり礫などが多量に混ざる	良好	外面の平行文叩き、内面の同心円文当て具痕とも そのまま残す。外面にわずかに自然釉を 被る。
MJ26Y4	第26号墳	須恵器 甕	体部		①②灰色(5Y5/1)	密 0.2～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩き後ナデ、内面の同心円文当て具痕も ナデられている。
MJ27Y1	第27号墳	須恵器 壺	口縁部	①(19.2) ③△3.0	①灰白色(2.5Y7/1) ～黄灰色(2.5Y6/1) ②灰白色(2.5Y7/1)	密 0.1～1.5㎜φの角閃石・長石などが少量混ざる	良好	口縁は軽く 外反して短く 立ち上がる。口縁端部に面を 取る。口縁残存率1/8.5。
MJ27Y2	第27号墳	須恵器 甕か壺	肩部		①②灰色(N5/)	密 0.1～1.5㎜φの角閃石・長石などが少量混ざる	良好	頸基部で折損している肩部片。外面に平行文叩きを 施し、内面に同心円文当て具痕を 残す。
MJ27Y3	第27号墳	須恵器 甕	体部		①②灰色(N6/) 外面灰:灰白色(7.5Y7/2)	やや粗 0.1～3㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩きをナデ消しカキ目を施す。上位に灰を被っ ている。内面は同心円文当て具痕を 丁寧にナデ消す。他に同一個体とみられる破片が2点存在する。MJ27Y5と同一個体の 可能性も ある。
MJ27Y4	第27号墳	須恵器 甕	体部		①②黄灰色(2.5Y6/1)	密 0.2～1.5㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩き後カキ目を 施す。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。
MJ27Y5	第27号墳	須恵器 甕	体部		①青灰色(5PB5/1) ②灰色(N5/)	密 0.2～1.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩きをナデ消しカキ目を施すが、かすかに叩き痕が残っ ている。内面は同心円文当て具痕を 丁寧にナデ消す。
MJ27Y6	第27号墳	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/)	密 0.1～1.5㎜φの長石・石英などが多量に混ざる	やや不良	外面は平行文叩きが施される。内面は焼成時に 剥離したも のと思われる。
MJ29Y1	第29号墳	須恵器 壺	底部		①黒褐色(2.5Y3/2) ～暗灰色(N3/) ②灰色(N4/)	密 0.1～2㎜φのくさり礫・長石などが少量混ざる	良好	平底の外面に糸切り痕と板圧痕？が見られる。内面は部分的に 平行文当て具痕が残る。
MJ29Y2	第29号墳	須恵器 甕	口縁部	③△5.8	①灰色(N5/) ～暗灰色(N3/) ②暗灰色(N3/)	密 0.1～1㎜φの長石などがやや多く 混ざる	良好	外反して大きく 開く 。口縁外端に突帯を1条巡らせる。内外面とも 回転ナデが施される。

法量( )は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
MJ29 Y3	第29号墳	須恵器 甕	頸～肩部	頸部径(29.3)	①黄灰色(2.5Y6/1) ～暗灰色(N3/) 灰・自然釉:灰白色 (7.5Y8/1～7/1) ②灰色(5Y5/1) ～暗灰色(N3/)	密 0.2～5㎜φの長石・角閃石などがやや多く 混ざる	良好	頸基部から肩部の外面には灰と自然釉が被るため叩きは観察できない。肩部内面は同心円文当て具痕をそのまま残す。頸部残存率1/10。
MJ29 Y4	第29号墳	須恵器 甕	頸部		①暗灰色(N3/)	密 0.1～1㎜φの長石などがやや多く 混ざる	良好	内外面とも 回転ナデを 施す。MJ29Y2の頸部である可能性が高い。
MJ29 Y5	第29号墳	須恵器 甕	頸～肩部		①②灰色(4.5N/)	密 0.1～1㎜φのくさり礫・長石などが少量混ざる	良好	外面の平行文叩きは粗く ナデ消される。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。
MJ29 Y6	第29号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/)	密 0.1～0.5㎜φの長石などがやや多く 混ざる	良好	外面は平行文叩きを 施す。内面の平行文当て具痕を 完全にナデ消している。胎土および焼成具合から、MJ29Y2・4と同一個体の 可能性がある。
MJ29 Y7	第29号墳	須恵器 甕か	体部		①灰色(4.5N/) ②灰色(5Y5/1)	密 0.1～0.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面の平行文叩き、内面の同心円文当て具痕とも そのまま残す。
MJ29 Y8	第29号墳	須恵器 甕	体部		①黄灰色(2.5Y6/1) 灰:明青灰色(5PB7/1) 自然釉:灰オリーブ色 (7.5Y4/2) ②灰色(N6/)	密 0.1～1㎜φの長石などがg極少量混ざる	良好	外面は平行文叩き後カキ目が施され、上位に灰と自然釉を被っている。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。胎土は精選されており、調整も 丁寧。
MJ31 Y1	第31号墳	須恵器 坏蓋	天井～口縁	③△1.5	①灰色(N6/) ②灰色(N6/～5/)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	低いドーム状の2片が接合。天井部から屈曲気味に口縁に降下する。
MJ31 Y2	第31号墳	須恵器 坏	底～体部	②(7.2) ③△2.3	①灰白色(5Y7/1) ②灰色(5Y6/1)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	シャープなつくりで、平底の底部から内湾気味に体部が立ち上がる。底部外面は不定方向のナデ、その他は回転ナデが施される。底部残存率1/6。
MJ31 Y3	第31号墳	須恵器 壺か	肩部		①灰白色(N7/) ～灰色(N6/) ②灰白色(N7/)	密 0.2～1㎜φの角閃石などが極少量混ざる	良好	外面は平行文叩きが施されているよう だがほぼ観察不能。カキ目が施されている。内面は同心円文当て具痕を残す。
MJ31 Y4	第31号墳	須恵器 甕	体部		①暗青灰色(5PB4/1) ②青灰色(5PB5/1)	やや粗 0.1～1㎜φの長石などがやや多く 混ざる	良好	外面は平行文叩き後不定方向に板ナデを 施す。内面の格子文当て具痕は粗く ナデられている。他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ33 Y1	第33号墳	須恵器 壺	口縁～肩部	①(16.0) ③△5.4	①灰白色(2.5Y8/1～7/1) ～暗灰黄色(2.5Y5/2) ②淡黄色(2.5Y8/3) ～にぶい黄色(2.5Y6/3)	密 0.2～2㎜φの角閃石・石英などが少量混ざる	やや不良	短い口縁が外傾して立ち上がる。肩部外面には平行文叩きが施される。内面は丁寧にナデ消されているが、わずかに同心円文当て具痕の凹みが残る。頸部残存率1/6。
MJ33 Y2	第33号墳	須恵器 壺か	肩部		①黄灰色 (2.5Y6/1～5/1) 灰:灰白色(2.5Y8/2) ②黄灰色(2.5Y6/1)	密 0.1～0.5㎜φの長石・角閃石などが極少量混ざる	良好	外面は平行文叩き後カキ目が密に施される。ヘラによるジグザグ模様の傷が見られるが意図的なもの か不明。内面の同心円文当て具痕は丁寧にナデ消される。非常に丁寧な器面調整で、胎土も 精選されている。
MJ33 Y3	第33号墳	須恵器 壺	底～体部		①②灰白色(5Y7/1)	密 0.1～0.5㎜φの長石・角閃石などが極少量混ざる	良好	外面下位は回転ヘラ削りが施される。内面は回転ナデが施されるが、部分的に縦方向のナデが施される。焼成具合は異なるが、丁寧な器面調整や胎土からMJ33Y2と同一個体の 可能性がある。
MJ33 Y4	第33号墳	須恵器 甕	口縁～頸部		①②灰色(N4/)	密 0.2～1㎜φの長石・角閃石などがやや多く 混ざる	良好	口縁が外反して大きく 開く。胎土や焼成具合からMJ29Y2と同一個体の 可能性がある。
MJ33 Y5	第33号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N6/～4/) ②灰色(N6/)	密 0.2～2㎜φの長石・くさり礫などがやや多く 混ざる	良好	外面には平行文叩きが 施され、自然釉(透明)を 被る。内面には同心円文当て具痕が残る。他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ33 Y6	第33号墳	須恵器 甕	底部付近か		①褐灰色(7.5YR5/1) ～灰褐色(7.5YR5/2) ②オリーブ黒色(5Y3/2)	密 0.1～5㎜φの角閃石・くさり礫などが極少量混ざる	良好	外面は不定方向の 平行文叩きが施され、内面には同心円文当て具痕が残る。
MJ34 Y1	第34号墳	須恵器 高台付坏	底部	③△1.4	①灰色(N6/～4/) 灰:灰オリーブ色 (7.5Y5/2) ②灰色(N6/)	密 0.1～1㎜φの長石などがやや多く 混ざる	良好	底部外端に断面長方形の高台が付く。高台の内外端で接地する。底部外面に灰と自然釉を被る。他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ34 Y2	第34号墳	須恵器 長頸壺	口縁～底部	①(11.6) ②(17.0) ③△口縁2.7	①灰褐色(5YR4/2) ～明赤褐色(5YR5/6) ②にぶい赤褐色 (5YR4/3) ～明黄褐色(10YR6/6)	密 0.1～1㎜φのくさり礫などがやや多く 混ざる	やや不良	3片は胎土や焼成具合から同一個体とみて良い。体部外面は格子文叩きをほぼナデ消している。内面の同心円文当て具痕は下位がほぼナデ消されている。口縁は屈曲気味に強く外反する。
MJ34 Y3	第34号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N6/) ②黄灰色(2.5Y6/1)	密 0.1～1.5㎜φの角閃石・長石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩き後粗く カキ目を 施す。内面の同心円文当て具痕は部分的にナデが施される。
MJ34 Y4	第34号墳	須恵器 甕	体部		①②暗青灰色(5PB4/1)	密 0.1～1㎜φのくさり礫などがやや多く 混ざる	やや不良	外面は平行文叩き後軽く ナデが施される。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ34 Y5	第34号墳	須恵器 甕	底部付近か		①にぶい褐色(5YR6/3) ～黄灰色(2.5Y6/2) ②黄灰色(2.5Y6/1～5/1)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は不定方向から平行文叩きが施され、横ナデを 行っている。内面には同心円文当て具痕が残る。
MJ35 Y1	第35号墳	須恵器 壺か	肩部か		①②灰色(N5/) 外面灰:灰白色(5Y8/2)	密 0.1～0.5㎜φの長石・角閃石などが極少量混ざる	良好	外面は平行文叩き後カキ目を 施す。内面の同心円文当て具痕は回転ナデによりほぼ消滅している。天井部に灰を 被るが、円形に灰を 被らない部分が存在する。
MJ35 Y2	第35号墳	須恵器 甕	口縁部	②(22.4) ③△2.6	①②灰色(N6/～4/)	密 0.1～0.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	口縁は緩やかに大きく 外反する。口縁外端を折り返して肥厚させる。口縁部残存率1/10。
MJ35 Y3	第35号墳	須恵器 甕	体部		①②灰色(N4/)	密 0.1～3㎜φの長石・くさり礫などが多く 混ざる	やや不良	外面は目の細かい 平行文叩きを 施す。内面には同心円文当て具痕が残る。
MJ35 Y4	第35号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N6/) ②灰白色(2.5Y7/1)	密 0.1～1.5㎜φの角閃石・長石などが少量混ざる	良好	3片が接合。器壁が厚く、底部付近の破片とみられる。外面は不定方向から平行文叩きを施し、部分的に弧状にナデ消す。内面は同心円文当て具痕を 残す。
MJ37 Y1	第37号墳	須恵器 甕	口縁～肩部	①(31.5) ③△8.3	①灰白色(N7/) ～暗灰色(N3/) ②灰色(5Y5/1) 灰:灰白色 (5Y8/1～8/2)	密 0.2～1.5㎜φの角閃石・長石などが少量混ざる	良好	口縁は緩やかに外反して開く。肩部外面と口縁内面に灰を 被る。肩部外面の平行文叩きおよび内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。頸部残存率1/12。

法量( )は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
MJ39 Y1	第39号墳	須恵器 高台付坏	底～体部	②高台外端(8.3) ③△2.2	①灰白色(2.5Y7/1) ～黄灰色(2.5Y6/1) ②灰白色(2.5Y7/1)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	器壁のやや暑い個体で、底部外端に断面方形の高台がハ字状に付く。他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ41 Y1	第41号墳	須恵器 甕	頸～肩部		①②灰色(5Y5/1)	密 0.1～1.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	肩部外面には目の細かい平行文叩きが施される。内面の同心円文当て具痕はナデ消されわずかに残る。頸基部残存率1/10。
MJ41 Y2	第41号墳	須恵器 甕	頸～肩部		①灰色(N4/) ②暗灰黄色(2.5Y4/2)	密 0.1～1.5㎜φの長石などが少量混ざる	やや不良	肩部外面は密にカキ目が施されており、叩きの痕跡は観察できない。内面の同心円文当て具痕はナデ消しが図られている。
MJ41 Y3	第41号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/) 灰:灰白色(7.5Y8/2) ～灰オリーブ色(7.5Y5/2) ②暗灰色(N3/)	密 0.1～3㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	良好	3片が接合。外面の叩きはナデ消されているよう だが、灰を多く 被るため観察不能。内面には同心円文当て具痕が残す。大甕の体部とみられる。
MJ41 Y4	第41号墳	須恵器 甕	底部付近か		①②暗青灰色(5PB4/1)	密 0.2～1.5㎜φのくさり礫などがやや多く混ざる	良好	外面は不定方向から平行文叩きが施され、部分的にナデを行っている。内面の平行文当て具痕は下位がナデ消されている。器壁の厚い個体で大甕とみられるが、MJ41Y3とは内面の当て具が異なる。
MJ41 Y5	第41号墳	土師器 坏	口縁部	③△3.0	①②橙色(5YR6/8)	密 0.2～1.5㎜φの長石・石英などがやや多く混ざる	良好	6片が接合。屈曲しつつも 直線的に外方に開く 口縁部片で、内外面とも 回転ナデ調整が施される。
MJ42 Y1	第42号墳	須恵器 長頸壺か	頸～肩部		①灰白色(N7/) 自然釉:灰オリーブ色(7.5Y6/2) ②灰色(N5/)～暗灰色(N3/)	密 0.1～0.5㎜φの角閃石などが極少量混ざる	良好	胎土は精選されており、焼成具合も 良好である。外面には自然釉が被っており器面調整不明。内面は回転ナデが施されているが、当て具痕がわずかに残っている。
MJ42 Y2	第42号墳	須恵器 壺か	頸～肩部		①②灰色(N4/)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	肩部外面に横位の平行文叩きを施す。内面の当て具痕は完全にナデ消されている。
MJ42 Y3	第42号墳	須恵器 甕	体部		①黄灰色(2.5Y4/1) ②褐灰色(10YR4/1)	密 0.1～2㎜φのくさり礫・長石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩き後ナデを 施す。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。
MJ42 Y4	第42号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(5Y6/1) ②灰白色(2.5Y7/1)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩き後カキ目が施される。内面は同心円文当て具には2種が用いられている。
MJ42 Y5	第42号墳	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) ②灰色(N4/)	密 0.1～1.5㎜φの長石・石英などが多量に混ざる	良好	外面は平行文叩き後部分的にカキ目を 施す。内面の平行文当て具痕はナデにより不明瞭となっている。
MJ42 Y6	第42号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(5Y5/1) ②灰色(N5/)	密 0.1～2㎜φの長石などがやや多く 混ざる	良好	外面は平行文叩き後粗く カキ目を施す。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。
MJ42 Y7	第42号墳	須恵器 甕	底部付近か		①②青灰色(5PB5/1)	密 0.1～3㎜φの長石・角閃石などがやや多く 混ざる	良好	外面の平行文叩き、内面の平行文当て具痕とも にナデが施されるが消滅はしていない。他に同一個体の可能性がある破片が2点存在する。
MJ42 Y8	第42号墳	須恵器 甕	底部付近か		①灰色(5Y4/1)～オリーブ黒色(5Y3/1) ②灰色(5Y9/1)	密 0.1～3㎜φの長石・角閃石・石英などが少量混ざる	良好	外面の格子文叩きを 丁寧にナデ消すが、部分的に残っている。内面の当て具痕も 丁寧にナデ消すが、深部が凹みとして残っている。
MJ42 Y9	第42号墳	須恵器 甕	底部付近か		①灰色(N5/) ②灰黄色(2.5Y7/2)	密 0.1～3㎜φの角閃石・長石などがやや多く 混ざる	良好	外面の叩きは格子文に 見えるが不明瞭である。内面には2箇所に同心円文当て具痕が見られる。
MJ43か Y1	第43号墳か	須恵器 壺	頸～肩部片		①褐灰色(10YR4/1) 自然釉:オリーブ黒色(7.5Y3/2) ②灰色(N6/)	精緻 0.1～2.5㎜φの長石・角閃石・チャートなどが少量混ざる	良好	丁寧なつくりで、叩き・当て具痕跡が完全にナデ消されている。外面に自然釉が多く 被っている。
MJ43か Y2	第43号墳か	須恵器 壺	底～腹部	腹部径(15.6)	①灰色(N5)～黒色(N2/) ②灰色(N5/)	精緻 0.1～0.5㎜φの長石・角閃石などが極少量混ざる	良好	シャープなつくりで、胎土も 精選されている。外面は回転ヘラ削りが施され、遺存最上位のみ回転ナデが施される。内面は回転ナデ。残存率1/7。
MJ43か Y3	第43号墳か	須恵器 甕	体部		①灰色(N6/～4/) 自然釉:灰色(7.5Y7/2) ②灰白色(2.5Y7/1)	密 0.2～2㎜φの角閃石・石英などがやや多く 混ざる	良好	外面は自然釉を 被っているが、平行文叩きが観察される。内面は同心円文当て具痕をそのまま残す。器壁が厚く、大甕とみられる。
MJ43か Y4	第43号墳か	須恵器 甕	体部		①灰白色(7.5Y7/1) ～灰色(N4/) ②灰色(N5/～4/)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	器壁が厚く 大甕の体部片とみられる。外面は摩滅しているが格子文叩きと部分的なカキ目(幅1cm)が見られる。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。
MJ43か Y5	第43号墳か	須恵器 甕	底部付近か		①灰色(N4/)～灰白色(2.5Y7/1) ②灰色(N5/～4/)	密 0.1～2㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	外面の平行文叩きおよび内面の平行文当て具痕とも 不定方向から当てられる。外面の叩きはナデを施されるが消えきっていない。
MJ44 Y1	第44号墳	須恵器 坏蓋	天井～口縁部	①(15.2) ③0.8	①②灰色(N4/)	密 0.1～2㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	良好	扁平な天井部から屈曲して口縁が開き、口縁端部を 鳥嘴状に下垂させる。口縁部残存率1/6。
MJ44 Y2	第44号墳	須恵器 坏蓋	天井～口縁部	①(14.4) ③△1.5	①②灰白色(2.5Y7/1) 重ね焼部:黄灰色(2.5Y5/1)	密 0.1～1㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	扁平な天井部からく 字状に屈曲して口縁が降下する。口縁端部は鳥嘴状に下垂させる。口縁内外面に重ね焼痕が残る。他に同一個体とみられる天井部片1点が存在する。
MJ44 Y3	第44号墳	須恵器 坏蓋	天井～口縁部	つまみ径(2.0) ③△1.4	①②灰色(N5/)	密 0.1～4㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	2片が接合。扁平なボタン状つまみを 有している。扁平な天井部から湾曲気味に口縁に降下し、屈曲気味に口縁を 折り上げる。口縁端部は欠失するが、鳥嘴状に 下垂させたも のと思われる。
MJ44 Y4	第44号墳	須恵器 鉢か	口縁部	①(16.8) ③△3.5	①②暗灰色(N3/) 端部灰:灰白色(7.5Y7/2)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	わずかに外反するがほぼ直立する口縁部で、端部にのみ灰を 被っている。内外面とも 回転ナデを 施している。口縁部残存率1/12。
MJ44 Y5	第44号墳	須恵器 壺	底部	②(9.8) ③△1.5	①黒色(N2/)～灰褐色(7.5YR4/2) ②暗灰色(N3/)	密 0.1～2㎜φのくさり礫・長石などが少量混ざる	良好	底部外端に高台剥離痕にも 見える痕跡があるが、全周しないことからヘラ切り痕と判断した。底部残存率1/5.5。
MJ44 Y6	第44号墳	須恵器 甕	口縁部	③△2.3	①②灰白色(2.5Y7/1) 外面自然釉:灰オリーブ色(5Y5/2) 内面灰:灰オリーブ色(5Y4/2)	精緻 0.1～0.5㎜φの長石などが極少量混ざる	堅緻	外反して開く 口縁の端部を内湾気味に立ち上げる。口縁の外側をやや肥厚させる。他に同一個体とみられる破片2点が存在する。
MJ44 Y7	第44号墳	須恵器 甕	頸部		①黒褐色(7.5YR2/2) ②暗灰色(N3/)	密 0.1～2㎜φの長石などがやや多く 混ざる	良好	器壁の厚い個体で、大甕とみられる。頸基部内面に同心円文当て具痕が残る。他に同一個体の可能性がある破片が1点存在する。
MJ44 Y8	第44号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N6/) ②灰白色(N7/)	密 0.2～2㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩き後カキ目が施される。内面の同心円文当て具痕は部分的に軽く ナデる。他に同一個体とみられる破片が4点存在する。
MJ44 Y9	第44号墳	須恵器 甕	底部付近か		①灰色(N4/) 自然釉:黒色(N2/) ②灰色(N5/)	密 0.1～2㎜φのくさり礫・長石などがやや多く 混ざる	良好	外面は格子文叩きが施されているよう であるが、火膨れと自然釉で不明瞭である。内面は車輪文(歯車文)当て具痕を残す。

法量( )は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
MJ45 Y1	第45号墳	須恵器 坏蓋	天井部	つまみ径(2.35) ③△1.2	①②灰色(7.5Y6/1)	密 0.1～2㎜φの長石などが少量混ざる	良好	扁平なボタン状つまみを有する。扁平なドーム状の天井とみられる。
MJ45 Y2	第45号墳	須恵器 高台付坏	底～体部	②高台外端 (8.6) ③△2.3	①灰色(7.5Y5/1～4/1) ②灰色(7.5Y5/1)	密 0.1～3㎜φの長石などが少量混ざる	良好	底部外端に断面方形の小ぶりな高台が付く。底部外面にはヘラ状工具の痕跡が見られる。体部は内湾しつつ開き気味に立ち上がる。高台残存率1/4.5。
MJ45 Y3	第45号墳	須恵器 壺か	頸～肩部		①灰色(N5/～4/) 灰:灰白色 (7.5Y8/1～7/2) ②灰色(N5/～4/) ～暗灰色(N3/)	密 0.1～1.5㎜φの長石・角閃石・石英などが少量混ざる	良好	肩部は外面に平行文叩きを施す。内面の当て具痕(形状不明)はナデ消されている。頸部は屈曲気味に強く外反させる。肩部外面および頸部内面に灰を被る。
MJ45 Y4	第45号墳	須恵器 壺	体部		①暗灰色(N3/) ②灰色(N5/)	精緻	良好	2片が接合。非常にシャープなつくり。外面は回転ヘラ削り、遺存部最上位には回転ナデを施す。内面は回転ナデ。残存率1/8。
MJ45 Y5	第45号墳	須恵器 甕	口縁部	①(25.6) ③△2.8	①暗灰色(N3/) ②暗灰色(N3/)～ 灰黄褐色(10YR4/2)	密 0.1～2㎜φの長石などが少量混ざる	やや不良	外反して大きく開く。口縁外端下位に断面三角形の突帯1条を廻らせる。内外面とも回転ナデを施す。口縁部残存率1/9。
MJ45 Y6	第45号墳	須恵器 甕か	口縁部	③△2.0	①②黒色(N2/) 内面灰:灰白色 (7.5Y8/2～7/2)	密 0.1～1㎜φのくさり礫・長石などが極少量混ざる	やや不良	大きく外反する口縁部片で、口縁内端を上方に跳ね上げ、外端の下位に断面三角形の突帯1条巡らせる。
MJ45 Y7	第45号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N5/) ②灰色(N6/)	密 0.1～2㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面の平行文叩きはそのまま残す。内面の同心円文当て具痕は粗く横ナデを施す。
MJ45 Y8	第45号墳	須恵器 甕	体部		①にぶい黄褐色 (10YR5/3) 風化部:灰白色(5Y7/1) ②にぶい黄橙色 (10YR7/2) ～にぶい黄褐色 (10YR5/3)	密 0.1～1㎜φの長石などが極少量混ざる	良好	2片が接合。外面は格子文叩きが施されているが、大部分が風化(焼き爆ぜ？)しており不明瞭である。内面の同心円文当て具痕は部分的にナデが施されている。他に同一個体とみられる破片が2点存在する。
MJ45 Y9	第45号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N7/) ②灰白色(2.5Y7/1)	密 0.2～2㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩き後カキ目を施す。内面の同心円文当て具痕は部分的にナデが施されている。他に同一個体とみられる破片が4点存在する。
MJ45 Y10	第45号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/) ②灰色(5Y4/1)	密 0.1～2㎜φの長石などがやや多く混ざる	やや不良	外面は平行文叩きを施す。内面の平行文当て具痕は部分的にナデる。
MJ45 Y11	第45号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/) ②灰色(5Y4/1)	密 0.1～2㎜φの長石・石英などがやや多く混ざる	やや不良	外面は平行文叩き後部分的にナデを施す。内面の平行文当て具痕も軽くナデを行う。他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ45 Y12	第45号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N6/) ②灰色(N7/)	精緻 0.1～0.3㎜φの長石などが極少量混ざる	堅緻	外面は格子文叩き後軽くナデ、上位にカキ目を施す。内面は同心円文当て具痕そのまま残す。
MJ45 Y13	第45号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N5/) ②灰色(N6/)	密 0.2～2㎜φの角閃石などが極少量混ざる	良好	外面は平行文叩き後部分的にカキ目を施す。内面の同心円文当て具痕は中位やや下に境界があり、粘土板接合部とみられる。
MJ45 Y14	第45号墳	土師器 坏	底部	②(7.2) ③△1.6	①②にぶい黄橙色 (10YR7/3～6/3)	密 0.1～0.5㎜φの長石などが極少量混ざる	良好	2片が接合。平底の底部から外方に開いて体部が立ち上がる。底部残存率1/6。
MJ48 Y1	第48号墳	須恵器 坏蓋	完形復元	①(15.0) つまみ径(8.0) ③3.3	①灰色(5Y6/1) 口縁※重ね焼き露出部 灰色(5Y5/1) 灰:灰白色 (7.5Y8/2～7/2) ②灰色(5Y6/1)	密 0.1～0.5㎜φの角閃石・長石などが少量混ざる	良好	輪状つまみを有する。扁平ではあるがやや高さのある天井から内湾しつつ降下し、口縁はわずかに外反させ端部を短く下垂させる。口縁外面に重ね焼痕が残る(灰を被る)。つまみ残存率1/3.5。
MJ48 Y2	第48号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N6/) ②灰白色(2.5Y7/1)	密 0.1～2㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩き後カキ目を施す。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ48 Y3	第48号墳	須恵器 甕	体部		①②灰色(5Y6/1)	密 0.1～2㎜φのくさり礫・石英などが多く混ざる	良好	外面の平行文叩き、内面の同心円文当て具痕ともにナデを施す。
MJ48 Y4	第48号墳	須恵器 甕	底部付近か		①灰色(N5/～6/) ②灰色(N6/)	密 0.1～2㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	やや不良	外面は斜格子状に平行叩きを施す。内面は扇状文当て具痕が残る。
MJ49 Y1	第49号墳	須恵器 壺	肩部と底部		①②黄灰色(2.5Y6/1) 自然釉:暗青灰色 (5PB3/1)	密 0.1～1㎜φの角閃石などが多量に混ざる	良好	胎土・焼成具合から同一個体と見なして良い。底部外端には高台が剥離した痕跡が残る。肩部内外面は回転ナデ、外面には自然釉が少量被る。肩部残存率1/7。
MJ49 Y2	第49号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N5/～4/) ②褐灰色(10YR5/1) ～灰黄褐色(10YR5/2)	密 0.1～1㎜φのくさり礫・長石などが極少量混ざる	不良	外面の叩きは完全にナデ消されるが、同一個体とみられる他の個体を見ると平行文叩きが施されたよう であり、カキ目を雑に施す。内面は大きな原体の同心円文当て具痕を粗くナデている。他に同一個体とみられる破片(2点が接合)が存在する。
MJ49 Y3	第49号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N5/) ②灰色(N6/)	密 0.1～1㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	3片が接合。外面は平行文叩きを施す。内面は最終的に平行文当て具痕を残すが無文(同心円？)当て具痕もわずかに残している。
MJ49 Y4	第49号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/) ②灰色(N5/)	密 0.1～2㎜φの長石などがやや多く混ざる	やや不良	外面は平行文叩き後粗くナデを施す。内面の同心円文当て具痕も軽くナデる。
MJ49 Y5	第49号墳	土師器 坏	口縁部	③△2.0	①②橙色(5YR6/6)	密 0.1～1.5㎜φの長石などが極少量混ざる	良好	口縁は内湾して立ち上がり、内端を肥厚させる。内面には斜線状の暗文が見られる。
MJ49 Y6	第49号墳	土師器 皿	底～口縁部	③△1.05	①浅黄橙色(7.5YR8/4) ～橙色(2.5YR6/6) ②橙色(5YR7/6)	密 0.1～0.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	2片が接合。外面は横方向のミガキが見られるが、内面は摩滅しており不明。
MJ50 Y1	第50号墳	須恵器 甕	体部		①②灰色(5Y6/1)	密 0.2～3㎜φの長石・くさり礫などが多く混ざる	良好	外面の平行文叩き、内面の当て具痕(無文か)をナデるが消滅はしていない。
MJ50 Y2	第50号墳	須恵器 甕	体部		①②灰色(N4/)	密 0.1～1㎜φの長石・くさり礫などが多く混ざる	やや不良	外面の平行文叩きは部分的にナデを施す。内面の同心円文当て具痕はほぼナデ消されている。
MJ52 Y1	第52号墳	須恵器 甕	口縁～頸部		①灰色(5Y6/1) ②灰色(5Y6/1) ～灰オリーブ色(5Y6/2)	密 0.1～1.5㎜φの長石・角閃石などがやや多く混ざる	良好	頸基部から直立気味に頸部が立ち上がり、口縁は外反しながら大きく開く。肩部内面に同心円文当て具痕を残す。
MJ52 Y2	第52号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N6/) ②灰色(5Y6/1)	密 0.1～4㎜φの長石・角閃石などがやや多く混ざる	良好	外面は平行文叩き後カキ目が施される。内面の同心円文当て具痕そのまま残す。

法量( )は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
MJ52Y3	第52号墳	須恵器甕	体部		①暗灰色(N3/) ②灰色(5Y6/1～5/1)	密 0.1～1㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	やや不良	外面は平行文叩きを施す。内面は同心円文当て具痕を残すがナデ消されている部分もある。他に同一個体とみられる破片が2点存在する。
MJ52Y4	第52号墳	須恵器甕	底部付近か		①灰黄色(2.5Y7/2～6/2) ②灰白色(5Y7/1)～灰色(5Y5/1)	密 0.1～2㎜φの長石・石英などが多く混ざる	やや不良	外面の平行文叩きは不定方向から施され、軽くナデられている。内面の同心円文当て具痕も軽くナデられる。他に同一個体の可能性のある破片が4点存在する。
MJ52Y5	第52号墳	須恵器甕	底部付近か		①灰色(N6/～5/) ②灰色(N6/)～黄灰色(2.5Y6/1)	密 0.1～1.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は不定方向から平行文叩きが施される。内面は丁寧にナデられているが、無文当て具痕がわずかに残る。他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ52Y6	第52号墳	土師器甕	口縁部	③△2.3	①橙色(7.5YR6/6)～にぶい黄橙色(10YR7/4) ②浅黄橙色(10YR8/3)	密 0.1～0.5㎜φの長石などが極少量混ざる	良好	口縁を大きく外反させ、内端を凹ませている。胎土は精選されており、焼成具合も良い。
MJ53Y1	第53号墳	須恵器壺	肩部か		①暗灰色(N3/) ②灰色(5Y4/1)	密 0.1～4㎜φのくさり礫・長石などが少量混ざる	良好	外面の平行文叩きは丁寧にナデ消されておりわずかに残るのみである。内面の当て具は平行文か。
MJ53Y2	第53号墳	須恵器甕	口縁部	③△6.4	①黄灰色(2.5Y6/1) 自然釉:オリーブ黒色(7.5Y2/2) ②灰黄色(2.5Y6/2)	密 0.1～1.5㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	外反して大きく開く口縁で、外面に2条、端部に1条の沈線を巡らせる。内面はうすく自然釉をかぶり、外面にも一部自然釉を被る。
MJ53Y3	第53号墳	須恵器甕	体部		①灰色(N5/～6/) ②灰色(5Y4/1)	密 0.1～1㎜φのくさり礫・長石などがやや多く混ざる	やや不良	2片が接合。外面は目の粗い平行文叩きと目の細かい平行文叩きを施す。内面は扇状文当て具と平行文当て具痕が見られるが、平行文が扇状文を切る。MJ53Y4と同一個体とみられる。
MJ53Y4	第53号墳	須恵器甕	底部付近か		①②灰色(N4/)	密 0.1～2㎜φのくさり礫・長石などがやや多く混ざる	やや不良	外面には目の粗い平行文叩きが施され、内面には扇状文当て具痕が残る。MJ53Y3と同一個体とみられる。
MJ53Y5	第53号墳	須恵器甕	体部		①灰色(N6/) ②灰白色(N7/)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩き後部分的にナデを施す。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。
MJ53Y6	第53号墳	須恵器甕	底部付近か		①②灰色(N5/)	密 0.1～1㎜φの長石などがやや多く混ざる	良好	外面は不定方向から平行文叩きが施され、カキ目状の板ナデが施される。内面の当て具痕は同心円か。
MJ54Y1	第54号墳	須恵器甕	口縁～腹部	①(13.4) ③△9.0	①②オリーブ黒色(5Y3/1)～灰色(5Y5/1) 灰:灰白色(5Y8/2)	密 0.1～1.5㎜φの角閃石・長石などがやや多く混ざる	良好	球形の体部からくの字状に頸部が屈曲し、口縁は直線的に短く開く。体部の外面平行文叩きと内面同心円文当て具痕はそのまま残す。口縁～頸部片と体部片は接合せず、図上復原を行っている。他に同一個体とみられる破片が2点(口縁～頸部片と体部片)が存在する。
MJ54Y2	第54号墳	須恵器甕	頸～肩部	頸部径(17.4)	①②灰色(N4/)	密 0.1～1.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	2片が接合。屈曲気味の頸部から口縁は大きく開くものと思われる。肩部外面は横位に平行文叩きが施される。内面はナデ消されるが当て具痕がわずかに残る。頸部残存率1/7.5。
MJ54Y3	第54号墳	須恵器甕か	肩部か		①暗灰色(N3/) ②灰色(N5/)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面の平行文叩きはそのまま残す。内面の当て具痕は丁寧にナデ消すが凹みは残っている。
MJ54Y4	第54号墳	須恵器甕	体部		①灰色(N6/) ②灰白色(N7/)	密 0.1～3㎜φの長石などが少量混ざる	堅緻	外面の平行文叩きはほぼナデ消される。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。他に同一個体とみられる破片が2点存在する。
MJ54Y5	第54号墳	須恵器甕	体部		①灰色(N5/) ②灰白色(N7/)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	2片が接合。外面は平行文叩き後カキ目が密に施される。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。MJ54Y4の当て具より径が大きいためここでは別個体と判断した。
MJ54Y6	第54号墳	須恵器甕	体部		①灰色(N4/) 自然釉:灰白色(7.5Y7/2) ②灰色(N6/)	密 0.1～1㎜φの角閃石・長石などが少量混ざる	良好	外面には平行文叩きが施され、内面には同心円文当て具痕が残る。外面に自然釉が被る。
MJ54Y7	第54号墳	須恵器甕	体部		①灰色(N6/) ②灰色(5Y6/1)	密 0.1～2㎜φの角閃石・長石などが少量混ざる	良好	外面の平行文叩きは部分的にナデを施す。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。。
MJ54Y8	第54号墳	須恵器甕	底部付近か		①灰色(N4/) ②黄灰色(2.5Y6/1)	密 0.1～2㎜φの長石などが少量混ざる	良好	2片が接合。外面は不定方向から平行文叩きが施される。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。
MJ55Y1	第55号墳	須恵器坏	底～体部		①灰色(N6/) ②灰白色(2.5Y8/1～7/1)	密 0.1～0.5㎜φの角閃石などが少量混ざる	堅緻	丁寧なつくりの坏で、口径は11～12cm程度と思われる高坏坏部の可能性がある。残存率1/6。
MJ55Y2	第55号墳	須恵器壺	肩部		①黒色(2.5Y2/1) 灰:灰オリーブ色(7.5Y6/2) ②灰白色(2.5Y7/1)～黄灰色(2.5Y6/1)	精緻 0.1～0.5㎜φの長石・角閃石などが極少量混ざる	堅緻	外面は回転ナデが施されるが、格子文叩きがわずかに残る。上位に灰を少量被る。内面の同心円文当て具痕はナデ消されるが、こちらもわずかに残っている。
MJ55Y3	第55号墳	須恵器壺	底部付近か		①灰色(N5/) 自然釉:灰オリーブ色(7.5Y5/2) ②灰白色(2.5Y7/1)	精緻 0.1～0.5㎜φの角閃石などが少量混ざる	堅緻	胎土は精選されており、焼成具合も良好。内面の同心円文当て具痕を回転ナデにより消している。外面の叩きも遺存しない。外面には自然釉が薄く被る。
MJ55Y4	第55号墳	須恵器甕	口縁～肩部	①(27.9) ③△8.35	①②黄灰色(2.5Y6/1～5/1)	密 0.1～1㎜φのくさり礫・長石などが少量混ざる	やや不良	接合しない口縁~頸部片と頸~体部を図上復原した。くの字状に屈曲する頸部から口縁が大きく外反して開く。口縁下端を下垂させる。肩部外面は丁寧にナデおよびカキ目が施されるが、わずかに平行文叩きの痕跡が残る。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。口縁部残存率1/7.5。
MJ55Y5	第55号墳	須恵器甕	底部付近か		①黄灰色(2.5Y4/1) ②にぶい褐色(7.5YR6/3) 自然釉:灰白色(10YR8/1)～褐灰色(10YR5/1)	密 0.1～3㎜φのくさり礫・長石などが少量混ざる	やや不良	3片が接合(うち2片はMJ49Y)。外面は上位に平行文叩きが残るが丁寧にナデ消されている。内面は上位に径の大きな同心円文当て具痕が残り、回には平行文当て具が用いられているようだがほぼナデ消されている。胎土や焼成具合からMJ55Y5と同一個体である可能性が高い。他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ55Y6	第55号墳	須恵器甕	体部		①灰色(N4/) ②灰色(N5/)	密 0.1～1㎜φの長石などが極少量混ざる	良好	2片が接合。外面は平行文叩きを施す。内面の同心円文当て具痕は粗くナデを施す。他に同一個体とみられる破片が2点存在する。
MJ55Y7	第55号墳	須恵器甕	体部		①灰色(N4/)～暗灰色(N3/) ②灰色(N5/～4/)	密 0.1～1.5㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	外面は擬格子平行文叩き後部分的にカキ目を施す。内面は一部が櫛歯状となっている平行文当て具痕の上に同心円文当て具痕が重なる。MJ112Y14と同一個体である可能性が高い。
MJ55Y8	第55号墳	須恵器甕	体部		①②灰色(N6/)	密 0.1～3.5㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩きを施す。内面は平行文当て具?を不定方向から当てる。他に同一個体とみられる破片が3点存在する。
MJ55Y9	第55号墳	須恵器甕	底部付近か		①②灰色(N5/)	密 0.1～5㎜φの長石などがやや多く混ざる	良好	外面は平行文叩き後部分的にカキ目(4条)が施される。 内面は平行文当て具痕をそのまま残す。部分的にm字状文になっているが原体の当たり方によるものと思われる。

法量( )は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
MJ56 Y1	第56号墳	須恵器 坏	口縁部		①②灰白色(5Y7/1) ～灰色(5Y6/1)	密 0.1～0.3㎜φの長石などが極少量混ざる	良好	口縁が直線的に外方に開く。内外面回転ナデを施す。『見島総合学術調査報告』417頁第16図6と同一個体の可能性もある。
MJ56 Y2	第56号墳	須恵器 甕	底部付近か		①黒褐色(10YR3/1) ②褐灰色(10YR4/1)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	やや不良	外面は平行文叩き後軽くナデる。内面の同心円文当て具痕も部分的にナデられる。
MJ56 Y3	第56号墳	土師器 皿	底～体部		①橙色(7.5YR6/6) ②橙色(7.5YR7/6)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	2片が接合。底部から大きく開いて立ち上がる。底部外面に回転糸切り痕が残る。底部残存率1/2。
MJ58 Y1	第58号墳	須恵器 壺	肩部		①灰色(N6/) ②黄灰色(2.5Y4/1)	密 0.1～0.5㎜φの長石などが極少量混ざる	良好	2片が接合。外面の目の細かな平行文叩きはそのまま残すが、内面の当て具痕は丁寧にナデ消す。
MJ58 Y2	第58号墳	須恵器 壺	肩部		①自然釉:灰オリーブ色(7.5Y6/2～5/2) ②黄灰色(2.5Y6/1)	精緻 0.1～0.3㎜φの長石・角閃石などが極少量混ざる	堅緻	外面は全面自然釉におおわれる。内面は回転ナデが施され、当て具痕は観察できない。
MJ58 Y3	第58号墳	須恵器 甕か	肩部		①黄灰色(2.5Y4/1) ②黄灰色(2.5Y5/1)	密 0.1～2.5㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	良好	頸基部で折損している。外面はカキ目を密に施し叩きは観察できない。内面の同心円文当て具痕は軽くナデられる。
MJ58 Y4	第58号墳	須恵器 甕	体部		①灰褐色(7.5YR5/2～4/2) ②黄灰色(2.5Y6/1)	密 0.1～3㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	外面の平行文叩きはそのまま残す。内面の同心円文当て具痕は軽くナデられる。
MJ58 Y5	第58号墳	須恵器 甕	体部		①灰褐色(7.5YR5/2)～褐色(7.5YR4/4) ②にぶい黄橙色(10YR6/4)～にぶい黄褐色(10YR5/4)	密 0.1～3.5㎜φの長石・石英などが極少量混ざる	やや不良	外面は平行文叩き後粗くナデが施される。内面の当て具痕はほぼナデ消されているが、遺存する部分を見ると斜格子文当て具痕のようである。
MJ59 Y1	第59号墳	須恵器 甕	口縁部	③△6.0	①灰白色(2.5Y7/1) ②黄灰色(2.5Y6/1) 自然釉:灰オリーブ色(7.5Y5/2) 灰:灰白色(2.5Y8/1～8/2)	密 0.2～2.5㎜φのくさり礫・角閃石・長石などがやや多く混ざる	堅緻	口縁外端を断面長方形状に肥厚させ、内端も断面三角形状に肥厚させる。外面の広範囲と内端部に自然釉と灰を被る。口径は50㎝程度。MJ59Y2・3と同一個体とみられる。
MJ59 Y2	第59号墳	須恵器 甕	体部		①②黄灰色(2.5Y6/1) 自然釉:灰オリーブ色(7.5Y5/2) 灰:灰白色(2.5Y8/2)	密 0.2～3.5㎜φの角閃石・長石などがやや多く混ざる	堅緻	外面に平行文叩きを施す。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。外面に自然釉と灰を被る。MJ59Y1・3と同一個体とみられる。
MJ59 Y3	第59号墳	須恵器 甕	底部付近か		①灰色(N6/) ②黄灰色(2.5Y6/1)	密 0.2～3㎜φの角閃石・長石などがやや多く混ざる	堅緻	外面に平行文叩きを施す。内面の同心円文当て具痕は部分的にナデ消す。MJ59Y1・2と同一個体とみられる。
MJ63 Y1	第63号墳	須恵器 壺	肩部		①灰黄褐色(10YR5/2～4/2)～黒褐色(10YR3/2) ②明赤褐色(5YR5/6)	密 0.1～0.5㎜φの長石・石英などが少量混ざる	不良	外面は密にカキ目を施す。内面は回転ナデ。MJ63Y3と同一個体とみられる。他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ63 Y2	第63号墳	須恵器 壺	肩部		①灰褐色(7.5YR5/2)～褐灰色(7.5YR4/1) ②灰色(5Y6/1)	密 0.1～1.5㎜φの長石・石英などが少量混ざる	良好	外面の平行文叩きは回転ナデのためほぼ消滅している。内面の平行文当て具痕もナデにより不明瞭となっている。他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ63 Y3	第63号墳	須恵器 壺	底部	②(10.0) ③△2.1	①にぶい赤褐色(5YR5/3～5/4)～黄灰色(2.5Y4/1) ②明赤褐色(5YR5/6)	密 0.1～1㎜φの長石・石英などが少量混ざる	不良	無高台の壺底部片。底部残存率1/5。MJ63Y1と同一個体とみられる。
MJ63 Y4	第63号墳	須恵器 甕か	口縁部	①(18.4) ③△3.0	①②暗灰色(N3/)	密 0.1～1㎜φの長石・石英などが少量混ざる	良好	外反する口縁で、端部は尖り気味に外方に伸ばす。内外面とも回転ナデを施す。焼成後に端部を打ち欠いた痕跡が残ることから据部の可能性もある。口縁部残存率1/7.5。
MJ63 Y5	第63号墳	須恵器 甕	口縁部	③△3.7	①灰色(N4/)～暗灰色(N3/) ②暗青灰色(5PB4/1)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	やや不良	大きく外反する口縁で、外端の下位に断面三角形状の突帯を巡らせる。MJ63Y6とは別個体とみられる。
MJ63 Y6	第63号墳	須恵器 甕	口縁部	③△1.7	①暗灰色(N3/) ②灰白色(2.5Y7/1)～黄灰色(2.5Y6/1)	密 0.1～0.5㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	応援は大きく外反し、端部ににぶく面をとる。口縁外端下位に断面三角形の突帯を巡らせる。口径30㎝程度とみられる。
MJ63 Y7	第63号墳	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) ②灰色(N4/)	密 0.1～1.5㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	やや不良	外面の平行文叩きはナデにより不明瞭となっている。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。MJ63Y8・9と同一個体の可能性がある。
MJ63 Y8	第63号墳	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) ②灰色(N4/)	密 0.1～1㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	やや不良	外面の平行文叩き軽くナデが施される。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。MJ63Y7・9と同一個体の可能性がある。
MJ63 Y9	第63号墳	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) ②灰色(N4/)	密 0.1～1㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	やや不良	外面の平行文叩きは丁寧にナデ消される。平行文当て具痕はそのまま残す。MJ63Y7・8と同一個体の可能性がある。
MJ63 Y10	第63号墳	須恵器 甕	体部		①黒褐色(2.5Y3/2) ②黄灰色(2.5Y4/1)	密 0.1～5㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	やや不良	外面は平行文叩き後ナデが施される。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。
MJ63 Y11	第63号墳	須恵器 甕か	体部		①灰色(N4/) ②灰色(5Y4/1)	密 0.1～0.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	器壁の薄い個体。外面は平行文叩き後ナデ。内面は同心円文当て具痕を粗くナデ消しているが、部分的に平行文当て具痕が見られる。
MJ64 Y1	第64号墳	須恵器 坏蓋	天井～口縁部	①(13.8) ③1.95	①②灰色(N6/) 外面口縁外端(焼成時露出):暗灰色(N3/) 外面灰:灰白色(5Y8/1～7/2)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	扁平なドーム状の天井部からゆるやかに降下し、屈曲気味に口縁が外方に開く。口縁端部はやや外方に下垂させる。天井部中央に折損痕跡があることからつまみを有していた可能性がある。内面にヘラ記号が残る。口縁上面に灰が多量に被っており、重ね焼かれた状況を示している。口縁部残存率1/4。
MJ64 Y2	第64号墳	須恵器 甕	体部		①灰黄色(2.5Y6/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)	密 0.1～2.5㎜φの長石などがやや多く混ざる	やや不良	外面の平行文叩き、内面の同心円文当て具痕ともそのまま残す。
MJ64 Y3	第64号墳	須恵器 甕	体部		①②灰色(N5/)	密 0.1～1㎜φの長石・角閃石などが極少量混ざる	堅緻	外面は平行文叩き後ナデ、部分的にカキ目を施す。内面は丁寧にナデられているが同心円文当て具痕がかすかに残っている。
MJ64 Y4	第64号墳	須恵器 甕	体部		①②灰色(N4/)	密 0.1～2㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩きを残すが、内面は丁寧にナデ消しが施されている。かすかに残る痕跡から平行文当て具を用いたと思われる。
MJ64 Y5	第64号墳	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) 灰:灰オリーブ色(7.5Y6/2) ②灰色(N4/)	密 0.1～1㎜φの長石などが極少量混ざる	やや不良	外面は目の細かい平行文叩きが施され、薄く灰を被っている。内面の同心円文当て具痕は軽くナデられている。

法量( )は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
MJ64 Y6	第64号墳	須恵器 甕	底部付近か		①灰色(N5～4/) ②灰色(N6/)	密 0.1～1.5㎜φの角閃石・長石などが少量混ざる	良好	外面は不定方向から平行文叩きが施され、軽く ナデられている。内面は丁寧にナデられている。数ヶ所の凹みは丸石を当てた痕跡か。
MJ64 Y7	第64号墳	須恵器 甕	底部		①青灰色(5PB5/1) ～暗灰色(N3/) ②灰色(N6/～4/) 灰:灰白色(7.5Y7/2) ～灰オリーブ色 (7.5Y6/2)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は目の細かい平行文叩きを施す。内面はナデられているが当て具痕(丸石か)とみられる凹みが残っている。
MJ64 Y8	第64号墳	土師器 壺	底部		①②にぶい橙色 (7.5YR7/4)	やや粗 0.1～1.5㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	良好	外面は摩耗で調整など観察不能。内面は指押さえ痕が顕著に残る。
MJ65 Y1	第65号墳	土師器 坏か	口縁部		①②橙色(5YR6/6)	密 0.1～2㎜φの長石・石英などが少量混ざる	良好	4片が接合。口縁が直立気味に立ち上がる。端部は丸く 収める。
MJ66 Y1	第66号墳	須恵器 壺か	肩部		①黄灰色 (2.5Y5/1～4/1) 灰:灰白色(5Y8/1)～ 灰オリーブ色 (5Y4/2) ②灰色(N5/～4/)	密 0.1～3.5㎜φの長石などがやや多く混ざる	良好	外面は灰を多量に被るがカキ目が見られる。内面の同心円文当て具痕はナデ消しが図られている。
MJ66 Y2	第66号墳	須恵器 壺か	肩部		①②暗灰色(N3) 外面灰:灰白色(7.5Y7/2) ～灰オリーブ色(7.5Y6/2)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は目の細かい平行文叩きが施される。上位に灰を多く 被る。内面は粗く ナデ消しが図られているが小さな亀裂痕のある同心円文当て具痕が残る。
MJ66 Y3	第66号墳	須恵器 壺	底部	②(11.0) ③△2.05	①灰白色(5Y7/1)～ 灰色(5Y5/1) ②暗灰黄色(2.5Y5/2)	やや粗 0.1～1.5㎜φの長石などが少量混ざる	やや不良	器壁の厚い個体。底部から円筒状に体部が立ち上がる。内面の調整は粗雑。底部残存率1/7。
MJ66 Y4	第66号墳	須恵器 壺	高台		①②灰色(N4/)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	ハ字状に長く 伸びる断面長方形の高台。内端で接地すると思われる。
MJ66 Y5	第66号墳	須恵器 甕	口縁～肩部	①(18.5) ③△5.5	①②灰黄褐色 (10YR6/2～4/2)	やや粗 0.1～1.5㎜φのくさり礫・長石などが少量混ざる	やや不良	口縁は外反して短く 立ち上がる。肩部外面には平行文叩きが施される。内面の同心円文当て具痕はナデ消しが図られている。口縁部残存率1/11。
MJ66 Y6	第66号墳	須恵器 甕	体部		①褐灰色(7.5YR4/1) ②オリーブ黒色(7.5Y3/1)	密 0.1～3㎜φの長石・くさり礫などがやや多く 混ざる	やや不良	外面の平行文叩きは軽く ナデられている。内面の放射状文当て具痕も 部分的に軽く ナデならる。
MJ66 Y7	第66号墳	須恵器 甕か	体部		①②灰色(N4/)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面はカキ目が施されており叩きは観察できない。内面の同心円文当て具痕には亀裂痕が見られる。
MJ66 Y8	第66号墳	須恵器 甕	体部		①②暗灰色(N3/)	密 0.1～2㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	やや不良	外面は平行文叩き後横ナデが施される。内面には原体が小さく 目の細かい平行文当て具痕が残る。
MJ66 Y9	第66号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/) ②灰色(N5/)	密 0.1～2.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面の平行文叩きは途中で方向を違えている。内面は粗く ナデられており、当て具痕の文様不明。他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ67 Y1	第67号墳	須恵器 坏	口縁部	①(11.8) ③△3.9	①灰色(N5/～4/) ②灰色(N5/)	密 0.1～2㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	良好	直線的に外方に開く 坏で、内外面とも 回転ナデが施される。口縁部残存率1/7.5。
MJ67 Y2	第67号墳	須恵器 高台付坏	底部	②高台外端径 (7.8) ③△2.0	①灰オリーブ色(5Y6/2) ②灰色(5Y6/1)	密 0.1～1.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	体部外端に断面逆台形の小ぶりな高台が付く 。高台は全面で接地する。高台残存率1/8.5。
MJ67 Y3	第67号墳	須恵器 壺か	肩部か		①灰色(N4/) ②暗灰色(N5/) 自然釉(透明)	密 0.1～1.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は目の細かい平行文叩きが施される。内面の同心円文当て具痕はナデ消しが図られている。内面頸基部の稜弧線の方向が逆で、内面に自然釉(透明)を被ることから、壺底部の可能性がある。
MJ67 Y4	第67号墳	須恵器 壺	底～腹部	腹部径(20.4) ②高台外端 (13.6)	①灰色(5Y5/1～4/1) ～オリーブ黒色(5Y3/1) ②灰色(N5/～4/)	密 0.1～7.5㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	良好	接合しない底部と腹部を図上復原した。底部外端に断面方形の小ぶりな高台がハの字状に付く 。体部外面の下半は回転ヘラ削りが行われている。上半は回転ナデおよび不定方向のナデ、内面は回転ナデが施されている。高台残存率1/9、腹部残存率1/13。
MJ67 Y5	第67号墳	須恵器 横瓶か	胴部か	胴部径(22.0)	①灰色(N4/) ②灰色(N5/)	密 0.1～2.5㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	やや不良	外面は平行文叩き後カキ目が施される。カキ目が器面に対し垂直方向から施されていることから、円筒状の器形となる。内面は同心円文当て具痕をそのまま残す。
MJ67 Y6	第67号墳	須恵器 甕	頸～肩部		①②灰色(N5/) 外面灰:灰白色(5Y8/2)	密 0.2～3㎜φのくさり礫・長石などがやや多く 混ざる	良好	頸部接合面で折損しており、剥離面に叩き痕が見られる。肩部外面には横位の目の細かな平行文叩きが施されている。内面の同心円文当て具痕はそのまま残すが、頸接合部は横ナデが行われる。
MJ67 Y7	第67号墳	須恵器 甕か	頸～肩部		①②暗灰色(N3/)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	やや不良	器壁の薄い個体。肩部の外面は横位の平行文叩きを施す。内面には目の大きい格子文当て具痕が残る。
MJ67 Y8	第67号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N5/～6/) ②灰色(N5/)	密 0.1～4㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩き後軽く ナデられる。内面には目の粗い平行文当て具痕の 上から目の細かい平行文当て具が当てられ、ナデが施されている。
MJ67 Y9	第67号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(7.5Y5/1) ②灰色(7.5Y6/1)	密 0.1～3.5㎜φの長石などがやや多く混ざる	良好	外面は平行文叩きを施す。ヘラ状工具の当たり傷が残っている。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ67 Y10	第67号墳	須恵器 甕	底部付近		①灰白色(N7/) ～灰色(N6/～4/) ～暗灰色(N3/) ②灰白色(N7/) ～灰色(N6/) 灰:灰白色(2.5Y8/2)	精緻 0.1～0.5㎜φの角閃石などが極少量混ざる	堅緻	外面は平行文叩き後粗く カキ目を 施す。内面は同心円文当て具痕が残るが、部分的(粘土板接合部か)に強い横ナデが施されており、下位に灰を被っている。
MJ68 Y1	第68号墳	須恵器 甕	口縁～頸部	①(17.4) ③△5.3	①灰色(N4/) ～暗灰色(N3/) ②暗灰色(N3/) ～黒色(N2/)	密 0.1～1㎜φの長石などがやや多く 混ざる	良好	頸部からゆるやかに外径して口縁に至る。口縁内端をわずかに肥厚させる。
MJ68 Y2	第68号墳	須恵器 甕	肩部か		①黄灰色(2.5Y5/1) ②灰色(N5/)	密 0.1～10㎜φの花崗岩(長石・角閃石など)がやや多く 混ざる	良好	外面は平行文叩き後軽く ナデる。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。
MJ68 Y3	第68号墳	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) ②灰色(N4/)	密 0.1～2㎜φの長石・くさり礫などがやや多く 混ざる	やや不良	外面の平行文叩きはナデによりほぼ消されている。内面の平行文当て具痕はそのまま残す。
MJ68 Y4	第68号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/) 自然釉:灰白色 (7.5Y7/2) ～灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 黒色(N2/) ②灰色(N5/)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	やや不良	外面は平行文叩きを施し、内面は同心円文当て具痕を軽く ナデる。外面に自然釉を被る。

法量( )は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
MJ68 Y5	第68号墳	須恵器 甕か	体部		①暗灰色(N3/) ②灰色(N5/)	密 0.1～0.5㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	外面は目の粗い擬格子文叩きが施される。内面は目の細かい同心円文当て具痕が残る。他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ68 Y6	第68号墳	須恵器 甕か	体部		①灰色(N5/～4/) ②灰色(N4/) ～暗灰色(N3/)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	器壁の薄い個体。外面は目の細かい平行文叩きが不定方向から施される。内面の同心円文当て具痕はナデ消されるがわずかに残る。
MJ69 Y1	第69号墳	須恵器 坏	底～体部	②(11.0) ③△3.35	①灰色(5Y6/1～5/1) ②灰色(5Y6/1)	密 0.1～1.5㎜φの長石・角閃石などがやや多く 混ざる	良好	器壁の厚い個体。平底からやや内湾気味に体部が 立ち上がる。
MJ69 Y2	第69号墳	須恵器 高台付坏	底～体部	②高台外端 (6.4) ③△4.1	①灰白色 (2.5Y8/2～7/1) ～暗灰黄色(2.5Y5/2) ②灰白色(2.5Y7/1) ～黄灰色(2.5Y6/1)	密 0.1～0.5㎜φの長石・角閃石などが極少量混ざる	良好	底部外端に断面方形の小ぶりな高台が付く 。底部から外傾して直線的に体部が 立ち上がるが、口縁は軽く 外反するよう である。胎土は精選されており、つく りも シャープである。高台基部残存率1/2.5。
MJ69 Y3	第69号墳	須恵器 壺	肩部か		①②暗灰色(N3/)	密 0.1～2㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は目の細かい平行文叩きが施される。内面の同心円文当て具痕はナデ消されるがわずかに残る。胎土からMJ69Y4と同一個体である可能性が高い。他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ69 Y4	第69号墳	須恵器 壺	体部		①暗灰色(N3/) ②灰色(N4/)	密 0.1～2.5㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	内面は回転ナデ、外面は横ナデが施される。MJ69Y3と同一個体である可能性が高い。
MJ69 Y5	第69号墳	須恵器 甕	頸部		①灰色(7.5Y6/1) ②灰色(N4/) 灰:灰白色(5Y8/1)	密 0.1～2㎜φの長石などが少量混ざる	良好	頸基部で剥離している。頸部は直立気味に立ち上がるが、口縁は大きく 外反して開く と思われる。内外面とも 横ナデが施される。
MJ69 Y6	第69号墳	須恵器 甕	頸～肩部		①灰色(N5/) ～青灰色(5PB5/1) ②灰色(7.5Y5/1)	密 0.1～2㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	頸基部で剥離している。MJ69Y7・8と同一個体とみられる。
MJ69 Y7	第69号墳	須恵器 甕	体部		①灰白色(7.5Y5/1) ②灰白色(7.5Y7/1) ～灰色(7.5Y5/1) ～灰色(N5/)	密 0.1～2.5㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	9片が接合。外面は平行文叩きを 施す。内面の平行文当て具痕は部分的にナデ消される。当て具の方向は不定方向である。一部に当て具原体の単位が観察できる。MJ69Y6・8と同一個体とみられる。他に同一個体とみられる破片が8点存在する。
MJ69 Y8	第69号墳	須恵器 甕	体部		①②灰色(N5/)	密 0.1～2㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩きを 施す。内面は目の大きな平行文当て具痕(MJ69Y7と同一)の 上に目の細かい平行文当て具痕が重なる。
MJ69 Y9	第69号墳	須恵器 甕	体部		①②褐灰色(5YR4/1) ～黒褐色(5YR3/1)	精緻 0.1～2㎜φの長石・角閃石などが極少量混ざる	堅緻	外面は平行文叩きを 施す。内面は同心円文当て具痕を軽く ナデる。
MJ69 Y10	第69号墳	須恵器 甕	底部付近か		①暗灰色(N3/) ～黒色(7.5YR2/1) ②黒褐色(5YR3/1)	密 0.1～3㎜φの長石などが少量混ざる	やや不良	器壁の厚い個体。外面は不定方向から平行文叩きが施される。内面の同心円文当て具痕はほぼナデ消されている。
MJ69 Y11	第69号墳	須恵器 壺・甕	底部付近か		①②灰色(N5/)	密 0.1～4㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	良好	外面は目の細かい平行文叩きを 施す。内面の同心円文当て具痕はナデにより不明瞭になっている。
MJ70 Y1	第70号墳	須恵器 甕	体部		①灰褐色(5YR4/2) ～黒褐色(5YR3/1) ②黄灰色(2.5Y4/1)	精緻 0.1～1.5㎜φの角閃石・長石などが極少量混ざる	良好	2片が接合。外面は平行文叩きが施される。内面の同心円文当て具痕はナデが施される。
MJ70 Y2	第70号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N5) ②オリーブ黒色 (7.5Y3/1)	密 0.1～2㎜φの角閃石・くさり礫などがやや多く 混ざる	良好	外面は平行文叩きが施される。内面の平行文当て具痕は平行文が縦方向に残り、ナデ消しが図られている。
MJ70 Y3	第70号墳	須恵器 甕	底部付近か		①灰色(N4/) ～暗灰色(N3/) ②灰色(N4/)	密 0.1～2.5㎜φの長石・くさり礫などがやや多く 混ざる	良好	外面の平行文叩きは軽く ナデられている。内面は同心円文当て具痕の 上から平行文当て具が当てられている。
MJ70 Y4	第70号墳	須恵器 甕	底部付近か		①灰色(N4/) ②灰色(5Y5/1) ～灰色(N4/)	密 0.1～1㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	良好	外面は不定方向から平行文叩きが施される。内面の平行文当て具痕はほぼナデ消されている。他に同一個体とみられる破片が7点存在する。
MJ70 Y5	第70号墳	土師器 甕	体部		①にぶい赤褐色 (5YR5/4) ②橙色(7.5YR7/6)	密 0.1～1㎜φの長石・石英などが極少量混ざる	良好	製作技法は須恵器と同等(須恵器模倣)。外面は目の細かい平行文叩きが施される。内面の同心円文当て具痕は軽く ナデる。
MJ71 Y1	第71号墳	須恵器 壺か	肩部		①②灰色(N6/)	密 0.1～1.5㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	堅緻	外面は縦位の平行文叩きを施した後目の細かいカキ目を 施す。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。
MJ71 Y2	第71号墳	須恵器 甕	頸～肩部		①②灰色(N3/)	密 0.1～2㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面には平行文叩きが残るが、内面は回転ナデにより当て具痕が消されている。
MJ71 Y3	第71号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/) ②灰色(N5/～4/)	密 0.1～1㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	良好	MJ70Yの1片と接合。外面は横位の平行文叩きが施される。内面の平行文当て具痕はナデ消しが図られている。特徴からMJ70Y4と同一個体とみられる。
MJ71 Y4	第71号墳	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) ②褐灰色(10YR4/1)	密 0.1～1.5㎜φの長石などが少量混ざる	やや不良	外面の平行文叩きはそのまま残すが、内面の同心円文当て具痕は丁寧にナデ消し、わずかに残るのみである。
MJ71 Y5	第71号墳	須恵器 甕	底部付近か		①灰色(10Y5/1)～ オリーブ黒色(10Y3/1) ②灰色(N6/)	精緻 0.1～1㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	堅緻	3片が接合。MJ72Yの1片と接合する。外面はナデで不明瞭となっているが格子文または擬格子文叩きが施されている。内面の同心円文当て具痕は下位がナデ消されている。
MJ71 Y6	第71号墳	須恵器 甕か	肩部		①灰色(N5/) ②暗灰色(N3/)	密 0.1～0.5㎜φの角閃石・長石などが少量混ざる	良好	外面は目の細かい平行文叩きが施される。内面の同心円文当て具痕は軽く ナデられる。
MJ71 Y7	第71号墳	土師器 坏	底部		①②にぶい褐色 (7.5YR5/3)	密 0.1～0.5㎜φの長石などが極少量混ざる	良好	無高台平底の底部片。
MJ72 Y1	第72号墳	須恵器 坏蓋	口縁部	③△1.05	①灰色(5Y5/1) ②灰色(5Y6/1)	精緻 0.1～0.3㎜φの長石などが極少量混ざる	良好	低い天井部からわずかに屈曲して口縁が外方に開き、端部をわずかに下垂させる。内外面とも 回転ナデを施す。
MJ72 Y2	第72号墳	須恵器 甕	頸～肩部	頸部径(17.0)	①黒色(N2/) ②暗褐色(10YR3/3) 灰:淡黄色(5Y8/3) ～浅黄色(5Y7/3)	密 0.1～4㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	やや不良	頸部内面上位、肩部外面に灰を被る。肩部内面にわずかに同心円文当て具痕が残る。外面は灰により観察できない。頸部残存率1/6。
MJ72 Y3	第72号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(5Y5/1) 灰:灰白色 (2.5Y8/1～8/2) ②灰色(N6/)	密 0.1～2㎜φの長石などがやや多く 混ざる	良好	外面の灰の被りかたから肩～腹部片とみられる。外面は平行文叩きが施される。内面の同心円文当て具痕は下位を軽く ナデている。

法量( )は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
MJ72Y4	第72号墳	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) ②灰色(N4/)	密 0.1～3㎜φの長石・くさり礫などが多く混ざる	やや不良	外面は目の細かい平行文叩きが施され、内面は目の粗い平行文当て具痕が残る。
MJ72Y5	第72号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N5/) ②灰色(5Y5/1)	やや粗 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は目の粗い平行文叩きが施される。内面は目の細かい平行文当て具痕が見られ、原体の縁部が当たった痕跡が残る。
MJ72Y6	第72号墳	須恵器 甕	体部		①黄灰色 (2.5Y5/1～4/1) ～黒色(2.5Y2/1) ②灰褐色(7.5YR4/2) ～灰黄褐色(10YR4/2)	密 0.1～1㎜φの長石などがやや多く 混ざる	やや不良	外面は平行文叩きを施す。内面は同心円文当て具痕と平行文当て具痕が残るが先後関係は不明。平行文当て具痕に直交する方向に平行文当て具痕が見られる部分もある。
MJ72Y7	第72号墳	須恵器 甕	体部		①青灰色(5PB5/1) ②灰色(N5/)	密 0.1～1.5㎜φの長石・くさり礫などがやや多く 混ざる	やや不良	外面は平行文叩き後軽く ナデる。内面の同心円文当て具痕も 軽く ナデる。MJUK1Y4と同一個体の可能性がある。
MJ72Y8	第72号墳	須恵器 甕か	底部付近		①②灰色(N6/)	密 0.1～2㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	良好	外面は直交方向から平行文叩きが施されるが、原体が異なる(3条/㎝と2条/㎝)。叩き後部分的にカキ目(板ナデ)が施される。内面は同心円文当て具痕が残る。他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ72Y9	第72号墳	須恵器 甕	底部付近		①灰色(N4/) ～暗灰色(N3/) ②灰色(N4/)	密 0.1～1.5㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	外面は不定方向から平行文叩きが施される。内面は同心円文当て具の後 平行文当て具が当てられている。
MJ72Y10	第72号墳	須恵器 甕	底部付近か		①灰褐色 (5YR5/2～4/2) ②灰色(N5/～4/)	密 0.1～6㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	やや不良	2片が接合。外面は平行文叩き後ナデが施される。内面は同心円文当て具痕がわずかに残るがナデにより不明瞭となっている。他に同一個体とみられる破片が2点存在する。
MJ73Y1	第73号墳	須恵器 甕	口縁～頸部	①(22.2) ③△3.3	①極暗赤褐色 (10YR2/3)～ 赤褐色 (10R4/4) ・黄灰色(2.5Y5/1) ②暗赤褐色 (5YR3/2～3/4)	精緻 0.1～1.5㎜φの長石・角閃石などが極少量混ざる	堅緻	短く 直立する頸部から屈曲気味に口縁が大きく 開く。口縁端部は凹めてる。口縁部残存率1/13。
MJ73Y2	第73号墳	須恵器 甕	底部付近		①②灰色(N4/)	密 0.1～1.5㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	良好	2片が接合。外面は不定方向から平行文叩きが施される。内面は一部に平行文当て具痕が残るが丁寧にナデられている。
MJ75Y1	第75号墳	須恵器 坏蓋か	天井～ 口縁部	①(11.5) ③△2.9	①灰色(N5/～6/) ②灰色(N6/～5/) ～暗灰黄色(2.5Y4/2)	密 0.1～1㎜φの角閃石・長石などが少量混ざる	良好	坏H類の蓋とみたが、坏の 可能性も ある。口縁部残存率1/6。
MJ75Y2	第75号墳	須恵器 高台付坏	底部	②高台外端 (7.8) ③△2.55	①②にぶい黄橙色 (10YR6/4) ～明黄褐色(10YR6/6)	密 0.1～1㎜φの長石・石英などが極少量混ざる	不良	底部外端に断面長方形の長い高台がハの字状に付く。陶器のよう な焼成具合で、器面の風化が著しい。高台残存率1/3。
MJ75Y3	第75号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/) ②黄灰色(2.5Y6/1)	密 0.1～3㎜φの角閃石・長石などが多く混ざる	良好	外面は平行文叩きが施される。内面はほぼナデ消されているがわずかに同心円 文当て具痕が残る。MJ75Y4と同一個体とみられる。
MJ75Y4	第75号墳	須恵器 甕	底部付近		①灰色(N6/～7/) ②黄灰色(2.5Y6/1)	密 0.1～2㎜φの角閃石・長石などが多く混ざる	良好	外面は直交する方向から平行文叩きが施されるが、原体が異なる(3条/㎝と4条/㎝)。内面は平行文当て具痕が残るが一部に同心円文当て具痕も 見られる。先後関係は不明。MJ75Y3と同一個体と思われる。他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ75Y5	第75号墳	土師器 高坏	裾部	裾部径(12.2) ③△2.5	①②浅黄橙色 (7.5YR8/4)	密 0.1～1.5㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	良好	器壁が薄く つくりも シャープである。内外面とも ナデ調整。裾部残存率1/8。
MJ76Y1	第76号墳	須恵器 壺か	肩部		①②黄灰色(2.5Y5/1)	密 0.1～1㎜φの長石などが極少量混ざる	堅緻	外面は縦位の平行文叩きを 施した後 粗く カキ目を 施す。内面は完全にナデ消されているが、円盤状の凹みがわずかに残る。
MJ77・78Y1	第77・78号墳	須恵器 高台付坏	底～体部	②高台径外端 (7.2) ③△2.5	①②灰色(7.5Y6/1)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	底部外端に断面方形の小ぶりな高台が付く。高台は全面で接地する。坏部の器壁はやや厚く、外面は回転ナデ、底部内面は不定方向のナデが施される。高台残存率1/6。
MJ77・78Y2	第77・78号墳	須恵器 壺	底～体部	②(16.6) ③△6.4	①黄灰色(2.5Y6/1) ～灰色(N4/) ・暗灰色(N3/) ②黄灰色(2.5Y6/1)	密 0.1～5㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	堅緻	平底の底部外端に高台が剥離した痕跡があるが、焼成前・焼成時に剥離しており、無高台の壺として使用された可能性が高い。体部外面は縦位の平行文叩きを 施した後に回転ヘラ削りが施されている。内面には同心円文当て具痕が残る。底部残存率1/10。
MJ77・78Y3	第77・78号墳	須恵器 壺か	底部か	③△1.4	①にぶい赤褐色 (5YR5/4) ②黄灰色 (2.5Y6/1～4/1)	密 0.1～5㎜φの長石・石英などが少量混ざる	やや不良	2片が接合。外面は渦巻き状にカキ目が施されていることから提瓶の腹部などの可能性があるが、ここでは壺底部とみておく。部分的に平行文叩きが残っている。内面には平行文当て具痕が残る。
MJ77・78Y4	第77・78号墳	須恵器 横瓶	頸～肩部		①灰色(5Y6/1～5/1) ②灰色(5Y6/1)	密 0.1～2㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	小片であるが横瓶の頸部片とみられる。外面は交叉方向に平行文叩きを 施す。内面の同心円文当て具痕は粗く ナデ消す。MJ77・78Y5と同一個体とみられる。
MJ77・78Y5	第77・78号墳	須恵器 横瓶	体部		①灰白色(5Y7/1) ～灰色(5Y6/1) ②灰白色(5Y7/1) ～灰色(5Y6/1～5/1)	密 0.1～2.5㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	外面は交叉方向に平行文叩きを 施す。内面の同心円文当て具痕は粗く ナデ消す。MJ77・78Y4と同一個体とみられる。
MJ77・78Y6	第77・78号墳	須恵器 横瓶	肩～腹部		①灰白色(N7/) 自然釉:灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 灰:灰白色(2.5Y8/2) ～浅黄色(2.5Y7/3) ②灰色(5Y6/1)	精緻 0.1～0.5㎜φの角閃石などが少量混ざる	堅緻	外面に灰と自然釉を 多量に被る。外面に平行文叩き、内面に同心円文当て具痕が残る。胎土も 精選されており、焼成状態も 良好、非常に丁寧なつくりである。
MJ77・78Y7	第77・78号墳	須恵器 甕	頸～肩部	頸部径(12.0)	①灰色(N4/) ②オリーブ黒色 (5Y3/2)～黒色(N2/) 自然釉:黒色(N2/) 灰:灰白色(7.5Y8/2) ～灰オリーブ色(7.5Y5/2)	密 0.1～1.5㎜φの長石などが少量混ざる	やや不良	肩部外面に横位に目の細かい平行文叩きが施される。内面は同心円文当て具痕がわずかに残るが回転ナデにより不明瞭になっている。頸基部外面と頸部内面に自然釉・灰を 被る。頸部残存率1/8。
MJ77・78Y8	第77・78号墳	須恵器 甕	頸～肩部		①褐灰色(7.5YR4/1) ～灰褐色(7.5YR4/2) ②にぶい赤褐色 (5YR5/4) ～灰褐色(5YR4/2)	密 0.1～3㎜φの長石・石英などが少量混ざる	不良	4片が接合。肩部内面には同心円文当て具痕が残る。
MJ77・78Y9	第77・78号墳	須恵器 甕	頸～肩部		①灰色(N4/)～(5Y5/1) ②灰色(N4/)～(N6/)	密 0.1～1㎜φの長石・角閃石などがやや多く 混ざる	良好	頸接合部で剥離した破片。肩部外面は横位に平行文叩きが施されており、頸剥離面にも 同様の痕跡が残る。内面の同心円文当て具痕は軽く ナデられている。

法量( )は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
MJ77・78 Y10	第77・78号墳	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) ②褐灰色(7.5YR4/1) ～黒褐色(10YR3/2)	密 0.1～3㎜φの長石・石英などが少量混ざる	やや不良	外面は平行文叩き後部分的にカキ目(板ナデヲ)が施される。内面は径の大きな同心円文当て具痕の上から平行文当て具を当てている。
MJ79 Y1	第79号墳	須恵器 壺	肩部		①灰色(N5/～4/) ②暗青灰色(5PB4/1)	密 0.1～1.5㎜φの長石などが少量混ざる	やや不良	外面はカキ目が密に施されており、叩きは観察できない。内面の同心円文当て具痕も回転ナデにより不明瞭になっている。
MJ79 Y2	第79号墳	須恵器 甕	肩部		①暗灰色(N3/) 灰:灰白色(7.5Y8/1) ～灰オリーブ色(7.5Y4/2) ②灰色(N5/～4/)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は横位(左上がり)の平行文叩き後カキ目を施す。内面の同心円文当て具痕はナデによりやや不明瞭となっている。外面に灰を多く被る。
MJ79 Y3	第79号墳	須恵器 甕	体部		①黄灰色(2.5Y6/1) 灰:浅黄色(5Y7/3)～オリーブ黄色(5Y6/3) ②灰色(N4/)	密 0.1～2㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	堅緻	外面は平行文叩きを残し、灰を被っている。内面の同心円文当て具痕は明瞭に残る。
MJ79 Y4	第79号墳	須恵器 甕	底部付近か		①灰色(7.5Y4/1) ②灰色(7.5Y6/1～5/1)	密 0.1～4㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	良好	2片が接合。外面は交叉方向に平行文叩きを施しており、内面も対応して交差方向に平行文当て具痕が残る。内外面の平行線は一致せず交叉する。
MJ79 Y5	第79号墳	須恵器 甕	底部		①②灰色(N5/～6/)	密 0.1～4㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	良好	2片が接合。外面は平行文叩き後ナデ、カキ目(板ナデヲ)を粗く施す。内面は上位に平行文当て具痕が残るが丁寧にナデられている。ヘラ状工具による刺突痕が残っている。
MJ81 Y1	第81号墳	須恵器 甕	頸～肩部		①②灰色(N5/)	密 0.1～2㎜φの長石などが極少量混ざる	やや不良	内外面とも回転ナデが施される。
MJ81 Y2	第81号墳	須恵器 甕	体部		①オリーブ褐色(2.5Y4/4)～灰色(N4/) ②黄灰色(2.5Y4/1)	密 0.1～1㎜φの長石などが極少量混ざる	やや不良	器壁の薄い個体。外面は平行文叩き後カキ目を施す。内面の同心円文当て具痕は明瞭に残る。
MJ81 Y3	第81号墳	須恵器 甕	体部		①②灰色(5Y5/1)	密 0.1～1.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は交叉方向から平行文叩きを施す。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。
MJ81 Y4	第81号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(5Y5/1～4/1) ②灰色(5Y5/1)	密 0.1～0.3㎜φの長石などが極少量混ざる	良好	外面は平行文叩きが施される。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。
MJ81 Y5	第81号墳	須恵器 甕	底部		①②灰白色(5Y7/1)～灰色(5Y6/1)	密 0.1～1㎜φの角閃石・長石などが少量混ざる	堅緻	外面の平行文叩き、内面の同心円文当て具痕ともナデにより不明瞭となっている。
MJ82 Y1	第82号墳	須恵器 高台付坏	底～口縁部	①(14.0) ②高台外端(9.2) ③(3.9)	①灰色(N5/～4/) ②灰色(5Y5/1)	密 0.1～3㎜φの長石などがやや多く混ざる	良好	接合しない2片を図上復原した。底部外端よりやや内側に断面長方形の低い高台が付く。高台は内端で接地する。坏部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁でわずかに外反する。口径に比して器高が低い。口縁部残存率1/7。
MJ82 Y2	第82号墳	須恵器 壺	頸～肩部	頸部径(11.6)	①②黄灰色(2.5Y6/1) 自然釉:オリーブ灰色(10Y4/2) ～にぶい黄橙色(10YR7/3)	密 0.1～1㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	2片が接合。器壁の薄い個体。シャープなつくりで焼成状態も良好。外面は灰を被り叩き痕が不明瞭であるが、同一個体とみられる別の破片を見ると平行文叩き(2.5条/㎝)が施されている。内面は同心円文当て具痕を横ナデする。頸部残存率1/8。
MJ82 Y3	第82号墳	須恵器 壺か	頸～肩部		①灰褐色(7.5YR4/2) ②灰色(5Y4/1)	密 0.1～0.3㎜φの長石などが極少量混ざる	やや不良	器壁が薄くシャープなつくり。外面の格子文叩き、内面の同心円文当て具痕ともナデによりやや不明瞭となっている。MJ82Y4と同一個体の可能性がある。他に同一個体とみられる破片が3点存在する。
MJ82 Y4	第82号墳	須恵器 壺か	体部		①灰赤色(2.5YR4/2)～灰色(N5/) ～暗灰黄色(2.5Y5/2) ②暗灰黄色(2.5Y5/2)	密 0.1～1㎜φの長石・角閃石などが極少量混ざる	良好	外面の目の大きな格子文叩きは、格子の中に「×」が刻まれている部分がある。内面の平行文当て具痕は斜め方向に木目が走っている。MJ82Y3と同一個体の可能性がある。
MJ82 Y5	第82号墳	須恵器 甕	口縁～肩部	①(30.1) ③△7.3	①黄灰色(2.5Y4/1) 灰:浅黄色(2.5Y7/3) ②黄灰色(2.5Y4/1) ～灰オリーブ色(5Y4/2)	密 0.1～5㎜φのくさり礫・石英・角閃石などが少量混ざる	良好	4片が接合。肩部から屈曲し口縁が直線的に短く開く。口縁端部は面を取る。肩部の外面は平行文叩きを、内面は同心円文当て具痕をそのまま残す。MJ82Y6と同一個体とみられる。他に同一個体とみられる破片が17点存在するが接合しない。口縁部残存率1/6.5。
MJ82 Y6	第82号墳	須恵器 甕	底部		①暗灰黄色(2.5Y5/2) ②灰オリーブ色(5Y5/2)	密 0.1～2.5㎜φのくさり礫・石英・角閃石などが少量混ざる	良好	2片が接合。外面は平行文叩きを方向を違えて施した後軽くナデる。内面の同心円文当て具痕は楕円形の当て具とみられる。MJ82Y5と同一個体とみられる。
MJ82 Y7	第82号墳	須恵器 甕	口縁部	③△5.1	①灰色(5Y6/1～5/1) ②灰黄色(2.5Y6/2) ～黄灰色(2.5Y6/1)	やや粗 0.1～1.5㎜φの長石などが多く混ざる	やや不良	頸部から外傾して口縁が立ち上がる。頸基部外面に板状工具の圧痕が見られる。
MJ82 Y8	第82号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(7.5Y4/1) ②灰色(N6/)	密 0.1～2㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は目の細かい平行文叩きが施される。内面は平行文当て具痕が明瞭に残るが、指押さえ痕が顕著に残る。
MJ82 Y9	第82号墳	須恵器 甕	底部か		①②灰色(N5/)	密 0.1～0.5㎜φの長石などが極少量混ざる	やや不良	外面の平行文叩きはナデにより不明瞭となっている。内面の同心円文当て具痕も部分的にナデが施される。他に同一個体とみられる破片が2点存在する。
MJ82 Y10	第82号墳	須恵器 甕	底部		①黄灰色(2.5Y5/1)～暗灰黄色(2.5Y5/2) ②灰色(7.5Y6/1)	密 0.1～0.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩き後部分的にカキ目を施す。内面の同心円文当て具痕は部分的に縦方向にナデる。
MJ82 Y11	第82号墳	須恵器 甕か	底部		①暗灰色(N3/)～灰色(N4/) ②青灰色(5PB6/1～5/1)	密 0.1～1㎜φの長石などが極少量混ざる	良好	3片が接合。外面は目の細かな平行文叩き後丁寧にカキ目を施している。内面は縦方向に丁寧にナデるが、平行文当て具痕がわずかに残る。
MJ83 Y1	第83号墳	須恵器 甕	底部付近か		①灰色(5Y4/1) ②灰色(5Y6/1～5/1)	密 0.1～2㎜φの長石・角閃石などが極少量混ざる	良好	2片が接合。器壁の薄い個体。外面は平行文叩きが施される。内面の平行文当て具痕はナデ消され不明瞭となっている。
MJ83 Y2	第83号墳	須恵器 甕	底部付近か		①②灰白色(2.5Y8/2)	密 0.1～1㎜φの長石・石英などが極少量混ざる	不良	風化の著しい個体。外面は平行文叩きが施され、内面には同心円文当て具痕が残る。
MJ83 Y3	第83号墳	土師器 坏	口縁部	③△2.5	①②浅黄橙色(7.5YR8/4)	密 0.1㎜φの長石などが極少量混ざる	良好	口縁が直線的に外方に大きく開く。
MJ84か Y1	第84号墳か	須恵器 壺	底～体部	②(10.6)	①②灰白色(2.5Y7/1)	精緻 0.1～0.5㎜φの長石などが極少量混ざる	堅緻	底部から体部が直立気味に立ち上がり、円筒状の器形となる。高台の有無は不明。内外面回転ナデを施す。底部残存率1/10。
MJ84か Y2	第84号墳か	須恵器 甕	頸～肩部	頸部径(17.8)	①②灰色(N5/)	密 0.1～1.5㎜φの長石などが極少量混ざる	良好	肩部外面はカキ目が密に施され、叩き痕は観察不能。内面の同心円文当て具痕は上位が回転ナデにより消されているが下位は明瞭に残る。頸部内外面は回転ナデを施す。頸部残存率1/6。
MJ84か Y3	第84号墳か	須恵器 甕	体部		①灰色(N5/) ②灰色(N6/)	密 0.1～2.5㎜φの長石・石英などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩きを施す。内面の同心円文当て具痕はナデにより不明瞭となっている。
MJ85 Y1	第85号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N5/) ②灰色(N6/)	密 0.1～1㎜φの長石・チャートなどが少量混ざる	やや不良	外面は平行文叩き後カキ目が施される。内面は同心円文当て具痕の上に部分的に縦位の平行文当て具痕が残る。

法量( )は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
MJ100 Y1	第100号墳	須恵器 壺	頸～肩部		①灰色(N4/) ②灰黄色(2.5Y6/2)	密 0.1～0.5㎜φの長石などが極少量混ざる	やや不良	器壁のやや厚い個体。外面回転ナデ、内面ナデを施す。
MJ100 Y2	第100号墳	須恵器 壺	底部	③△2.2	①暗灰色(N3/) ②黒褐色(2.5Y3/2)	密 0.1～1㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	無高台の壺底部片。内面回転ナデ、外面ナデを施す。
MJ100 Y3	第100号墳	須恵器 甕	肩部		①黄灰色(2.5Y5/1) ②灰黄褐色(10YR5/2)	密 0.1～1.5㎜φの長石・石英などが少量混ざる	やや不良	外面は平行文叩き後上位にカキ目を施す。内面は同心円文当て具痕をそのまま残すが部分的に指ナデが見られる。
MJ100 Y4	第100号墳	須恵器 甕	体部		①灰黄色(2.5Y6/2) 黒斑部:灰色(N4/) ～暗灰色(N3/) ②黄灰色(2.5Y5/1) ～灰色(N5/～4/)	密 0.1～1㎜φの長石などが極少量混ざる	良好	外面は目の粗い平行文叩きを交叉方向に施す。内面は同心円文当て具痕と扇状文当て具痕が残る。MJ100Y5と同一個体とみられる。
MJ100 Y5	第100号墳	須恵器 甕	底部付近か		①暗灰黄色(2.5Y5/2) 黒斑部:灰色(N4/) ～暗灰色(N3/) ②灰色(N5/～4/)	密 0.1～1㎜φの長石などが極少量混ざる	良好	外面は目の粗い平行文叩きを施した後軽くナデる。内面は目の細かい平行文当て具痕を軽くナデる。MJ100Y4と同一個体とみられる。
MJ100 Y6	第100号墳	須恵器 甕	底部付近か		①暗灰色(N3/) ②灰色(N4/)	密 0.1～14㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	外面は目の細かい平行文叩きを施す。内面には同心円文当て具痕が残る。
MJ101 Y1	第101号墳	須恵器 甕	体部		①②(N6/)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	2片が接合。外面は平行文叩き後部分的なカキ目を施す。内面の同心円文当て具痕は軽くナデられている。
MJ101 Y2	第101号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N6/) ②灰色(N5/)	やや粗 0.1～6.5㎜φの石英・くさり礫などが多量に混ざる	やや不良	2片が接合。外面は平行文叩きを施す。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ101 Y3	第101号墳	須恵器 甕	底部付近か		①灰色(N5/～4/) ②暗灰色(N3/)	密 0.1～5㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩き後軽くナデる。内面の平行文当て具痕は部分的にナデる。
MJ103 Y1	第103号墳	須恵器 壺	底部付近		①灰色(N6/) ②灰白色(2.5Y7/1)	密 0.1～3㎜φの長石などが少量混ざる	良好	底部付近の破片で、体部は外方に大きく開く。内外面とも回転ナデを施す。底部付近残存率1/7。
MJ103 Y2	第103号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(5Y4/1) ②灰色(5Y5/1)	密 0.2～3㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	外面に目の粗い平行文叩きを施す。内面の同心円文当て具痕は部分的にナデる。他に同一個体とみられる破片が2点存在する。
MJ103 Y3	第103号墳	須恵器 甕	底部		①黄灰色(2.5Y5/1) ②黄灰色(2.5Y6/1)	やや粗 0.1～6.5㎜φの石英・長石などが多く混ざる	良好	バイ面は凹みの浅い平行文叩きが残る。内面の同心円文当て具痕は軽くナデられている。
MJ105 Y1	第105号墳	須恵器 坏蓋	天井部	つまみ径 (8.0) ③△1.8	①橙色(7.5YR6/6) ～黄灰色(2.5Y6/1) ②橙色(5YR6/6) ～暗灰色(N3/)	密 0.1～3㎜φの長石・石英などが少量混ざる	やや不良	輪状つまみを有する蓋で、つくりは丁寧だがやや酸化焼成となっている。つまみ残存率1/3。
MJ105 Y2	第105号墳	須恵器 甕	口縁～肩部	頸部径 (30.0)	①黒色(N2/) ～灰色(N5/) ②灰色(N5/)	やや粗 0.1～2㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	やや不良	接合する2片を含め4片から図上復原を行った。屈曲気味に折れる頸部から直線的に口縁が開く。口縁端部を強く外反させ、内端を凹ませている。外面には沈線を巡らせ文様帯とし、少なくとも上下2段の櫛描波状文が施される。頸基部外面に砂と灰が付着している。肩部の外面は右上がりの平行文叩きが施され、頸部付近は横ナデが行われる。内面の平行文当て具痕は不定方向で、軽くナデられている。MJ105Y3と同一個体とみられる。他に同一個体とみられる頸部片、肩部片がそれぞれ1点存在する。
MJ105 Y3	第105号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/) ②灰色(N5/)	やや粗 0.1～6.5㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	やや不良	4片が接合。外面は平行文叩き後軽くナデる。内面の平行文当て具は交叉方向から当てられており、格子状となっている。MJ105Y2と同一個体とみられる。
MJ105 Y4	第105号墳	須恵器 甕	底部付近		①灰色(N4/) ②灰色(N5/)	密 0.1～2㎜φの長石などが少量混ざる	やや不良	外面は平行文叩き後部分的にカキ目が施される。内面の同心円文当て具には2種(文様幅の太い・細い)が用いられている。
MJ107 Y1	第107号墳	須恵器 壺	肩部か		①暗灰色(N3/) 灰:灰白色(2.5Y8/1) ～浅黄色(2.5Y7/3) ②灰色(N4/)	密 0.1～1.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は目の細かい平行文叩きが施されるが、灰を多量に被っており不明瞭となっている。内面は同心円文当て具痕の上に平行文当て具痕が重なる。MJ107Y2と同一個体の可能性がある。
MJ107 Y2	第107号墳	須恵器 壺	肩部か		①暗灰色(N3/) ・褐灰色(10YR5/1) 灰:灰白色(2.5Y8/2) ②灰色N4/)	密 0.1～2㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	良好	外面は右上がりの平行文叩きが施される。内面の平行文当て具痕の下位に同心円文当て具痕がわずかに残っている。MJ107Y1と同一個体の可能性がある。
MJ107 Y3	第107号墳	須恵器 甕	体部		①②灰色(N4/)	密 0.1～0.5㎜φの長石などがやや多く混ざる	良好	外面は平行文叩きが施される。内面には平行文当て具痕が残る。
MJ112 Y1	第112号墳	須恵器 坏蓋	天井～ 口縁部	①(13.0) ③2.9 つまみ径(7.8)	①灰色(N4/) ②灰色(N5/)	精緻 0.1～0.3㎜φの長石などが極少量混ざる	良好	輪状つまみを有する蓋。天井からくの字状に降下し、口縁端部をわずかに下垂させる。内面天井部はミガキ状に平滑となっていることから、硯として使用された可能性もある。口縁部残存率1/4。
MJ112 Y2	第112号墳	須恵器 坏	底～体部	②(6.5) ③△2.8	①浅黄色(2.5Y7/3) ～にぶい黄橙色 (10YR6/3) ②灰黄色(2.5Y7/2)	密 0.1～0.5㎜φの角閃石・長石などが少量混ざる	良好	平底だが底部中央がやや凹む。体部は直線的に外方に延びる。底部残存率1/2。
MJ112 Y3	第112号墳	須恵器 壺	底～体部	②(10.2) ③△4.85	①黒褐色(2.5Y3/2) ～灰黄褐色(10YR4/2) ②黒褐色(2.5Y3/1)	密 0.1～0.3㎜φの長石・くさり礫などが少量混ざる	良好	3片が接合。小さな底部から体部がやや外方に直線的に立ち上がる。底部外端に高台が剥離したような痕跡が残るが、焼成状態に変化はない。底部残存率1/2。
MJ112 Y4	第112号墳	須恵器 壺	肩部		①にぶい赤褐色 (5YR4/3) ②にぶい赤褐色 (5YR5/6)	密 0.1～1㎜φの長石などが極少量混ざる	不良	陶器のような焼成具合となっている。外面には密にカキ目が施され、内面は回転ナデを施している。叩き、当て具痕は観察されない。
MJ112 Y5	第112号墳	須恵器 壺か	体部		①黄灰色(2.5Y4/1) ②灰色(N6/)	精緻 0.1～0.3㎜φの長石などが極少量混ざる	堅緻	外面は不定方向から格子文(擬格子文か？)叩きが行われた後にナデが施される。内面の同心円文当て具痕は部分的にナデられる。
MJ112 Y6	第112号墳	須恵器 横瓶	頸～肩部		①灰色(5Y6/1～5/1) ②灰色(N6/)	密 0.1～2㎜φの長石・角閃石などが極少量混ざる	堅緻	横瓶の天井部から腹部への破片で、頸部の立ち上がりがわずかに見られる。天井部外面には平行文叩きが行われ、腹部から天井部にかけてカキ目が施されているが連続的なものではない。内面の平行文当て具は天井部から腹部の順に当てられている。MJ112Y7・8と同一個体とみられ、他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ112 Y7	第112号墳	須恵器 横瓶	側腹部		①灰色(5Y6/1～5/1) ②灰色(N6/)	密 0.1～2㎜φの長石・角閃石などが極少量混ざる	堅緻	閉塞粘土円盤周囲の破片。円盤接合部が剥離しており叩き痕が残る。外面は同心円状にカキ目が施される。内面は同心円文当て具痕と円盤接合のためのナデが残っている。MJ112Y6・8と同一個体とみられる。
MJ112 Y8	第112号墳	須恵器 横瓶	側腹部		①灰色(5Y6/1～5/1) ②灰色(N6/)	密 0.1～2㎜φの長石・角閃石などが極少量混ざる	堅緻	外面は渦巻き状にカキ目が施される。内面は丁寧にナデているが、閉塞粘土円盤接合部の剥離面などに目の細かな布目が残っている。MJ112Y6・7と同一個体とみられる。

法量( )は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
MJ112Y9	第112号墳	須恵器 甕	口縁 ～肩部	①(15.2) 頸部径(14.9) ③△4.2	①灰色(5Y5/1) ～暗灰色(N3/) ②灰色(N5/) ～暗灰色(N3/)	密 0.1～4㎜φの長石・角閃石などがやや多く 混ざる	良好	後接は外反して短く 立ち上がる。肩部外面は平行文叩き、内面は同心円文当て具痕が残る。内面の頸-肩境界部に紐圧痕が残る。頸部残存率1/6.5。
MJ112Y10	第112号墳	須恵器 甕	頸～肩部	頸部径(14.6)	①灰色(N4/) ～黒色(N1.5/) 灰:灰白色(7.5Y7/2) ②灰色(N4/) ～暗灰色(N3/)	密 0.1～3.5㎜φの長石などが少量混ざる	やや不良	肩部外面の平行文叩きをそのまま残す。内面の同心円文当て具痕は軽く ナデる。頸部残存率1/7。
MJ112Y11	第112号墳	須恵器 甕	頸～肩部		①②灰色(5Y6/1) 外面灰:灰白色(5Y8/2)	密 0.1～3.5㎜φの長石・角閃石などが極少量混ざる	良好	外面は左上がりの平行文叩き後カキ目が施される。内面は回転ナデが施されるが同心円文当て具痕が明瞭に残っている。
MJ112Y12	第112号墳	須恵器 甕	頸～肩部		①灰色(N5/) ②黄灰色(2.5Y6/1)	密 0.1～4㎜φの角閃石・長石などがやや多く 混ざる	良好	肩部外面は右上がりの平行文叩きをそのまま残す。内面の同心円文当て具痕の上位は回転ナデにより消えかかっている。胎土は角閃石が目立つ。他に同一個体とみられる頸～肩部片が1点存在する。
MJ112Y13	第112号墳	須恵器 甕	体部		①灰黄色(2.5Y6/2) ～灰色(N4/) ②灰色(5Y6/1)	密 0.1～1.5㎜φの長石などが多量に混ざる	良好	外面は擬格子文叩きを行った後部分的にカキ目を施している。内面の同心円文当て具痕は原体の亀裂が見られる。
MJ112Y14	第112号墳	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) ②灰色(N4/)	密 0.1～1㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	外面は擬格子文叩きが施される。内面は平行文当て具痕の 上から径の大きな同心円文当て具が当てられている。平行文当て具痕は一部が櫛歯状になっている。MJ55Y7と同一個体である可能性が高い。
MJ112Y15	第112号墳	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) ②黄灰色(2.5Y4/1)	密 0.1～1.5㎜φの長石・角閃石などがやや多く 混ざる	良好	外面は目の細かな平行文叩きを施す。内面は平行文当て具痕が残る。MJ112Y18と同一個体とみられる。
MJ112Y16	第112号墳	須恵器 甕	体部		①黄灰色(2.5Y6/1) ②灰白色(2.5Y7/1)	密 0.2～1.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は縦及び右上がりの平行文叩きが施され、粗く カキ目が施される。内面の同心円文当て具痕は明瞭に残るが、上位は横ナデが施される。内面に数ヶ所火膨れを起こしている。
MJ112Y17	第112号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/) ②灰色(5Y6/1)	密 0.1～6㎜φの長石などが多量に混ざる	良好	2片が接合。外面は横または左上がりの平行文叩きが施される。内面は同心円文当て具痕の 上から部分的に 平行文当て具が当てられている。
MJ112Y18	第112号墳	須恵器 甕	底部付近か		①暗灰色(N3/) ②黄灰色(2.5Y4/1)	密 0.1～1.5㎜φの長石・角閃石などがやや多く 混ざる	良好	外面は擬格子文叩き後ナデが施される。内面は目の粗い 平行文(格子文か)当て具痕の 上から径の大きな同心円文当て具が当てられている。MJ112Y15と同一個体とみられる。
MJ112Y19	第112号墳	須恵器 甕	底部付近か		①浅黄色(2.5Y7/3) ②灰色(5Y6/1)	密 0.1～1㎜φの長石・角閃石などがやや多く 混ざる	良好	外面は斜格子方向に目の粗い 平行文叩き、目の細かい 平行文叩きを施し、軽く ナデる。内面の同心円文当て具痕は上位から下位に当てられている。
MJ112Y20	第112号墳	須恵器 甕	底部付近か		①灰色(N6/) ②灰色(5Y6/1)	密 0.1～1㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩き後軽く ナデる。内面は径の小さな同心円文当て具痕が残り、部分的に横ナデが施される。
MJ112Y21	第112号墳	須恵器 甕	底部付近か		①灰色(5Y5/1) ～灰色(N5/) ②灰色(N5/～4/	密 0.1～1.5㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	2片が接合。外面は平行文叩きが施される。内面の当て具痕はほぼ完全にナデ消されているが、同心円文当て具と見られる凹みがわずかに残る。
MJ113-114Y1	第113-114号墳	須恵器 坏	口縁部	③△2.2	①②灰色(5Y6/1～4/1)	密 0.1～1.5㎜φの石英・くさり礫などが少量混ざる	良好	体部がわずかに内湾気味に 立ち上がり、口縁外端を 玉縁状に 肥厚させる。内外面回転ナデを 施す。
MJ113-114Y2	第113-114号墳	須恵器 高坏	脚柱部		①②灰色(N5/) ～暗灰色(N3/)	密 0.1～0.3㎜φの長石などが極少量混ざる	良好	高坏脚柱部としたが、内面にしぼり痕がないことから長頸壺頸部の可能性もある。
MJ113-114Y3	第113-114号墳	須恵器 甕	口縁～肩部	①(12.8) ③△5.1	①灰黄色(2.5Y6/2) ～浅黄色(2.5Y7/3) ②黄灰色(2.5Y5/1) ～灰黄色(2.5Y6/2)	密 0.1～0.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	なで肩の 肩部から口縁が短く 外反して 立ち上がる。口縁端部は 凹ませる。肩部外面は斜格子方向に 平行文叩きを 施す。内面には 目の細かい 同心円文当て具痕がわずかに残る。頸部残存率1/9。MJ113-114Y4と同一個体の 可能性がある。他に 同一個体とみられる破片が4点存在する。
MJ113-114Y4	第113-114号墳	須恵器 甕	体部		①灰黄色(2.5Y6/2) 黄灰色(2.5Y6/1) ②灰黄色(2.5Y7/2) ～灰白色(2.5Y7/1)	密 0.1～0.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	2片が接合。外面は縦位の平行文叩きを 施す。内面の同心円文当て具痕の原体は楕円形である。
MJ113-114Y5	第113-114号墳	須恵器 甕	口縁～肩部	①(21.6) ③△8.3	①黒色(N2/) ～灰色(5Y5/1) ②灰色(5Y4/1) ～暗灰黄色(2.5Y5/2)	密 0.1～7㎜φの長石などが極少量混ざる	やや不良	接合しない2片(口縁～頸部、頸～肩部(2片が接合))を図上復原した。器壁の薄い個体で、口縁は直線的に 短く 外方に開く。口縁外端を 断面三角形状に 肥厚させる。肩部の外面は横位に 目の粗い 平行文叩きを 施す。内面には 目の細かい 同心円文当て具痕が残る。MJ113-114Y6は同一個体の 腹部付近とみられる。他に 同一個体とみられる破片が5点存在する。
MJ113-114Y6	第113-114号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/) ～暗灰黄色(2.5Y5/2) ②暗灰黄色(2.5Y5/2)	密 0.1～1.5㎜φの長石などが極少量混ざる	やや不良	外面には不定方向からの平行文叩きが施される。内面には目の粗い 平行文(格子文か？)当て具痕が残るがほぼナデ消されている。
MJ113-114Y7	第113-114号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/) ～暗灰色(N3/) 灰:浅黄色(5Y7/3) ②灰色(N4/)	密 0.1～2.5㎜φの長石などが少量混ざる	やや不良	外面は上下で平行文叩きの方向を 違えている。内面は下位に横位の平行文当て具痕、上位に同心円文当て具痕が残るが、軽く ナデられており不明瞭な部分がある。外面に灰を少量被る。
MJ113-114Y8	第113-114号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(5Y6/1～5/1) ②黄灰色(2.5Y6/1)	密 0.1～2㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は目の細かい 平行文叩きが施される。内面は横また斜めの平行文当て具痕が残るが、部分的に縦方向のナデが施されている。
MJ113-114Y9	第113-114号墳	緑釉陶器 瓶か	体部		素地:灰白色(2.5Y8/2) 釉薬:淡黄色(7.5Y8/3) ～浅黄色(7.5Y7/3)	密 0.1～0.3㎜φの長石などが極少量混ざる	良好	器壁が厚いことから供膳具ではないと思われる。釉薬の発色も 良好。第113号墳出土花瓶(乗安1983)と同一個体か。
MJ116Y1	第116号墳	須恵器 甕	頸～肩部		①灰色(N4/) 灰:灰白色 (5Y8/2～7/2) ②灰色(N5/)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面に縦位の平行文叩きが施される。内面の同心円文当て具痕はナデにより不明瞭となっている。外面には灰が多量に被っている。他に同一個体とみられる破片が1点存在する。
MJ116Y2	第116号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N6/) ②暗灰色(N3/)	密 0.1～2.5㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は平行文叩き後粗く カキ目が施されている。内面の目の大きな同心円文当て具痕は部分的にナデられている。
MJ116Y3	第116号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N5/) 灰:浅黄色(5Y7/3)～ オリーブ黄色 (5Y6/3) ②灰色(N6/)	密 0.1～0.5㎜φの長石などが極少量混ざる	良好	2片が接合。器壁が薄く つくりも 丁寧。外面の平行文叩きを軽く ナデる。内面の同心円文当て具痕も ナデられており、上位ほど綿密にナデる。
MJ117Y1	第117号墳	須恵器 甕	頸～肩部		①灰色(N4/) ②暗灰色(N3/)	密 0.1～2㎜φの長石・くさり礫などがやや多く 混ざる	良好	外面は横位の平行文叩きが施される。内面は丁寧にナデられているが、同心円文当て具痕がわずかに残る。頸部剥離面に平行叩き痕が残っている。

法量( )は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
MJ117 Y2	第117号墳	須恵器 甕	体部		①②黄灰色(2.5Y5/1)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外面は目の粗い平行文叩きを施す。内面は下位に同心円文当て具痕、上位に平行文当て具痕が残るが、丁寧にナデを施している。
MJ117 Y3	第117号墳	須恵器 不明	不明		①②灰色(N6/)	密 0.1～2.5㎜φの長石・角閃石などがやや多く 混ざる	良好	縦横ともにほぼ湾曲しない板状の須恵器。外面は平行文叩きが行われ、部分的にカキ目が施される。内面の同心円文当て具痕はナデにより不明瞭とんっている。
MJ117 Y4	第117号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(5Y5/1) ②青灰色(5PB5/1～6/1)	密 0.1～1.5㎜φの長石・角閃石などがやや多く 混ざる	良好	外面は不定方向から平行文叩きが施されている。内面はナデにより不明瞭となっているが平行文(格子文か)当て具痕が用いられているよう に見える。
MJ117 Y5	第117号墳	須恵器 甕	底部		①灰色(N5/～4/) ②灰色(N5/)	密 0.1～1.5㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる		2片が接合。外面は不定方向から平行文叩きを施す。内面は丁寧にナデられているが、同心円文当て具痕がかすかに残る。
MJ120 Y1	第120号墳	須恵器 壺	体部		①暗灰黄色 (2.5Y5/2～4/2) ②黄灰色(2.5Y5/1)	密 0.1～1㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	外面はナデ、内面は回転ナデが施される。残存率1/8。
MJ120 Y2	第120号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N6/) ②黄灰色(2.5Y6/1)	密 0.1～3㎜φの長石・くさり礫などがやや多く 混ざる	良好	器壁の厚い個体。外面は平行文叩き後ナデ、内面も 同心円文当て具痕をナデている。
MJ UK1 Y1	不明墳1	須恵器 甕	口縁～肩部	頸部径 (17.6)	①暗灰色(N3/) 灰:灰オリーブ色 (7.5Y6/2) ②褐色(10YR5/1～4/1)	密 0.1～1.5㎜φの長石・角閃石などがやや多く 混ざる	良好	頸部から外反して大きく 口縁が開く。肩部の外面は灰を被り不明瞭となっているが平行文叩きが観察される。内面の同心円文当て具痕はナデにより不明瞭となっている。頸部残存率1/5。
MJ UK1 Y2	不明墳1	須恵器 甕	頸～肩部		①黄灰色(2.5Y6/1～4/1) ②黄灰色(2.5Y6/1)	精緻 0.1～0.5㎜φの長石・角閃石などが極少量混ざる	やや不良	肩部外面は密にカキ目が施されているが、縦位の平行文叩きがかすかに残る。内面の同心円文当て具痕も 縦方向のナデにより不明瞭となっている。胎土・成形は丁寧であるが焼成不良である。
MJ UK1 Y3	不明墳1	須恵器 甕	底部		①にぶい褐色(7.5YR5/4) ～褐灰色(10YR5/1) ②にぶい黄橙色 (10YR7/4～6/4)	密 0.1～2.5㎜φの石英・長石などが極少量混ざる	やや不良	外面は不定方向から平行文叩きを施し、軽く ナデる。内面は格子文当て具痕が残るが、ナデにより不明瞭となっている。
MJ UK1 Y4	不明墳1	須恵器 甕	底部付近か		①②暗青灰色(5PB4/1)	密 0.1～2.5㎜φのくさり礫・長石などが少量混ざる	やや不良	2片が接合。外面は平行文叩き後ナデを施す。内面は同心円文当て具痕が残る。MJ72Y7と同一個体の可能性がある。
MJ UK2 Y1	不明墳2	須恵器 甕	口縁部	③△2.5	①②黒色(10YR2/1)	密 0.1～1㎜φの長石などが少量混ざる	良好	外反して開く 口縁。口縁外端をやや肥厚させ、その下位に断面にぶい三角形状の突帯を1条巡らせる。
MJ UK2 Y2	不明墳2	須恵器 甕	体部		①②灰黄色(2.5Y7/2)	密 0.1～1㎜φの長石・角閃石などが少量混ざる	良好	外面の平行文叩き、内面の同心円文当て具痕をそのまま残す。

第Ⅲ章　まとめ

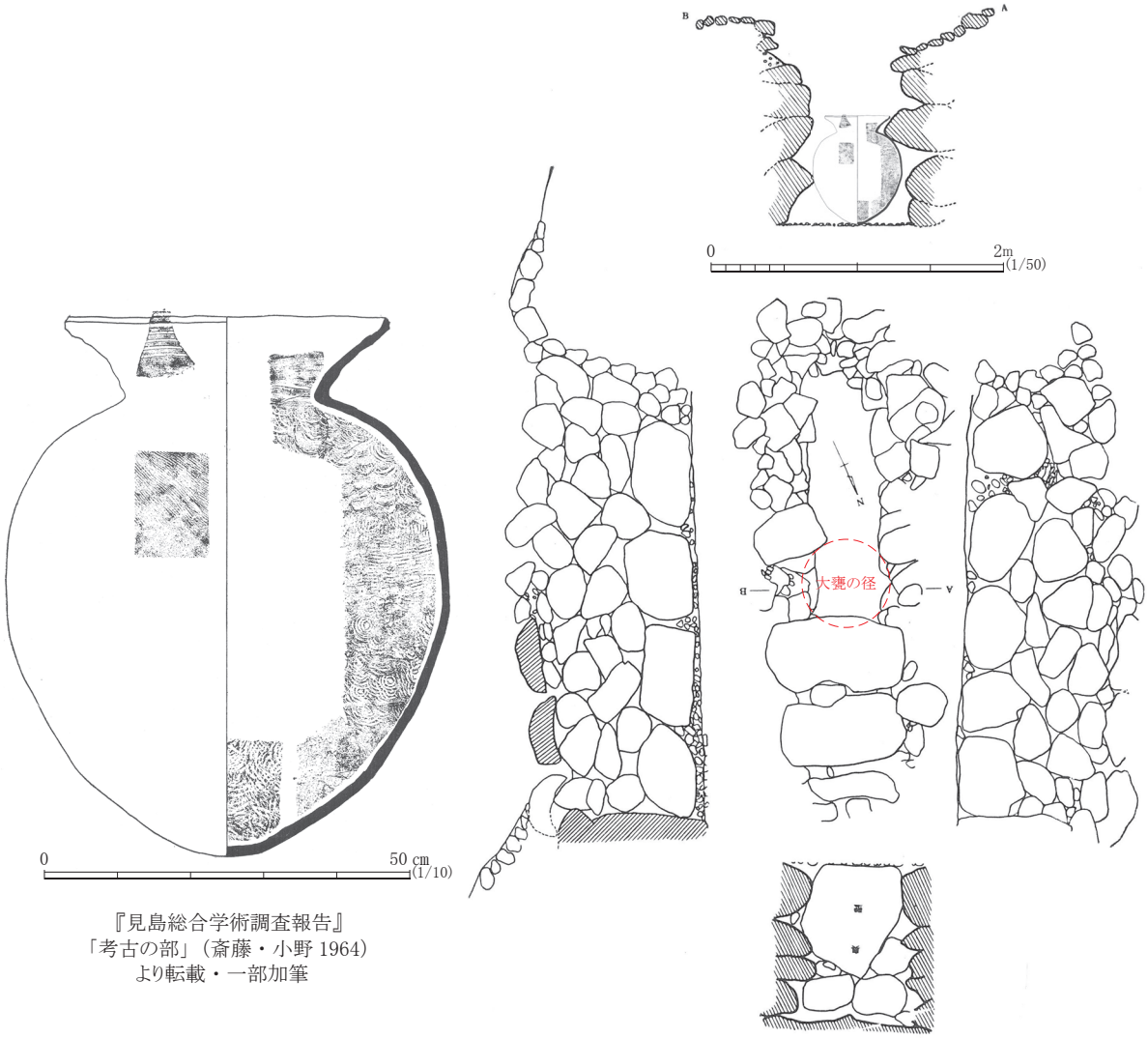
1．見島ジーコンボ古墳群東部域採取資料概括

以上が昭和35年(1960)分布調査時に東部域にて採取された資料の全貌である。西部域採取資料報告(横山2017)同様、図化可能な資料は全て掲載した[註1]。

『見島総合学術調査報告』には「その後(大正15年(1926)7月に実施された山口高等学校歴史教室による調査を示す:筆者註)、堤防工事や防風のための植樹事業などが進捗するにともない、古墳も著しく旧規の損傷されることも多くなった。一方好事家もあらわれ、出土遺物も採取され散失する傾向もあった」と記されている(斎藤・小野1964)が、墳墓の数に対し採取された遺物は多量とは言いがたい。また、採取は土器に限られており、鉄器を含め金属器がまったく存在していないこと、須恵器に比して土師器が僅少であること、須恵器の中でも坏などの食膳具は少なく、大多数が甕、壺などの貯蔵具であることが大きな傾向と言える。

須恵器貯蔵具の遺存状態は総じて不良で、多くは小破片として採取されており、器形全体の復元に至る資料は存在しない。筆者は第151・154号墳の資料報告において、甕の体部片の多さ(個体数の多さ)から、狭小な石室内への完形品の副葬・供献は想定しがたく、葬送に際し破砕土器供献儀礼とも呼ぶべき行為が存在したのではないかと指摘した(横山2011、横山・松浦2012)。昭和57年(1982)の発掘調査を担当した乗安和二三氏も、第113号墳の報告にて「閉塞時に意図的に破砕投機するなどの何らかの葬送儀礼的行為」を想定しており、断定は避けているものの、石室外表に多くの須恵器片が散乱していたことから墳丘上での祭祀をも想像している(乗安1983)。

大型貯蔵具については、破片としては多数の存在が確認されるが、既往の調査報告にて全形が図示



『見島総合学術調査報告』
「考古の部」（斎藤・小野 1964）
より転載・一部加筆

図 54　第 81 号墳石室と出土大甕実測図

されたのは、第81号墳出土の1点[註2]のみである（第54図左）。報告書中に法量に関する記述はないものの、器高74㎝、口径43㎝、腹部径60㎝程度の大甕である。当資料が完形で第81号墳石室内に副葬された状態を復元したものが図54右となる。図上不可能ではないようだが、まるで石室に合わせ製作されたかのような大甕、もしくは大甕に合わせ構築されたたかのような石室になってしまうことから、事実上石室構築後にこの大甕を空間内に持ち込むのは困難と考えられる。少なくとも大型貯蔵具は葬送時に破砕されていたと想像される。昭和35年の分布調査では、葬送儀礼の結果として墳丘外表付近に存在することになった大型須恵器貯蔵具と、主には閉塞部付近に供献され後世の破壊時にかき出された中型須恵器貯蔵具が採取の主な対象となったと推察される。換言すると、玄室内に副葬された食膳具、金属器類などは外部に持ち出されることが少なかったと想像される。

以上のように考えると、過去において人為的に墳墓が破壊されたのは事実であろうし、さらに自然的な要因であるにせよ現在進行形で破壊が進行していることが容易に想像される（写真3～7参照）のではあるが、昭和35年の遺物採取状況と、昭和37年（1962）および昭和57年（1982）の発掘調査成果を踏まえると、過去における破壊は主として石室や墳丘を構築する石材の抜き取りが目的であり、少なくとも東部域に分布する未調査の横穴式系石室内には、比較的良好な状態で食膳具や各種金属器、装身具などが埋存している可能性を残している。

2．須恵器貯蔵具内面に見られる平行文当て具痕について

昭和35～37年および昭和57年の調査報告で紹介されることはなかったが、見島ジーコンボ古墳群出土須恵器貯蔵具の内面当て具痕は、同心円文と平行文に大別される。再度図54左の大甕を確認すると、報告では「内面は部位によって同心円、青海波文が浅深、密疎の差をもって示されている」と記されているものの、腹部付近に明確に平行文当て具痕が看取される。つまり『見島総合学術調査報告』が刊行された昭和39年（1964）にはその存在が周知されていたことになるのだが、残念ながら現在まで遺跡評価の際に当て具痕に注意が向くことはなかった。遺物の大多数が死蔵状態であったことが主たる要因であろうが、将来的に議論の俎上に載せられるよう紙面を割いておきたい。

上記の通り、本書に掲載した須恵器貯蔵具の内面当て具痕は、一部に格子（斜格子）文も見られる（MJ58Y5やMJUK1Y3など）が同心円文と平行文を基本としており、器面観察の結果をまとめると表3のようになる。「同心円文当て具痕」「平行文当て具痕」と算入したものの中には、同文ではあるが当て具を交換したとみられる個体も含んでいる。結果は同心円文が170点、平行文が43点、同心円文と平行文の重複が21点、ナデによる消滅などで特定不能であったものが15点であった[註3]。比率にすると同心円文68.3%、平行文17.3%、同心円文と平行文の重複8.4%、特定不能6%となり、概算では古墳群東部域では貯蔵具の1/4（25.7%）という高い比率で平行文当て具が用いられていることになる。平行文当て具が「胴部下半から底部の成形のための専用具として使用されていたことが予想できる[註4]」（寺井2018）状況にあるにしても、第81号墳出土大甕のように腹部付近に限定的に用いられる例がある以上、この比率はさらに高まる可能性を有している。

見島ジーコンボ古墳群では、遺物の人為的な移動や波涛による移動が十分に想定されることを前提とした上で、古墳群東部域における平行文当て具痕の分布も確認しておきたい。図55は平行文当て具痕が観察された須恵器の採取地点を示したものである[註5]。東部域南部（南西－北東石垣（仮称）の南東側、北西－南東石垣1～3（仮称）周辺）に分布の中心があるようにも思えるが、南西－北東石垣の北西側では土器の採取自体が少なく、北西－南東石垣1以北にも一定量見られることから、偏在しているとは言いがたい状況にある。西部域でも同様の状況がうかがえる[註6]ことから、平行文当て具貯蔵具は、被葬者個人または被葬者の所属する小集団の属性とは強く結びつかないと予想される。

本土から遠く離れた孤島という見島の特性上、島民の死亡に際し、埋葬時に新たに須恵器を入手できた[註7]とは考えがたく、すでに供給されていた須恵器が使用されたと推定されるが、水系に乏しい見島で液体貯蔵具をふんだんに用いた葬送儀礼が執り行われていたことは興味深い事実である。未だ姿を見せない古代集落址の確認も急務であるが、当時の生活者がどのように水を確保したか、須恵器貯蔵具がどのような役割を担っていたかという視点も重要であろう。

3．特殊な当て具痕について

平行文当て具痕以外にも、見島ジーコンボ古墳群から出土する須恵器貯蔵具の特徴の一つに、車輪文に代表される特殊な当て具痕の存在が挙げられため、ここに集成しておく（図56～58）。車輪文当て具痕の分類は、「須恵器車輪文当て具文様に関する覚書－西日本を中心に」（長尾・亀田2019）に提示された案に従う。

【車輪文】（図56図）

MJ152H18は放射線状文（c-2）で、中央の円形隆起から6本の放射状線が延びる。同心円文当て具痕に重なるため不明瞭であるが、圏線は3～4輪とみられる。

MJ141Y4は3輪圏線で、1輪に6本、2輪に5本以上（10本か）の放射状線を配す。放射状線は圏線

間それぞれに配されており、歯車文(f)とみられる。

MJ100Y4は2輪圏線の間に4本以上、6本以上の放射状線を残す。放射状線は圏線間それぞれに配されており、歯車文(f)とみられる。

MJ44Y9は不明瞭ではあるが2輪圏線の間に7本以上、8本以上？の放射状線をそれぞれに配しており、歯車文(f)とみられる。

MJ124H8も不明瞭な痕跡で、径の大きな当て具を使用しており、2輪以上の圏線の間に多数の放射状線を配している。放射状線は圏線を越えて連続しているようであり、蜘蛛の巣状文(e)に分類されるものかもしれない。

【扇状文】(図57)

MJ143H3は8条以上からなる扇状文当て具痕。外面には目の粗い平行文叩き(2条/㎝)が施されている。

MJ143Y2は9条からなる扇状文当て具痕。外面にはMJ143H3と類似する目の粗い平行文叩き(2条/㎝)が施されている。同一個体である可能性が高いが、当て具痕の大きさが異なる。収縮率の違いによるものであろうか。

MJ48Y4はほぼ半円形に残る当て具痕で、19条以上からなる。部分的に放射条線が途切れており、彫り直しが行われている。ここでは扇状文としたが、放射線文の可能性がある。

MJ53Y3は平行文当て具痕に切られていることからやや不明瞭となっているが、7～8条からなる扇状文当て具痕とみられる。

MJ53Y4はMJ53Y3と同一個体である可能性が高く、8条からなる扇状文当て具痕のみが残る破片である。外面には目の粗い平行叩き(2.5条/㎝)が施されている。

【歯車状同心円文・櫛歯状平行文】(図58)

MJ134Y1は同心円文の最外圏線に、歯車状に方形の彫り込みを連続して付加した当て具痕が残る。ここでは歯車状同心円文と仮称しておく。これまで本例しか確認できていない。

MJ128H15は圏線は見られないが弧状に方形の彫り込みが並ぶ当て具痕である。格子文の一種として捉えるべきかもしれないが、MJ134Y1との類似からここで紹介しておく。

MJ55Y7は平行文の一部に方形の彫り込みを連続して付加した当て具痕が残る。ここでは櫛歯状平行文と仮称しておく。**MJ112Y7**にも同様の当て具痕が見られる。両者の採取地点は大きく離れているが、外面の擬格子平行文叩きや胎土、焼成状態が類似することから同一個体とみられる。

3．おわりにー須恵器貯蔵具の産出地についてー

内面の平行文および車輪文、扇状文当て具痕を有する須恵器は、現在のところ山口県(周防・長門両国)の須恵器窯で産出された形跡がなく、墳墓遺跡を含め消費地遺跡においても、管見ではあるが確認できていない。現状では周防長門以外の故地から、両国を経ることなく見島にもたらされた可能性が高いと思われる。問題は「産出地は何処か」という点である。

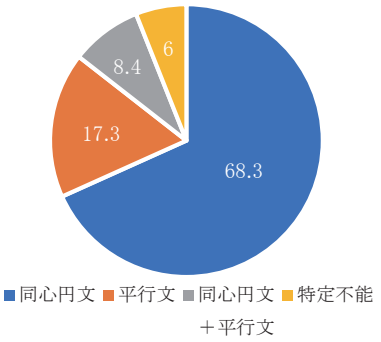
見島ジーコンボ古墳群は、7世紀後半に造営が開始され、新規造営や追葬を繰り返しつつ10世紀初頭に墓地としての役割を終えると推定されている。被葬者像に関しては、文献には残されていないものの「中央の朝廷から派遣された指揮官と、防人や健兒として従軍した人々の墓」(小野1986)とするいわゆる「防人墓説」と、8世紀末から9世紀初頭の対蝦夷戦争の中で発生した大量の帰服蝦夷を、国内各地に強制移住させた政策の一貫として「見島を俘囚集団に警護させた」(下向井2008a・b)とする「俘囚墓説」に二分されており、筆者は時期を限定せずに「島移住後に土着した集団の墓」と推測するにとどめ

表3 須恵器内面当て具痕一覧

墳墓番号	同心円文当て具痕	平行文当て具痕	同心円文＋平行文	特定不能	特殊な当て具痕
第2号墳	1		1		
第3号墳	2				
第5号墳	3		1		
第6号墳	3	1	1		
第8号墳		1			
第9号墳	1				
第12号墳	3	2			
第13号墳			1		
第15号墳			1		
第18号墳	1			1	
第20号墳	2	1		1	
第23号墳	2	1			
第26号墳	1	1		1	
第27号墳	4				
第29号墳	4	1		1	
第31号墳	1				格子文1
第33号墳	4				
第34号墳	4				
第35号墳	3				
第37号墳	1				
第41号墳	4				
第42号墳	3	2		2	無文(丸石か)2
第43号墳か	2	1			
第44号墳	2	1			車輪文(歯車文か)1 ※平行文に重複
第45号墳	5	2		1	
第48号墳	2				扇状文1
第49号墳	2		1		
第50号墳	2				
第52号墳	4				無文1
第53号墳	1	1		2	扇状文2 ※1点は平行文に重複
第54号墳	6			1	無文か1
第55号墳	4	2	1	1	櫛歯状の平行文1 ※同心円文と重複
第56号墳	1				
第58号墳	3				斜格子文か1
第59号墳	2				
第63号墳	3	2	1		
第64号墳	3			1	無文(丸石か)2
第66号墳	5	2			
第67号墳	5	1			格子文1
第68号墳	4	1			
第69号墳	4	1			
第70号墳	1	2	1		
第71号墳	4	1		1	
第72号墳	5	2	2		
第73号墳		1			
第75号墳	1		1		
第76号墳				1	
第77・78号墳	5	1	1		
第79号墳	3	2			
第81号墳	3				
第82号墳	6	3			
第83号墳	1	1			
第84号墳か	2				
第85号墳			1		
第100号墳	3	1			車輪文(歯車文)1 ※同心円文に重複
第101号墳	2	1			
第103号墳	2				
第105号墳	1	1			
第107号墳		1	2		
第112号墳	10	1	3		櫛歯状の平行文1 ※同心円文と重複
第113号と114号の間	3	1	1		格子文か1
第116号墳	3				
第117号墳	3		1	1	
第120号墳	1				
不明1	3				斜格子文1
不明2	1				
計	170	43	21	15	

表4 須恵器内面当て具痕の比率

当て具の種類	同心円文	平行文	同心円文＋平行文	特定不能	総数
点数	170	43	21	15	249
%	68.3	17.3	8.4	6	100



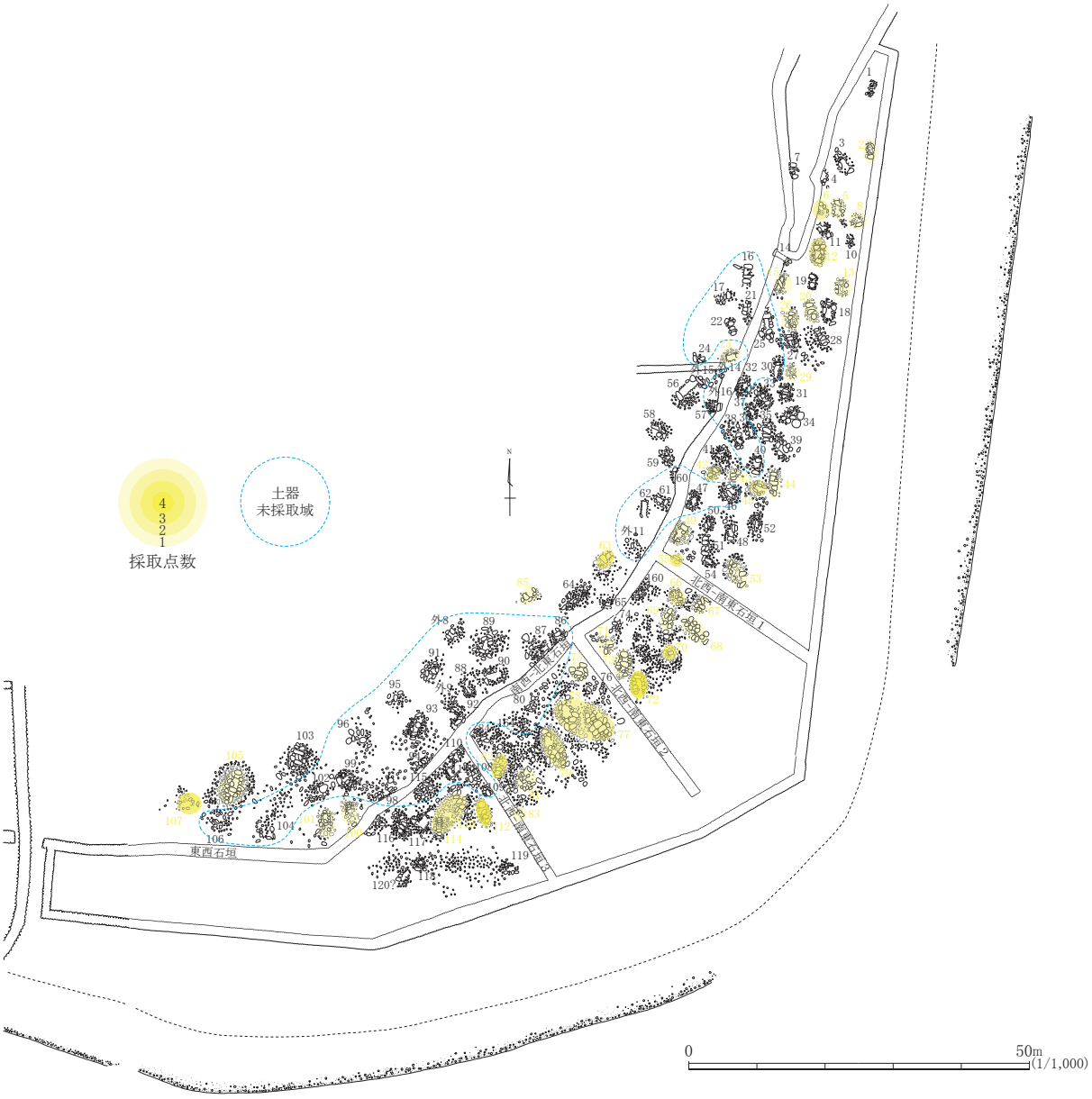


図55 見島ジーコンボ古墳群東部域平行文当て具痕の分布

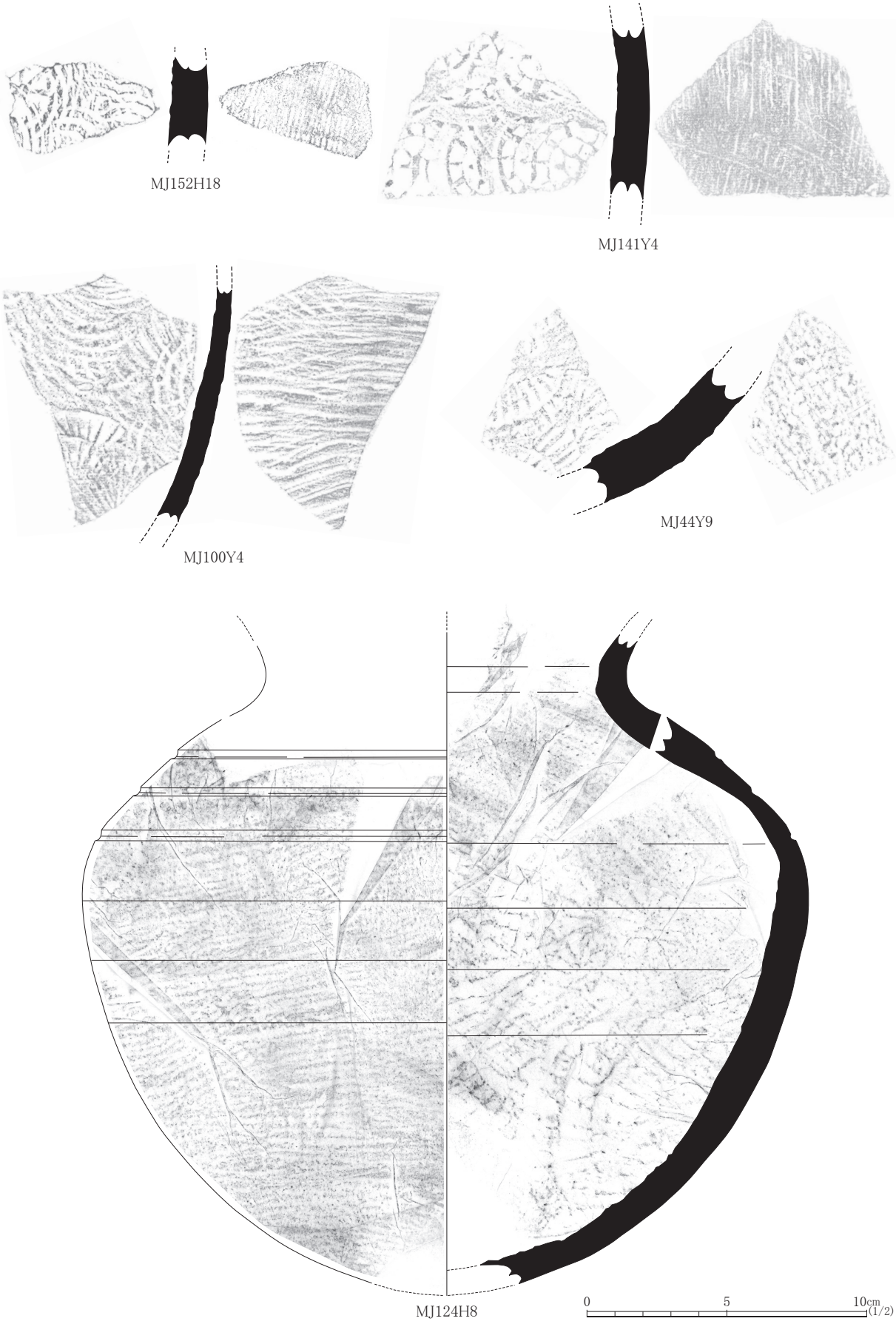


図56　見島ジーコンボ古墳群に見られる特殊な当て具痕①

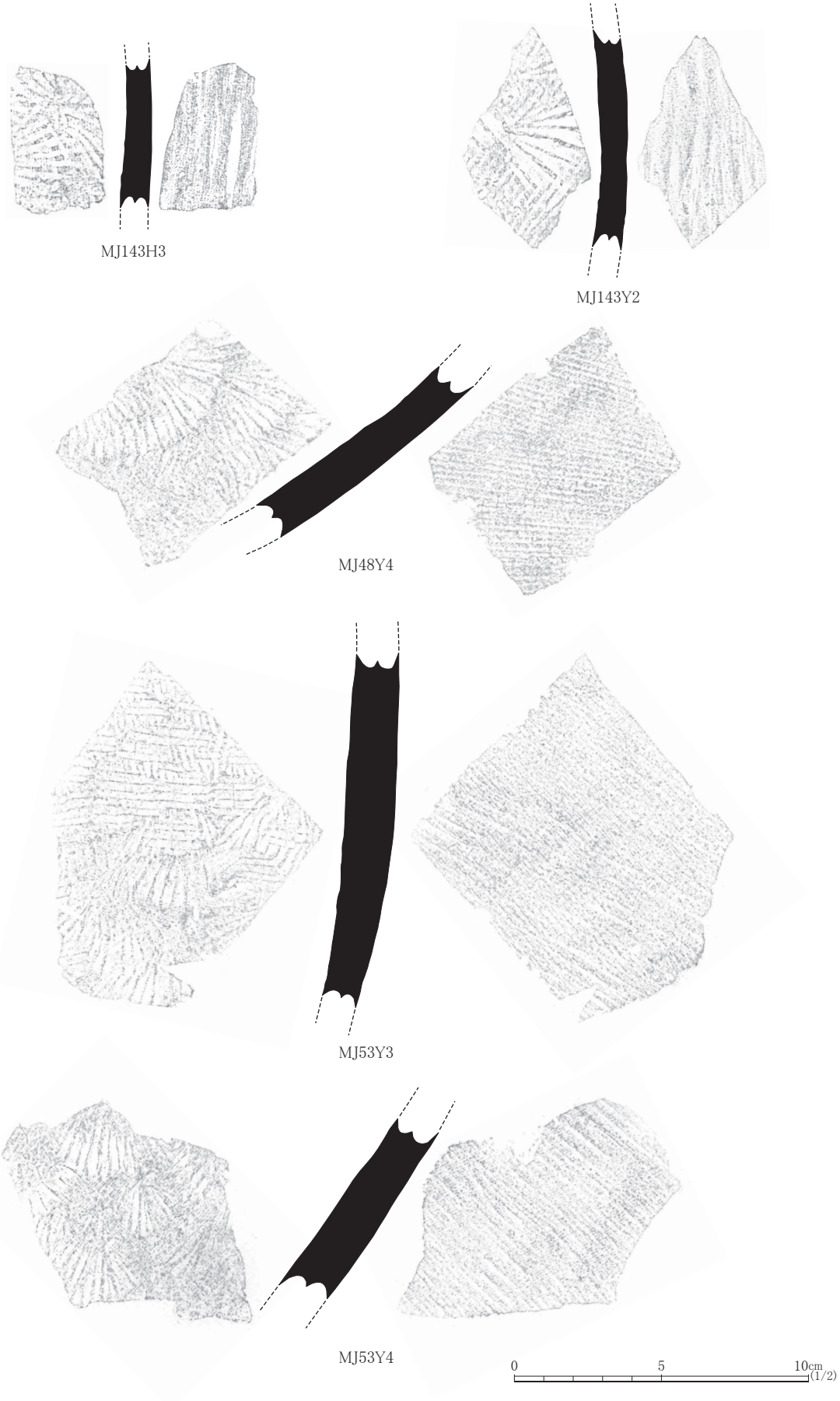
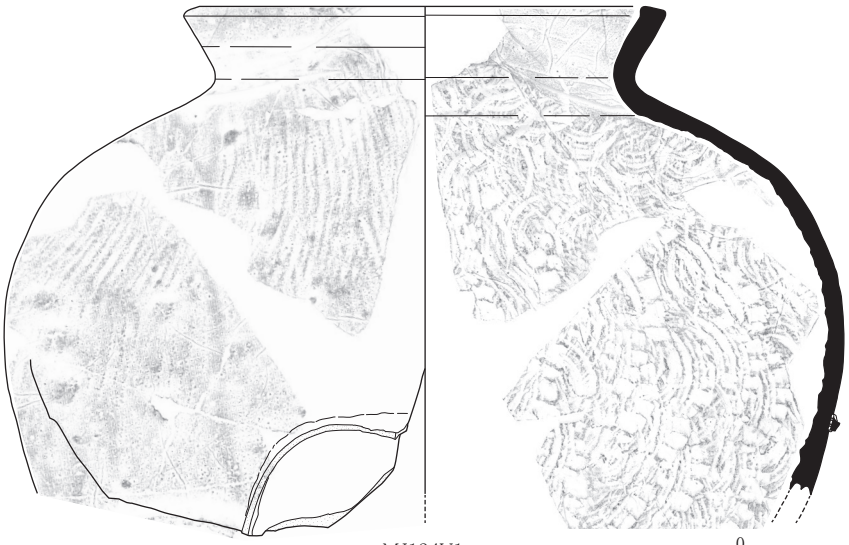
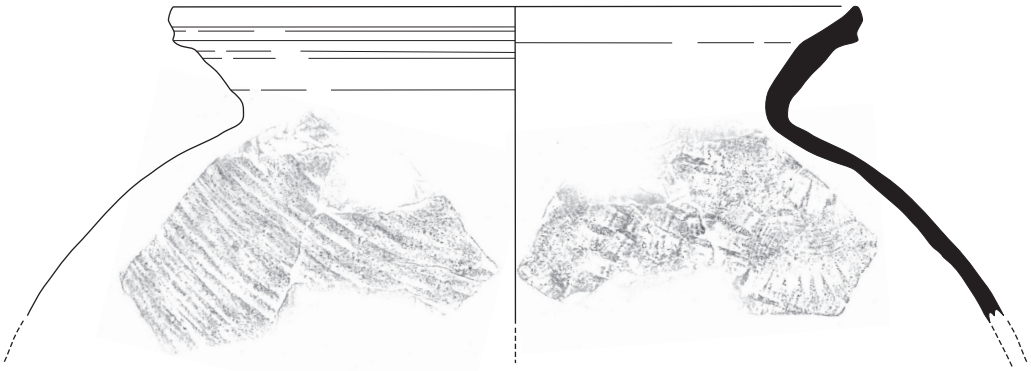


図57　見島ジーコンボ古墳群に見られる特殊な当て具痕②



MJ134Y1

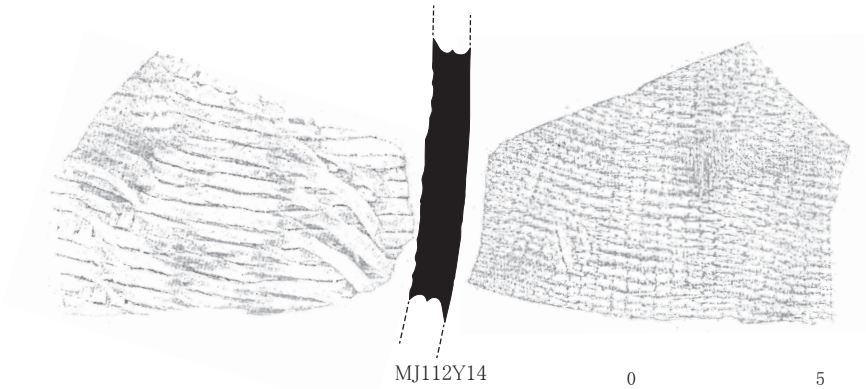
0　10cm (1/3)



MJ128H15



MJ55Y7



MJ112Y14

0　5　10cm (1/2)

図58　見島ジーコンボ古墳群に見られる特殊な当て具痕③

ている[註8]（横山2012）。見島ジーコンボ古墳群は、存続期間の長さと被葬者像の不安定さが遺跡の大きな特徴、ある種の魅力となっている一方で、遺跡の性格を検討する上で大きな障害ともなっているのが現状と言える。

本報告では須恵器貯蔵具に注目したが、時期不明の小破片が大多数の中で、平行文当て具の産出地だけを追うのであれば、北は遠く津軽五所川原古窯跡群持子沢D-1窯（青森県弘前市）（坂詰1974、三浦1995）から、南も遠く中岳山麓窯跡群荒平第2支群（鹿児島県南さつま市）（中村ほか2015）や苺田窯跡（宮崎県延岡市）（小田1983）までをも視野に入れる必要性を感じる。

コ字状断面で内端を肥厚させる第59号墳採取の須恵器甕口縁（MJ59Y1）は、平行文および扇状文当て具痕が確認されている邑久窯跡群佐山新池1号窯跡（岡山県瀬戸内市）（亀田2018）との関連を、第156号墳出土の二重口縁状の須恵器甕（MJ156H2）は、平行文当て具を多用する荒尾窯跡群をはじめとする肥後地域との関連を、離島に運ばれた須恵器という点を重視すれば、第159号墳採取甕（MJ159Y1）の肩部まで及ぶ縦位の平行文当て具痕は、カジヤバ古墳（長崎県壱岐市）（副島・本田1988）出土甕との関連をも想像させる。

今後も検討を進めていきたいが、いずれにせよ当館に所蔵される見島ジーコンボ古墳群出土資料の公開は本書をもって終了となる。残された資料群（萩博物館に所蔵される昭和37年（1962）東部域調査出土資料や調査時に島民から寄贈を受けたとみられる資料、昭和59年（1984）から60年（1985）にかけて前田勲氏により堅田遺跡にて採取された多量の遺物）に関しては、近い将来の学術公開を望んでいる。

猛威を振るい続ける新型コロナウィルスは、我々に悪影響を与えているだけでなく、地域でじっくり資料と向き合う時間を与えてくれているのではなかろうか。

【註】

1）明らかに同一個体とみられ、部位がほぼ同一で体部内外面の成形痕（叩きや当て具痕など）なども共通しているものは、遺存状態の良い破片に代表させた。

2）『見島総合学術調査報告』「考古の部」第19図。筆者は実見していない。

3）「特殊な当て具痕」に関しては、同心円文や平行文と重複する場合はそれぞれ「同心円文当て具痕」「平行文当て具痕」にカウントしている。

4）寺井誠氏の論考は6世紀から7世紀にかけての資料を主な対象としているが、古代（奈良～平安時代時代）に産出された平行文当て具を用いる須恵器貯蔵具についても、一部例（球磨窯跡群下り山窯跡1号墳（松本1980）、荒尾窯跡群皮籠田B窯跡（網田2009）出土甕などで全面に縦位で当てられている）を除くと全面に及ぶものは少ないようで、やはり胴部より下位で用いられるのが通例のようである。

5）図示した第81号墳出土大甕1点はカウントしている。

6）昭和35年（1960）の分布調査で採取された西部域の遺物は、今回同様の作業を経た上で報告を行った（横山2017）が、第151・154号墳出土資料の調査では、時間の制限上須恵器貯蔵具細片の悉皆調査を実施できなかった（横山2011、横山・松浦2012）ことから、当て具痕の比率や分布に関して詳しく言及できない。

7）現在まで島内に須恵器窯は確認されていないが、西部域採取須恵器中に二次焼成を受けた（窯道具として使用された）可能性のある資料（MJ134Y-1）が存在する。

8）第1章に記述した昭和59年（1984）の水田基盤整備工事で遺物を採取したのは、当時見島中学校に赴任されていた前田勲校長であった。近年、萩市文化財保護課の協力により、旧見島中学校校長室から段ボール詰めされた多量の遺物が発見された。実見したところ、前田校長は上記の工事以外でも資料採集を行うほか、表採活動も行っていたようで、昭和60年（1985）6月に旧見島小学校プール工事の排土中から採取した土器の中に6世紀代の土師器を、同年8月10日に発電所前の畑にて表採した遺

物の中には古代の須恵器に混ざり6世紀代の須恵器蓋坏を確認した。ほかに竈支脚なども存在していることから、少なくとも古墳時代後期には一定規模の集団が定住生活を行っていたと考えられる。

【参考文献】

青島啓(2007)『陶窯跡群Ⅱ』山口市埋蔵文化財調査報告第98集, 山口市教育委員会文化財保護課(編), 山口

青島啓ほか(2011)『陶窯跡群Ⅰ』山口市埋蔵文化財調査報告第70集, 山口市教育委員会文化財保護課(編), 山口

網田龍生(2009)「皮籠田A・B窯跡、古屋敷B窯跡」, 荒尾市史編纂委員会(編)『荒尾市史 前近代資史料集』, 荒尾(熊本)

池田善文(1979)『長門末原窯跡 第1次調査報告』美東町文化財調査報告第2集, 美東町教育委員会(編), 美東(山口)

池田善文(1993)「土器の基準資料と編年」, 池田善文(編)『長登銅山Ⅱ』美東町文化財調査報告第5集, 美祢(山口)

池田善文(2004)「集成 須恵器」, 山口県(編)『山口県史』資料編考古2, 山口

市来真澄(2011)「見島ジーコンボ古墳群の構築時期と石室について」, 海の古墳を考える会(編)『海の古墳を考えるⅠ－群集墳と海人集団－発表要旨』, 北九州(福岡)

小田富士雄(1975)「萩の埋蔵文化財」, 史都萩を愛する会(編)『史都萩』第32号, 萩(山口)

小田富士雄(1983)「延岡市苺田窯跡」, 宮崎県教育庁文化課(編)『宮崎県文化財調査報告書』第26集, 宮崎

小野忠熙(1961)「見島古墳群」, 小野忠熙・山口県教育委員会(編)『山口県文化財概要』第4集, 山口

小野忠熙(1985)『山口県の考古学』, 吉川弘文館, 東京

小野忠熙(1986)『日本の古代遺跡30 山口』, 保育社, 大阪

亀田修一(2018)「備前邑久窯跡の須恵器甕に関する覚書」, 岡山理科大学地理考古学研究会(編)『半田山地理考古』第6号, 岡山

斎藤忠・小野忠熙(1964)「考古の部」, 山口県教育委員会(編)『見島総合学術調査報告』, 山口

坂詰秀一(1974)「津軽持子沢窯跡第2次調査概報」, 北奥古代文化研究会(編)『北奥古代文化』第6号, 東京

下向井龍彦(2008a)「第九編 律令国家の変容と周防国・長門国　第三章 変動期の瀬戸内海海域」, 山口県(編)『山口県史 通史編 原始・古代』, 山口

下向井龍彦(2008b)「第十編 長門・周防地域と東アジア　第四章 対外緊張と周防・長門地方」, 山口県(編)『山口県史 通史編 原始・古代』, 山口

副島和明・本田秀樹(1988)『カジヤバ古墳』芦辺町文化財調査報告書第3集, 芦辺町教育委員会(編), 壱岐(長崎)

俵教雄(1959)「第二部 沿革 第四編 古代」, 萩市誌編纂委員会(編)『萩市誌』, 萩(山口)

寺井誠(2008)「古代難波に運ばれた筑紫の須恵器」, 九州考古学編集幹事(編)『九州考古学』第83号, 福岡

寺井誠(2018)「6・7世紀の北部九州の土器に見られる新羅・加耶的要素」, 九州考古学会・嶺南考古学会(編)『海峡を通じた文化交流』, 福岡

寺井誠(2020)「難波など畿内に搬入された他地域産須恵器-有文当て具痕跡を基にして-」, 大阪歴史博物館(編)『共同研究成果報告書』14, 大阪

長尾早江子・亀田修一(2019)「須恵器車輪文当て具痕に関する覚書－西日本を中心に－」, 岡山理科大学地理考古学研究会(編)『半田山地理考古』第7号, 岡山

中村徹也ほか(1980)『末原窯跡』山口県埋蔵文化財調査報告第54集, 山口県教育委員会文化課(編), 山口

中村徹也(1983a)「[特別講演]ジーコンボ古墳群から見た見島(上)」, 史都萩を愛する会(編)『史都萩』第45号, 萩(山口)

中村徹也(1983b)「[特別講演]ジーコンボ古墳群から見た見島(下)」, 史都萩を愛する会(編)『史都萩』第46号, 萩(山口)

中村徹也・国守進(1989)「原始・古代の見島」, 萩市史編纂委員会(編)『萩市史』第2巻, 萩(山口)

中村直子ほか(2015)『中岳山麓窯跡群の研究』, 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター(編), 鹿児島

乗安和二三(1983)『見島ジーコンボ古墳群』, 山口県教育委員会(編), 山口県埋蔵文化財調査報告第73集, 山口

乗安和二三(2000)「見島ジーコンボ古墳群」, 山口県(編)『山口県史　資料編　考古1』, 山口

匹田直・弘津史文・小川五郎・三宅宗悦・姉川従義(1927)「阿武郡見島文化の研究」, 山高郷土史研究会(編)『山高郷土史研究会考古学研究報告書－台覧紀年号－』, 山口

松下孝幸・分部哲秋・佐熊正史(1983)「山口県萩市見島ジーコンボ古墳群出土の平安時代人骨」, 山口県教育委員会(編)『見島ジーコンボ古墳群』山口県埋蔵文化財調査報告第73集, 山口

松下孝幸(1985)「山口県見島ジーコンボ古墳群の人骨－山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の資料－」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』, 山口

松下孝幸・松下真実(2012)「山口県萩市ジーコンボ古墳群出土の人骨」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『見島ジーコンボ古墳群　第151号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書2, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口

松下孝幸・松下真実(2013)「山口県萩市ジーコンボ古墳群第155墳出土の人骨」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『見島ジーコンボ古墳群　第152・153・155・156号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書3, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口

松下真実・松下孝幸(2014)「山口県萩市ジーコンボ古墳群出土の平安時代人骨」, 山口考古学会(編)『山口考古』第34号山本一朗先生追悼号, 防府(山口)

松本健郎(1980)「Ⅴ. 球磨窯跡群」, 熊本県県教育委員会(編)『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ－須恵器窯跡・瓦窯跡・陶磁器窯跡－』熊本県埋蔵文化財調査報告書第48集, 熊本

三浦圭介(1995)「第3章　古代」,「新編弘前市史」編纂委員会(編)『新編弘前市史　資料編1-1　考古編』, 弘前(青森)

三輪善之助(1923)「長門見島の遺跡」, 日本考古学会(編)『考古学雑誌』第14巻第3号, 東京

山本博(1935)「長門国三島村の弥生式遺跡と古墳出土遺物－特に銙帯について－」, 日本考古学会(編)『考古学雑誌』第25巻第8号, 東京

横山成己(2011)『見島ジーコンボ古墳群　第154号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書1, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口

横山成己・松浦暢昌(2012)『見島ジーコンボ古墳群　第151号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書2, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口

横山成己(2012)「見島ジーコンボ古墳群「俘囚墓説」小考」,「やまぐち学」推進プロジェクト(編)『やまぐち学の構築』第８号, 山口

横山成己(2013)『見島ジーコンボ古墳群　第152・153・155・156号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書3, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口

横山成己(2015)『見島ジーコンボ古墳群　第128・137号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書4, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口

横山成己・川島尚宗(2016)『見島ジーコンボ古墳群第124号墳・潮待貝塚出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書5,山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口

横山成己(2017)『見島ジーコンボ古墳群第123号・第152号(再)・西部域出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書6,山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口

吉瀬勝康・大林達夫(2000)『敷山・末田須恵器窯跡調査報告－防府市の須恵器窯の発掘調査及び表採資料の調査報告－』防府市埋蔵文化財調査報告0001, 防府市教育委員会(編), 防府(山口)

渡辺一雄ほか(1983)『生産遺跡分布調査報告書』山口県埋蔵文化財調査報告書第74集, 山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化財センター(編), 山口

館蔵資料調査研究報告書7

見島ジーコンボ古墳群

東部域出土資料調査報告

令和4年3月31日

編集　山口大学埋蔵文化財資料館

発行　山口大学

〒753−8511　山口市吉田1677−1

印刷　(有)三共印刷

〒759−0204　宇部市大字妻崎開作1953−8